始

無門關講話

管原時保



はしがき

月、潭底を穿つて水に痕なく、竹影、階を拂つて塵動ぜず、寔に萬有の本體、所謂眞如法性の活動は、木人の歌、石女の舞の如く、思量を絕し摸索の及ばざるものである。禪とは這箇玄々微妙の端的に證入し、活社會に處して不染汚底の活機輪を轉ずるの力用を養ふ所以の道である、而して禪門の所謂祖錄は、古來の禪匠が這裏に證入し、這箇を體現し得るに到つた因緣を錄し、且つ之に評唱を附したものである。

無門關は、文字平明、理路整然、他の多くの祖錄が、拮屈聱牙にして且つ理路を超越せるとは少からず趣を異にして居る。從つて比較的論理的で、理知によつて解し易いものとして、古來參學の初心の間に珍重せられて居る。併し乍ら各則の的意に到つては所

謂沒縱跡斷消息であつて、依文解義の手段を以つてしては到底之を揣摩し憶惻することも出來ぬ。此の講話は禪門現代の巨匠たる建長寺派管長菅原時保禪師が縱横の禪機を以つて、無門關を隨所に提唱拈弄せられたものを錄したのであつて、禪師の懇切叮嚀な文字の解釋と、應用無碍なる宗意の拈弄とは、努めて之を逸せざらんことは筆錄者の特に意を用ひた所である。禪は言詮不及意路不到の消息であるけれども、熟讀玩味、努めて怠らずんば、這箇の髣髴を窺ひ得ること必しも難くはあるまいと思ふ。

筆錄者白

無門關講話目次

—目次終—

無門關講話

菅原時保述
池上文僊畫

序講

一　禪とは何ぞや

無門關を講ずるに就いて先づ一應禪とは如何なることであるかを大略述べて見よう、禪といふ語は梵語の禪那を略したのであつて、之を漢譯すると靜慮といふ意味になる、古語に心猿飛び移る五欲の枝、意馬馳走す六塵の境といふが、全く吾々の心は常に財色食名睡の五慾、色聲香味觸法の六塵に惹かれて、明け暮れ東奔西走して須臾も停まる時

はない、從つて己れの好むものは美しく見え、己の好まぬものは醜く見えて、ありのままに物の眞相を見ることが出來ず、己の欲することは正しく己の欲せざることは誤つて居る樣に思はれて、ありのまゝに正しい道理を知ることが出來ぬ、所謂邪見偏見に執はれて事物の眞相を正しく知ることが出來ぬのである、茲に於いて靜坐して身心を調へ、妄念妄想を抑制して宇宙の眞理を徹見し、正しい道に從つて日常の行動を爲し、心中毫も煩悶執着なくして所謂安心立命の境界に達する、これが卽ち禪の目的である、而して此に謂ふ所の宇宙の眞理とは單なる事物の道理ではなくして、法性、佛性、法身などゝいうて、眞善美を圓滿に具足して、而かも全宇宙に徧滿せる絕大なる人格を意味するのである、卽ち宇宙の眞理を徹見するといふことはこの大人格に相見し、之と一如になることである、吾等が佛性を徹見することが出來ぬのは上に述べた通り心水が動搖して居るからであつて、之を靜かにして明に事物の態を映ぜしめる爲には、それを容れる器なる身體を安靜にすることが肝要である、卽ち坐禪は此の目的の爲に修するものである、尤も只管打坐といふて坐禪は目的の爲の手段として行ふのでなく只坐禪の爲に坐禪を修するといふ道理もあるけれども一應は上述の樣に解することが出來る、要するに禪とは靜坐して眞如法性を慮り、それを徹見しそれに一如することである。

さて、斯樣に坐禪三昧によつて妄念執着を靜止することは出來るが、所謂佛性を徹見するといふことは却々容易ではない、兎角邪路に踏み入つて却つて迷妄を增長し易いものであるから、古來參禪辨道に志す人はそれ〴〵知見開發というて已に悟を開いた明眼の師家に就いて自己の所見を述べて其の指導提撕を仰ぎ、師家方でも又自ら進んで參學の徒を勘檢して其の迷執を打破して正眼を開發せしめる、これ所謂問答商量の手段である、而して古聖先德は斯樣に問答商量を屢〳〵する間に漸次機根が醇熟して遂に啐啄同時というて雛鳥が卵の中に充分成育して中から啐すると親が同時に外から之を啄く樣に或機會の問答によつて豁然として大悟發明する處がある、斯樣な場合の問答商量は一言一句千鈞の重があつて實に後學の範とするに足るものである、一般に古則公案と稱せ

られるものは卽ちこれであつて、古人は之を提唱諷咏して學人の爲に門を敲くの瓦、月を示すの指とせられた、碧巖集や從容錄、及び此の無門關の如きは卽ちそれを多數に集めた所の所謂祖錄である。

禪は不立文字敎外別傳を標榜する宗旨である、何故文字言句を排斥するかといふに、物事の眞相は文字や言句を以つて如何に委曲を盡しても充分他人に傳へ得るものではない、百聞は一見に如かずといふ通り、如何程詳しく聞いても櫻の花を見たことのないものには解らぬ、文字言句が多ければ多い程益〻複雜になるばかりで眞相とは愈〻遠かつて終ふ、一事一物に於いて已に然り、況んや宇宙の本體、眞如の當相に到つては到底文字言句を以つて之を他に傳へ若くは他より傳へられんとすることは不可能である、所謂冷暖自知で直覺的に知る外はない、古則公案に於いては問ふものも問はれるものも相當に知見が開けて居つて、文字言句の葛藤の爲に累はされぬ底の力倆を具して居るけれども、而かも尙ほ多くの閑言句を消さず、單刀直入的に、所謂ヒントを與へる位の程度で問答應對をするのであるから、其の文字は極めて簡潔である、從つて難解であるけれども、意味は頗る深長であつて、味へば味はう程、參ずれば參ずる程愈〻入つて愈〻深きを覺ゆるのである。

二　無門關解題及び著者の傳記

無門關は臨濟下の一分派なる楊岐派の無門慧開禪師が古人の公案四十八則を選んで評唱し、且つそれに頌を付したもので、門下生の彌衍宗紹が筆錄編纂したのである、各則每に「無門曰」と「頌」とがあるが無門曰は卽ち無門の公案に對する評唱であつて無門が自己の力倆を以つて古人の問答往徠を拈評したもの、頌は其の境界を諷咏したのであつて碧巖集等に比しては評唱も頌も共に聊か神韻に乏しい憾はあるが、其の代り比較的條理が立つて居て、參學の初門としては却つて入り易い趣がある、尙ほ本書は次項に揭ぐる上表文によつても知られる通り、無門慧開禪師が南宋の理宗皇帝紹定二年卽位の祝日

に印行して聖壽を祝する爲に獻じたものである。卷頭に習庵珍塤の序、慧開の上表文及び自序があり、卷末に「禪箴」「黃龍三關」といふ二編の文章と、孟珙の跋と、更に又易にいふ所の大衍の數に合せしめん爲に安晚居士の付した第四十九則語といふものがある。

著者無門慧開は支那杭州錢塘の良渚といふ處の人で、姓は梁、母は宋氏である、性恬淡洒脫、毫も外見を飾らず、所謂道者の風があつたといふので開道者と呼ばれた、天龍の肱和尚に就いて得度し只管禪に參じ道を求めて怠らず、常に南高峰の石室に登つて端坐した、六年目に到つて聊か心眼が開けたけれども尙未だ大悟徹底するに到らなかつたので、出でゝ江湖四方の尊宿に歷參して到る處で知見を鍊磨した、それでも尙ほ機緣が熟して證契即通するといふ所には達せず、殊に趙州狗子佛性の話に遇うて疑團を生じて容易に解決が出來なかつた、其の頃月林の觀禪師が平江の萬壽寺といふに住して高く法旆を揭げ、孤奇峻峭な門風であつたが、法席頗る殷賑を極めた、開道者は此處に參じてわれ悟らずんば契つて睡眠せずといふ大決心の下に大いに刻苦して居つたが、一日齋鼓即ち食時の報知の太鼓を聞いて、忽然として桶底を脫するが如く、從來の疑團全く解けて無門は玆に打開せられた、そこで喜悅の情抑へ難く、次の一偈を賦した、「靑天白日一聲の雷、大地の群生眼豁開す、萬象森羅齊く稽首す、須彌踍跳して三臺を舞はしむ」

其の翌日觀禪師の室に入つて所解を呈せんとすると、觀禪師は「神を見鬼を見了れり」といつて大喝した、開道者も聲に應じて喝すると觀禪師は更に第二喝を下された、それから「雲門話墮の話」を擧して「那裏か是れ這の僧の話墮の處」と問ふた、開道者答ふらく「話墮し了れり」觀禪師又問うて曰く「這の僧甚に因つて話墮す」開道者即ち拳を竪てゝ之に應じた、玆に於いて觀禪師は道者を印可證明せられて付法の偈を唱へて曰く「雲門の話墮全身擔荷、赤手にして人を殺す、更に兩箇無し、侍者開に禪を分付す、甚の西來の達磨を說かん」と、かくて開道者を嗣法の弟子とせられた、王都知大尉通菴楯と法門の二難と稱せられたといふが王都知とは如何なる人であるか明でない、此の二人が兎に角當代の傑物で、參學の徒はいづれも之を難物と見做して居つたものと見える、安

吉の報國、隆興の天寧、黄龍の翠巖、蘇州の開元、鎭江の焦山、金陵の保寧等の諸寺に歴住し、淳祐六年には護國の仁王寺を開き、晩年には西湖の上に庵居して居つた、嘗て理宗皇帝に進講して佛眼禪師の號と金襴衣を賜ひ、有る時は雨を祈つて驗があつたとも傳へられる、理宗皇帝の景定元年庚申夏四月偈を書して遷化した、世壽七十八歲であつた、これから二代を經て慈雲妙慈、拔隊得勝といふ二人があるが共に我が國に渡來した。

三　習庵陳塤の序

無門關の卷頭には習庵陳塤の序文がある、習庵陳塤といふ人の行狀は傳はつて居らぬから解らぬが、習庵は別號で、陳は其の姓、塤は其の本名である、此の序文は餘り重要ではないが一應の解釋だけはして置かう。

說道無門盡大地人得入說道有門無阿師分第一强添幾箇注脚大似笠上頂笠硬要習翁贊揚又是乾竹絞汁著得這些哮本不消習翁一擲一擲莫敎一滴落江湖千里烏騅追不得紹定改元七月晦習庵陳塤寫

【和訓】說いて無門と道はゞ盡大地の人得入せん。說いて有門と道はゞ阿師の分無けん。第一より强ひて幾ばく箇の注脚をか添ふ。大に笠上に笠を頂くに似たり、硬く習翁が贊揚せんことを要す。又た是れ乾竹に汁を絞つて、這些の哮本を著得す。習翁が一擲を消ひずして一擲せよ。一滴をして江湖に落さ敎むること莫れ。千里の烏騅を追ふことを得じ。紹定改元七月晦、習庵、陳塤寫す。

『說いて無門と道はゞ盡大地の人得入せん』無門關の序文であるから先づ無門といふ語を用ひたものである、佛法は元來四通八達十方通暢で、毫も出入往來を碍ゆべき門關はない、本書錄する處の公案も亦東西の學人が來つて參究するに任せて自由自在である、所謂盡大地の人皆其の本面目に得

入することが出來るのである、此處の道理を白隱和尙も「四方八面遮欄を絕す、凡情都て來つて皆入得す」というて居る、『說いて有門と道はゞ阿師の分無けん』然るに此の十方通暢なる佛法の大虛空に於いて向上だの向下だの還相だの往相だの、或は五時或は八敎といふ樣な門關を强ひて建つるならば師家分上の人と許すことは出來ぬ、阿師の阿は阿誰、阿爺の如き發語の添字で別に意味はない『第一より强ひて幾箇の注脚をか添ふ』第一則より第四十八則に到る各則に對して元來文字言句に涉るべきでないのに强ひて兎や角と評唱を加へたり頌を付したりするのは畢竟『大いに笠上に笠を頂くに似たり』である、公案なるものが已に無瑕の寶珠に强ひて瑕を着けたものであつて、最早それ以上言句を重ぬべきではない、習庵が眼より見る時んば此の無門關は要するに頭上に頭を安ずるものである、然るに尙ほ其の上に『硬く習翁の贊揚を要す』此の陳塤にまで序文を書けといふのは一層罪過を重ねる譯である、硬くは無理にとか强ひてとかいふ意味で、習庵が謙遜するのを强ひて慧開和尙が序を求めたものと見える、此處の文意より推す時は、前の笠上笠を頂く云々の語は所謂句抑下の意卓上というて、言葉の上では無門を貶斥抑下して內心大いに褒讚卓上した意味があることを知るに足る、無門慧開の高邁なる道力を以つて、而かも其の縱橫なる機略を以つて拈提してさへ未だ笠上笠を頂くの譏を免かれないのに、まして拙者習庵等が無けなしの知慧を以つて之に序を付する等は全く『又是れ乾竹に汁を絞る』樣なものである。乾き切つた竹から水分を絞り出すが如く、我が空疎なる頭腦から名言佳句を拈出せしめやうとするのは到底不可能を强ふるといふものである、併し强ひて求めらるゝ懇請默し難く、無理やりに『這些の哮本を著得す』哮本といふ語には種々な說がある、一說には贋本といふ意味で、習庵が自ら卑下して求めらるゝまゝに敢て不才を顧ず、大膽にも序文らしくもない僞せものを書いた、何の役にも立たぬどころか、却つて好肉上に瑕を付した罪過實に彌天であるというたのであると解し、又一說には哮は哮吼の意で、所謂佛の說法を獅子吼無畏の說といふに比して無門の著した四十八則の評唱や頌は實に獅子の哮吼にも比すべきものである。それに對して習庵が序を付するのは所謂哮本に瑕瑾を著ける樣なものであるといふ意味に解してある、いづれでも結局は同じ意味であるから餘り言句に拘泥せず、アツサリと解して置くが好いと思ふ。北磵の頌には「哮本免れ難し蕭我か眼」とあるが此の場合の哮本は矢張り贋本の意味である、サテ斯樣な無用な閑言句であるから懇請に任せて書くは書いたもの、自らは一擲に付し度く思つて居る、故に『習翁が一擲を消ひずして一擲せよ』遠慮なく放棄して貰つても苦し

うない、併しかくいふもの丶、習庵も此の序に對しては大いに力をそ丶いで居る、學人は習庵がいふがま丶に之を輕視せずして充分味つて見るが可い、臨濟が佛に逢うては佛を殺し、祖に逢うては祖を殺すといふたからとて學人がウカと其の口に乘つて佛祖を撫するならば飛んだ間違を生ずる、其の邊は大いに注意して見ねばならぬ、併し兎も角も習庵は自ら其の言句を貶斥して更に『一滴をして江湖に落さしむること莫れ』というた、一滴は絞汁の文字に關聯した語で、斯樣な閑葛藤は後人を誤まる因となるものであるから江湖に落して流布させてはならぬ、兎角初心のものは文字言句に執り着いて種々と妄想を乾き本來の面目を失却し易いものであるから一點一滴をも、江湖に傳へて學人をして迷執の窠窟に陷らしめぬ樣にしたいものであるといふ、習庵はかく自ら其の言句を貶斥して居るがそれ程無用なものならば始めから作らぬ方が好い譯であるが其の實表面自己の序を貶斥しながら眞意では後代の學人が此の無門關の言句に執着して自由無碍の活機輪を失却するものあらんことを畏れて、それとなく警誡したのである。これ習庵が無門の懇囑に應ずる情誼である、若し一滴でも江湖に流出せしめたならば『千里の烏騅も追ふことを得じ』である、烏騅は楚の項羽が愛した名馬で一鞭の下に千里を走るといふ、駟も口に及ばずといふが一度滴水を落せば忽ちにして天下人を迷却して千里の名馬も之を呼び戻して迷惑を脱せしむることは出來ぬ、無門の評唱頌偈は頗る巧に出來て居るけれども聊かでも其の言句に滯れば忽ちにして本分と相距ること白雲萬里である、これ學人のよく〳〵注意せねばならぬ處であることを重ね重ねの警誡した、『紹定改元七月晦』紹定は南宋五代理宗皇帝の年號で、無門慧開は紹定二年に皇帝の卽位を祝して此の書を獻じたのであるから此の序はそれ已前に書いたものである、徹頭徹尾文字言句に執着するの非なるを說いたもので、序としては異樣な文體であるけれども已に格式を超越した禪門の書籍に對する序文であるから兎や角と批難すべきではない、簡潔にして禪機の橫溢した名文であつて、殊に參學を警策する上に於ては好箇の文字である。

四　慧開の上表文

紹定二年正月初五日恭遇
天基聖節僧慧開預於元年十二月初五日印行拈提

佛祖機緣四十八則祝延
今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬々歲
皇帝陛下恭願
聖明齊日月
叡算等乾坤八方歌
有道之
君四海樂
無爲之化
慈懿皇后功德報因佑慈禪寺前住持傳法臣僧慧開謹言

【和訓】紹定二年正月初五日、恭く天基の聖節に遇ふ。臣僧慧開預め元年十二月初五日に於いて、佛祖の機緣四十八則を印行し拈提して、今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬々歲を祝延し上る。皇帝陛下恭く願くは、聖明日月に齊しく、叡算乾坤に等しく、八方有道の君と歌ひ、四海無爲の化を樂まんことを。
慈懿皇后功德報因佑慈禪寺前住持傳法臣僧慧開謹んで言す。

『紹定二年正月初五日恭く天基の聖節に遇ふ』紹定は前にも述べた通り理宗皇帝の年號である、宋は前宋卽ち大宋が九帝で其の後の五代を南宋といふ、卽ち前の九帝と後の五帝とを合せて十四代になる、理宗皇帝は卽ち其の第十四代目である、理宗皇帝は寶慶元年正月五日を以つて卽位せられたので紹定二年正月五日は其の紀念日である。天基は天子、聖節は祝日であつて、無門は此の日に遇うて其の苦心の述作を皇帝に獻して祝意を表せんとしたのである、其の意を表する文であるから之を上表文といふ『臣僧慧開預め十一月初五日に於いて』棄恩入無爲というて印度の律部に規定する所では僧侶は已に出家と同時に君臣父子の恩愛の絆を脫し無爲安樂の境界に入つたのであるから臣僧と稱するのは異なものであるけれども、それは一切差別を絕した禪門でいへば向上邊の消息で

あるけれども、一箇の人間として見る場合には普天の下率土の濱悉く王臣にあらざるはないのであるから、所謂向下の差別門からして臣僧と稱したのである、其の臣僧慧開が此の上表文を書く前年、卽ち紹定元年十一月五日に『佛祖の機緣四十八則を印行し拈提して、今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲を祝延し上る』佛祖の機緣とは佛々祖々が學人提撕の爲に用ひられた機略因緣の意で、それを四十八則集めて之に評唱頌偈を付して獻じ、以つて聖壽の幾萬歲も窮りなきことを祝し奉る、萬歲といふ語は明治以來世間一般に用ひられる樣になつたが禪門では昔から之を唱へて居つた、卽ち毎月禪宗の寺院では祝聖といふことを行ふて天皇陛下、聖壽萬歲を祈り、國家の安泰を祝つたものである、禪門では大般若經を轉讀したり、眞言陀羅尼を諷誦して病氣災厄の消除を祈つたり福壽無量を禱つたり等するが斯樣に有言の經陀羅尼を轉讀してさへも種々功德があるとすれば絕言絕慮の大說法たる公案を拈弄する功德は實に無量無邊である、無門が天基の聖節に際して四十八則の公案を獻じたのは誠に好い祝物である、例へば趙州無字の公案は一切の閑葛藤を截斷して無の一字に歸し、其の無字をも超越して本來の面目に相見した境界をいふのであつて大般若六百卷の中に說き示された空の道理も畢竟此の無字に參ずる門關に過ぎぬ、門關たる大般若經すら之を轉ずる丈でも

諸災消除の功德があるから、況して其の堂奧ともいふべきこれ等の公案は聖躬の萬歲萬萬歲を祝延するには相應しいものである『皇帝陛下、恭しく願くは聖明日月に齊しく叡算乾坤に等しく』天子を陛下といひ太子を殿下といひ、大將を麾下といふのは秦漢以來の規定であるといふ、天子の德は天に合するが故に之を皇といひ、地に合するが故に之を帝といふとあつて天地に洽き大德を有するといふ意味から皇帝といふ、願くは獻上せる公案の功德力によつて其の聖德聖智明かなること日月の如く、叡算卽ち聖壽の長へなることは乾坤に等しからんことを祈り、更に、『八方有道の君を歌ひ、四海無爲の化を樂まんことを』東西南北及び東北東南西南西北の四維の民が此の道と德と兼ね具はれる大君を讃嘆し、四海卽ち何處の國の人々も等しく樂んで無爲の化益を蒙らんことを希むといふのである、無爲とは爲作造作に渉らずして自然に德を以つて國を治める樣子をいふ、夫の堯舜の民は腹皷を打ち土塊を叩きながら田を耕して食ひ井を掘つて飲む、帝力何ぞ吾にあらんと唄つたといふが眞に德を以つて治むる君は其の蹤跡を貽さぬ、これが卽ち無爲にして化するといふものである、恰も吾等は常に太陽の光によつて物を見、空氣を呼吸して生を持續して居るけれども、其の恩澤が餘りに大なるが爲却つて之を知らずに過して居る樣なものである、無門は其の獻じた書物の功德に

よつて皇帝の上に右の如き利益あらんことを祈つたのである、『慈懿皇功后德報因佑慈禪寺前住持傳法臣僧慧開謹んで言す』慈懿皇后は理宗皇帝の生母の謚號であるといふ說と孝宗皇帝の皇后で寧宗皇帝の后であるといふ說とある後の方が正しいといふことである、慧開は此の皇后が功德を積み恩に報ぜんが爲に建立した佑慈寺に嘗て住したことがあるので佑慈禪寺前住持というたのである、報因は報恩の訛であらう、慧開が本書を獻じ、聖壽の無窮を祝いだのも何の緣故もないのに國王に媚びたのではなく斯樣に慈懿皇后の恩惠を受けたといふ皇室に對する緣故があるからである。

五　自序

禪宗無門關

佛語心爲宗無門爲法門既是無門且作麼生透豈不見道從門入者不是家珍從緣得者始終成壞恁麼說話大似無風起浪好肉剜瘡何況滯言句覓解會掉棒打月隔靴爬痒有甚交涉慧開紹定戊子夏首衆于東嘉龍翔因衲子請益遂將古人公案作敲門瓦子隨機引導學者竟爾抄錄不覺成集初不以前後敍列共成四十八則通曰無門關若是箇漢不顧危亡單刀直入八臂那吒攔他不住縱使西天四七東土二三只得望風乞命設或躊躇也似隔窓看馬騎貶得眼來早已蹉過

【和訓】 禪宗無門關。佛語心を宗と爲し、無門を法門と爲す、既に是れ無門、且らく作麼生か透らん。豈に道ふことを見ずや、門從り入る者は是れ家珍にあらず。緣に從つて得る者は始終成壞すと、恁麼の說話大いに風なきに浪を起し、好肉に瘡を剜るに似たり。

何んぞ況んや言句に滯つて解會を覔るをや。棒を掉つて月を打ち、靴を隔てゝ痒を爬く、甚んの交渉か有らん。慧開紹定戊子の夏、衆に東嘉の龍翔に首たり。因に衲子請益す。竟爾として抄錄するに、覺えず集を成すことを、初めより前後を以つて叙列せず、共に四十八則と成るを、通じて無門關と曰ふ。若し是れ箇の漢ならば、危亡を顧みず、單刀直入せん。八臂の那吒他を攔れども住まらず。縱使西天の四七、東土の二三も、只だ風を望んで命を乞ふことを得ん。設し或は躊躇せば也た窓を隔てゝ馬騎を看るに似たり。眼を眨得し來らば早く已に蹉過せん。

『禪宗無門關』これは禪宗無門關自序とあるべき所を自序の二字がないから本文と誤り易い、禪宗は禪を宗とする家風をいふ、禪に就いては前にも大體述べて置いたが、元來佛說の中に禪宗といふ語があつた譯ではなく、後世に到つて不立文字教外別傳の宗旨を默會證契するものを稱して禪宗といふたのである、禪宗のみでなく天台にしても眞言にしても、又法相三論華嚴成實等いづれも同樣で、無量無邊の佛所說の教法を各自其の立場から解釋してそれ〴〵所依の經典によつて宗旨を組織し宗名を立てたのである、只禪宗には定つた所依の經典がない、これ不立文字と稱せられる所以で禪宗の立場よりいへば佛一代の身口意の三業悉くこれ說法であつて、身業說法も口業說法も乃至意業說法も悉く採つて以つて所依とすることの出來るのが禪宗の特色である、而して傳燈錄には禪には深淺の階級があると說いてある、即ち上を欣び下を厭うて修行するものは之を外道の禪といひ已に因果の理は信ずるも未だ欣厭の心を以つて修するの弊あるは凡夫の禪、我空偏眞というて、我が、空なることは知つても未だ偏眞に執着して法空の理を悟らざるものをば小乘の禪、已に我空法空の道理を悟つて眞理を顯さんが爲に修行するものは即ち大乘の禪である、大乘の禪は結構ではあるけれども未だ眞理といふ一物を珍重し我とか法とか迷とか悟とかいふものを認めて居る、故に更に百尺竿頭一步を進めて、迷悟凡聖の邊量を超越し、即心即佛の道理に依つて修行するものを最上乘の禪といふ、かく階級を立つるものゝ、前の禪は凡て眞禪でなくて最後の最上乘の禪のみが眞禪である、併しかくいふも未だ禪の眞面目ではない、兒啼を止めんが爲に假にかくいふたまでのことである、無門關とは此の書の題目であるが、已に無門といふからは關のあるべき筈はない、併し

乍ら無門にして關あり無關にして門ある道理もあることを知らねばならぬ、明中に暗あり暗中に明あり明暗相囘互する道理あることが解れば又無門の關を透過することが出來る。

『佛語心を宗と爲し、無門を法門となす』自序の冒頭である、これは楞伽經佛語心品の中から馬祖道一和尚が引いて「楞伽經に云く、佛語心を宗となし無門を門となす」といふたのを其の儘用ひたのである、佛語心の語は餘り深い意味はない、要するに佛心のことである、禪門は佛心宗と稱せられる通り佛心を以つて宗とする、直指人心見性成佛といふて吾々の心そのまゝが佛心である、佛心は法界に徧滿して至らざる處なく、縱に時間を絕し横に空間を絕して居るから、吾々は常に佛心の中に於いて行住坐臥運足轉歩しつゝあるのである、吾々のみならず佛々祖々も又同じく佛心中に於いて或は横說竪說をなし或は爲人度生をなされた、而かも凡夫は佛心中にあつて佛心を知らず自己の本家鄕を迷ひ出で、他國の塵境に去來して居るから、禪門に於いては切に脚下を照顧して人人本來具有して居る處の佛心佛性を徹見する爲に修行を奬勵するのである、而して佛心は上に述べた通り法界に徧滿して居るから十方通暢八面玲瓏で何處からでも這入ることが出來る、頓教からでも漸教からでも、將た又藏通別圓のいづれからでも佛心に通達すること自在無碍である、八萬四千の法門といふて、佛法の上には極めて澤山な門がある樣であるけれども、いづれも皆開き放しで、入らんと欲するものゝ入るに任せてあるから實は無門も同樣である。此の無門が卽ち禪宗の所謂法門であるから、其の道理を茲に無門を法門と爲すといふたのである。內に佛心を以つて宗旨の根本となし、外に無門を以つて法門となすのが禪宗の特色であるから、一切の佛說皆其の所依となり、一切の法門悉く所入の門關となるのである、然らば其の佛心といひ無門の法門といふものゝ樣子は如何であらうか、次に順を追うて說く處の文字に就いて其の意を會すべきである『既に是れ無門且らく作麽生か透らん』已に無門といふ以上は透入するといふことも無い譯である、門があればこそ入るとか出るとか、透るとか透らぬとかいふことがあるが、無門では其の道理はない、さればといふて透入せねば永劫に佛心宗の主人公に相見することは出來ぬ、佛法とか禪道とか向上とか向下とかいふ佛法上の語はこれ各々一の法門であるが、今それ等のものは一切無いものであるとすれば何として悟つたものであらうか『豈に道ふことを見ずや、門より入る者は是れ家珍にあらず、緣に從つて得るものは始終成壞すと』これは巖頭全豁和尚が雪峯義存和尚を接得する時の語である、他人から又聞きのことは自分のものになつて居らぬから、之を更に他の人に傳へるといふ場合には、

少し困難な反問に遇ふと忽ち返答に詰つてしまふ、所謂付燒刄は兎角剝がれ易いものである、眼耳鼻舌身意の六根門頭より入り來るものは眞に自己の寶財とはならぬ、誰が此樣云つた彼が彼樣云つた等と如何程他人の說を詳しく知つて居つても、自分が充分硏究した結果に得たものでなければ其の說に生命がなく力が籠つて居らぬ、されば巖頭和尙は又「若し大敎を播揚せんと欲せば一々自己の胸襟より持ち來つて我が家に蓋天蓋地し來れ」と云はれてある、如何程御馳走の說明を詳しく知つて居つても、實際それを食つた上でなければ腹の足にもならず他に對して其の味を說く資格もない、又緣に從つて生じたものは始め終りがあり、從つて生成したり壞滅したりする、佛心は不生不滅不增不減のものであるが、これ何によつて然るかといへば、卽ち因緣を超越した存在であるからである、緣を尋ねてそれによつて進む處の法門は、天台とか眞言とか唯識とか三論とか何とか彼とか名目がある所の法門であつて無門ではなく、それによつて得た處の眞理は眞理の一面であつて全體ではない、從つてそれには始終があり究極がある、然るに佛心を以つて宗とする我が禪門は所謂無門の法門であつて何等の所依なく、何經をも緣とせずして直下に承當するのであるから始終成壞を絕して居る、不立文字敎外別傳とは卽ちこの。緣に從つて得ず、門より入るものを執着珍重せぬことである、卽ち文字言句は畢竟始終あり成壞あるものであるから禪門では切に之を貶斥するのである『恁麽の說話大いに風なきに浪を起し好肉に瘡を剜るに似たり』恁麽は斯の如きといふ程の意で、以下に拈擧する所の四十八則の公案を指すのである、是等の各則はいづれも端的に法の本體を把捉せしめんために打開せられたる、所謂無門の法門であるけれども、而かも畢竟これ餘計な仕事であつて、正眼より見來る時は、尙ほ無門の處に門を立て緣なきに强ひて緣を設けるのであつて、それが爲め學人をして佛法は斯樣々々のもの、禪とは斯樣々々なものといふ樣に一定の型へ當て篏めて終つて、如實に佛法の眞面目を會することを得ざらしめる、卽ちこれ湛々として一波起らぬ極めて平穩なる大海に强ひて波瀾を起し、玲瓏たる玉の如く美しい肌に故らに瘡を求めるといふものである、古人は佛の一字も心田の汚というて居る程であるから、かゝる閑言句の爲に心識を弄して折角脚下に黃金の地を踏みながら本分に蹉過せぬ樣に心掛くべきである『何ぞ況んや言句に滯つて解會を覓むるをや』公案に就いて參究することすら已に風なきに浪を起し好肉上に瘡を剜るのであるからまして文字言句を逐うて理窟の解釋によつて佛法の道理を會得しようとするが如きは、一層邪路に踏み迷ふものといふべきである『棒を掉つて月を打ち、靴を隔てゝ痒を爬く、甚

の交渉かあらん』言句に滯つて解會を覔むるのは、恰ど棒で月を叩き落さうとしたり、靴の外から痒い處を爬く樣なもので、到底其の目的を達し得るものではない、或所に親子三人の愚者があつて弟息子が夜屋根へ上つて竿を振り廻して居るのを見て、總領息子が「何をして居るのか」といふと、弟は「今此の竿であのピカ〳〵光つて居るものを落さうと思ふのだ」といふ、そこで總領は「そんな短い竿ではあれまでは屆かぬ、もう一本ついだらよからう」といつて二本の竿をつないで星を叩き落さうとして振り廻して居る、親父が之を見付けて「そんなことをしてもあれが落ちるものか」といふと悴が「父さんあれは一體何だへ」といふ、親父一寸答に困つて「あれか、あれは雨の降る穴だ」といつたといふ笑話がある、言を逐ひ語を尋ねて眞如を把捉しようとするのは恰ど之に均しく、甚の交渉かあらんで、全く手掛りはない、『慧開紹定戊子の夏、衆に東嘉の龍翔に首たり』紹定戊子は紹定元年で、慧開無門道者は其の時恰も溫州東嘉の龍翔寺に住して大勢の雲衲の首として之を接化指導の任に當つて居つた。龍翔寺は浙江の中にあるから別に之を江心寺とも稱したといふことである、『因に衲子請益す』因にとは折にふれてといふ程の義で、雲衲達が時折利益になる說話を願ひたいといふ、所謂化益を請うて止まなかつたので『遂に古人の公案を將つて門を敲くの瓦子と作して機に隨つて學者を引導す』斯樣なことは風無きに浪を起すのであるから、餘り望ましくはないけれども、大衆の懇請默し難く、遂に古人の公案を以つて佛法的々の大意を會せしめる方便とした、示す處の公案はいづれも古聖先德が開發悟道の機緣であつて、甚だ貴重なものである、併し悟つた人自身に取つては生命のあるもので、其處に佛法の面目が端的に實現したであらうけれども他人が之を參究する場合には最早生命あるものではない、音を立て〻門內の人を喚ぶ場合には、瓦は方便手段であつて其の目的とする處のものではないと同じく、公案は只學人をして實參實窮せしめん爲の方便に過ぎぬ、公案其の物が悟ではなく、之を通して無門の法門に入るべき手段である、そこで慧開は古人の公案を敲門の瓦子卽ち方便として、學人の機根力倆に從つてそれ〴〵相應のものを示して引導接得したのである、此處で少しく公案の語義を說明して置かう、公案とは公府の案牘といつて役所の張り出し卽ち布告である、役所の布告は天下何人も之を遵守せねばならぬ一定不變のものである、中峰和尚の山房夜話には「公といふは乃ち聖賢其の轍を一にし其の途を同うするの理法なり、案といふは聖賢理を爲すことを記するの正文なり」とある、卽ち公案は古聖先德が悟を開かれた機緣であつてそれが直ちに後世の則となり規範となるものである、併し乍ら前にもいふ

通り公案其の者は佛法でもなく悟でもなく、所謂門を敲く瓦、月を示す指であるから、學人をして音を聞いて覺醒せしめ、月の光を明に見せしむれば公案の瓦、指は最早用事はない『竟爾として抄錄するに覺えず集を成すことを』竟爾の爾は助字である、折に觸れ機に應じて公案を拈提したのが積り積つて、それを書き付けたものが知らぬ間にもう一卷の書となつた『初より前後を以つて叙列せず、共に四十八則と成るを通じて無門關と云ふ』初から前後の順序を定めて列べたのではない從つて最初の趙州狗子の話から最後の乾峰一路の話に至るまで、各則の間に別に何等の關係聯絡がある譯でなく、系統や組織がある譯でもない、雜然たる四十八則を一纏めにして之を無門關と名けた、各則いづれも難透難入であつて、假設三世諸佛でも歴代の祖師でも、透過する底の分なければ決して通さぬといふ意味で關と稱したのである、『若し是れ箇の漢ならば危亡を顧みず單刀直入せん』難透難入なることは上述の通りであるけれども、若し修行功勳を充分に積んで電光影裏に緇素を分ち、擊石火裏に龍蛇を辨ずるといふ様な大力倆を具したものならば危險を冒して只一騎で驀直に公案の敵陣に突進するであらうといふ、箇とは這箇とか眞箇とか熟字して輕くいへば此といふ様な意味であるが、箇といふ字を用ふる場合は頗る深長な意味がある、即ち平々凡々の人ではなく、煩惱妄想を凡て打ち拂つて本來の面目を徹證した人物の目の前に引き出して來て示す様な場合に用ふるのである、漢とは惡漢とか沒分曉漢とかいふ様に罵倒する場合に多く使ふ字であるけれども、禪門では罵倒が罵倒でなく賞讃が賞讃でないといふ一種獨特の用語法があるから、箇の漢といふ場合も、語の上では強く罵倒した様であるが其の實衷心から讃嘆した趣があることを知つて置く必要がある、されば本文に於いても師家が學人に對して箇の漢といふ場合は大いに其の技倆を認めて之を尊重して居るものと見て差閊ない『八臂の那吒他を攔れども住まらず』那吒は毘舍門天王の太子で三面八臂の大力ある鬼王であつたといふ、骨を折つて父に返し肉を裂きて母に返し、然る後本身を現じ大神通力を現はして父母の爲に說法したといふ傳說がある、かゝる大力の鬼王でも他即ち箇の漢が公案に向つて直入するのを攔り止めることは出來ぬ、本來の面目を徹見した所謂英靈の漢が公案を拈弄する場合には其の全力を傾注するのであるから其の力は實に山を顚し海を飜倒するの概がある『縱使西天の四七東土の二三も風を望んで命を乞ふことを得ん』西天の四七は西天竺即ち印度の迦葉尊者より達磨大師までの二十八祖をいひ、東土の二三は二祖慧可和尚より六祖慧能和尚に到る六祖をいふ、本書に擧げた四十八則の公案を自由自在に橫拈倒用し得る箇の英靈漢に對しては

西天東土の祖師方でも其の評判を聞いた丈で已に軍門に降つて其の命令を乞ふであらう、箇の漢とは遠い處に居るのではない、人々箇々皆これ箇の漢であつて、一度活眼を開いて公案の眞面目を徹證する時には佛祖といへども倒退三千である、所謂明眼の衲子の境界は魔外も窺ふことは出來ぬ、『設し或は躊躇せば也た窓を隔てゝ馬騎を看るに似たり』若し單刀直入の機用が無くて趙州の無が斯うだの百丈野狐が彼だのと思量分別に渉つてマゴ〳〵して居る樣では所謂箇の漢といふことは出來ぬ、その樣なことでは窓外を走る馬騎を見る樣なもので、忽ちの間に眞如實相の影を見失つて到底追付くことは出來ぬ、公案の文字言句に滯らず一見辨見に無字の本面目、野狐の正體を徹證すべきである、『眼を貶得し來らば早く已に蹉過せん』思量分別や智見解會を以つて本分の事を證得せんとするものは忽然として目の前に其の影が現れた時に直ちに之を捕へることが出來ないでパチクリと瞬きをしたりグズ〳〵と躊躇して居る位が落である、その間に眞如の影は遠く行き過ぎて終つて、最早影も形も見えぬ、眞如は常に動いて停まざるものである、其の當體を把捉せんが爲には非常に敏活な機用がなければならぬ、所謂急流上に毬子を打するといふ樣な働があつて始めて眞如の當體に相見し、所謂西天東土の列祖をして風を望んで命を乞はしめることが出來るのである。

頌曰大道無門千差有路透得此關乾坤獨歩

【和訓】 頌に曰く、大道無門、千差路有り、此の關を透得せば、乾坤に獨歩せん。

『頌に曰く』頌は梵語の伽陀であつて又偈といふ字を當てることもある、支那では詩の六義といはる丶比、賦、興、諷、雅、頌の中の一つであつて、頌は德を頌する所の詩の體となつて居るが禪書に出て居る頌は大悟徹底の境界を頌表する意味に於て用ひてある、佛法の玄旨悟達の妙境は言句文字を以つて說明的に叙述することは出來ぬ、如何に多くの文字を用ひても理路を逐つて居つては到底眞意を他に傳へることが出來ぬが、詩の體によつて之を諷詠する時は神韻漂渺たる中に自然に眞如の面影を想像することが出來る『大道門無し』大道とは天地間に充塞して居る眞如の當體をいふのである、眞如は之を佛性とも法性とも時には佛心とも法身ともいふがそれは人格的方面から見たり道德的方面から見たり、又は理論的方面から見たりする處の見方の相違による名稱である、今此處に大道といふのは眞如を道德的方面から見たので此の大宇宙には人間は人間畜生は畜生、草木は草木でそれ〳〵運行する道が定まつて居る、其の道は元來眞如其の者であつて時間的にも空間的に

も一切時一切處に徧滿して居る、從つていづれの方面にも之を礙ゆる處の門はない、東からも西からも北からも南からも、入らんと欲すれば自由に入り、進まんと欲すれば任意に進むことが出來る、こゝの道理を大道門なしというたのである『千差路あり』前には平等の方面から大道門なしといふたけれども、眞如には平等門があると共に差別門がある、平等の方面から見れば人格的方面から法身といひ道德的方面から大道というたのも畢竟一時の假說であつて法身とも大道とも眞如とも何とも彼とも名け樣がないのが眞如の當相であるけれども、之を差別の立場から見る時は以上の各名目は──それ〴〵動かすべからざるものであるのみならず、大道の中にも又千差萬別の道がある、之を人道の上に就いてのみいつても、親としての道、子としての道、君としての道、臣としての道といふ樣に、人の實踐躬行すべき道は無數にある、而かも此の無數の道も無差別中の差別であつて、平等の本體たる眞如を離れたものではない、大道無門の當處にチヤンと千差有路の道理がある、此の平等即差別、差別即平等の道理は理窟の上からは何人も一應は了解するけれども、眞に其の一枚の面目を了得することは頗る困難なことである、そこで之を無門は常に關と稱して居る『此の關を透得せば』若し此の難關を透過して平等即差別の端的を親しく我がものとすることが出來たならばそれこそ『乾坤を獨歩せん』天地宇宙を我が掌裡に把握し、乾坤の主人公となつて其の中を堂々と橫行濶歩することが出來るのである、これは無門が徒らに文字を弄して大言壯語したのではなく、眞に本分の事に徹證すれば、宇宙と我と一如になつて我は宇宙全體の事を悉知するのであるから一事一物として我が意のまゝにならぬものはない、悟るといふことは單に知るといふことでなく、それを我がものにする、それと我と一致するといふことであるから從つて此の關を透得せば乾坤を獨歩せんといふ道理もあるのである。

木版の古書には慧開の自序の次に「機緣四十八則」と題して四十八則の目次が揭げてあるけれども、本講話には卷頭に目次を揭げてあるから此處に重ねて錄する必要はあるまい、機緣四十八則とは機根に應じ因緣に從つて舉拈したる四十八則の公案といふ程の意味である。

第一則 趙州狗子

趙州和尚因僧問狗子還有佛性也無州云無

【和訓】 趙州和尚因に僧問ふ、狗子に還つて佛性ありや、也た無や。州云く、無。

〔講話〕『趙州和尚』趙州は趙州城東観音院の従諗和尚のことで、南泉普願和尚の法嗣である、禪門では有名な大宗師家を呼ぶに多く其の名を以つてせずして其の住所をいふ習はしになつて居る、百丈だの南泉だのといふのは其の一例である、従諗和尚も趙州和尚といふ方が廣く知られて居る程である、曹州郝鄕の人で始め瑞像院に於いて得度し、後南泉普願禪師に謁して參究し、それより黄檗、寶壽、鹽官、夾山等に歷參して八十歳の時、趙州觀音院に住した、爾來百二十歳で遷化するまで前後四十年、多くの學人を接得して名聲四方に轟き、其の遷化するや眞際大師の諡を賜つた、趙州の生れたのは唐の代宗大曆十三年であるから、韓退之が佛骨表を奉つたのは趙州の四十二歳の時、武宗の會昌沙汰卽ち會昌年中の廢佛棄釋は六十八歳の時、日本傳敎大師が比叡山を開創したのは其の十一歳の時、弘法大師が高野山を開創したのは三十九歳の時、菅公が遣唐使に任ぜられたのは百十七歳の時であつた、之によつて大體趙州出世時代の樣子が解るであらう、サテ愈〻公案の本文に入ることとする『因に僧問ふ、狗子に還つて佛性ありや也た無しや』佛は一切衆生悉有佛性と說かれた、虻蜂蜻蛉蟹蛙に至るまで生きとし生けるものは悉く佛の性質を具へて居ると申され、又吾と山河大地同時に成道すと仰せられたから生命ある動物のみならず山河大地草木等に至るまで矢張佛性を有する譯である、然らば其處等に戯むれて居る狗子でも佛性を有するのでありますかと趙州門下の一僧が念を押した、因みにとは或時といふ程の議で、坐談の折か何かに庭前に遊んで居た狗子を見て早速問うたものと見える、狗子の子は別に意味はない。拂子とか椅子とかいふ樣な場合と同じで添字である、此の公案は趙州狗子の話というて禪門では最も有名な公案になつて居るから無門が最初に之を拈提したものと見える、殊に慧開の評の中でも此の無字の公案に對するものが最も簡潔で要を得て居ると古人も讃嘆して居るし、黄檗禪師も古則拈提の初めは此の無字の話を工夫せよといはれたといふことである、此の問に對する趙州の答は頗る簡單明瞭で『州曰く、無』とある、無は無しといふのであるから狗子には佛性を認めないといふ答と一應は解しても可い、併しそれで

は佛說の一切衆生悉有佛性の趣旨に反するではないかといふ疑が誰しも起ることである、そこで無門關にはこゝまで出て居る丈であるが趙州錄には此の文の續に「僧云く蠢動含靈皆佛性あり、狗子甚麼に因つて無きや、師云く他に業識の性あるが爲なりと、又一僧師に問ふ、狗子に還つて佛性ありや也た無しや、師云く、有、既に有り、甚麼としてか這の皮袋裏に入り來るや、師云く、知つて故に犯すが爲なり」とある、一體趙州の答へた無といふ字を有無の無と解するから佛說に背くではないかといふ樣な疑が起るのである、從つて趙州錄にあるが如き種々な閑言句を弄することになるのである、趙州の無は決して斯樣な有無對待の上の無ではない、無の一字を以つて徧法界の當相を其の儘其處へ擲け出したのである。狗子の話に就いていふ場合であるから狗子を僧の目の前に引張り出して、サア佛性が有るか無いかこの狗子に就いてよく〳〵見屆けよと有ると見るも不是、無いと見るも不是ぢや、思量分別を雙に拂ひ去つて直下に狗子の眞面目に相見するが可いといふ趣である、併し趙州は此の僧が一切衆生悉有佛性といふ佛說の言句に執着して居るのを見て取つたから其の偏見を打ち拂はんが爲に無の字を用ひたのであつて此の場合有の字を以つて無の字に代へることは出來ぬ、此の公案に於ける趙州の無は實に牢として動かすべからざるものである、こゝが公案の面白い處で、有無の對待に渉らぬ無であるからとて他の字を以つて之に代へるとは出來ぬ、公案は凡て漠然たる文字が使つてあつて無用の字や同義の字が重つて居る樣に一應は考へられるがよく味つて見るといづれもの文字も恰ど機械を組織する處の金具がどの樣な小さなものでも一つを缺けば其の運轉に差閊へる處の大切なものばかりであると同樣に、一字一句といへども疎かにすべきではない、此の公案に於ける無の字の如きは殊に千鈞の重味のある文字で古來參學の徒が種々と研究して見るが却々挺子でも動かぬ、所謂樞機である、卽ち機械の樞軸となる所のものである、慧開が只僧と趙州との一問一答を擧げた丈で、趙州錄にある樣な爾餘の問答を除いたのは頗る當を得たやり方である、有とか無とかいふ對待邊に渉ればこそ兎や角と言句も費さねばならぬけれども、趙州は無の一字を以つて僧の分別を斷ち截つて終つたからそれで自出度一場の公案が圓成したのである、更に向下落草の手段を用ふる時は趙州錄にある爾餘の問答も役に立つし又有用なものであるが、慧開は一刀兩斷的の大機用のみを玆に擧げて參學のものをして閑葛藤の爲に引かゝるの累を免かれしめんとしたのである、併し簡潔である丈に智解分別を弄するものには却々的意が解らぬので、古來禪門に於ける最も難透の關として問題になつて居る、それは兎も角、趙州の無字を諸人者

何と味はゝれたか、白隱は佛性ありといはゞ三十棒、無しといはゞ又三十棒というて居る、ウツカりすると白隱が大正の世にも暴れ出すぞ。

無門曰參禪須透祖師關妙悟要窮心路絕祖關不透心路不絕盡是依草附木精靈且道如何是祖師關只者一箇無字乃宗門一關也遂目之曰禪宗無門關透得過者非但親見趙州便可與歷代祖師把手共行眉毛厮結同一眼見同一耳聞豈不慶快莫有要透關底麼將三百六十骨節八萬四千毫竅通身起箇疑團參箇無字晝夜提撕莫作虛無會莫作有無會如吞了箇熱鐵丸相似吐又吐不出蕩盡從前惡知惡覺久久純熟自然內外打成一片如啞子得夢只許自知驀然打發驚天動地如奪得關將軍大刀入手逢佛殺佛逢祖殺祖於生死岸頭得大自在向六道四生中遊戲三昧且作麼生提撕盡平生氣力擧箇無字若不間斷好似法燭一點便著

【和訓】無門曰く、參禪は須らく祖師の關を透るべし。妙悟は心路を窮めて絕せんことを要す。祖關透らず、心路絕せずんば、盡く是れ依草附木の精靈ならん。且らく道へ、如何んか是れ祖師の關。只だ者の一箇の無の字、乃ち宗門の一關なり。遂に之れを目けて禪宗無門關と曰ふ。透得し過ぐる者は、但だ親しく趙州を見るのみに非らず。便ち歷代の祖師と手を把つて共に行き、眉毛厮ひ結んで、同一眼に見、同一耳に聞く可し。豈に慶快ならざらんや。透關を要する底有ること莫し麼。三百六十の骨節、八萬四千の毫竅を將つて、通身より箇の疑團を起して、箇の無の字を參ぜよ。晝夜提撕して虛無の會を作すこと莫れ。有無の會を作すこと莫れ、箇の熱鐵丸を吞了するが如くに相ひ似たり、

吐けども又た吐き出さず。從前の惡知惡覺を蕩盡して、久々に純熟して、自然に内外打成一片ならば、啞子の夢を得るが如く只だ自知することを許す。驀然として打發せば、天を驚かし地を動さん、關將軍の大刀を奪ひ得て、手に入るゝが如く、佛に逢うては佛を殺し、祖に逢うては祖を殺し、生死岸頭に於いて大自在を得、六道四生の中に向つて遊戲三昧ならん。且つ作麽生か提撕せん。平生の氣力を盡して箇の無の字を擧せよ。若し間斷せずんば好し法燭一點すれば便ち著くに似ん。

〔講話〕『無門曰く』これからが無門慧開が公案に對して下した評語である、故に無門曰くとある、元來一切衆生悉有佛性といふ上からいへば各人皆見識は同一であるべき筈であるが、平等の一面には必ず差別があつて、所謂人々一座の補陀山であるから無門には無門の見方がある、公案は前にもいうた通り公府の案牘であつて世人一般の矩とし範とすべき所謂共通的法則であるけれども、之に參じ之を拈ずる人の手許からいへば人々各自に異つた見方を生ずるは又當然のことである、以下無門の評語を講ずるけれども諸人者は此の文字に執着することなく、之は只參考に留めて置いて直下に公案の眞面目を參究して各箇獨立無伴の境界を開拓すべきである『參禪は須らく祖師の關を透るべし』參禪をするには須らく歷代の祖師方が設けられた關門を透過せねばならぬ、公案は道に入るの規則であり範例であるから之によつて修すれば正しくして且つ速かに開發悟道が出來るのである、恰ど旅をするものが旅行案内に據れば迂り道をせず比較的速かに而かも間違なく目的地に達することが出來る通り、祖師の關門即ち公案によつて參學すれば佛祖の堂奧に入ることは容易にして且つ正確である『妙悟は心路を窮めて絕せんことを要す』參禪は祖師の關を透過すべきことは上述の如くであるが、而かも祖師の關を透過するには智慧分別を以つてすることは絕對に避けねばならぬ、知識的に佛祖の公案を解釋する時はそれからそれへと迷執を生じて果しがなく、如何程骨を折つて考へても青竹を割る樣に豁然として疑問が解決して後に何物も殘らぬといふ譯には行かぬ。其處で妙悟即ち玄々微妙な悟の境界に至るには心路といふて心意識の上のすぢ路をたどるといふことはサツパリと止めて驀直に法の本體に向つて突入することが肝要である、一超直入如來地とは即ちこゝの道理をいうたのである、吾々が公案の文字言句に就いて兎や角と思量分別をして居るのは心路に彷彿つて居るのであつて、恰ど八幡の森に迷ひ込んだ樣に、步いても步いても廣々とした自由の境

地に出ることは出來ぬ、かゝる場合には、大死一番、思ひ切つて其の心路を絶すべきである、何時までも前にある御馳走の味を論じ合つて居るよりも早速とつて味はつて見れば直に甘味いか不味いかゞ解るではないか、『祖關透らず心路絶せずんば盡く是れ依草付木の精靈ならん』祖師の玄關を透らず、心意識の妄動を停止することを知らずして相變らず文字言句の邊量に築着磕着して居るものは夫の草や木につきまとつて居る精靈の樣なものであつて、自由の利かぬこと顯しい、精靈といふことは人智の未開な時代は何處の國にもあつたと見えて西洋の書物等にも精靈が木や草に付着して居つて人間に對して幸福も禍を授けるといふことが書いてあるさうだが、我が國でも善玉惡玉などというて無形な動物とも神とも分らぬ樣なものが禍福を人に與へるといふ考が昔からあつた、要するに斯樣な精靈といふものは執着の凝り固りであつて我が禪門に於いては最も卑むべきものとなつて居る、叅禪學道に志すものは依草付木の化物の樣にならぬ心掛が肝要であるぞといふ警誡である、『且らく道へ如何か是れ祖師の關』抑も祖師の關とは一體どんなものであらうぞなどと仰山らしくいふと直にそれに執り着いて祖師の關とは此樣ものであらうか彼樣ものであらうかと妄想を畫いても困るから一應説明をして見よう、併し次に述べることも、畢竟混沌に眉を描くと一般で、却つて好



第一則　趙州狗子

肉上に瑕を剜るの譏を免れぬかも知れぬが一人でも語に執せずして意を酌む者あらば多少の功はあるであらうといふ樣な意味が此の間にあるものと見て置くが可い、『只だ者の一箇の無の字、乃ち宗門の一關なり』これは外でもない、趙州和尚が僧に示された處の無の一字が實に祖師門下向上の關棙子である、サア此の關棙子が頗る厄介なもので、斯ういうて學人達に種明しをすると直ぐに何だそんなことか、それでは趙州の手許に丈佛法があつて外の處にはないのかとか、同じ趙州の語でも無の方は祖師の關であるが有の方はさうではないのかなどと摸索するものがあらば、かゝる鈍漢は宗旨の面目を會すること到底不可能である、それは兎も角、此の無の一字が宗門の關所であるから、そこで本書の如きも禪宗無門關と名けたのであるといふ意味で『遂に之を名けて禪宗無門關といふ』と一應結んだのである、『透得し過ぐるものは但だ親しく趙州を見るのみにあらず』趙州は元來佛を呵し祖を罵つて直下第二人なしといふ向上の境界に到達した人である、趙州と歴代の佛祖と二にして不二であるから、一度此の無字の關を透過し得たものは啻に趙州の境界を見抜くばかりではなく、其の時こそは『便ち歴代の祖師と手を把つて共に行き、眉毛厮ひ結んで同一眼に見、同一耳に聞くべし、豈慶快ならざらんや』迦葉尊者も阿難尊者も龍樹菩薩も透得底のものから見れば皆友達である、此の場合には印度と日本といふ空間上の距離も、昔と今といふ時間上の隔も悉く泯絶して終つて互に手を把り合つて同道に行き、眉毛を結び合ふ程相接近し合つて佛法の商量をなすのみならず、更に一層親しくなつて同じ眼を以つて物を見、同じ耳を以つて音を聞くことが出來る、要するに歴代の祖師と一如になつて終ふことをいふのである、これ趙州が佛祖と同道唱和底の人であるから、趙州の境界を徹證したものは又佛祖と手を携へて行くことが出來る譯である、併し元來吾吾は何であらう、趙州と一如になるの佛祖と親しくなるのといふと、如何にも吾等と佛祖とが、これまでに遠く離れて疎遠な間柄であつたかの樣に思はれるが、決して然らず、父母未生已前の昔より已に吾等は佛祖と同道唱和しつゝあつたのである、それを今此の言を聞いて俄かに佛祖と親しくなつた樣に考へるものがあれば、それこそ大きな謬見である、本來同一眼に見同一耳に聞きつゝあつたので、今無門がかくいうたので始めてそれに氣が付く樣では所謂遲八刻了である、兎に角斯樣に佛祖と親しいものでありますれば實に慶快至極といはねばならぬ、『透關を要する底あること莫し麼』サア我が無門座下に於いて此の關棙子を打開して佛祖の堂奥に進まんとするものはないか、苟くも參禪學道に志したもので此の目的を持たぬものはあるまい、透關せんと望むものは、『三百六

十の骨節、八萬四千の毫竅を將つて通身より箇の疑團を起して箇の無の字を參せよ』である、人間の體の骨は三百六十片からなつて居つて毛の竅が八萬四千あるといふことは誰が檢べたもので、今日の科學に當て篏まるか否かは解らぬが、兎に角頭の先で一寸考へる位でなしに、全身を擧げて一枚の大疑團となり切つてかゝれといふのである、毫竅は毛の穴といふことで、人間は猿よりも毛が三本多いとか少いとかいふ程であるから或は八萬四千位の毛の穴はあるかも知れぬ、要するにこれ等の語は頭のギリ〳〵から足の爪先までといふ意味を力を籠めていつたのである、全身通身疑問三昧となつて例の無の字を參究して見なければ到底生やさしいことでは祖師の關門を透過することは出來ぬといつて實參實究の切要なることを力說したのである『晝夜提撕して虛無の會を作すこと莫れ有無の會を作すこと莫れ』提撕の撕も提と同じくひつさげるといふ字で祖師の關を透過せんと思ふものは此の無字を明けても暮れても把持して離さず、仔細に參究すべきである、併し此の無を以つて有無の無と考へたり、虛無の無と考へたりしてはならぬ、前にも屢いふ通り趙州は狗子に佛性があるのないのといふことを答へたのではなく、無の一字を以つて狗子を其の儘其處へさし出して示したのであつて、其の狗子は僧が盡法界を代表せしめたのであるから、從つて此の場合無の一字も又一切萬有を代表して居る、之を有無の無や、虛無の無と同じ樣に考へて凡夫の思量分別の對象とするのは大きな謬である、會は解會とつゞく場合の意味で卽ち考へといふ程の義である、虛無とは斷常の二見の中の斷見の方であつて、佛敎では常見も偏頗な考として排斥するが斷見も亦一方に偏つた古說として取らぬ、『箇の熱鐵丸を呑了するが如くに相似たり、吐けども又吐き出さず』サテ此の無字を全身を擧げて疑ひ初めると、それこそ熱鐵丸を呑んだと同樣で、呑み込むことも吐き出すことも出來ぬ、進むに道なく退くにも道がない、進退谷まつた境界に一度は立つて見ねば活路は開けぬ、窮すれば通ずといふが、實に再活現成は大死一番の後でなければ得られぬのである、何でも佛道修行は獅子奮迅の勢を以つてなすべきで、宇宙の眞理を徹證すれば自ら其の主人公となつて自由自在に之を左右することが出來るのであるからそれに對する努力も又尋常一樣なことでは駄目である、『從前の惡知惡覺を蕩盡して久々に純熟して內外打成一片ならば』煩惱妄想の爲に身心を打ち任せて生死流轉の境界を脫しようとも努めぬのは素より惡いことであるけれども、其の煩惱を滅し妄想を拂はん爲に種々と思量分別をするのも又これ惡知惡覺たるを免れぬ、學問や知識は世渡りの上に一應は必要なものであるけれども、人生のこと宇宙のことは悉く學問知識を以つて解釋し盡せ

るものではない、否寧ろこれあるが爲に束縛せられて物の眞相が解らぬ場合が多い、さればかゝる惡知惡覺を拂ひ盡して、久々に悠くりと氣長に、さればとて一寸時も懈怠することなく、純一無雜に習熟練磨して根本の無明を斷盡すべきである、豁然大悟だの忽然として省ありだのといふから、禪宗では急に迷を轉じて悟を開くことが出來るといふ樣に考へたならば、それこそ大きな間違ひである、香嚴が擊竹を聞いて悟道するにも靈雲が桃花を見て桶底を脫するにもそれ〴〵長い間の修行を要した、まして禪門に於いては悟後の修行を重じて一生不離叢林を以て理想とするに於てをやである、久久に純熟するといふことが最も肝要である、而して爲作造作を用ひずして任運自然に自他彼此の間に隔なく法界と我、佛と衆生と煩惱と菩提とが打して一片と成ると、卽ち一如となり一枚となるならば、それこそ立派な佛境界であるけれども、而かもその有樣は『啞子の夢を得るが如く、只だ自知することを許す』である、啞は夢にどんなことを見てもそれを人に語ることが出來ぬ、只自分一人で思ひ出して居る外はない、所謂冷暖は自知するのみである、『驀然として打發せば天を驚かし地を動かさん』悟の境界は之を他に說き示すことは出來ぬけれども、それは把住の方面からいうたのであつて、他に又放行の一面があつて、其の立場からいへば驀然として打發する道理もある、此の時に於いては所謂大死一番再活現成の境界であつて、かくて驚天動地の大活動は實現せられるのである『關將軍の大刀を奪ひ得て手に入るゝが如く、佛に逢うては佛を殺し祖に逢うては祖を殺す』關將軍は蜀の家臣で、名を關羽、字を張雲といつた、常に靑龍刀を提げて千軍萬馬の中を往來した豪傑である、驀然として打發した放行の作略を形容して見ようならば、彼の千古の大英雄たる關羽の靑龍刀をも奪ひ取つて佛に逢へば佛を殺し祖に逢へば祖を殺して眼中何物をも認めぬ天上天下唯我獨尊の境界、獨坐大雄峰の面目である、此の殺佛殺祖といふことを或る門外漢が聞いて禪宗は秩序を無視し禮義を破壞する思想であるといつたことがあるが、物も斯樣にトンチンカンに履き違へられると却つて愛嬌である、物を見る時は、必ず視點といふがある、視點を中心とすれば他は皆それに對して從屬的關係となつて、たとひ其の視點となつてものが美とか價値とかいふ上からいへば取るに足らぬものでも、それが中心たることは動かすことは出來ぬ、此の時には視點は他の何物よりも尊嚴な位置を占むるのである、我等は宇宙間の萬有から見れば些々たる一個の人間に過ぎぬが、而かも一人が缺ければ宇宙に一缺點が生ずる、此の故に我等はこれ宇宙の一樞機である、樞機として見る時は實に最も大尊貴なるものであつて、假設佛祖といへども此の際從屬的關係

に立つことを免れぬ、此處の道理を殺佛殺祖といふのである『生死岸頭に於いて大自在を得、六道四生の中に向つて遊戲三昧ならん』生死は人生の一大事である、此處では必しも生と死といふ事實のみを指したのではない、如何なる大事件が突發しても、平然として之を取り捌いて自由自在の働を現はし、六道四生の間に無碍自在に往徠遊戲することが出來るのは即ち驀然打發の上の大機大用である、六道は地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六つの世界である。これは別々に存在するのではなく、今日我々の目から見れば現在の社會を此の六道に分つことが出來るのである、併し昔は無智なものに解りよい樣に、斯樣な世界が別々にあると說いたものと見える、四生は胎卵濕化の四種の生れ方である、胎生は人間や獸類の如く胎內より形になつて生れて來るもの、卵生は鳥類の如く卵によつて生れるもの、濕生は濕氣から生ずる蟲けらの類をいひ、化生は經文には種々な解釋があるが蛹から蝶になる樣な場合と見て置くがいゝ、斯樣に世界の生物には種々雜多の種類があるが、驀然打發の大機用を現ずる場合には全宇宙の主人公となつて自由無碍の往徠が出來るから六道四生いづれへでも遊戲三昧なることが出來るのである『且つ作麼生か提撕せん平生の氣力を盡して箇の無の字を擧せよ』晝夜箇の無の字を提撕せよと前にも述べたが、其の提撕の方法は如何、畢竟どう工夫をしたものであらうか、それは別段難しい手段は要らぬが只全力を注ぐことが肝要である、所謂平生怠らず全身の氣力を盡して趙州無字の關に向つて直往驀進すべきである『若し間斷なくば好し法燭一點すれば便ち著くに似ん』若し斯樣に全力を注いで參究して、毫も間斷なくやつたならば、豁然として知見の開發することは恰も蠟燭火が心を剪ると忽ち明るくなる樣なものである、蠟燭は念々刻々怠らずに燃えて居るが更に光が一層明になる、便ち著くとはこの事をいつたのである、禪門の修行は不借身命的でなければならぬ、古人は數年間脇席に着けずして打坐せられ、又師を訪うて敎化を受けんに爲とは雪中に立つて夜を徹せられる樣な勝躅もある、人生の一大事を悟り自ら妄執を斷じて自由無碍の佛境界に住するのみならず、廣く其の德を一切衆生に蒙らしめることが出來るのであるから、如何なる困難に遭遇しても屈せず撓まず、意根下の卜度を停め有無の見解を捨て、獅子奮迅の勢を以つて參究すべきである、遮莫、茲に人あつて箇の無字の眞面目は畢竟如何と問はゞ、矢張無と答へる外はない、王祖は此の無字を頌して「趙州露刄劍、寒霜光り焰然、纔かに是れ如何と擬すれば、身を分つて兩段となる」といふて居るが、これも又一場の懡㦬に過ぎぬ、言端語端は悉く迷執の因となるものであるから、端的を示さんとすれば矢張端的に其のものを

提起する外はない、

頌曰狗子佛性全提正令纔涉有無喪身失命

【和訓】 頌に曰く、狗子佛性、全提正令、纔かに有無に涉れば、喪身失命せん。

〔講話〕『狗子佛性』此の四字には僧因に問ふ狗子に佛性ありやまた無しや、州曰く無云々の話が含まれて居る、否、それどころではない、一切衆生悉有佛性の語も山河大地同時成道の語も、乃至は歷代祖師の言說も公案も、佛四十九年の說法も、悉く收めて此の四字の中にあることを知らねばならぬ、狗子に佛性があるのでもなく、佛性に狗子があるのでもない、狗子が佛性であり佛性が狗子である、佛性と狗子と二にして一、一にして二の道理を會して、此の四字を見ると無門が脫白に、此處に呈露せられた狗子の眞面目に相見することが出來るのである『全提正令』禪門の師家が本分底から呈露する言句を正令といふのは國王大臣が法令の根本となるものを發表する樣なもので、天下の青人草は悉くそれに準據して各其の堵に安んずる、正令とは卽ち憲法の綱要ともいふべきものである、今趙州が狗子に佛性ありやと問はれて或は有と答へ或は無と答へたのは全く現金懸直なし腹の中丸出しであつて、些々たる法律の細條細目ではない、滿天下の學人が據つて以つて根本の規矩となすべき佛向上の端的である、されば『纔かに有無に涉れば』趙州は一僧に對しては無と答へ一僧に對しては有と答へられたが、いづれも相對上の有無ではない、其の時其の折に機に應じて本分の正令を行ぜられたのであるから、之に對して些かでも相對上の有無の分別に涉つたならば忽ちにして、『喪身失命せん』である、自己の身命を喪失するのみならず、滿天下の學人を惑はして罪過彌天である、古來佛祖は皆常に正令を全提して示されたもので、眞に端的を會するが爲には瑣末な閑言句は却つて妨げとなる、されば學人の方でも有無等の第二念に涉らずして驀直に祖師意に參ずる樣に務むべきである。

第二則　百丈野狐

百丈和尚凡參次有一老人常隨衆聽法衆人退老人亦退忽一日不退師遂問面前立者復是何人老人云諾某甲非人也於過去迦葉佛時曾住此山因學人問大修行底人還落因果也無某甲對云不落因果五百生墮野狐身今請和尚代一轉語貴脫野狐遂問大修行底人還落因果也無師云不昧因果老人於言下大悟作禮云某甲已脫野狐身住在山後敢告和尚乞依亡僧事例師令維那白槌告衆食後送亡僧大衆言議一衆皆安涅槃堂又無人病何故如是食後只見師領衆至山後嵓下以杖挑出一死野狐乃依火葬師至晩上堂擧前因緣黃蘗便問古人錯祇對一轉語墮五百生野狐身轉々不錯合作箇甚麼師云近前來與伊道黃蘗遂近前與師一掌師拍手笑云將謂胡鬚赤更有赤鬚胡

【和訓】　百丈和尚凡そ參の次で、一老人有つて、常に衆に隨つて法を聽く。衆人退けば老人も亦た退く。忽ち一日退かず。師遂に問ふ、面前に立つ者は復た是れ何ん人ぞ。老人云く、諾。某甲は非人なり。過去迦葉佛の時に於いて、曾つて此の山に住す。因に學人問ふ。大修行底の人還つて因果に落つるや也た無や。某甲對へて云く、不落因果と。五百生野狐身に墮す。今請ふ和尚一轉語を代つて、貴ぶらくは野狐を脫せしめよ。遂に

問ふ、大修行底の人還つて因果に落つるや也た無や。師云く、不昧因果。老人言下に於いて大悟。作禮して云く、某甲已に野狐心を脱して山後に住在せん。敢て和尚に告す、乞ふ亡僧の事例に依れ。師、維那をして白槌して、衆に告げしむ。食後に亡僧を送らんと。大衆言議す、一衆皆な安し。涅槃堂に又た人の病む無し、何が故ぞ是の如くなると。食後に只だ、師の衆を領して、山後の嵓下に至つて、杖を以つて一死の野狐を挑げ出して、乃ち火葬に依るを見る。師晩に至つて上堂、前の因縁を擧す。黄檗便ち問ふ、古人錯つて一轉語を祗對して、五百生野狐身に墮すと、轉々錯らずんば、箇の甚麽とか作る合き。師云く、近前來。伊が與めに道はん。黄檗遂に近前して、師に一掌を與ふ。師手を拍つて笑つて云く、將に謂へり、胡鬚赤と、更に赤鬚胡有ることを。

〔講話〕『百丈和尚』百丈は名を懷海といひ馬祖道一和尚の法嗣である、福州長樂の人で、智藏和尚と共に馬祖の會下に參じて苦修練行すること數年の後、馬祖の印可を得て洪州大雄山に住した、大雄山の高さ百丈であつたから別に百丈山とも稱した、其處に於いて大いに化門を開いた處から懷海和尚のことをも人呼んで百丈といつた、行持頗る綿密で、夫の「一日作さゞれば一日喰はず」といふ語は實に百丈和尚が自らいひ自ら實行せられた處である、由來禪門は起居動作の規矩が整つて居ることを誇とするが、其の規矩の根本たる百丈清規は實に和尚が初めて制定せられたものである、唐の元和九年九十五歳を以つて示寂せられた『凡そ參の次で一老人有つて常に衆に隨つて法を聽く衆人退けば老人も又退く』百丈和尚は右に述べた通り行持の綿密な人であつたから朝參暮參常に參禪辨道を怠る時とてはなかつた、然るに何時の頃からか一人の老人が毎日來て參禪問法の場合には必ず僧と共に其の席に列つた、而して參學が終つて大衆が各寮に歸ると其の老人も何處へか行つて終ふ、百丈山では不思議な老人だといふので噂の種になつて居つたものであらう、『忽ち一日退かず師遂に問ふ、面前に立つものは復た是れ何人ぞ、老人云く、諾、某甲は非人なり』或日大衆が退いてからも老人は其の場に止つて居るので、百丈和尚は我が面前に立つて居るのは誰かと尋ねると、老人は諾、某甲は人間ではありませぬと答へた、『過去迦葉佛の時に於いて曾つて此の山に住す』迦葉は釋尊の御弟子の迦葉尊者のことではない、過去七佛といふて釋尊より以前に七代の佛があつて各數百年に渉つて衆生を敎化せられたといふ傳説があるが此の老人も過去迦葉佛の時代に此の百丈山

の住持となつて居つたことがあるといふ、何だか眉唾な話であるが兎角の評は後に譲つて先づ次を述べよう『因に學人問ふ、大修行底の人還つて因果に落つるや也たいなや』其の頃座下に居つた一人が或時拙者に向つて大いに修行功動を積んだ人でも因果に左右せられるものでありますかと問うた。全くありさうな質問である、此の公案は百丈が野狐を假り來つて因果の道理を向上底から拈ぜられたものであつて、荒誕無稽な點は一の方便と見て差問ない『某甲對へて云く、不落因果と、五百生野狐身に墮す』其の時老人は不落因果と答へた、修行功動を積んで大悟の境界に到つたものは因果を超越して終つて居る、因果等に左右せられるものではないと答へた、此の答が誤つて居つた爲に五百生の長い間野狐の身を受けねばならぬことになつた『今請ふ和尚一轉語を代つて貴ぶらくは野狐を脱せしめよ』どうか私の爲に迷を轉ずる一語を下して此の苦しい野狐の境界を脱せしめて下さいと老人が赤誠を籠めての願ひである、一語のいひ損ひの爲に五百生の間野狐身に墮するといふ程であるから苟くも人の師となるものは一言一句忽にしてはならぬ、一盲衆盲を牽き、一犬嘘に吠えて萬犬實を傳ふといふ通り人の爲に法を說くものが一度間違つたことをいふ時は累の及ぶ處限が無いから從つて自己の受ける罰も重い譯である『遂に問ふ、大修行底の人還つて因果に落つる



也たいなや』そこで老人は尙ほ語を續いで百丈和尙に問うた、大修行底の人々にも因果があるか如何でござる、善因善果惡因惡果といふは世間一般の理法であるが善といひ惡といひ、因といひ果といふは畢竟相對上の事であつて、絶對界に逍遙する處の所謂大修行底の人には因だの果だのといふものは關係がないのではなからうかといふ疑問である、老人は此の問に對する答の爲に五百生野狐身に墮したのであるから、不昧因果の道理が已に明に實際の上に現れて居るに、氣が付かぬと見える『師曰く、不昧因果』百丈はまだ此の老人が不落因果といふことに執はれて居る樣子を見て取つて因果は毫も昧ますべきものではない、如何に大悟底の人でも惡業があれば惡果を受けるは當然のことであると答へた、これが此の公案の眼目である、百丈はこれをいはんが爲に野孤といふものを假に持ち出したのではないかと思はれるが釋迦樣でも達磨大師でも物を食はねば腹も減る、光がなくては物が見えぬ、これが宇宙の眞理で何とも仕方がない『老人言下に於いて大悟』百丈の一語によつて大悟徹底して始めて野狐身を脱することが出來た、併し其の代りに百丈が野狐身に墮したのではないか元來因果は不落とが不昧とかいふ樣な言句を以つて制限すべきでない、不落といふが誤ならば不昧といふも亦誤である、百丈和尙つまらぬことをいうて學人を窠窟に引張り込むのは甚だ不都合である『作禮して云ふ、某甲已に野狐の身を脱して山後に住在せん、敢へて和尙に告す、乞ふ亡僧の事例に依れ』老人は豁然として大悟徹底した嬉しさに、覺えず立つて禮拜して、拙者は最早和尙の御提撕によつて野狐身を脱することが出來たらう百丈山の後に居ります、どうか亡僧を葬る儀式に依つて葬式がして戴きたいといふて姿はかき消すごとくに見えなくなつた、尤も本文には消えて無くなつたことは書いて無いけれども兎に角百丈と野狐との一段の問答は之を以つて終つて居る『師、維那をして白槌して衆に告げしむ、食後に亡僧を送らん』維那は僧堂の取締をする役目である、凡て僧堂で何か大衆に報告する時は八角の三尺許りの短い柱の樣なものを、矢張これも八角の一と握り位の柄のない槌の樣なものでカチリと打つ、白槌といふのはそれである、維那の役をつとめて居る人が百丈和尙の命を受けて白槌して、今日食事がすんだら坊さんの葬するからその心得で居る樣にと報告した『大衆言議す、一山皆な安し、涅槃堂に又た人の病む無し、何が故ぞ是の如くなる』維那の報告を聞いた大衆一同は大に驚いて種々と評議をした、一山の衆僧いづれも安泰である、涅槃堂即ち叢林の病室にも誰も居ない樣であるが一體誰が死んだのであらう、不思議なことであると口々に噂をして居る『食後に只だ師の衆を領して山後の巖下に至つて杖を以つて

一死の野狐を挑げ出して乃ち火葬に依るを見る』誰の葬式をするのかと思ふと、食後に百丈和尚は大勢の僧を引きつれて山の後の巖陰から野狐の死骸を杖にかけて引き出し、火葬に付した、『師晩に至つて上堂、前の因緣を擧す』百丈和尚は其の晩說法の座へ上つて野狐と問答をしたことに就いて一場の物語をした、それまで大衆は野狐の話を知らなかつたと見える、或は百丈和尚が此の時始めて野狐の話を揑造せられたかも知れぬ、嘘も方便であるから慈悲落草の爲には斯樣な手段も敢へて罪にはならぬのであらう『黃檗便ち問ふ、古人錯つて一轉語を祗對して五百生野狐身に墮すと、一轉語を錯らずんば箇の甚麼とか作る合き』黃檗は百丈和尚の高足黃檗希運和尚のとである、黃檗は百丈の許にあつて大いに修行し充分技倆を具して居る人であるから百丈の物語を聞いて默つては居られぬ、早速一矢を放つて師に酬いた、所謂佛を呵し祖を罵る底の活機輪である、サテ黃檗は何といふたかといふに、古人は錯つて不落因果といふ一轉語を下したばかりに五百生の長い間野狐身に墮したといふことは今承つた通りであるが、然らば若し正しく一轉語を下したらどの樣な結果になるであらう、問はれる度に快刀亂麻を斷つが如き明答を下してスカリ〳〵と疑問を解くものがあつた場合は何としたものであらうかと詰め寄つた、實に此の問は錯たず急所を射ぬいて居る、『師曰く、近前來、伊が與に道はん』百丈は却々黃檗の詰問位には動ぜぬ、何を小癪な、もつと前へ出て來い、いつて聞かせてやらうといふ『黃檗遂に近前して師に一掌を與ふ』前へ來いといはれて進むや否やピシヤリと百丈和尚の橫面をお見舞申した、實に惡辣な機用である、所謂佛に逢うては佛を殺し祖に逢うては祖を殺すといふものである『師手を拍つて笑つて曰く、將に謂へり胡鬚赤と、更に赤鬚胡あることを』百丈和尚擲られて眞赤になつて怒るかと思ひの外、手を拍つて呵々大笑して、何だ俺が一掌を與へてやらうと思つたのに反對に擲られるとは又一興である、野蠻人の鬚は赤いと思つたら鬚の赤い野蠻人があつた、頰べタべタ頰、俺とお前と境界が同じ樣でもあり別の樣でもある、此の師資二面裂破の消息は俺とお前の外に解るものはあるまい、誠に以つて喜ばしいことであるといふ程の意味である、俺は胡鬚赤であると謂うて威張つて居たのにお前は又一段上の赤鬚胡であつた、これは實に驚き入つたと百丈はいうてござるが其の胡鬚赤と赤鬚胡とは只語を轉倒した丈のことで別に優劣はない、優劣がないのに如何にも優劣があるらしくいうた處が百丈の機略である、白隱は此處に可惜乎といふ著語を下して居る、何が可惜乎であらうか、それは參學の人の實參實究に任せて置かう。

無門曰不落因果爲甚墮野狐不昧因果爲甚脫野狐若向者裏著得一隻眼便知得前百丈贏得風流五百生

【和解】無門曰く、不落因果、甚と爲してか野狐に墮す。不昧因果、甚と爲してか野狐を脫す。若し者裏に向つて、一隻眼を著得せば、卽ち前百丈贏ち得て風流五百生なることを知得せん。

〔講話〕『不落因果、甚と爲てか野狐に墮す』不落因果といつた爲に野狐身に墮ちたといふがどういふ譯であらう、元來因果に涉るのは生死輪廻の邊量に彷徨するもの、ことで、生死透脫の境界には因果等は用はない筈である、斯樣な道理もあるから不落因果といふたのに何も不思議はない譯であるといふ、それと同時に『不昧因果甚と爲てか野狐を脫す』不昧と不落とは只一字違である、落が惡ければ、昧も惡い譯だがどうして不昧因果で野狐身が脫せられたのであらう、不落と不昧と何處に價値の相違があるのか、よく〳〵活眼を開いて參究して見が可い『若し者裏に向つて一隻眼を著得せば』此の疑團を起して之に向つて何かの向上の一隻眼を見開くことが出來たならば、『便ち前百丈贏ち得て風流五百生なることを知得せん』過去迦葉佛の時の百丈山主卽ち前百丈が五百生の間墮して居つたといふ所謂野狐身は極めて風流な生涯であつたといふことが解るがあらう、頂門上に一隻眼を豁開したものから見れば不落不昧共に結構な消息であつて何の優劣もない、公案の上では老人が野狐身を脫したといふので不昧因果が優れて居る樣にいうてあるが絕對の立場からすればいづれも無碍の往徠であつて、悠々自適、頗る平和な好風流である。

頌曰不落不昧兩采一賽不昧不落千錯萬錯

【和訓】不落不昧、兩采一賽、不昧不落、千錯萬錯。

〔講話〕『不落不昧』慧開は先づ公案の主眼ともいふべき不落と不昧とを重ねて最初に置いた、かう竝んだ處を見ると別物の樣でもあり一ッの樣でもある、これに對して百丈は或は肯ひ或は貶斥したが其の意旨はどうであらうか『兩采一賽』賽は双六の賽子のこと、采は賽子の六方に刻み込んである賽子の目のことである。双六の賽子は轉がす度に二が出たり三が出たり其の時の都合で種々變つた

目が出るが而かも賽は一つである、同じ賽子が種々變つて現れることを兩采一賽というたのである、或は双六には賽子を二つ用ふるもので、二つの賽子が同じ目を表した時には兩采にして而かも一賽に等しいといふ樣に解するものもあるが、此の場合矢張り前の樣に解した方が可い、或る時は不昧と說き或る時は不落と說く、師家によつて其の提撕に相違があり又同じ師家でも對機に應じて異つた作略を用ひるけれども、因果其のものには變りはない、不落不昧共に因果の兩面である、恰も兩采にして一賽なると同じく、二にして一、一にして二である『不昧不落』と今度は逆に拈提した、物を見るには縱からも横からも右からも左からも、あらゆる方面から觀察しなければ其の眞相を知ることは出來ぬ、此の頌では本則に不落と不昧とが別々になつて居つたから、先づそれを一つにして不落不昧を横から觀察し、更に今度は不昧不落を縱から觀察したのである、『千錯萬錯』不落不昧兩采一賽というたが、其の二にして一といふ處に滯れば忽ちにして因果の眞面目を失却する、不昧に執著するも不落に滯るも、又不落不昧一如の處に足を止めるのも、共に錯りである、中峰和尙は不落不昧を拈提して次の如くいうて居る、「非は非にあらず是は是に非ず、兩頭を坐斷するとも劍去つて久し矣、前百丈云く不落と、後百丈云く不昧と、見來れば也た多くを較べず、甚麽に因つてか墮あり脫ある、余二十年參學するも此を明むること能はず、如し人の此を明め得るあらば我れ當に四大を捨てゝ繩床の爲に用ひて供養すべし」不落不昧の正當恁麼事は古人も頗る難透の關として際分骨を折つたものである、不落は非にして而かも非にあらず、不昧は是にして而かも是にあらず、其の是非の兩頭を截斷するか、矢張り劍去つて舷を刻むが如く、已に機を失して居るといふ中峰の見識は却々面白い、何も四大を捨てゝ繩床の爲に供養する等と卑下するにも及ばぬ。

第三則　倶胝竪指

倶胝和尚凡有詰問唯擧一指後有童子因外人問和尚說何法要童子亦竪指頭胝聞遂以刄斷其指童子負痛號哭而去胝復召之童子廻首胝却竪起指童子忽然領悟胝將順世謂衆曰得吾天龍一指頭禪一生受用不盡言訖示滅

【和訓】倶胝和尚凡そ詰問有れば、唯だ一指を擧す。後に童子有り。因に外人問ふ、和尚何んの法要をか說く。童子も亦た指頭を竪つ。胝聞いて遂に刄を以つて、其の指を斷つ。童子負痛號哭して去る。胝復た之を召す、童子首を回らす、胝却つて指を竪起す。童子忽然として領悟す。胝將に順世せんとす、衆に謂つて曰く、吾れ天龍一指頭の禪を得て、一生受用不盡と。言ひ訖つて滅を示す。

〔講話〕『倶胝和尚』倶胝は法を杭州の天龍和尚に嗣いで後に婺州金華山に住した人である、天龍は大梅法常の法嗣で南嶽下三世の法孫であるから倶胝は南嶽下第五世に當る、常に好んで倶胝佛母陀羅尼を讀誦して居つた處から人呼んで倶胝和尚といつたのが遂に其の名になつて終つたといふことである、或時一人の尼僧が來て、笠も草鞋も脫がないで和尚の坐つて居る坐床の周圍を三度廻つて「道ひ得ば卽ち笠子を下さん」何とか佛法上の一句を道ひ得るならば笠を取つてお目に掛らうといふたが倶胝和尚此の時はまだ知見が開けて居なかつたので何とも返答が出來ず、只呆然として居つた、尼僧は三度までそれを繰り返したが矢張何とも返事がないので、これはよく／＼の愚物であると見切りを付けて立ち去らうとした、折柄日の暮方であつたので、倶胝は尼僧を呼び止めて泊つて行けと勸めると、尼僧は又「道ひ得ば卽ち住まらん」何とか祖師門下の一句を道破すれば拜宿を願はうといふたらそれでも倶胝和尚何の返答も出來なかつたので尼僧は到頭出て行つて終つた、玆に於いて和尚は猛省一番して大いに修行に努力せんといふ志を起した、其の晩の夢に鎭守の山神が現れた「近日肉身の菩薩が來て和尚の爲に法を說くであらうから其の菩薩に就いて充

分に修行するが可からう」』といふお告があつた、其の後間もなく天龍和尚が倶胝の住庵を訪づれたので、此の人こそ夢のお告の肉身の菩薩であらうといふので其の物語をして敎を乞うた、其の時天龍和尚が何ともいはずに指を竪てゝ示されると倶胝は豁然として省悟し、其の後も大いに參究して遂に天和龍倘の印下證明を得て、爾來學人の法を問ふものあれば常に一指を竪てゝ之を示したといふ、此の則には其の事を引いて『凡そ詰問あれば唯一指を示す』というたのである、倶胝和尚に取つては一指頭上に佛一代所說の敎を示し、森羅萬象の當相を現ずることが出來る のである、『後に童子あり、因に外人問ふ、和尚何の法要をか說く』倶胝和尚に一人の童子が侍者としてついて居つたが、和尚が誰が何を問うても指を竪てるのみで外に何ともいはぬ、所謂竪指三昧であつたので、見樣見眞似で其の童子も人が何かいふと戲れ半分に指を竪てたものと見えて、此の則は童子の竪指を假りて倶胝が辛辣の機略を弄せられた一場の因緣を擧した、外人は外國人のことではない、倶胝の住した金華山以外の人のとで、金華山外人が倶胝を訪うた場合には和尙に逢ふ前に童子に逢つて如處の和尚は一體どんな說法をせられるかと尋ねる、これもよくありさうなことである『童子も亦指頭を竪つ』人に訊かれると童子は得意になつて師匠の眞似事をやる、「内の和尚は誰が何というて



第三則　倶胝竪指

も是れ三昧ですよ」と指を竪てゝ見せる、悪戯小僧の仕さうなことである、同じ竪指でも無眼子の竪指と明眼の衲僧の竪指とは雲泥の相違であるが、其の人でないと見分けが付かぬから兎角人を誤り易い、虎を描いて猫に類する位ならばまだしも、全く似ても付かぬものを描いて得意になつて居つては自分の不利益なるのみならず、大いに累を他に及ぼすから倶胝は思ひ切つて之を懲しめられた、即ち『胝聞いて遂に刄を以つて其の指を斷つ』倶胝和尙が其の事を聞いて其の侍童を召び、お前は佛法を會したというて人に示すさうだが佛法とは抑〻どんなものか、一番此處へ出して見よといはれると、小僧はいつもの癖でつい指を竪てゝ師匠に示した、すると和尙はイキナリ隱し持つた刀でスカリと小僧の竪てた指を切り落して終つた、隨分殘酷な樣であるけれども、これが爲人接衆の慈悲である、兒を憐んで衷心啼泣しながら思ひ切つて悪辣な手段を採つたのである、所謂涙を揮つて馬稷を斬るといふ活作略である、『童子負痛號哭して去る』棘が立つても苦になるのに指を斬り落されては堪らない、痛さ骨髓に徹したと見えて大聲を擧げて哭き號びながら逃げ出した、これ程の目に遇つて見ねは却々祖師の關を透過することは出來るものではない、二祖慧可和尙は自ら臂を斷ち切つて達磨に求道の赤誠を示したといふが歷代の祖師達はいづれも皆道の爲には身命をも敢て惜まなかつたものである『胝復た之を召す』逃げ出して行く童子を倶胝和尙は再び召び戻された、童子が肉身の痛味は覺えても心中の痛味をまだ感ぜない樣であるから、其の心眼を開かせん爲の慈悲の手段である『童子首を回らす、胝却つて指を竪起す、童子忽然として領悟す』童子は和尙の聲を聞いて痛さを堪へてふり回つた、そこで和尙は例の手段で一指を竪てゝ童子に示すと、和尙の提撕によつて將に心眼が開けんとして居つた時であるから、始めて眞の指頭の禪を悟ることが出來た、童子は今まで和尙の指のみを見て一指頭上の佛法を親しく了悟することが出來なかつたが、此の時に到つて忽然として桶底を脱したのである、玄沙和尙が此の公案を評して「我れ當時若し見ば指頭を拗折せん」といふたのは、倶胝の作略を以つて一應無用の閑手脚であると抑へたのであるが、内心深く其の活作略を嘆賞した趣があることは勿論である『胝將に順世せんとす、衆に謂つて曰く、吾れ天龍一指頭の禪を得て一生受用不盡と、言ひ訖つて滅を示す』順世の世は遷流の義とあつて萬物は常に變遷流轉して停まざるものである、其の遷流に順ふといふのであるから死ぬこと、即ち遷化するの意である、倶胝が將に遷化せんとするに當つて枕頭に集つた大衆に向つて垂語して曰ふには、自分は天龍和尙から一指頭の禪を傳はつて一生涯常に用ひて用ひ盡せなかつたと、其の言の終るか

終らぬかに澮焉として滅度せられた、一生受用不盡といふ語が面白い、一指頭の禪は徧界に充塞した眞理である、却々七十年や八十年の人間の生涯に用ひ盡せるものではない、時間を絶したものであるから人間の生涯は勿論のこと全宇宙の滅びる時が來ても受用し盡されるものではない、倶胝和尚はかく道ひ訖つて遷化せられたといふが、其の殘された公案は今尚參學のもの丶爲に向上の關棙子となつて居る、されば倶胝の生命も又不滅であるといふことが出來る。

無門曰倶胝並童子悟處不在指頭上若向者裏見得天龍同倶胝並童子與自己一串穿却

【和訓】無門曰く、倶胝竝に童子の悟處、指頭上に在らず。若し者裏に向つて見得せば、天龍同じく倶胝竝に童子と自己と、一串に穿却せん。

〔講話〕『倶胝並に童子の悟處、指頭上に在らず』倶胝一指頭の禪に對する無門の評である、又之を無門の一指頭の禪といふことも出來る、何となれば無門は自ら倶胝指頭の禪に參究して其の所得を文字の上に表はしたのが此の評語であるからである、先づ倶胝と童子との悟つた境界を述べて『指頭上に在らず』というた、倶胝も童子も他の所問に對しては常に指を竪て丶示したが其の指の頭に佛法や悟があると思ふと飛だ間違であるぞ、指の頭には爪と爪の垢がある位のもので、どうして佛法だの禪道だのといふ樣なものがあらうぞ『若し者裏に向つて見得せば』然るに若し指の頭に滯つて此處に佛法があるの悟のあるのといふ妄想を起したならば、それこそ『天龍同じく倶胝竝びに童子、自己と一串に穿却せん』である、天龍和尚も倶胝和尚も、童子も自己も皆一とまとめにして串に突き刺されて終ふ、即ちいづれも同罪である、イヤ天龍や倶胝等三四人の人ばかりではない、一度見得したといふ妄想に執はれる時は天下人を盡く迷却して終ふと、徹頭徹尾一指頭に滯るものを誡めたのである。

頌曰倶胝鈍置老天龍利刄單提勘小童巨靈擡手無多子分破華山千萬重

【和訓】頌に曰く、倶胝鈍置す老天龍、利刄單提して小童を勘す。巨靈手を擡ぐるに多子無し、分破す華山の千萬重、

〔講話〕『倶胝鈍置す老天龍』鈍置は馬鹿にしたといふ程の意、倶胝は折角老天龍から一指頭の禪を傳授しながら、それを濫用して天龍和尚の顔に泥をぬつたのみならず、三世の諸佛歴代の祖師を盡く無川の長物として終つたと、語の上では倶胝を抑へて居るが、其の實極力倶胝の活作略を讃嘆したのである、所謂句抑下の意卓上とは此のことである。『利刄單提して小童を勘す』老天龍から授かつた指頭禪の利劍を只一刀提げて、何の樣な大機大用を現ずるかと思へば、何だあの樣な小童を勘破した位のことかと、この句も表面では倶胝を貶してあるが眞意は矢張賞讃して居る、千鈞の弩は鼷鼠の爲に發せずといふが併し獅子は兎を捕へるにも其の全力を注ぐ、倶胝が小童を勘破した場合は實にそれである。『巨靈手を擡ぐるに多子なし』此の句と終の句は碧巖錄の第三十二則に、臨濟が定上座を勘破する場合に上座を擒住し一掌を與へて放行した機略を擧げて、雪竇が「斷際の全機後蹤を繼ぐ、持ち來つて何ぞ必しも從容にあらん、巨靈手を擡ぐるに他子なし、分破す華山の千萬重』と頌した中の二句をその儘轉用したのである、支那の傳說に巨靈神といふ大力量ある神が華山といふ山を分破して黃河を通じたといふことがあるが、巨靈の力倆を以つてすればその樣なことは造作もないことである、手を擡ぐるに多子無しとは一寸手を擡ぐれば譯もなく出來るといふ意、倶胝は實に此の巨靈の如く何の造作もなく指頭の禪を擧揚して學人を接得せられた『分破す華山の千萬重』一生受用不盡の機略を以つてしても千萬重も重なり合つた妄想執着の峯々を搔き分けて黃河の水を落すが如く學人をして豁然大悟の妙境に達せしめるといふことは却々容易ではない、それを造作もなくやつてのけた倶胝は實に千古の大英雄であつたと、結局語の上でも倶胝を讃嘆してある。

第四則　胡子無鬚

或庵曰西天胡子因甚無鬚

【和訓】或庵曰く、西天の胡子、甚んに因つてか鬚無き。

〔講話〕『或庵曰く』或庵は鎭江府焦州の或庵師體和尚のことで、碧巖の評唱を書いた圜悟克勤の法孫である、此の則は只或庵の語丈を擧げたので簡單な樣ではあるが其の意味は頗る深長である、『西天の胡子甚に因つてか鬚無き』西天は支那から西の方のことであるから印度方面を指すのである、胡子とは支那人が外國人を卑めていふ言葉で、日本でいへは毛唐とかチヤン〳〵とかいふ所であらう、印度人には鬚が無いが何いふ譯であらうといふ質問である、質問丈で答がなくて一則の公案としたのは可怪しい樣であるけれども此處が又無門の作略の面白い處である、西天の胡子といふとすぐ其の胡子の事を考へたり、鬚無しといへば直の鬚のことに執着するのが脚下未穩在のものの常である、亞米利加大統領ウイルソンにも鬚がない、西園寺講和特使にも鬚が無い、原總理大臣にも鬚がない、ハテ何いふ譯であらう等と考へた處で別に三文の德になる譯でもない、瓜の蔓に茄子はならぬ樣なもの、柳の枝に梅の花は咲かぬ樣なもの、親爺は悴より年が上、女房女で鬚がない丈のことである、西天の胡子とは達磨のことであると或る本の注には出て居るがそんな事はどうでも可いとである、胡子無鬚の的意に參ぜんとならば須らく明眼の衲僧に就いて佛知見の開發に努力すべきである。

無門曰參須實參悟須實悟者箇胡子直須親見一回始得說親見早成兩箇

【和訓】無門曰く、參は須らく實參なるべく、悟は須らく實悟なるべし。者箇の胡子、直に親見一回して始めて得べし。親見と說くも、早く兩箇と成る。

〔講話〕『參は須く實參なるべし』參禪辨道は耳で聞いたり目で讀んだのでは駄目である、ヒヤカシ參禪や似而非悟で得意になつて居る樣なものに指頭の禪も胡子の無鬚も解るものではない、實參實究して始めて眞に佛祖の眞面目に相見することが出來るのである『悟は須く實悟なるべし』悟も又

眞實自分のものにならなければならぬ、歴代の祖師の悟の講釋を如何程丁寧に聞いても決してそれが我がものになりはせぬ、如何に巧に描いてあつても繪の餅は腹の足にはならず、口の酸くなる程説明しても喰はせて見ねば物の味を知らせることは出來ぬ、參と悟とは用と體とである、參禪とは悟を得んが爲の手段ばかりではなく、悟其のもの、實現をも意味する、大悟底の人の日常の擧手投足も卽ち參禪である、悟は之を實現する用の働によつて其の眞價が現れ參禪は其の根柢に悟の體があつて一層力があるのである、而かも其の體も用も眞實自ら努力して得たものではなければ生命ある自己のものといふことは出來ぬ『者箇の胡子、直に須らく親見一回して始めて得べし、親見と説くも兩箇となる』今或庵が引合に出した胡子とはどんなものか、先づ其の相を親しく見なければ何して無鬚であるかといふことは解らぬ、否第一鬚があるかないかも又聞では信ぜられぬではないか、かういふと兎角人は胡子といふものを對うに置いて考へるから所謂話兩橛となるで、彼此是非の相對的窠窟に墮ちる、それ故白隱和尚は此の語は餘計なものであると排斥して居る、それも一理あるけれども、併しそれを邪魔にするのが已に執着して居るのであるといふことも出來る、兎に角胡子に親見して胡子と一如にならねば胡子に鬚無き理由は解るものではない、水の冷暖を知らんと



欲すれば先づ水を我が口中に入れて、水と吾と一如一體になつた時に始めて得ることが出來る、併も一如になつた親見したといふても、胡子の相は一體どんなであらうが、水の味は如何等と第二念に渉れば、忽ち本分に蹉過し胡子の姿を見失うて終ふぞと、無門は叮嚀に注意をせられたのである。

頌曰痴人面前不可說夢胡子無鬚惺々添懵

【和訓】 痴人面前に、夢を說く可からず。胡子無鬚、惺々に懵を添ふ。

〔講話〕『痴人面前に夢を說くべからず』此の頌は無門が或庵の的意を誤つて詠じたものであると古人はいつて居るが、必しもその樣に貶斥するにも及ばぬと思ふ、無門は禪門慣用の語法を以つて或庵の語を抑下しながら實は之に執着する學人を警めたのである、或庵の語は愚痴なものに夢物語をする樣なもので甚だ人を惑はすといふべきである、道理の分つたものには夢の話などは馬鹿氣切つて居るが、痴人は兎角これを眞實と誤つてそれについて回るから斯樣なことは痴人の前ではせぬが可い、と表面は或庵を抑へて、一面に於いて參學の徒は痴人となつて夢を逐ふの愚をなさぬ樣にせねばならぬと注意したのである『胡子無鬚、惺々に懵を添ふ』胡子無鬚といふ或庵の語は眠のさめ切つた白晝にボンヤリした寢ぼけ面を出す樣なものである、そんな面は人の物笑を招くだけのもので決して怜悧の漢はその樣なものを相手にはせぬぞ、サッサと面を洗つて出直すが可いと語を極めて或庵を抑へた、併し前にもいうた通り、無門も相當に力倆のある人であるから、文字通り、或庵の垂語を貶斥したのではなく、惺惺に懵を添ふといふ語の中にも或庵の親切な爲人を讃嘆した意味が籠つて居る。

第五則　香嚴上樹

香嚴和尚云如人上樹口啣樹枝手不攀枝脚不踏樹樹下有人問西來意不對即違他所問若對又喪身失命正恁麼時作麼生對

【和訓】　香嚴和尚云く、人の樹に上るが如く、口に樹枝を啣み、手に枝を攀ぢず、脚に樹を踏まず。樹下に人有つて西來意を問はんに、對へずんば卽ち他の所問に違く。若し對へなば又た喪身失命せん。正恁麼の時、作麼生か對へん。

〔靈顛〕『香嚴和尚云く』香嚴は「かうがん」ではなく「けうげん」と讀む、これは昔からの讀くせで別に理由がある譯ではないが禪書を讀むには矢張讀癖に從ふが可い、サテ香嚴は名を智閑という

て潙山靈祐和尚の法嗣である、資性頗る慧敏で、廣く一切の經論に通じ又辯舌に長じて居つたので師匠の潙山も賴もしく思つて何とかして之を激發してやらうと或時香嚴に向つて「お前は我が座下へ來る前に百丈和尚の處で大いに參究し、殊に諸の經論に就いては深く研究する處があつたさうであるが、今予は其の樣な學問上のことを彼是いふのではない、お前がまだ生れぬ先、東西も何も辨ぜぬ場合に於いて本分の事に就いて一句を道つて見よ、卽ち文字言句や知見解會に渉らずに直下にお前の悟つた境界を此處へ丸出しにして見よ」と詰つた、香嚴は思量分別に渉らずに道へといはれても從來それ專門でやつて來たのであるから分別や言句を離れては何ともいふことが出來なかつた、そこで正直に私はとても返答は出來ませぬからどうか貴師から垂示が願ひたいというたが潙山は却却教へてくれぬ、終には强制的に請うたが、潙山は「我が說く底は是我が底、終に汝が事に干らず我若し說かば他日汝我を罵り去ることあらん」といつて頑として應じて吳れぬので遂に意を決して今まで學問研究の材料として大切にして居つた書類を盡く燒き捨て、終つて南陽の慧忠國師の遺跡なる武當山に庵を結んで十八年の間只管辨道に努力した、然るに或日掃除をして居ると箒の先ではねた小石が傍の竹に當つてカチリと音を立てた、香巖は此時忽然として胸中の疑團が解けたので、歡

喜勇躍して急いで沐浴焚香して遙かに潙山を禮拜し「我潙山の道を貴ぶに非ず我が爲に說かざりしことを貴ぶ、當時若し說かば焉んぞ今日の慶快あらんや、和尙の大慈悲父母に過ぎたり」といつて其の恩を謝したといふこと が傳に見えて居る、兎に角以上記する處によつて香巖は潙山の提撕の自身の熱心な修行とによつて大力倆を具した人であつたことが粗ぼ察せられるであらう『人の樹に上るが如く、口に樹枝を啣み手に枝を攀ぢず、脚に樹を踏まず』香巖が學人の爲に垂語せられたのを其の儘採つて一則の公案としたのである、人が樹に上つて樹の枝を啣へて手も脚も離して終つてブラリと下つて居る場合に『樹下に人あつて西來意を問はんに』下へ人が來て祖師西來の意、即ち達磨大師が遙々波濤を超えて西天から來られた意旨、換言すれば佛法的々の大意如何と問ふものがあつたならば『對へずんば他の所問に違く、若し對へなば又た喪身失命せん』答辯をせねば折角法の道理を問はんとする誠意に背く譯であるが、答ふるには口を開かねばならぬ、口を開けば啣へて居つた樹を離すからそれこそ眞逆樣に落ちて喪身失命である、『正恁麼の時作麼生か對へん』正に斯の如き場合には何と對へたものであらうかと問題を出した丈で何とも解決が付けてない、併し口に樹の枝を啣へて何とも彼とも言はれぬ時に眞の佛法は現前して居る、何とでも言句に渉れば已に本



第五則　香嚴上樹

分と相距ること千萬里である、啞子の苦瓠を喫したるが如く其の味を語らんとして語ることが出來ぬ、かく言はんとしていふ能はず示さんとして示す能はざる消息を香嚴は撃竹の當處に於いて悟つたが、其の時の投機の句に一撃所知を忘ず更に修治を假らず云々というて居る、實に能知所知の對待を亡じた消息は只之を實參實究によつて知るの外はない、何にしても修行が大切である、此の無門關には舉げてないが香嚴がかく垂示をした時に、「招上座といふものあり、出でて問ふ、人の樹に上る時は則ち問はず、未だ樹に上らざるとき如何、師笑ふのみ」といふ語が他の書に見えて居る、樹上ばかりではなく樹下底の消息も知らねばならぬ、所謂樹に上る云々は已に風無きに波を起した趣があるが、一波起らずして平穩無事な境界に於ける佛法を商量することも必要である、併し香嚴の手許に於いては樹に上るといふことも決して僞作造作の上の擧動ではなく任運無加用の手段であるから故に樹下底等のことを云々する必要がない、樹上樹下の差別は香嚴に於いては認めて居らぬから何とも答へずに只笑つて居つたのであらう、從つて無門が此のことを擧げなかつた意旨も充分察せられるのである。

無門曰縱有懸河之辯總用不著說得一大藏教亦用不著若向者裏對得著活却從前死路頭死却從前活路頭其或未然直待當來問彌勒

【和訓】無門曰く、縱ひ懸河の辯有るも、總に用不著、一大藏教を說き得るも亦た用不著。若し者裏に向つて對得著せば、從前の死路頭を活却し、從前の活路頭を死却せん、其れ或は未だ然らずんば、直に當來を待つて彌勒に問へ。

〔講話〕『縱ひ懸河の辯あるも總に用不著』無門の本則に對する評である、香嚴は雄辯家であつたといふが潙山に學解や經卷を離れて一句を道へといはれて何とも彼とも返答が出來なかつたのは實に尤なことである、いかに辯口が達者でも自分の食つた馳走の味を人に傳へることは出來ぬ、急流の水の樣にスラ〳〵と聊かのどよみもなく辯じ立てる才智があつても祖師西來の的意は到底之を說明し得るものではない、懸河の辯も所謂用不著で何の役にも立たぬ『一大藏教を說き得るも亦た用不著』香嚴は數千卷の經卷を讀破して一大藏教の趣旨に通じて居つた大學者であつたけれども擊竹の音を聞いて豁然大悟するまでは眞に祖師意を會することは出來なかつた、經卷は用不著であつ

たから悉く燒き捨て、終つた『若し者裏に向つて對得著せば』若し斯の如く文字言句を雙に排けて終つた場合に自由自在に問者に應對して之を接得することが出來たならば『從前の死路頭を活却し從前の活路頭を死却せん』石を呵して羊となした支那の仙人の樣に、生命なきものをも活きて働かせ、日本の玄翁和尚の樣に化物石を叩き割つて殺生をなさしめぬといふ大機用が得られる、祖師西來意を充分手裏に握つたならば殺活自在で如何樣にでも學人を接得することが出來る、柔に逢うては剛、剛に逢うては柔、其の時其の對機に應じて應用無碍なることは所謂者裏に向つて對得著底の那人にして始めて得られる働である『其れ或は未だ然らずんば直に當來を待つて彌勒に問へ』さて斯樣に樹上に在つて西來意の應對も出來ず、殺活自在の妙用も得られぬとならばユックリと時節の到來を待つが可い、九十六億七千萬歲の後には彌勒菩薩が此の世に出現して釋尊の後を承け嗣いで衆生敎化をせられるといふことであるからそれまで待つても遲くはない、併し香嚴の垂示によつて知見の開けぬ樣なもので彌勒世になつた所で急に悟が開ける譯でもない、まア精々勉强するが可からう、一生不離叢林といふが、一生どころか生れ易り死に代り七生までも修行を怠らぬ樣に努むべき旨をいはんが爲に彌勒を引合に出したのである。

頌曰香嚴眞杜撰惡毒無盡限啞却衲僧口通身迸鬼眼

【和訓】 頌に曰く、香嚴眞の杜撰、惡毒盡限無し。衲僧の口を啞却して、通身に鬼眼を迸らしむ。

〔講話〕『香嚴の杜撰』杜撰とは支那に杜氏といふ人があつて詩を作ることが頗る拙劣な上に韻も平仄も丸きり合つて居ないので當時の人が出鱈目なもの、ことを杜氏の撰した詩のやうだといふた處から杜撰といふ語が出來たものであるといふが、香嚴の垂示も隨分好い加減な出鱈目であると、語を極めて罵つた、併し此の罵倒は例の句抑下の意卓上で內實大いに讚美して居るのである『惡毒盡限無し』黃河は源頭より濁るといふ禪語であるが香嚴が一度杜撰なことをいひ出して惡毒を流してからこの方、天下の學人其の毒に染んで困難するもの盡限なしである、實に一犬噓に吠えて萬犬實を傳ふるの例で、累を後世に及ぼした香嚴の罪は正に死刑に相當すると極端に貶し付けた、無門は香嚴の的意を充分に會得して居るから其の垂語が面白くて有難くて堪へられぬので、かやうに口穢く罵つて其の親しみを表したのである、眞の知音同士になると口先では何というても互に意志が解

つて居るから面白い。『衲僧の口を啞却して』懸河の辯舌を有する天下の衲僧も香嚴に會つては一言半句を吐くことが出來ぬ、口が利けぬばかりでなく、『通身に鬼眼を迸らしむ』眼をギヨロ／＼と瞪るのみでどうすることも出來ぬ、眉毛の下に横つて居る一對の眼を輝かすのみではなく、通身全身悉く眼ばかりになつて、狼狽へ廻るのである、これ實に香嚴の惡毒が全身に回つたのであつて最早どうすることも出來ぬ、併し眞實此の毒に當つたものにして始めて佛祖屋裏の消息を窺ふことが出來るのであるが、却々此の惡毒を呑み下し得るものがない。

第六則　世尊拈花

世尊昔在靈山會上拈花示衆是時衆皆默然惟迦葉尊者破顏微笑世尊曰吾有正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙法門不立文字教外別傳付囑摩訶迦葉

【和訓】世尊、昔し靈山會上に在つて、花を拈じて衆に示す。是の時衆皆な默然たり。唯だ迦葉尊者のみ破顏微笑す。世尊曰く、吾れに正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微妙の法門、不立文字、教外別傳有り。摩訶迦葉に付囑す。

〔講話〕『世尊昔靈山會上に在つて花を拈じて衆に示す』此の則に出て居る因緣は禪宗の起原として最も重んぜられて居る、即ち世尊拈花迦葉微笑、當處に於いて以心傳心に大法の相續が行はれたのであるから不立文字教外別傳の佛心宗、相承は此の時を以つて最初とする、併し此の事實に就いて

は古來種々の疑難がある、世尊拈華の因緣は大梵天問佛決疑經を除いては大藏經の中いづれにも記載してない、確かな典據がないから此の事實は信ぜられぬ、只一つの典據たる大梵天問佛決疑經は頗る眞僞の疑はしい經典で、恐くは後世の僞作であらうといふのが否定論者の說である。併し典據の有無に拘らず、禪門に於いては不立文字敎外別傳を以つて根本精神として居るのであるから其の邊のことは餘り穿鑿するには及ばぬ、世尊は現に四十九年一字不說といはれた程であるから、若し眞に法を相承するといふ場合には拈花微笑といふ樣な形式に依られるであらう、サテ世尊卽ち釋迦牟尼如來は靈鷲山に於いて八萬の大衆の爲に說法して居られた時に大梵天王が世尊に金波羅華を獻上した、世尊は或日說法の座に陞つて、一語も發せずに其の金波羅を拈つて大衆に示された『是の時衆皆な默然たり』大衆は例によつて如來の縱橫自在なる金口の說法を聞くつもりで靜かに其の初まるのを待つたが、世尊は何ともいはずに金波羅華を拈ぜられたのみである、一同は何の事かサッパリ解らぬから默然として世尊の袖手許を眺めて居るのみであつた、今まで語言の說法のみ聞いて居て四句百非を離れた處に眞の佛法あるを知らなかつた一般の大衆に取つては、世尊の無言の說法が解らぬのも無理ならぬことである『唯だ迦葉尊者のみ破顔微笑す』其の時一會の首座に居つた迦



葉尊者が只一人世尊の拈花を見てニッコリ笑つた、破顔は相好をくづすといふ程に強い意味ではないが、輕く笑ふ是に顔の樣子のかはることをいふ、世尊の會下には智慧第一舍利弗尊者もあり博識第一ともいふべき阿難尊者も居つたが頭陀第一というて行業の最も勝れた迦葉尊者が只一人佛の眞意を會得したといふのを見ても、智慧や學識では眞面目に相見することが出來ぬといふことを知ることが出來る『世尊曰く、吾に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門、不立文字敎外別傳あり、摩訶迦葉に付囑す』世尊は迦葉が破顔微笑するのを御覧になつて、吾が手裏には正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門不立文字敎外別傳がある。汝摩訶迦葉に付囑すと仰せられた、之を印可證明といふ大勢の前で明に認許狀を與へられたのである、正法は正當にして毫も誤りなく宇宙の法則、眼藏は一切萬法の眼目、受用不盡なる大法の藏である、涅槃は梵語で、之を漢譯すると寂滅の意となる、寂滅は不生不滅の義で、眞理は時間を絕したものとあるから終なく始なく生なく滅なきものである妙心は清淨微妙にして何者にも汚されざる萬有の本心、實相は一切萬物の眞實の相をいふ、萬有はかく眞實の相を持つて居るけれども、而かも其の本體は凡夫の妄見を以つて見ることが出來ぬから又之を無相ともいふ、而して以上種々の言葉を以つて形容したけれども、要するにこれは假に文字を以つて其の各一面を表したまでのもので、眞理其のものは文字や經論を以つて說き盡せぬ、所謂以心傳心のものであるから之を不立文字敎外別傳というたのである、斯樣に同じ樣な文字を重ねていふと甚だ複雜で解り悪いが要するに甚深微妙の法門である、此法門を世尊が迦葉に傳へたと申されると凡夫の妄見では直に經論の外に何か異つたものでもあるかの樣に考へるが、それが已に言句に滯るといふものであつて四十九年の說法が卽敎外別傳の法門であつて、これ以外、何物もある譯ではない、只言敎は月を示すの指、門を敲くの瓦子なることを忘れて言敎其の物が佛法であるかの如く執着するもの、爲に敎外別傳といふまでのことである、言敎以外に何か特別なものが存在する樣に考へたならば世尊の的意永劫に失却して終ふであらう、サテかやうに靈山會上に於いて迦葉に付囑せられた微妙の法門は迦葉より阿難に、阿難より商那和修に、一器の水を一器に移すが如く、遂に二十八傳して達磨大師に到つて始めて東土に傳はり更に東傳して我が國に迄擴まつたのである、而かも其の源は靈山會上に於ける拈花微笑にあるのであるから、此の則は歷史の根據の如何に拘らず、禪門に於いては最も重要なものとなつて居る。

無門曰黄面瞿曇傍若無人厭良爲賤懸羊頭賣狗肉將謂多

少奇特只如當時大衆都笑正法眼藏作麼生傳設使迦葉不笑正法眼藏又作麼生傳若道正法眼藏有傳受黄面老子誑謼閭閻若道無傳授爲甚麼獨許迦葉

【和訓】無門曰く、黄面の瞿曇、傍若無人、良を厭うて賤と爲し羊頭を懸げて狗肉を賣る。將に謂へり多少の奇特と。只だ當時大衆都べて笑ふが如んば、正法眼藏作麼生か傳へん。設し迦葉をして笑はざらしめば、正法眼藏又た作麼生か傳へん。若し正法眼藏に傳授有りと道はゞ、黄面の老子閭閻を誑謼す。若し傳授無しと道はゞ、甚麼と爲してか獨り迦葉を許す。

〔講話〕『黄面の瞿曇、傍若無人』黄面の瞿曇とは釋尊のことをいふ、釋尊は衆生敎化の爲に東奔西走日も又足らずといふ有樣であつたから、其のお顏は日に燒けて澁紙色になつて居つたであらうといふ想像で黄面といつたのであらう、瞿曇（原語ゴータマ）は釋尊の姓である、釋尊は釋迦族の族長たる瞿曇家の生れで其の本名は悉達多である、釋尊だの釋迦牟尼だの佛だの世尊だのといふのは皆後から付けた尊稱である、無門は釋尊を捕へて此の澁紙面の瞿曇奴、甚だ以つて傍若無人の振舞ぢやと頭から罵つた、實に佛を呵し祖を罵るといふ高邁な見識であつて、斯樣なことは他宗他派では夢にも見られぬ所である、抑ゝ何を其の樣に罵つたか『良を厭うて賤と爲し羊頭を懸けて狗肉を賣る』黄面の瞿曇は傍人なきが如く勝手に振舞ひ、八萬の大衆を蔑ろにして愚鈍で馬鹿正直な迦葉に法を嗣いだのは、智慧學識の勝れた良を厭うて賤となしたのであつた、正法眼藏涅槃妙心等と立派さうな名前を竝べ立てゝ其の實何にも佛法らしいものも傳へないのは、羊肉を賣るといふ看板を掲げながら其實狗の肉を賣る樣な詐僞的行爲であると極力世尊を罵つた、口に罵しれば罵る程敬虔の念は一層深くなるのである『將に謂へり多少の奇特と』何と立派な說法でもあるかと謂つたのに世尊拈花迦葉微笑でお終ひとは甚だ以つて呆氣無いと益ゝ有難がる『只だ當時大衆都て笑ふが如くんば正法眼藏作麼生か傳へん』これは面白い拈弄である、世尊が拈華した時に、迦葉丈がニツコリ笑つたから可い樣なものゝ、若し八萬の大衆一同が皆呵々大笑でもしたらどうするつもりぞ、會座の大衆一人として本來の面目を具有せぬものはない、清淨法身を持つて居らぬものはないから、迦

葉の樣に輕率には笑はなかつたけれどもいづれも皆笑ふ底の分は具へて居るのであるから、若し一同が笑つたら誰に微妙の法門を傳へるつもりであるが、元來傳ふべき何物もないのに傳ふの傳へぬのといふから、斯した矛盾にぶつかるのぢやと、無門が手痛く世尊を抑へ付けた、此の所實に無門和尚大出來と賞讃すべきである『設し迦葉をして笑はざらしめば正法眼藏又た作麼生か傳へん』又其の反對に世尊が拈華しても迦葉が一向笑はなかつたらそれこそ間が拔けて可笑しかつたであらうと、これ又面白い拈弄である『若し正法眼藏に傳授ありと言はゞ黃面の老子閭閻を誑謼す』黃面の老子は矢張釋尊のこと、閭閻は大勢人の住んで居る村里をいふ、若し正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門などといふものがあつて、それが傳へられるものである等といつたならば、釋尊は大勢の村人達を誑かすものといふべきである、現に摩河迦葉に付囑すといふという處を見れば慥かに世尊は人を欺いて居る、一體人々具足個々圓成であるから何も殊更に傳授する必要はない、傳授するならば會下一同に傳授すべきであるのに一人を限つて傳授するとは甚だ以つて偏頗な沙汰であるといふ意味を『若し傳授無しと道はゞ甚麼と僞てか獨り迦葉に許す』というた、要するに無門は世尊が一切衆生悉く具有して居る實相無相微妙の法を迦葉に付囑すといはれたのは學人をして一物

珍重の弊た陷らしめる惧のあるので斯樣に拈弄して學人の迷執を未然に防いだのである。

頌曰拈起花來尾巴已露迦葉破顔人天罔措

【和訓】 頌に曰く、花を拈起し來つて、尾巴已に露る。迦葉破顔、人天措くこと罔し。

〔講話〕『花を拈起し來つて』一體他の書には凡て拈華となつて居るが此の書には拈花となつて居る、華でも花でも同じことであるけれども、華ならばヶと讀むが花ではついクヮとかヵとか讀みたくなる、併し此の句では花となつて居るから讀み癖に就いての心配は要らぬ、サテ無門は頌でも却々面白く詠じて居る、世尊は花を拈起せられたが『尾巴已に露はる』其の手許にもう尻尾が見えて居る、脚下線絕えて百自由といふ境界は、世尊も蹉過してござる、涅槃妙心は言語や分別を絕して居るのみならず舉手投足の手段をも絕して居る、世尊拈花は無瑕の寶玉に瑕を生ずるものといふべきである『迦葉破顔』世尊の拈花は風なきに波を起すのであるが、然らば迦葉の破顔は何と評したものであらうか、世尊の的意を會得した迦葉は只一人莞爾として破顔微笑した、實にそれ間髮を容れざる機用であつて、かゝる機用を有するものは八萬の大衆中二人とないことは又尤なことである『人

天措くこと罔し』靈山會上八萬の大衆のみならず、人間天上にも手を下し得るものはない、人間天上又元來涅槃妙心を具して居ることには變りはないが、而かも道元禪師の申された通り「修せざるには現はれず證せざるには得ず」である、迦葉は頭陀第一の人であつたから已に實參實究によつて破顏微笑の分があつたが當時人天に個の參得底のものは多かつたのみである、此の頌では一方世尊の拈花を貶下して迦葉の破顏が卓上してある、然らば迦葉が善くて世尊が惡いか、其の邊のことは實地の參究でなくては解るまい。

第七則　趙州洗鉢

趙州因僧問某甲乍入叢林乞師指示州云喫粥了也未僧云喫粥了也州云洗鉢盂去其僧有省

【和訓】趙州因に僧問ふ、某甲乍入叢林、乞ふ師指示せと。州云く、喫粥了や也た未しや。僧云く、喫粥了。州云く、鉢盂を洗ひ去れ。其の僧省有り。

〔講話〕『趙州因に僧問ふ、某甲乍入叢林乞ふ師指示せよ』趙州は趙州觀音院從諗和尚のことで、傳は第一則に述べて置いた、趙州の公案は幾つもあつて、無門關にも二三則出て居るが碧巖錄にも數則出て居る、いづれも無理のない輕い調子の應對であるけれども、而かも一言一句拔き差しの出來ぬ極めて適切なものばかりである、初め瑞像院といふ寺で得度せられたが後南泉の普願禪師に從つて參究せられた、始めて趙州が南泉の許に行つた時、寢椅子の上か何かに寢轉んで居つた、趙州は

其の時まだ十二三の小童であつたが怜悧俊潑な樣子は一目見て南泉にも解つたと見えて、先づお前は何處から來たと普通の問を發し、趙州が瑞像院から來ましたといふと、却つて瑞像を見るやといふ奇問を發せられた、東京から來たものに嘗て東京を見たことがあるかと問ふ樣なものであるから普通のものならば一寸返答に困る處であるが、趙州は間に髪を容れず、瑞像を見ず唯臥如來を見ると答へた、瑞像のことは知りませんが現に寢轉んだ佛樣を拜んで居りますといふのである、却々摑まへ所のない宛轉自在な答振である、南泉は更に汝は是れ有主の沙彌か無主の沙彌か、お前は師匠のある小僧か師匠のない小僧かと問ふと、趙州は有主の沙彌と答へた、然らば其の師匠は何處に居るといふ南泉の問に對して、趙州は恭しく立つて仲冬嚴寒伏して惟れば和尚尊體萬福といつた、時節柄寒さが嚴しうございますがお障もなくて先づ結構でございますといふ挨拶である、蛇は寸にして人を呑むといふが、十二三の小僧の分際で斯の如き應對をなすことの出來る人であつたから、南泉も大いに望を囑して直ちに入室を許し、後ち幾干もなくして印下證明を與へられたといふ、サテ餘儀に涉つたが此の則に於ける問答も又趙州一流の圭角のない極めて圓滑な對話である、或時僧が趙州に向つて、某甲乍入叢林、私は新に叢林に入つたばかりで佛事門頭のことも日常の座作進退の



第七則　趙州洗鉢

ことも一向知りませんが、乞ふ師指示せよ、どうか御差圖を願ひますというた、此の僧果して乍入叢林であるかどうか頗る怪しいものである、或は假面を被つて趙州和尚の脚下を覗つて居るのかも知れぬ、『州云く、喫粥了や也た未しや』趙州は別に七難かしい佛法上の事をいはずに食事を濟して來たかどうかと反問した、叢林でお粥を食ふのは此の頃にも行はれて居つたものと見える、僧は趙州が何か引かゝりのあることでも云つたら直に飛びかゝつて詰め付けようと待ち構へて居つたが、斯樣に手もなく輕く外されては何とも二の句が繼げなかつたと見えて、正直に「僧云く、喫粥し了れり」食事はもう先刻濟して來ましたと答へた、此處で何とか彼とか之乎者也に涉れば、此の僧反對に趙州の爲に痛棒を喫せしめられたであらうが正直に返答をしたので、何事もなく濟んだ、併し僧にはまだ戈を逆にして趙州に向ふ丈の技倆が無かつたかも知れぬ『州云く、鉢盂を洗ひ去れ』食事が濟んだら應量器を洗つて置け、便所に行つたら手を洗ひ、朝起きたら顏を洗ふ、これ實に世間一般の規定であつて別に理窟はない、春來れば花開き、秋來れば紅葉する、これ草木一般の規定である、規定通りにやつて行けば天下太平で、四海波平かに吹く風も枝を鳴さぬが、兎角世の中の人は此の規定を忘れたり背いたりするから問題が起るのである、趙州は此の僧が佛法禪道といふ妄想の繩に縛られて居るのを見て取つたから、先づ喫粥了也と途轍もない返答をして其の妄見を捨てさせ、更に又向上の悟りが殘つて居るのを鉢盂を洗ひ去れの一語で綺麗サッパリと拂ひ去つた『其の僧省あり』此處に於いて僧はスッカリと我見の角を折つて趙州の前に降參した、兎角我見我慢があつては、眞實開發悟道の境界に達することは出來ぬ、何でも我見の水をスッカリ無くして終つて虛心坦懷になつて來ぬと、どんな親切な提撕を受けても其の甲斐はない、僧は最初多少の我見を持つて居つたかも知れぬが趙州の宛轉滑脫な接得に遇つて忽ち己を空うしたから言下に省悟することが出來たのである。

無門曰趙州開レ口見レ膽露二出心肝一者僧聽レ事不レ眞喚レ鐘作レ甕

【和訓】無門曰く、趙州口を開いて膽を見せしめ、心肝を露出す、者の僧事を聽いて眞ならずんば、鐘を喚んで甕と作す。

〔講話〕『趙州口を開いて膽を見せしめ、心肝を露出す』この則無門の評も面白い、趙州和尚は慈悲徹悃の宗師家である、一度口を開けば五臟六腑を丸出しにして毫も祕し立てはせぬ、喫粥了也だの

洗鉢盂去だのと身上を有る丈持ち出して並べ立てた所は餘り親切過ぎて見惡いほどである『者の僧事を聽いて眞ならずんば』斯樣に叮嚀な提撕も聽き手の方がまた其の地に到つて居らぬと却つて有害無益である、『何でも啐啄は同時でなければならぬ、親鳥が折角啄いても雛鳥がまだ成育して居らねば卵を無駄にして終ふ丈のことである『鐘を喚んで甕と作す』問僧が趙州の眞意を汲み得ないで矢張り我見に捉はれて居るならば、鐘と甕とを取り違へて終ふ、其の僧省ありといふが若し聾の早耳で聞違をして居つたらそれこそ僧一人でなく後世のものを惑はす樣なことになるからよく〳〵注意せねばならぬ、形は似て居つても鐘は鐘、甕は甕で異つた處がある、僧も注意せねばならぬが趙州和尙も餘り親切過ぎて却つてそれが迷の種となる樣な提撕をせぬ樣にして貰ひたいものぢやと無門が手強く趙州を抑へて一般の學人を警めた。

頌曰只爲二分明極一。飜令二所得遲一。早知二燈是火一。飯熟已多時

【和訓】頌に曰く、只だ分明に極むるが爲めに、飜つて所得をして遲からしむ。早く燈は是れ火なることを知らば、飯熟すること已に多事。

〔講話〕『只だ分明に極むる爲に』趙州は僧に對して先づ喫粥し了せりやといひ、僧が喫粥し了れりと答へると鉢盂を洗ひ去れといつた、極めて要領を得た接得振であるが餘り分明過ぎる爲に『飜つて所得をして遲からしむ』太陽は餘り光が强過ぎるので眞面に見ては其の形が解らぬ、禪門の問答は何のことかサッパリ解らぬといふものがあるが、それは禪門では端的に法の面目を目の前につき出して示すから却つて正體が解らぬのである『早く燈は是れ火なることを知らば』燈が火であるといふことが判つたならば『飯熟すること已に多時』飯はもう疾に出來て居る筈である、何でも物事の根本を悟ることが大切であつて燈が明るいのはどういふ譯であらうかといつて種々と枝末のことを研究するよりも、直ちにそれは火であるからといふ根本問題を解決すれば、それで充分である、悟は已に開けて居るのである、兎角學人は月を示せば其の指に滯り、門を敲けば門が開かれてからでも瓦を握つて放さぬから所得が遲くなるのである、指に滯らずして目を見、燈に執着せずして直ちに火なることを知れば悟の飯は疾に熟して居る。

第八則　奚仲造車

月庵和尙問僧奚仲造車一百幅拈却兩頭去却軸明甚麼邊事

【和訓】月庵和尙僧に問ふ、奚仲車を造ること一百輻、兩頭を拈却し軸を去却して、甚麼邊の事をか明らむ。

〔講話〕『月庵和尙僧に問ふ』月庵は潭州大潙山の月庵善果和尙のこと、開福道寧禪師の法嗣、本書の著者無門慧開に取つては法の曾祖父に當る、或時座下の衆僧に對して垂示した、『奚仲車を造ること一百輻』これは造車といふ事柄を借りて法門上のことを問うたのであるから所謂借事門である、奚仲は支那古代の人で或は黃帝の頃の人であるともいひ又禹の時代の人であるともいふが兎に角始めて車を發明した人で詳しいことは「事物記原」や「山海經」等に出て居る、其の奚仲が車を一百輻許り儲へた、輻は輻輳などと熟字して、集まるの意味に使ふが、つまり車の輪の中心から四方へ出て居る矢のことである、こゝでは車の數を算へる單位の意味に用ひてある『兩頭を拈却し軸を去却して甚麼邊の事をか明らむ』兩頭は兩輪のこと、車から輪を取り去り、軸を取り去り其の他車を形づくるところのものを一切取去つて、輪は輪に返し軸は軸に返して終つたら車といふものは何處にあるか、どうして車といふことを明めることが出來るか、引よせて結べば草の庵なり、解くれば元の野原なりけりといふ歌があるが、本來物には實體はない、所謂無相の相である、吾々の身體は地水火風の四大で出來て居るといふが、其の地は地に返し、水は水に返し、火は火に返し、風は風に返してならば何處に身體といふものが存在するか、まして美といひ醜といふ樣なものは畢竟影も形もない、サテ此の場合何處に向つて物の實相を捉へたものであらうかと、月庵和尙は大衆の前へ此の問題を擲げ出して其の解決を促した、之に對して若しも學人達は種々と工夫を凝したであらうけれども、兎や角と分別に渉つては月庵和尙の提出した問題を明に解決することは出來ぬ、思量分別は此の際絕對に禁物である、月庵が此處に言つた語は、問題其の儘の答であつて、奚仲造車一百輻云々の十數字が其の儘祖師西來意の端的をも趙州無字の面目をも淨裸々赤灑々に道破して居る、

兎や角と之に對して分別を挾めば忽ち白圭に瑾を生ずるのである。

無門曰若也直下明得眼似流星機如掣電

【和訓】無門曰く、若し亦た直下に明め得ば、眼、流星に似て、機、掣電の如くならん。

〔講話〕『若し也た直下に明め得ば』月庵が提出した問題に對して毫も躊躇することなく、言下に明快な解決を與へ得るものがあつたら、それこそ一言の下に緇素を分ち龍蛇を辨ずる所の所謂快人である『眼流星に似て機掣電の如くならん』其の眼光の敏捷きことは恰も空を飛ぶ星の如く、瞬きする暇もない、又其の機鋒機略卽ち心の働の自由自在にして早く速かなことは電光の如くである、それは一體誰のことであらう、月庵のことか奚仲のことか、或は無門自身のことか、曰く、誰でもない、學人皆這箇の働を以つて居るのであるけれども、悲しいかな知見解會に滯つて本具の眼識機略を實現することが出來ぬのである。

頌曰機輪轉處達者猶迷四維上下南北東西

【和訓】頌に曰く、機輪轉ずる處、達者猶は迷ふ。四維上下、南北東西



第八則　奚仲造車

〔講話〕『機輪轉ずる處』本則に車を問題にしてあるから無門は頌にも又車に因緣のある語を用ひた、機輪は元來開き戸のクル、のことであるけれど、此處では大きな車の意味に用ひてある。全宇宙即ち法界は一の車の樣なもので、其の運轉の速かなることは到底形容も出來ぬ程である、されば『達者猶ほ迷ふ』で、佛法の道理に通達した大宗師家といはれる程の人でも、動もすれば見誤る程である、無門は奚仲の車に關する問題を直下に明め得たものは眼流星に似、機掣電の如くであると評したが、更に其の車を機輪と名けて再び此處に持ち出した、機輪の轉ずる樣子を直下に明得するといふことは却々難しいものであるから、所謂達者猶ほ迷ふである、而かも其の車は『四維上下南北東西』自由無碍に東へでも西へでもどちらへも轉ずるもので、少しもさし障りはない、而し此の機輪の轉處は却々學問や智識では分るものではない、光は一時間二十哩を走る汽車が五百年かゝる處の太陽から地球までの間を僅かに七八分で達するといふが、機輪の轉ずるのはまだそれよりも速かなものである、天文學や光線學の上で光の速度は大凡解るであるが、法界といふ大機輪が四維上下東西南北の十方を自由自在に轉ずる速度に到つては、到底測り得られるものではない、此處は全く實參實究でなくては解らぬ消息である。

第九則　大通智勝

興陽讓和尙因僧問大通智勝佛十劫坐道場佛法不現前不得成佛道時如何讓曰其問甚諦當僧云既是坐道場爲甚麼不得成佛道讓曰爲伊不成佛

【和訓】　興陽の讓和尙因に僧問ふ、大通智勝佛、十劫坐道場、佛法不現前、不得成佛道の時如何ん。讓曰く、其の問甚だ諦當なり。僧云く、既に是れ坐道場、甚麼と爲てか不得成佛道と。讓曰く、伊が不成佛なるが爲なり。

〔講話〕『興陽の讓和尙』これは郢州興陽山に住した淸讓和尙のことで、淸讓和尙は芭蕉慧淸和尙の法嗣で、夫の潙仰宗の祖仰山から三世の法孫である、『因に僧問ふ』此の和尙の處へ或僧が來て下の如き問端を起した、此の僧却々怜悧の漢であつたと見えて問ひ振が並々でない、興陽も浮かりする

と足をすくはれさうである、さて僧はどんなことを問うたか、『大通知勝佛、十劫坐道場、佛法不現前不得成佛道の時如何』蟻の行列の様に頗る長い問題である、これは法華經化城喩品の中にある事柄で、大通智勝佛とは過去無量時に出現した佛で、其の壽命は五百四萬無量劫であるといふ、此の佛がまだ出家せられぬ時に十六人の王子があつたが、過去世の釋迦牟尼佛は實に此の第十六王子であつたと書いてある、而して此の佛の神通は三世十方に通徹せざることなきを以つて大通といひ、此の佛の智慧は一切を覺了して三惑を淨盡し、三乘の人の智に勝れたるが故に智勝といふ、而して十劫の間道場に坐して佛道を成じ法華經を十六王子に聽かしめて後入定すること八萬四千劫であつたとある、何にしても大仕掛な佛樣である、素より比喩品に出て居る佛樣であるから實在であるかないか等と論ずるのは野暮である、佛敎の經典は印度や支那の極めて思想の豐富な詩人や學者達によつて書かれたり譯されたりしたものであるから、實に其の構想が雄大である、全宇宙を一と呑にする樣な佛樣のことはザラに書いてある、然らばこれが皆口から出まかせの法螺ばかりかといふに決してさうではない、我が禪門の立場からいへば眞如は法界に充塞して空間的に際涯なく、時間的にも又局限のないもので、三世の諸佛は此の眞如を人格化したもの、眞如と一如になつたものであるから從つて大勝智勝佛の如き大仕掛な佛樣も强ち空想的のものとして排し去るべきではない、十劫坐道場の劫とは無量の長日時をいふ、例へば此處に四十里四方の大石があつて、百年目に一度づつ天人が舞ひ下りて其の柔かい羽衣でそつと一と撫して行く、それが度重つて遂に其の石がすり滅されて無くなつて終ふ間の時間を一劫といふ、それが十回重つたのが十劫であるから殆ど想像も及ばぬ程の長時間である、サテ此の樣に長い間坐禪をして居つても、佛法が現前しなかつた悟が開けなかつた、又佛道を成ずることが出來なかつた、かゝる場合には何としたものであらうかといふ僧の問である、此の則は臨濟錄にも出て居るが臨濟は之に對して「大通とは是れ自己なり、處々に於いて其の萬法の無性無相なる處に達するを名けて大通となす、又智勝とは一切處に於いて疑せずして一法を得ざるを名けて智勝と爲す、又佛とは心清淨光明にして法界に透徹するを名けて佛と爲す、十劫坐道場といふは十波羅密これなり、佛法不現前といふのは佛もと不生、法もと不滅といふのが故に何ぞ更に現前することあらん、不得成佛道といふは、佛は更に作佛すべからず」といつて居る、餘り拖泥帶水に過ぎた說法であるけれども、字義の解釋としては要を盡したものである、要するに僧の問は父母未生已前の事如何とか、一字不說の面目如何とかいふ樣な意味である、『讓曰

く其の問甚だ諦當なり』臨濟もいうた通に佛法は元來現前不現前を以つて論ずべきではない、現前の方面からいへば一切處一切時に現前して毫も昧す所はない、不現前の方面からいへば佛一代の所說の中にも寸毫も佛法などといふものは現前して居らぬ、佛道に又成ずる成ぜぬといふ邊量に涉るべきものではない、其の現前もせず成じもせぬのが眞の佛法である、されば僧の問は問其の儘が立派な答である、所謂諦かに本分に契當して居るのであると讓和尙が證明せられた、併し僧はかく和尙が其の銳鋒を避けるのを尙第二矢を放つて射止めようとした『僧云く、既に是れ坐道場、甚麼と爲てか不得成佛道』そんならば何故大通智勝佛は十劫の間道場に坐して居られたのか、已に道場に坐すといへば何か目的がある筈である、無量の長時間に涉つて坐禪をしても不得成佛道であつたとは甚だ受取り惡い話であると詰問したのである、併し僧はまだ修行だの證果だのといふ相對上のことに滯つて居る、坐禪をしたら悟が開けさうなものであるといふ妄想を抱いて居るからこの樣な寢語が出るのである、此の僧初めは讓和尙を勘破するつもりで大層な勢で問端を起したが終は甚だ振はない、所謂龍頭蛇尾の商量振であつた『讓曰く、伊が不成佛なるが爲なり』快刀亂麻を斷つが如き頗る痛快な答である、伊とは表面大通智勝佛を指すのであるが、其の實僧に對して、お前が迷



つて居るから其の樣な愚問を發するとだやと眞向から其の鼻柱を挫いたのである、讓和尙の接得振は誠に當を得て居る、所謂前箭は輕く後箭は深しで、初め其の問甚だ諦當なりなどと輕くあしらつて置いて、僧がまだ對待邊に執着して居ると見るや、頭から伊が不成佛なるが爲なりと抑へ付けた所は實に巧妙なものである、十劫の間道場に坐して不得成佛道であるのは全く讓和尙のいふ通り大通智勝佛が名は佛であつても其の實悟が開けて居らぬからである、併し其の悟の開けぬ處が又面白い、不成佛の當處に大通智勝佛の眞面目が現前して居る、大通智勝佛は十劫どころではない、百劫も千劫も乃至無量劫に渉つて道場に坐するけれども決して佛法現前せず佛道を成ぜない、それを兎や角と問題にするお前は餘程血の循の惡い男ぢやといふのが讓和尙終りの答話である。

無門曰只許老胡知不許老胡會凡夫若知卽是聖人聖人若會卽是凡夫

【和訓】無門曰く、只だ老胡の知を許して、老胡の會を許さず。凡夫若し知らば卽ち是れ聖人、聖人若し會せば卽ち是れ凡夫。

〔講話〕『只だ老胡の知を許して老胡の會を許さず』知は智識に愬へて事物の道理を了解するとで、會は智識的でなくて驀直に法の當相を會得するの意であるといふ樣に、知と會とを强ひて區別すれば出來ぬことはないが、此處では其の樣な差別的の意味はない知と會とは同じ意味である。老胡の胡は前にもあつたと思ふが野蠻人、外國人といふ意味で、此處では暗に達磨大師のことをいうたものである、達磨大師が佛法の道理を知つたといふなら可いが會した等といふならば許しては置かぬ、達磨大師ばかりではない、三世の諸佛歷代の祖師、乃至現前の大衆一同苟にも佛法を會する等というたら忽ち無間地獄へ落ち込むぞ、大通智勝佛は十刧坐道場で以つて佛法を現前し、佛道を成ずるつもりであらうが矢張それも徒勞である、現前も成道も語こそ違ふがいづれも佛法を會するを目的とするのであるから、此の無門は決してそれを許さぬぞと抑へた、『凡夫若し知らば卽ち是れ聖人』併し凡夫が若し佛法的々の大意を知つたならば直ちに聖人の位に入ることが出來る、修因證果の因果法は歷然として昧すべきではない、『聖人若し會せば卽ち是れ凡夫』けれども聖人の位に登つて其處に住着すれば忽ち向上の病である。聖人となつたならば直ちに凡夫の境界に降つて衆生敎化の拕泥帶水をする、これが直に佛法を會得し佛道を成じた聖人の行である、要するに知るがよくて會す

るが悪いではない、知とか會とかいふことに執着することを警めたのである。

頌曰了身何似了心休了得心兮身不愁若也身心俱了々神仙何必更封侯

【和訓】頌に曰く、身を了せんよりは何ぞ心を了して休せんに似かん、心を了得すれば身愁へず、若し也た身心俱に了々なれば、神仙何ぞ必しも更に侯に封ぜん。

〔講話〕『身を了せんよりは何ぞ心を了して休せんに似かん』大通智勝佛は道場に坐り込んで身體の上の相好を了うせんとして居る樣である、併しいくら身體ばかり兀々地に坐定して居つても心中に煩惱とか菩提とか生死とか涅槃とかいふ樣な波風が立つて居つては何にもならぬ、先づ其の心を休して眞をも求めず妄をも斷ぜざる境界に達せねばならぬ、『心を了得すれば身愁へず』身外の賊を平ぐるは易く心中の賊を平ぐるは難しで、釋尊も煩惱の毒蛇眠つて汝が心にあり、毒蛇已に出でなば安眠すべしと遺教經の中にもお示しになつて居るが、心に箇の一大事を了得したならば最早煩惱の爲に惑はされることもなく、身も又寧靜して、安眠することが出來る、かく一應は身と心とを別々にして見るもの〻、元來身心は一如であるから身心共に了得すべきであるが、此處では大通智勝佛の十劫坐道場の身行に執着するもの〻ために身行を抑へて心悟を奬めたのである『若し也た身心俱に了了なれば』已に前の句の心を了得すれば身愁へずとあるのは身心一如の證である、身心が別々ならば心で悟つても身が安靜であるといふ譯には行かぬ、併しそれは兎も角身で共に悟り了つたならば已に不生不滅の神仙界に入つて居る、何も殊更に神仙の爲に公侯伯子男等の俗爵を貰ふ必要はない、十劫坐道場の當處に於いて身心脱落が出來たならば佛法が現前しなくても佛道を成ぜなくても、最早その樣なことに用事はない、立派な大通智勝佛といふ佛である、イヤ身心脱落等といふことは本來は無用である、十劫坐道場其の儘が大通智勝佛の眞面目である、此の則に對して古來宗匠達はそれぞれ拈評を下してござるが、就中、報山珪和尙の「穀を植ゑて豆苗を生ぜず、砂を蒸して豈によく飯となさんや、大通智勝如來一箇擔板底の漢」といふ頌や、經山果和尙の「道場に宴坐して十劫を經へ、一一從頭俱に漏泄す、世間多少株守の人、棒を揮つて打たんと擬す天邊の月」といふ頌等は却々面白い。

第十則　清稅孤貧

曹山和尙因僧問云淸稅孤貧乞師賑濟山云稅闍梨稅應諾山曰靑原白家酒三盞喫了猶道未沾唇

【和訓】 曹山和尙因に僧問うて云く、淸稅孤貧、師賑濟し玉へ、山曰く、稅闍梨。稅、應諾す。山曰く、靑原白家の酒、三盞喫し了つて、猶ほ道ふ未だ唇を沾さずと。

〔講話〕『曹山和尙』曹山和尙は名を本寂といひ、洞山良价和尙の法嗣で、泉州甫田の人である、洞山五位の法を傳へて叢林の標準と稱せられたといふ、唐の天復元年六十三歲を以つて遷化し、元證大師と諡せられた、曹洞宗は洞山曹山に於て大に興つたので曹山の曹と洞山の洞とを取つて宗名が出來たといふ說がある程である、併し曹洞の曹は曹谿六祖大師の曹であると曹洞宗では主張して居るが、兎に角曹山も格外の力倆ある大宗師家であつたことはいふまでもない、『因に僧問うて曰く、淸稅孤貧、師賑濟したまへ』曹山に對して或僧が斯樣に問端を起した、淸稅は問僧自身の名である、拙僧は孤貧というて赤貧洗ふが如き有樣でありますがどうか惠んで下さい、賑は賑はす、濟はすくふであるから衣食が淋しいから何か施して賑かにして下さいといふ嘆願である、隨分哀つぽい弱音を吐いたものである、併しこれは只の問ではなく、驗試問というて師家の手許を探るのである、試に僧の眞意を忖度して見るならば、拙僧は迷悟とか凡聖とか佛法とか禪道とかいふ樣な財產はすつかり無くして終つて懷中、否心中全く無一物であります、一切を放下し去つた場合には何としたものでありませうか、これが大悟徹底といふものではありますまいかといふ程の意味である『山曰く稅闍黎』曹山は金をやるとも食物をやるともいはずに只淸稅和尙と其の名を呼んだ、實に巧に體をかはしたものである、これでは流石の淸稅も何として見ようがない、曹山和尙が何とか引かゝりのあることでもいつたら忽ち飛びかゝつて其の喉首を押へようと思つた淸稅も、斯樣に輕く外されたので二の太刀をふり上げるキツ掛けもなく、呼ばれるまゝに『稅應諾す』ハイと答へた、心中無一物というたが其の應諾する底のものは何である、其處に費つても費つても盡きぬ所の無價の珍寶があるではないか『山曰く、靑原白家の酒三盞喫し了つて猶ほ道ふ未だ唇を沾さずと』此の大酒喰ひ

メ、白家の酒を五郎八茶椀に三杯も五杯も喰ひながらまだ唇もぬらしませぬなどとよくも圖々しくいはれたものだと鋭く抑へ付けた、青原は土地の名、白家は一般の百姓家をいふ青原白家の酒は商賣品の水まじりの酒ではなく素人家の生一本の酒である。應諾するのは即ち青原白家の酒に醉つて居る證據である、其の大酒喰が醉ぱらつて應諾して居ながら清税孤貧等とよくも白々しくいはれたものだ、尊公は佛法禪道の酒で腹一杯ではないかと警めた。

無門曰清税輸レ機是何心行曹山具眼深辨二來機一然雖レ如レ是且道那裏是税闍梨喫酒處

【和訓】無門曰く、清税機を輸す、是れ何んの心行ぞ。曹山は具眼、深く來機を辨ず。然も是の如くなりと雖も、且らく道へ、那裏か是れ税闍梨喫酒の處。

〔講話〕『清税機を輸す』清税は私は孤貧でありますと思ひ切つて下手に出た、技倆を隱して巧に曹山を一杯喰はせるつもりであらう、斯いふ手合には却々油斷がならぬ、『是れ何の心行ぞ』心行は心持、仕方といふ樣な意味で曹山の如き出格の大宗師家に對して驗主門を擔ぎ出すとは一體どういふ



第十則　清税孤貧

心持であうと、到底及ばぬことは解り切つて居るのにと抑へた『曹山は具眼、深く來機を辨ず』曹山は明眼を具した衲僧であるから問ひ來る處の人物の機根を一見して見分けて終つて、稅闍黎と呼んだり、青原白家の酒云々と云つたり、種々と接得の手段を用ひられた『然も是の如くなりと雖も且らく道へ那裏が是れ稅闍黎喫酒の處』併しそれは兎も角として、清稅が青原白家の酒を喫したといふ面目は何なものか、諸人者此處が注意のしどころぢやぞと學人をして本則の主眼たる清稅の脚下を點檢させた、清稅が無一物といつたのを曹山は無一物中無盡藏であると指摘した、そこで無門が一般參學の人に對して其の無盡藏の的意を參究せよと促したのである。

頌曰貧似范丹氣如項羽活計雖無敢與鬪富

【和訓】頌に曰く、貧は范丹に似たり、氣は項羽の如く。活計無しと雖も、敢へて與に富を鬪はしむ。

〔講話〕『貧は范丹に似』范丹は後漢時代の人で、字を史雲といひ、學識は深かつたが頗る貧乏で、所謂赤貧洗ふが如くであつた、其の時代の人は范丹を評して、甑中に塵を生じ、范史雲は釜中に魚を生ず」といつた程である、それでも范丹自身は一向無頓着で常に自若として貧に甘んじて居つた無門は清稅が孤貧というたので其の實例に范丹を引ぱり出した『氣は項羽の如し』項羽は漢の高祖と天下を爭つた人で、力山を抜き、氣世を蓋ふといふ漢楚時代の豪傑である、清稅は范丹の如く貧乏であつたが而かも其の氣概は乾坤を呑吐する程であつたから、曹山の如き出格の大師匠に對しても毫も懼るゝことなく、其の脚下をすくはうとした、實に心中何等の蟠りもないから斯樣に自由無礙の活作略が出來るのである『活計無しと雖も』活計は日暮の材料即ち財産をいふ、清稅は上にいふ樣な貧乏人で、さう財産といふ樣なものはないが『敢て與に富を鬪はしむ』昔の石崇と手愷とが富の競爭をした樣に清稅も曹山に對して富の鬪をやつた、此の場合の富は所謂心の富である、心の富というても智識の豊富なことをいふのではなく、禪定の技倆である、サテ此の勝負はどちらが勝利を得たであらうか、苟くも參禪せんとするものはよく〳〵其の勝負を注意して見るべきである。

第十一則　州勘庵主

趙州到一庵主處問有麼有麼主竪起拳頭州云水淺不是泊船處便行又到一庵主處云有麼有麼主亦竪起拳頭州云能縱能奪能殺能活便作禮

【和訓】趙州一庵主の處に到つて問ふ、有麼有麼、主、拳頭を竪起す。州云く、水淺くして是れ船を泊する處にあらずと云うて、便ち行く。又た一庵主の處に到つて云く、有麼有麼、主も亦た拳頭を竪起す。州云く、能縱能奪、能殺能活と云うて、便ち作禮す。

〔講話〕『趙州一庵主の處に到つて問ふ、有り麼有り麼』趙州のことは前に出て居る、趙州觀音院從諗和尚である、趙州和尚は諸方遍歴して名師巨匠を訪うて自己の見地を鍊磨せられた、一體禪は一種の力であるから常に之を鍊磨せねばならぬ、昔は武者修行の樣に禪僧も諸方の師家を歴訪して問答商量して力倆を鍊磨したものであるが、近來はトンとさういふことが行はれなくなつた、趙州和尚の時代には盛に參師問法といふことが行はれたもので、此の則も其の一例である、庵主とは名藍大刹の住持でなく、極めてさゝやかな庵にあつて專心修行して居る人である、近頃は少し學問があつたり評判がよいと直に大寺の住職や管長になりたがるものが多いが、昔は大悟徹底してからでも小院や堂庵に籠つて悟後の修行に大いに力を盡たしものである、從つて斯樣な庵主等にも頗る技倆の優れた大宗匠が居ることがあるから却々油斷はならぬ、サテ趙州が或る庵を訪うて居るか居るかと大聲で呼んだ、只庵主といふ人間が居るか居ないかを問うたばかりではない、庵主心中に主人公が惺々着と控へて居るかどうかを勘檢したのである、『主拳頭を竪起す』庵主もさるもの浮乎と居るとか居ないとかいふ樣な有りふれた返答はしない、ニユウツと窓から握り拳を差し出した、ソーラ主人公は此處に居るぞといふ見識である、人々本具の主人公の面目は文字や言句では眞箇にいひ現せるものではない、庵主が何ともいはずに拳頭を竪てたのは主人公をそのまゝ其處へ引き出したのであるから、これほど親しい返答はない、併し趙州は之を肯はぬ、『州曰く、水淺くして是れ船を泊する處にあらずと云うて便ち行く』こんな淺い港では此の趙州丸といふ大船はよせられぬ、握

拳を出す等といふ樣な小細工をする庵主に何が分るものかといふ態度でサッサと行つて終つた、趙州の目から見ると此の庵主は尙ほ一物珍重の病に罹つて居ることが解つたから重ねて商量せずして其の儘去つたのである『又た一庵主の處に行つて云く、有り麼有り麼』又外の庵主の處へ行つて同じ樣に大聲を擧げて呼び立てた『主も亦た拳頭を竪起す』然るに此の庵主も趙州が來るのを待つて居たかの樣に直樣握り拳を竪てゝ見せた、其の頃は拳頭禪が流行したものと見える『州曰く、能縱能奪能殺能活といふて便ち作禮す』趙州はそれを見て今度は前と反對に、これはどうも立派な作略である、實に能く縱ち能く奪ひ、能く殺し能く活す、殺活自在與奪縱橫である、敬服致しましたというて坐具を展べて禮拜した、斯なると愈ゝ何のことか分らなくなる、前には同じ拳頭竪起に對して水淺くして船を泊し難しといつて去り、今度は能縱能奪云々といつて禮拜したが、趙州の手許では前の庵主が不是で後の庵主が是であるのか等と考へたらそれこそ忽ち本分に蹉過して終ふ、趙州は一を肯ひ他を肯はなかつたのではない、水淺くして船を泊し難きも是、能縱能奪、能殺能活も又是である、一方を抑へて一方を揚げ、甲を活して乙を殺す、兩方共趙州得意の活作略である、庵主の方でも共にさる者であるから抑へられたからとて失望もせないし、揚げられたからとて有頂天に



なりもすまい、所謂一手擡一手搦、世の中には同じものは一つもない、同じ樣に見えてもそれぐ異つた經過を歷、異つた內容を以つて居るから、其に對して何とか判斷を下す日になれば自ら違つた手段を取らねばならぬ、けれどもそれに對して是とか不是とか好とか惡とかいふ樣な比較上の判定を下すべきではない、紅葉には紅葉の美あり櫻には櫻の美がある、之に對して好惡をいふのはこれ我是我執を土臺とした偏見に過ぎぬ。

無門曰一般竪起拳頭爲甚麽肯一箇不肯一箇且道諦訛在甚處若向者裏下得一轉語便見趙州舌頭無骨扶起放倒得大自在雖然如是爭奈趙州却被二庵主勘破若道二庵主有優劣未具參學眼若道優劣無亦未具參學眼

【和訓】無門曰く、一般に拳頭を竪起す。甚麽と爲してか、一箇を肯ひ、一箇を肯はざる。且らく道へ、諦訛甚れの處にか在る、若し者裏に向つて一轉語を下し得ば、便ち趙州の舌頭に骨無くして、扶起放倒、大自在を得ることを見ん。然も是の如くなりと雖も、爭奈せん趙州却つて二庵主に勘破せらるゝことを。若し二庵主に優劣有りと道はゞ、未だ參學の眼を具せず。若し優劣無しと道はゞ、亦た未だ參學の眼を具せず。

〔講話〕『一般に拳頭を竪起す』庵主が二人あつてどちらの庵主も趙州が有り麽有り麽と呼んだのに對して同じ樣にニユツトと握り拳を竪てた、然るに『甚麽と爲てか一箇を肯ひ一箇を肯はざる』趙州和尚は何故片方に對しては忝しく禮拜し片方に對しては水淺くして船を泊す處にあらず等という たのか、『且らく道へ、諦訛甚れの處にか在る』諦訛は詰倔聱牙の聱牙と同じで、難しい込み入つたことをいふ、一體斯樣に態度が違ふ譯合、其の込み入つた理由は何處にあるであらうか『若し者裏に向つて一轉語を下し得ば』若し此の魂膽に向つてハツキリとした解決を與へる樣な一轉語を下すことが出來たならば『便ち趙州の舌頭に骨無くして扶起放倒大自在を得ることを見ん』舌頭には誰でも骨はないが、而かも一般の人の舌は骨があるかの樣にキゴチなくて、自由自在に佛向上の事を說得することが出來ぬ、拳頭竪起に對しても巧に長廣舌を振つて之に適當な判決を下すことが出來ぬ、然るに趙州和尚に於いては眞に舌頭に骨がないから、二人の庵主の全く同じ樣な作略に對し

ても一手は擡け一手は搦へて、或は能縱能奪能殺能活云々等と扶け起し、或は水淺くして船を泊する處あらずと抑へ倒す等、全く自由自在な大機用を現ずることが出來るのである、『然も是の如くなりと雖も爭奈せん趙州却つて二庵主に勘破せらるゝことを』併し趙州和尚は斯樣に大自在を得た樣であるけれども其の實却つて二庵主の爲に脚下を見られて終つて居る、ハテ何う脚下を見られたであらうか等と分別に涉れば忽ち解らなくなつて終ふが、一寸種明しをして見ようならば、二庵の主の手許からいへば、拳頭竪起につられて、趙州が一庵主の處を立ち去つたり一庵主の處で禮拜したり、種々なお芝居をして居る『若し二庵主に優劣ありと道はゞ未だ參學の眼を具せず』若し此の二庵主の作略に對して趙州が口でいつた通りに腹の中でも優劣をつけて居つたとすれば飛んだ間違で、それと參學の眼もない所の所謂無眼子の漢といふべきである、要するに此の無門の評の中で最も重要な文字は、且らく道へ諸訛甚れの處にか在る」といふ一句である、何でも公案には必ず諸訛があるから、其の諸訛を觀破することが肝要である。

頌曰眼流星機掣電殺人刀活人劍

【和訓】　頌に曰く、眼流星、機掣電、殺人刀、活人劍。

〔講話〕『眼流星』此の頌は徹頭徹尾趙州の機用を諷詠したのである、趙州和尚が宗乘を擧揚せらるる時は機に臨み變に應じて敏俊怜悧、對手の利鈍賢愚を見分ける眼光は實に流星の如く迅速にして且つ自在である『機掣庵』又其機略は縱橫無碍にして間髮を容れざること恰も稻妻の如くである、例へば、本則に於いて一庵主が拳頭を竪起すれば之を貶斥して去り、一庵主が同じく拳頭を竪起すれば忽ち之を禮拜する、實に敏活にして自在である『殺人刀、活人劍』それは禪語に「寶劍手に在り殺活自在」といふのと、同巧委曲である、佛祖は學人を接するに一本調子ではない、機に應じ時に臨んで種々異つた手段を用ひられる、趙州は其の尤も秀れたるもので、一庵主を貶斥せられたのは殺人刀を用ひられたので、一庵主を卓上せられたのは活人劍を用ひられたのである。而かも此の活人劍と殺人刀とは別々のものではない、一刀にして兩樣の働があり、同時に兩樣に用ひられる、例へば趙州が一庵主に對して禮拜した當處には一面に於いて其の庵主を極力貶下した意味がある、一庵主に背いて去つた胸中には衷心から之に對して贊成して居る趣がある、それは又どういふ譯であらうか等と思量分別に涉つては到底殺活自在の機用は會得せられるものではない、趙州の的意會せんと要すれば須らく參すること三十年なるべしである。

第十二則　巖喚主人

瑞巖彥和尚每日自喚二主人公一復自應諾乃云惺惺著諾他時異日莫レ受二人瞞一諾諾

【和訓】瑞巖彥和尚、每日自ら主人公を喚び、復た自ら應諾す。乃ち云く惺々著、諾。他時異日人の瞞を受くること莫れ。諾、諾。

〔講話〕『瑞巖彥和尚』瑞巖和尚は臺州の人で名を師彥といひ、閩許氏の子である、德山宣鑑の法孫巖頭全奯和尚に法を嗣いだが大悟の後終日巖頭に坐して愚の如く而かも衆を統ぶること頗る嚴整であつたといふ、『每日自ら主人公と喚び、復た自ら應諾す』每日折があれば必ず大聲をあげて、主人公ありやありや、本心の主人公は居るか〳〵と喚んで自分で又諾々居りますよと答へた、これが瑞巖の精神修養法である、昔から修養を心掛けた人は皆それ〴〵一定の規を立て、それに順つて動もすれば消滅せんとする自己本心の光を怠らず磨いたものである、今日でも靜坐をするとか、古聖先賢の書を每日幾らか讀むとか、種々の方法によつて精神修養をして居る人があるが、兎に角修養といふことは溜て置いて一時にやるといふ譯とは行かぬ、每日々々少しづつでも怠らず行つて居る間に漸次人格が向上して來るのである、瑞巖は此の主人公を喚び出すことが得意の修養法であつたと見える、吾々が兎角物事に對して執着をしたり迷を起したりするのは本心の主人公が居眠をして居るからである、一家に嚴然たる主人公があつて、それを中心として日常の生活をして行けばチヤンと治まりが付いてイサクサが無いが、主人公が確乎して居らぬと一家中のもの、心に落着がない、一箇人の上に就いて見ても同樣で、本心が明かな眼を見開いて居らぬと兎角身心全體がボンヤリして居つて、事に當つて快刀亂麻を絕つが如き明快な所置を取ることが出來ぬ、瑞巖和尚は外貌は愚の如くであつたと傳記にも見えて居るが、而かも斯樣に主人公を覺醒することを怠らなかつたから其の心は明鏡の如く澄み渡つて、胡來れば胡を現じ漢來れば漢を現じて、毫も昧ます處がなかつたのである『乃ち云く、惺々著』瑞巖和尚は主人公を喚び起して諾々と返事をすると、更に居睡つて居つてはならぬぞ、ハツキリと目を覺せと注意した、惺は覺醒の義である、本心の主人公が睡つて

居ると種々な煩惱が起つて來て罪業を作る、交番の巡査が浮乎して居ると犯罪者が跋扈するから、主人公が控へて居るばかりでなくハッキリと目を覺して警戒をせねばならぬ、『諾』目を醒して居るかと自分で問うて又自分でハイハイ此の處り大きな目を開いて居りますと答へた、斯樣に能問と所問卽ち問はれるものと問ふものとを一人で兼ねて居るのは、能所彼此の對待を絕した自他一枚の樣子を現したものと解しても可い、三界唯一心心外無別法といふ佛教の唯心的立場からいへば、問ふものも問はれるものもない、盡法界唯自己一心に歸して終ふ譯であつて、瑞巖の自問自答はその道理を具體的に現はして居るものと見ることが出來る、併し禪の立場からは斯樣な閑妄想を描くことは禁物であるけれども、假に第二第三に涉つて精采を着けて見れば斯もいはれぬことはないのである、瑞巖はかく自問自答をしてから、更に『他時異日人の瞞を受くること莫れ』と自ら誡めた、吾には常に人の爲に瞞ぜられてばかり居る、人が佛法といへば佛法の語に迷ひ、禪といへば禪の語に迷ふ、花といへば花、月といへば月、見るもの聞くものに就いて自ら貪瞋痴の三毒を起して居る、人に瞞ぜられるといふが人とは人間ばかりではなく、吾々の心の對象となる處の一切萬物をいふのである、換言すれば六根に對する六境六塵である、否六境六塵ばかりではない、三毒を滅して心を



第十二則　巖喚主人

清淨にし、根本無明を斷じて開發悟道したと信じて居るものでも、又其悟といふものについて廻つて居る、これ悟に瞞ぜられるのである、例へば修養に志して居る人が、ヤレ孔子の倫理說がどうの釋迦の哲理がどうのと、理窟にばかり頭を突込んで肝腎の實行を疎かにし居るのは、即ち倫理や哲學に瞞ぜられて居るのである『諾諾』瑞巖は斯樣な外境の事物や心中の智慧分別に瞞ぜられてはならぬぞと警めて置いて、更に自ら諾諾心得ましたと答へた、誠に好い教訓である、吾等は瑞巖の樣に常に怠らず主人公を惺々たらしめねばならぬが、此の主人公を普通にいふ意識であると思ふと甚だ狹い意味になつて終ふ、意識を常に惺々たらしめて置かねばならぬといへば、吾々は眠ることも出來ぬ譯である、禪は昔の印度の苦行外道が行つた樣な難行苦行を奬勵するのではない、眠る時には徹底眠り起きる時には徹底起き、行住坐臥擧足下足、必ず道に契つて誤らぬのが眞に主人公が惺惺たる所以である、人の眠るべき最夜中に料理店の二階等でドンチャンと騷いで居る人間はこれ主人公が居眠をして居る連中である、一日の務を終へて安然として枕を高うして熟睡して居るものこそ實に主人公の惺々著たるものといふべきである。

無門曰瑞巖老子自買自賣弄出許多神頭鬼面何故聻一箇喚底一箇應底一箇惺々底一箇不受人瞞底認著依然還不是若也傚他惣是野狐見解

【和訓】無門曰く、瑞巖老子、自ら買ひ自ら賣つて、許多の神頭鬼面を弄出す。何が故ぞ聻。一箇は喚ぶ底、一箇は應ずる底、一箇は惺々底、一箇は人の瞞を受けざる底、認著すれば依然として還つて不是。若し也た他に傚はゞ惣に是れ野狐の見解ならん。

〔講話〕『瑞巖老子』老子といふ語は釋迦老子等というて最も人を尊敬する場合に用ひる、無門は大いに瑞巖の作略を讃嘆するつもりで先づ其の名を最大敬語を以つて喚んだ『自ら買ひ自ら賣つて許多の神頭鬼面を弄出す』自ら買ふは自答すると、自ら賣るは自問するとである、瑞巖和尙は自問自答の一人商賣をしてござるが、それでは掛引もなくて理想的商賣が出來るであらうと思ふと却々さうではない、神頭鬼面というて種々な化物を引張り出して自分を瞞じてござる、神頭鬼面は鬼神の頭や面といふ意味で、支那では鬼神は幽靈とか化物とかいふ意味があるから、つまり瑞巖が主人公、惺惺著、人の瞞を受くること莫れ等といふのは皆神頭鬼面であつて、その樣な依態の知れぬものを

引張り出して道化芝居をして居る、それは一體『何が故ぞ、噫』主人公だの瞞ぜらるゝ莫れだのといふのは何の譯であらうか、主人公は心のことである、瞞ぜらるゝなとは心を覺醒させることである等と妄想を描いてはならぬぞ、然らば瑞巖の的意如何、參學のものはよく〳〵此處を注意して見よといふ意味を強める爲に噫といつたのである。『一箇は應ずる底一箇は惺々底、一箇は人の瞞を受けざる底』無門は瑞巖が持ち出した神頭鬼面を又自分の店頭へ持つて來て竝べた、サア參禪學道のお客さん達、此等の古物を間違なく鑑定して御覽じろ、鑑定違をすると大損害を蒙りますぞ、瑞巖慣用の作略、何と會得が出來ましたかナといふ態度である『認著すれば依然として還つて不是』さればというて喚ぶ底は斯樣々々、應ずる底は斯樣々々等と文字言句で解釋して見たり、思量分別に渡つて見て、コレで忍得が出來たなどといふならば、依然として不是、大間違である、元來瑞巖の的意は瑞巖自身の外眞箇に解るもりではない、人々一座の補陀山である、『若し也た他に倣はゞ惣に是れ野狐の見解』眞箇に解りもせぬ癖に瑞巖の眞似をして主人公と喚んだり、自ら應諾したりするのは、所謂野狐悟りといふものである、兎角人眞似といふものはどうしても精神が籠らぬから力がない、當今禪門の師家と稱するもの、中にも此の野狐禪を振り舞して得々として居るものが少くないか、實に側から見て居ると齒の浮く樣な感がする、何でも實參實究をして法を自分のものにしてかゝらねばならぬ、瑞巖の作略は瑞巖に任せて置いて、他のものは各自自己の新天地を開拓するがいゝ。

頌曰學道之人不識眞、只爲從前認識神、無量劫來生死本、癡人喚作本來人

【和訓】頌に曰く、學道の人眞を識らざることは、只だ從前の識神を認むるが爲めなり。無量劫來生死の本、癡人は喚んで本來人と作す。

〔講話〕『學道の人眞を識らざることは』此の頌は無門の作ではなく、長沙景岑和尙の作を無門が其の儘用ひたものである、卽ち長沙が客と主人公に就いて論じた時、此の偈を作つて客に示したものであるといふ、サテ學道の人卽ち參禪學道に志す人は頗る多いが、眞に參禪の目的を達して、本來の面目、宇宙の本體を識得した人は甚だ稀である、一體それは何いふ理由であらう、『只だ從前の識神

を認むるが僞なり』修行に志さぬものは皆識神を認むるものがあるが、修行に志しても從來通り識神に執着して居るから容易に大悟徹底が出來ぬのである、識神の識は六識八識とか意識とか常識とかいふ樣に熟字するが、要するに心のことである、神は精神の神で、これも心のことをいふ、三界唯一心とか萬法は唯心の所變である等といふから少し經論でも聞嚙つたものは直に心といふ一物を珍重して此の心が悟の本體である、心が萬法の根元であるといふ樣に執着する、斯樣に識神を認めて、識神の働によつて考へ付いたことが無上のものであるかの樣に妄想するから、所謂眞を識ることが出來ぬのである『無量劫來生死の本』一般に識神即ち心といふのは即ち心的現象のことで、これは只一時的のものであつて永久不變の本體ではない、然るに人は此の一時的現象に迷つて種々煩惱妄想を起し、それが實行の上に現れて業となり、業が生死流轉の因をなして無量劫の長い間吾等を暗きより暗きに彷徨はせるのである『癡人は喚んで本來人と作す』斯樣な生死の源を捉へて愚かなものはこれが本來の面目である、吾等の本體はこれであるといふ、何んぞ知らんこれこそ吾等本具の佛性を昧ます處の無明の根本である、要するに瑞巖和尚が自ら買ひ自ら賣つて居る處の主人公といふ代物も、本分底より見來れば矢張り生死流轉の種である、瑞巖の手許に於いては或はさうでないかも知れぬが、これを擔ぎ出して兎や角と評唱を加へた無門の手許ではもうすつかり本分に蹉過して終つて居る、況んやそれに對して又分別妄想を逞うする學人に於いては、到底野狐の見解を免れることは出來ぬ。

第十三則　德山托鉢

德山一日托鉢下堂見雪峰問者老漢鐘未鳴鼓未響托鉢向甚處去山便回方丈峰擧似巖頭頭云大小德山未會末後句山聞令侍者喚巖頭來問曰汝不肯老僧那巖頭密啓其意山乃休去明日陞座果與尋常不同巖頭至僧堂前拊掌大笑云且喜得老漢會末後句他後天下人不奈伊何

【和訓】　德山、一日托鉢して堂に下る。雪峰に者の老漢、鐘未だ鳴らず、鼓未だ響かざるに、托鉢して甚の處に向つてか去ると問はれて、山便ち方丈に回る。峰巖頭に擧似す、頭云く、大小の德山未だ末後の句を會せず。山聞いて侍者をして巖頭を喚び來らしめて問うて曰く汝老僧を肯はざるか。巖頭密かに其意を啓す、山乃ち休し去る。明日陞座す、果して尋常と同じからず、巖頭僧堂の前に至つて、掌を拊して大笑して云く、且喜すらくは老漢末後の句を會することを得たり、天下の人伊を奈何ともせじ。

〔講話〕『德山一日托鉢して堂に下る』德山は唐の武宗が佛教に對して大迫害を加へた時に非常に難儀をした人で、龍潭宗信の法を嗣ぎ、深く律藏に通じ性相の學を修め、殊に好んで金剛經を研究して、其姓の周氏である所から周金剛と稱せられた人である、行脚中に一婆子の爲に勘破せられたことは有名な話で、龍潭の外潙山靈祐和尚にも參じて大に得る處があつた、此の德山が或時托鉢即ち禪僧の食事に用ふる鉢の子を持つて、禪堂から下りて齋堂時ち食堂の方へ行かうとせられた、托鉢とは鉢を托し上げて持つことであるが、後に轉じて僧が鉢を持つて道を乞食する意味となつた、僧侶は佛道修行が目的であつて自ら食物を得ることが出來ぬから托鉢して食を乞うたものである、即ち僧侶には衆生敎化といふ大責任があるから、食を人に乞ふのは當然のことで毫も愧づべきではないけれども、今日の僧侶の樣に其の本務を盡さぬ者の托鉢は眞の乞食であるから誠に見苦しい、併し近來は慈善托鉢とか何とかいふ特別な目的のある場合の外、普通の僧侶は托鉢をやらぬ樣であ

るがこれは寧ろ喜ぶべきことである、個人的の托鉢は餘り奬勵すべきものではない、餘談に渉つたが此處に托鉢とあるのは今いふ様な行乞の意味ではなくて只鉢を托げることである『雪峯に者の老漢鐘未だ鳴らず皷未だ響かざるに托鉢して甚の處に向つてか去ると問はれて、山便ち方丈に囘る』徳山が鉢を托げて齋堂へ行かうとすると雪峯が之を見付けて、此の老耄れ爺、まだ齋時の鐘も太皷も鳴らぬのに鉢の子などを持ち出して何處へ行くつもりぢやと怒鳴つた、雪峯は徳山和尙の法嗣雪峯義存和尙のことで、この人は三到投子九至洞山といつて投子山へ三度、洞山へは九囘も拜登したといふ程、修行の爲には苦心をせられた人で、力倆も非常に勝れて居つたけれども尙ほ徳山の許にあつて飯頭というて食事係を務めて居つた、弟子の分際で師匠を捉へて此の老漢等といふのは世間の禮儀に外れて居る様であるけれども、佛事門頭に於いては佛もなく祖もない、一切平等であるから敢て怪むに足らぬ、徳山が托鉢して行つたのも只食事時であつたばかりではなく折にふれて座下の學人の力倆を點檢せんとする目的であつたかも知れぬ、それを見て取つて雪峯が修行といふ鐘が鳴らず證果といふ皷も響かぬ此の無事幸裡に向つて、つまらぬ之乎者也を容れぬが好いと眞向から抑へたのである、徳山は之を聞いて唯々諾々として自分の部屋へ戻つて行つた、剛に逢うては柔と



第十三則　徳山托鉢

いふ機用である、流石に永年修行した德山和尚であるから雪峯の打ち込む太刀先をスルリと拔けてカスリ瑕も受けぬ、方丈は維摩の居つた部屋が一丈四方であつた處から後世一山の主の居る部屋を一丈四方に造つて之を方丈と呼ぶ習はしになつた、それが轉じて今日では禪宗寺の住職のことを方丈といふ『峯巖頭に擧似す』巖頭は巖頭全豁和尚のことで、此の人も又德山の法を嗣いで、後洞庭湖畔に庵居して四來の雲衲を接化した大宗匠である、雪峯は德山を一喝したのが餘程得意であつたと見えて、早速法眷の巖頭に其の話をした、擧似は擧示と同じで語り示すこと、『巖曰く、大小の德山未だ末後の句を會せず』雪峯の話を聞いた巖頭はさすがの德山和尚もまだ末後の句を會得して居られぬと見えるといつた、大小はさすがの意、末後の句とは佛法のギリ〳〵結着のところを道破する語である、雪峯和尚お前がさういつたら何とか末後の句を示せばいゝのに、その儘方丈に歸るとは意氣地のない話ぢやと、巖頭も又佛に逢うて佛を殺すといふ機略を用ひた、『山聞いて侍者をして巖頭を喚び來らしめて問うて曰く、汝老僧を肯はざるか』德山が其の事を誰かから聞いて早速巖頭を呼び付けて、貧公は此の德山の接得振が氣に入らぬのかと訊ねた、これも強に遇うては弱といふ作略である、『巖頭密かに其の意を啓す』巖頭はソツと德山の耳に口をよせて自分の眞意を物語つた、

啓は拜啓の啓で申開くといふ意味である、サテ此の時巖頭は德山に何をいつたか、此處は參學の諸人の大いに參究を要する處である、或は芝居の耳打と同じで口を動かすばかりで何にも云はなかつたかも知れぬイヤ全く以心傳心の宗旨に何もいふべきことはない筈である、『山乃ち休し去る』德山も何を聞いたか其の儘ソウカ〳〵といふて許した、休し去るは其儘すましたといふ位の意味、德山も巖頭も同じ穴の狐であるから何をやるか外のものには解らぬ、『明日陞座す、果して尋常と同じからず』德山は其翌日說法の座に陞つて大衆を說得せられたが其の樣子がいつもとは違つて居つた、どう違つたかといふとは書いてないから分らぬが、兎に角巖頭の忠告が利き目があつたと見えて、餘程樣子が變つて居つたものと見える『巖頭僧堂の前に至つて掌を拊して大笑して曰く、且喜すらくは老漢末後の句を會することを得たり』巖頭はワザ〳〵禪堂の前へ行つて掌を拊つてカラ〳〵と大笑した、而していふには、且喜すらくは、喜ばしいことには德山方丈が末後の句を了解せられた、始めて方丈が悟を開かれたと、これはもう德山と內相談を定めてからの芝居であるから浮乎眞に受けると飛んだ目に逢ふぞ『他後天下の人伊を奈何ともせじ』サア德山方丈が末後の句を會した以上は鬼に金棒ぢや、どの樣な天下の豪傑がやつて來ても手も付られる譯ではない、巖頭はどうい

ふ譯でこの樣なことをいつたのか、一寸眞意を解し兼ねるが、此處に兎角の分別を加へると却つて的意を失する、或人が此の則を解して、德山の如き行持綿密な大宗匠が鐘もならず皷も響かぬのは齋堂へ出掛けて行つたのは慥かに耳が遠くなつて鐘の音を聞き損つたか或は頭の調子がどうかなつて居たので、雪峯に注意せられて引下つたが、巖頭は早くもそれと察して德山に召ばれたついでにそツと德山に耳うちして其のことを告げた、そこで德山も自分の頭に狂の來たのは餘命幾干もない證據であらうと悟つて、翌日の陞座には一世一代のつもりで全力を注いで本分を披瀝した、之を巖頭が一般學人に會得させる爲に僧堂前へ行つて上に述べた樣なことをいつたのであるというたが、傳燈錄の巖頭章には此の則に出で居る文句に續けて「然も是の如くなりと雖も只だ三年の活を得たりと、德山果して三年の後示寂す」とある處を見ると、此の說が正しい樣に思はれる、併しこれは聊か理窟に涉つた解釋であつて、之に執着すると却つて本分を失却するから、學人はよく〳〵注意して直に德山巖頭雪峯等が商量の的意を會すべきである。

無門曰、若是末後句、巖頭德山倶未夢見在。檢點將來、好似一棚傀儡。

【講訓】無門曰く、若し是れ末後の句なれば、巖頭德山、倶に夢にだも見ざること在らん。檢點し將ち來れば好し一棚の傀儡に似たり。

〔講話〕『若し是れ末後の句なれば』巖頭は德山が雪峯にやり込められて唯々として退いたのを見て、德山未だ末後の句を會せずというたが、眞に末後の句ならば會する會せぬの論量に涉るべきものではない、從つて『巖頭德山倶に夢にだも見ざることあらん』巖頭にも德山にも解る筈はない、夢にも見ることは出來ぬ、又之を巖頭が禪堂の前に且喜すらくは老漢末後の句を會することを得たりといふがそんなものを末後の句だと思ふ樣では二人共夢にも末後の句を會して居るとは思はれぬといふ意味に見ても可い、『檢點し將ち來れば好し一棚の傀儡に似たり』よく〳〵檢査をして見ると二人は一つ棚に並べた木偶人形である、土偶人形がよつて末後の句ぢやの何ぢやのと騷いで見た處が何の利益もない、併し木偶人形にも一つ〳〵變つた趣がある、德山にも巖頭にも又雪峯にも、それぞれ、一見識があつて一場の法戰を開いた、傀儡の芝居にも終始一貫の筋書がある、諸人者各自に其

の芝居の筋を會得するが可い。

頌曰識得最初句便會末後句末後與最初不是者一句

【和訓】頌に曰く、最初の句を識得すれば、便ち末後の句を會す。末後と最初と、是れ者の一句にあらず。

〔講話〕『最初の句を識得すれば』宇宙は一系の組織の下に整然として活動して居る、北極と南極とには必ず連絡があつて各箇獨立のものではない、一切藏經は最初から終まで脈絡貫通した意味がある、されば最初の一句を識得すれば『便ち末後の句を會す』である、これは末後といふ語があるからわざと最初といふ字を用ひて拈弄したまでのことで、古人は最初と末後とに分けたのが惡いとか何とか非難して居るが、それ程八釜しくいふにも及ぶまい、二つに分けたら分けたまゝに見て味つて置けば可いではないか、栴檀は二葉より香しといふが、草木の區別はそれが芽を出した時にチヤンと解る、花を見れば其の實を知ることが出來る本を知れば末が分る、帝釋の網羅堂に於ける珠の如く、一切萬法は叵互圓融したものであるから一を知れば他の一切が解るのである、『末後と最初と』併し一體最初にも末後にも一句等といふものは何處にもない『是れ者の一句にあらず』一切藏經の初から終まで讀破してもこれこそ者の一句であるといつて捉へるものはない筈ぢや、釋尊は四十九年一字不說といはれて居る程であるのに、何を捉へて末後の句といひ最初の句といふのかと此の頌では前の二句で扶起して後の二句で掃蕩して居る、白隱和尙は最初と末後とに分けたのをひどく貶斥して居るがマア其の樣に一概に貶し付けたものでもあるまい。

第十四則　南泉斬猫

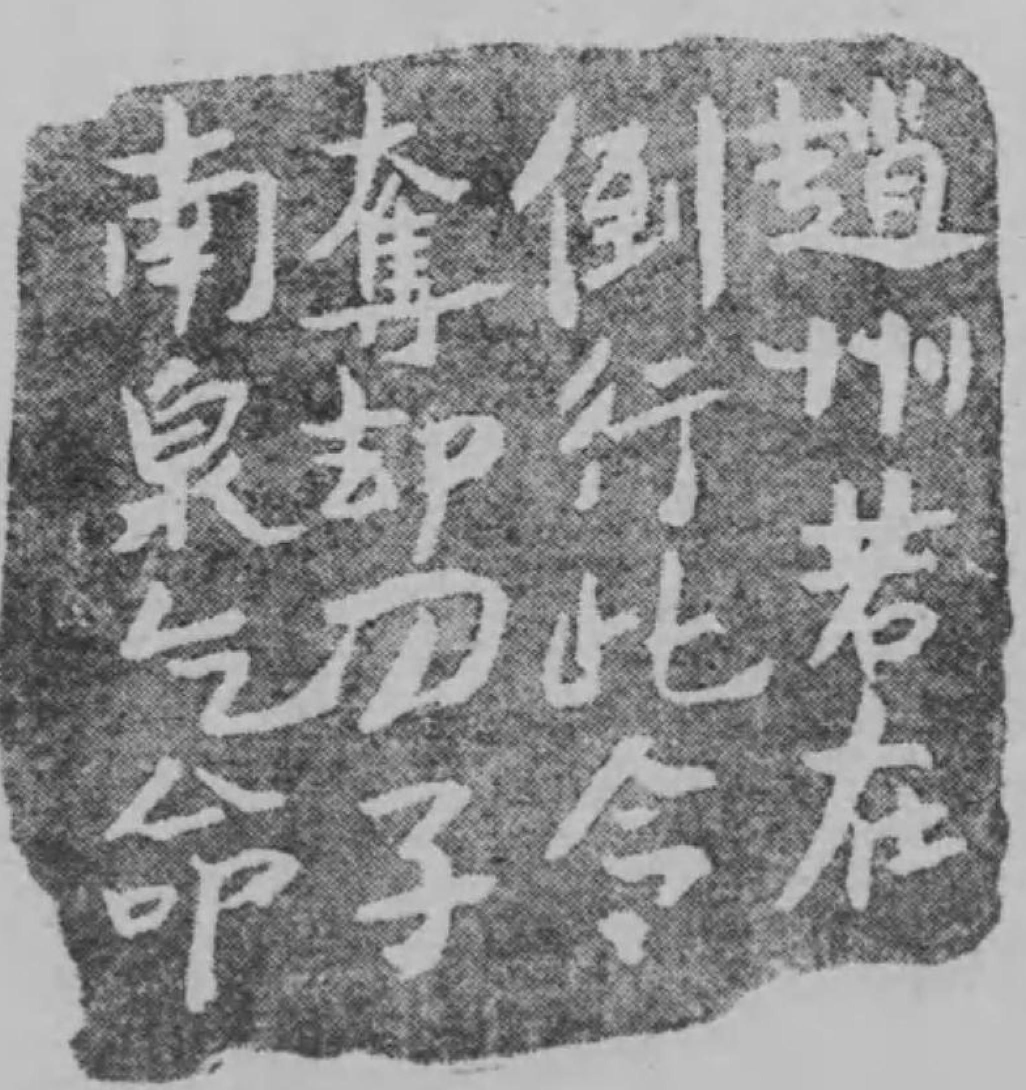
南泉和尚因東西兩堂爭猫兒泉乃提起云大衆道得卽救道不得卽斬却也衆無對泉遂斬之晩趙州外歸泉擧似州州乃脫履安頭上而出泉云適來子若在卽救得猫兒

【和訓】南泉和尚、因に東西の兩堂猫兒を爭ふ。泉乃ち提起して云く、大衆道ひ得ば卽ち救はん、道ひ得ずんば卽斬却せん。衆對無し。泉遂に之を斬る。晩に趙州外より歸る。泉、州に擧似す。州乃ち履を脫いで頭上に案じて出づ。泉云く、適來子ぢ若し在らば、卽ち猫兒を救ひ得ん。

〔講話〕『南泉和尚』南泉は池陽の南泉山普願和尚のことである、鄭州新鄭の人で、唐の至德二年大隗山の大慧和尚に依つて業を受け、後馬祖道一和尚に就いて參究大いに努め、遂に其の法を嗣いだ、唐の貞元十一年池陽に南泉山を草創して四來の雲衲霞袂を接化した、其の門下からは趙州從諗、長沙景岑等頗る多くの龍象を打出して『因に東西の兩堂猫兒を爭ふ』南泉山の僧堂で東の寮のものと西の寮のものとが一匹の猫に就いて種々と爭論をして居つた、狗子佛性の話と同じ樣に猫に佛性のある無しを議論して居つたのであらうともいひ、只其の猫の所有權を爭つて居たのであるともいひ、又此の猫は鼠をよく捕るか捕らぬか、雄であるか雌であるかを論じて居るのであるともいひ、古來種々に議論があるが、そんなことはいづれでも可い、兎に角猫が兩堂の雲衲の間に問題になつて居つたのである『泉乃ち提起して曰く、大衆道ひ得ば卽ち救はん、道ひ得ずんば卽ち斬却せん』そこへ住持の普願和尚が來てイキナリ猫の首ツ玉を摑んでさし上げて、サア大衆一同の中で誰でも向上の那一句、猫兒の本性本面目を道破し得るものがあれば此の猫が助かるが、道ひ得るものがなければ斬つて捨てるがサアどうぢやと鋭い質問を起した、實は南泉和尚大衆一同の首を一刀に擬して、サア道ひ得るかどうぢや、道ひ得なければ一と突きぢやぞといふ勢を示したのである、眞に末後の一句はこれ程せツぱ詰まつた場合でなくては道破し得られるものではない、道ひ得れば可憐な

る猫の命を助けることが出來、道ひ得なければ師匠南泉をして殺生戒を犯さしめるとになるから、大衆一同も一生懸命でなければならぬ、然るに『衆對無し』一同はいくら頭を捻つても適當な返答が出ぬと見えてウンともスンともいはずに目ばかりパチクリさせて居る、覿面に露呈せられては餘程力倆を具した英靈の漢でも一寸應對に惑ふものである、『泉遂に之を斬る』大衆一同が燒物の巾着の樣に口を開いたまゝ何とも云はぬので南泉和尚エイと一聲掛けると共に一刀兩斷に猫兒を斬つて退けた、實に涙を振つて馬稷を斬る南泉の苦衷察すべきである、併し學人をして徹底本分の事を會せしめるにはこれ位の根本的治療を加へねばならね、これで一切妄想の窠窟を斬り拂つた譯であるけれども、大衆中幾人か能く南泉の的意を了得したであらうか『晚に趙州外より歸る』南泉門下に其の人ありと知られた趙州從諗和尚が晚方になつて外から歸つて來た、こゝに趙州とあるけれども此の時はまだ趙州觀音院に住して居つたのではない、後世傳を書く人が書いたから、斯なつて居るのである、祖錄には往々斯樣な例があるから多少でも史的詮索をする場合にはよく注意して見るべきである、『泉、州に擧似す』南泉は趙州が歸つて來ると早速其の日の出來事を物語つた。他の學人達が大勢居ても一句を道ひ得るものが無かつたので口惜しくてならなかつた處へ高足の趙州が歸





つたから趙州ならば滿足な答話をしてくれるであらうと樂にして話をしたものであらう、師資の間柄の親しさがよく現れて居る『州乃ち履を脱いで頭上に安じて出づ』趙州は南泉の話を聞くと何とも言はずに、穿いて居た草履を脱いで頭の上へのせてサッサと其處を出て行つた、實に思量分別を絕した答話である、有とか無とか、何とか一言いへば忽ち無瑕の寶珠に瑕を着ける、口を緘して言はねばまた空無の見に墮するのみならず、折角慈師の懇囑に背く譯である、其處で趙州は沒蹤跡斷消息の一着を下したのである、趙州の的意會せんと欲すれば須らく參三十年なるべしである『泉曰く適來子ち若し在らば即ち猫兒を救ひ得ん』南泉は此の作略を見て始めて滿足して云つた、適來即ち先刻拿公が此の場に居つたならば猫兒を斬らずに濟んだものを、實に猫兒に取つては氣の毒なことであつたと嘆じた、これ趙州に對する印可證明の語である、一體此の則は難透難解を以つて有名であるが、一方又斬猫といふ行爲に對して是非の論が外門漢の間にある樣である、即ち斬猫は殺生戒といふ佛戒を犯したものであるといふのであるが、これは實に取るに足らぬ議論である、今玆で戒のことを詳しく說く餘裕はないが要するに南泉の斬猫は小の蟲を殺して大の蟲を助けたものであつて此の事は戒法の上でも或程度までは許されて居る、殺生戒というても絕對に殺生戒を犯さぬといふことは有り得べからざることで、一杯の水の中にも無數の生物が居り、一莖の野菜でもこれ生命あるものであるから、吾等が物を喰はずに生きて居る法が發明されぬ限り殺生戒は相對上の問題である、況んや一猫兒の生命によつて南泉座下幾十百の惠命を相續することが出來たといふ點からいへば殺生戒等は此の際全く問題ではない。

無門曰且道趙州頂草鞋意作麼生若向者裏下得一轉語便見南泉令不虛行其或未然險

【和訓】 無門曰く、且らく道へ、趙州草鞋を頂く意作麼生。若し者裏に向つて一轉語を下し得ば、便ち南泉の令虛りに行ぜざることを見ん。其れ或は未だ然らずんば、險。

〔講話〕『且らく道へ趙州草鞋を頂く意作麼生』且らく道へは前を抑へて後を起す語である、こゝでは本則の言句を抑へたのである、それは兎も角趙州が草鞋を頂いて出で去つた本意は如何であらう、これが實に千古の大問題である、此の一事を會せんが爲に古來參學の徒は一方ならず苦心を重ねて居る『若し者裏に向つて一轉語を下し得ば』サテ趙州頂草鞋去の端的に對して何とか適切な一轉語

を下し得るものがあつたならば『便ち南泉の令虛りに行ぜざることを見ん』其の者こそは南泉は正令を虛りに行ずる人ではないといふことを知るであらう、正令を行ずるこは猫兒を斬るといふが如き最も非常の手段を取るをいふ、非常というても變則の意味ではない、奧の手、根本の法令といふ程の義である、國王が最も重要な法令を下すには最も愼重にする、これ一度發すれば容易に改めるべきものでないからである、南泉斬猫の一事又それであつて、其の端的を會得するものにして始めて南泉が如何に愼重に此の正令を行じたかを知ることが出來る『其れ或は未だ然らずんば險』若し一轉語を下すことが出來ねばそれこそ猫ばかりではなく南泉座下の大衆を始め滿天下のもの悉く南泉の惡辣な一刀の下に生命を斷たれねばならぬ、實に危險千萬であると評した。

頌曰趙州若在倒行此令奪却刀子南泉乞命

【和訓】 頌に曰く、趙州若し在らば、倒に此の令を行ぜん。刀子を奪却せば、南泉も命を乞はん。

〔講話〕『趙州若し在らば』趙州が若し猫兒を爭ふ場所に居合はせたならばといふ意、一體此の頌は明快にして頗る要領を得た出來であるから別に解釋するに及ばぬ位である、『倒に此の令を行ぜん』南泉があの際には大衆に向つて斬猫といふ惡辣な手腕を振はれたが、趙州が居合せたら反對に南泉に向つて本分の正令を行じたであらう、『刀子を奪却せば』南泉の持つて居つた刀を奪ひ取つたならば、『南泉も命を乞はん』流石の南泉も趙州の前に甲を脫いで降參することであらうといふが前二句と後二句とは同じことを繰り返した樣な趣があるが前二句では趙州の方から頌し後二句は南泉の手許から頌むしてある、一つの景色を右からも左からも寫し出したのである、刀を奪却するとは所謂賓主其の位を換へることで、南泉が大衆を相手に正令を行じて居る時は南泉は主位に立つて絕對的支配權を握つて居つた、若し大衆の中に代つて主位に立ち得る力倆あるものがあれば直ちに之に位を讓つて其の正令を行ぜしめようとしたけれども、可惜乎其の分あるものが居なかつたので南泉の殺人刀は拔き放しになつて居つたのである、然るに趙州が歸つて南泉の話を聞くや自ら敢然として主位に立つて南泉に向つて正令を行じた、南泉斬猫丈では公案が完全に圓成したとはいはれぬが、趙州が主位に立つて始めて賓主互換の機用が現前して活人劍の機用が現れたのである。

第十五則　洞山三頓

雲門因洞山參次門問曰近離甚處山云查渡門曰夏在甚處山云湖南報慈門曰幾時離彼山云八月二十五門曰放汝三頓棒山至明日却上問訊昨日蒙和尚放三頓棒不知過在甚麼處門曰飯袋子江西湖南便恁麼去山於此大悟

【和訓】雲門因に洞山參する次で、門問うて曰く、近離甚れの處ぞ。山云く、查渡。門曰く夏、甚れの處にか在りし。山曰く、湖南の報慈。門曰く、幾く時か彼を離る、山曰く。八月二十五。門曰く、汝に三頓の棒を許す、山明日に至つて却つて上つて問訊す。昨日和尚三頓の棒を放すことを蒙る。知らず過甚麼の處にか在る。門曰く、飯袋子、江西湖南便ち恁麼にし去るか。山此に於いて大悟す。

〔講話〕『雲門因に洞山に參する次で』雲門は雲峰義存の法嗣で名を文偃といふ、初め空王寺志澄律師に就いて戒法を學び又敎相を明めたが、後ち睦州道蹤和尙に謁して禪に參じ、更に雪峰に就いて遂に其の法を嗣いだ、初めて睦州に參ずる時、州は門を鎖ぢて雲門を入れなかつたので三度其の門に到つて相見を乞うた、三度目に睦州が少し門を開いて顏を出したので雲門はこゝぞとばかり其の門を押し開いて內に入らうとした、すると睦州は中から力一杯に押し戾して扉を鎖ぢた爲に雲門は足を挾まれて苦痛に耐へ兼ねて思はず叫んだ、而して其の一聲の下に豁然として省悟したといふことである、此の睦州といふ人は頗る親孝行な人で常に忠實かに一人の母に侍いて居つたが寺の三寶物を以つて俗緣の母を養ふことは道でないといふので、自ら草鞋を造つてそれで得た資を以つて母を養つたと傳へられて居る、併し學人に接する手段は頗る俊烈で、誰が來ても必ず一度や二度は門の外へしめ出しを喰したものである、雲門を三度目に押し出した時には、箇の秦時の鍍鑠鑽といつた、鍍鑠鑽は釘のことで秦の始皇帝が阿房宮を建てる時に用ひた釘は頗る大きなもので平生は何の役にも立たぬ處から日本でいへば此の穀潰し奴といふ樣な場合に秦時の鍍鑠鑽といふ、斯樣な辛辣な機

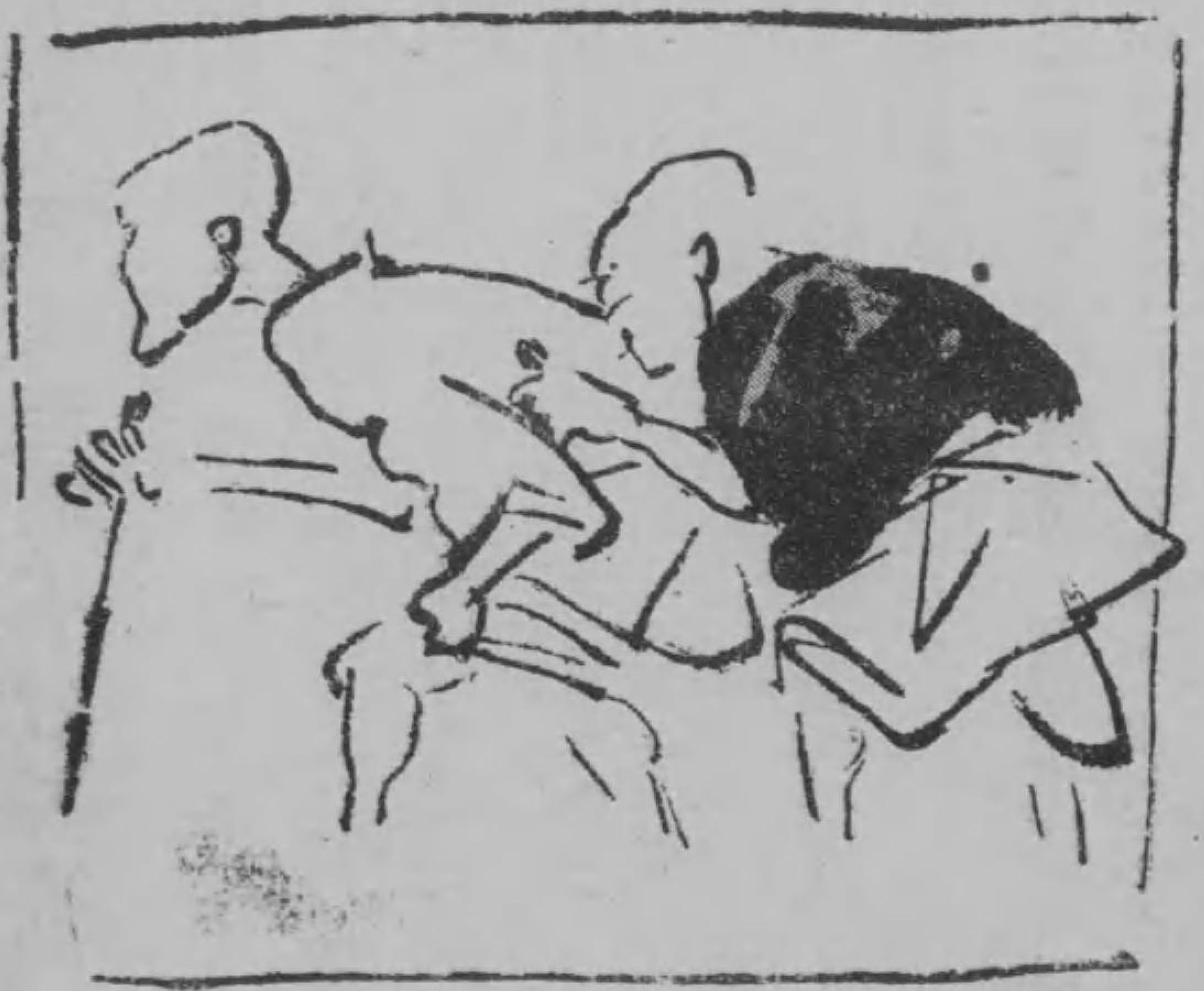
用のある師家に就いたのであるが雲門の家風は至極穏かで、且つ叮嚀であつた、雲門は生知といつて生れながらにして知見の秀れた人であつたといふが、加ふるに睦州や雪峰の接得によつて一層禪門の玄旨に通じ、後に雲門宗の一派を開創するに到つた、洞山は支那曹洞宗の開祖たる洞山悟本大師のことではなく、雲門の法を嗣いだ洞山守初和尚のことである、洞山守初が雲門に參じた時、『門問うて曰く、近離甚れの處ぞ』雲門が洞山に問うていふには、近頃まで何處に居たのかこれは初相見の時には大概定つて出る問であるか禪門の初相見に於ける此の語は又別段の趣がある、『山云く、査渡』洞山は別に雲門の問を難しく考へずに査渡に居りましたと只普通の應對をした、慭じ理窟をこねぬのも却つて可いかも知れぬ『門曰く、夏、甚れの處にか在りし』雲門は第二矢を發して、此の一夏どこに安居して居つたかと問うた、印度では夏になると雨季というて毎日雨ばかり降つて居る、殊に其の頃は毒蟲が多くて外出が危險であるから、修行者等も行乞や布教を止めて一夏九十日の間一所に集つて坐禪をしたり經論の研究をしたりする、それが支那にも日本にも傳はつて夏安居、江湖會等と稱して今にも行はれて居る『山曰く、湖南の報慈』洞山は又正直に此年の夏安居には湖南の報恩寺に居りましたと答へた『門曰く、幾時か彼を離る』何時向ふを出發して來たのか、『山曰く

八月二十五』八月二十五日に出掛けました、極めてアツサリした問答である、少しも滯りなく應對して行く處を見ると洞山もこれまで餘程修行をして來たものと見える、そんなありふれた問答なら誰れでも滯なく出來ると思ふが、當時の禪僧と禪僧との初相見はお互に脚下を探り合つたものであるから却々浮乎したことは言はれぬ、洞山の樣に易々と間に髮を容れず答へて退けるといふことは、尋常のものでは一寸出來ぬ藝當である『門曰く、汝に三頓の棒を放す』こゝへ來て一寸雲門の問振が變つた、これまでの小手調べで大槪洞山の力倆が解つたから、ソロ／＼奥の手を出し始めたのである、三頓の棒とは一頓が二十であるから六十棒に當る尊公には六十棒を喫せしむべきであるけれとも今日は放して置かうといふ、何の罪で六十棒を喫するのか、こゝが學人の目の着け所である、つまり洞山が巧に應對して聊か鼻孔遼天の樣子が見えたので一寸抑へて其の參究を促したものと見て置くが可い『山明日に到つて却つて上つて問訊す』洞山も雲門和尚の最後の語が胸に答へたので其の晩は大いに工夫したものと見える、翌朝になると早速雲門の前へ出て問訊した『昨日和尚に三頓の棒を放すことを蒙る、知らず過甚麽の處にか在る』前日の初相見で自分は隨分巧く應對をしたつもりであるのに、和尚は三頓の棒を喫せしむべきであるが今日は放して置くといはれた

が、一體自分に如何なる罪過があるであらうかといふ問である、雲門の見抜いた通り矢張洞山は我慢の角を生じて居るのみならず、三頓の棒といふ語に執り着いて居る『門曰く、飯袋子、江西湖南便廢にし去る』飯袋子此の大飯喰ひ奴といふ樣な意味で、江西や湖南を歩き廻つてもまだその樣な境界にウロついて居るのか、此の穀潰し奴と眞向から一時に三頓の棒を下した、『山此に於いて大悟す』洞山は此の言下に大悟徹底した、從來身中に漲つて居つた惡毒が一時に奇麗サツパリと下つて終つた、修行功勳を充分に積んでもまだ其の修行の粕が留つて居つてはならぬからそれを洗ひ去らんとしたのが雲門の惡罵である、禪の師家は時とすると聞くに堪へぬ痛罵を浴せることがある、斯樣な場合には却つて徹悃の慈悲が流露したものであつて、學人はそれに對して有難く思ふべきである。

無門曰雲門當時便與本分草料使洞山別有生機一路家門不致寂寥一夜在是非海裏著到直待天明再來又與他注破洞山直下悟去未是性燥且問諸人洞山三頓棒合喫不合

獅子教兒迷
子訣
擬前跳躑早
翻身
無端再敘當
頭着
前箭猶輕後
箭深



喫若道合喫草木叢林皆合喫棒若道不合喫雲門又成誑語向者裏明得方與洞山出一口氣

【和訓】無門曰く、雲門當時便ち本分の草料を與へて、洞山をして別に生機の一路あらしめば、家門寂寥を致さず。一夜是非海裏に在つて、著到して、直に天明を待つて再來すれば、又他の爲めに注破す。洞山直下に悟り去るも、未だ是れ性燥ならず。且らく諸人に問ふ、洞山三頓の棒を喫す合きか喫す合からざるか、若し喫す合しと道はゞ、草木叢林皆な棒を喫す合し。若し喫す合からずと道はゞ、雲門又誑語を成す。者裏に向つて明め得ば、方に洞山と與に一口の氣を出さん。

〔講話〕『雲門當時便ち本分の草料を與へて洞山をして別に生機の一路あらしめば宗門寂寥を致さず』本分とは本來其の人に適當な分量の義、草料は馬に食はせる食物即ち飼料のこと、生機は生きかへる即ち復活すること、雲門和尚が本來持ち前の一手を與へて洞山をして飯袋子江西湖南便ち恁麼にし去るといふ言下に豁然として復活せしめたから＝あらしめばといふは、こゝではあらしめたからの意＝雲門の宗風は一層榮えて寂寥ではなかつた、併し『一夜是非海裏に在つて著到して』洞山は汝に三頓の棒を放すといふ一語を聞いて其晩徹夜して斯であらうか彼であらうかと雲門の意中を忖度して是非善惡の分別海中に漂つて遂に行き詰つて終つた『直に天明を待つて再來すれば又他の爲に注破す』夜が明けるのを待つて直ちに雲門の處へ行つて三頓の棒を喫する理由を訊ねた處が、雲門は再び「此の穀潰しめ、江西湖南をまごまごして歩いてもまだ悟れぬのか」と眞向から抑へ付けた、此の時直ちに洞山は大悟したといふが、斯なつてから悟つた處がもう怜悧敏捷な漢といふとは出來ぬ、雲門に初相見の刹那に於いて未だ一語を發せざるに大悟徹底する樣でなくてはならぬ、性燥は活潑怜悧なことをいふ『且らく諸人に問ふ、洞山三頓の棒を喫すべきか喫す合からざるか』無門自ら參學の諸人者に相談するが、此の時洞山は三頓の棒を喫したものであらうか或は又喫せなかつたものであらうか、三頓の棒を喫するとは此處では迷つて居る證據とも見るべきである『若し喫す合しと道はゞ草木國土皆棒を喫すべし』若し洞山が迷つて居る六十棒を喫する罪があるとすれば豈洞山のみならんや、山河大地草木國土の一として迷はぬものはない、把住の方面からいへば一切

萬法悉く迷の塊である、併し『若し喫す合からずと道はゞ雲門又誑語を成す』若し喫せしむべきではない、洞山又本來成佛底の人であるといふならば雲門が洞山に三頓の棒を放すといつたのはこれ天下の人を誑かすといふものであつて、實に師家の風上にも置くべきではない、『者裏に向つて明め得ば、方に洞山と與に一口の氣を出さん』サテ喫すべきか喫すべからざるか、喫したならば斯、喫せぬならば何と明に這裏の眞面目を道破し得るものがあれば、それこそ洞山と共に復活することが出來る、卽ち大悟徹底することが出來る、洞山とも雲門とも、釋迦とも達磨とも、同じ口で呼吸をするといふ樣な親しい中となることが出來やう。

頌曰獅子敎兒迷子訣擬前跳躑早飜身無端再叙當頭著前箭猶輕後箭深

【和訓】 獅子兒を敎ゆ迷子の訣、前まんと擬して跳躑して早く飜身す。端無く再び叙ぶ當頭著、前箭は猶ほ輕く後箭は深し。

〔講話〕 『獅子兒を敎ゆ迷兒の訣』獅子は其の兒を谷底へ突き落して迷ひ兒にして其の勇氣を養ふといふが、雲門が洞山に對して汝に三頓の棒を放すといふ難題をいひかけて洞山をして思量分別せしめたのは恰も之に類して居る、古來の祖師は皆學人を接するに此の手段を用ひられた、德山の棒臨濟の喝、いづれも皆學人を萬仭の崖下に突き落して其の力倆を鍊磨せしむる手段に外ならぬのである『前まんと擬して跳躑して早く飜身す』洞山は雲門の爲に突き落されて勇氣を奮ひ起し、大悟徹底の境界に進まんと一旦跳躑つて退いたが、忽ち身を飜へして翌朝問端を起して雲門に迫つた、實に勇しい勢である、勇將の下に弱卒なしで、流石に雲門座下の俊才である、『端無く再び叙ぶ當頭著』端無くは圖らずもといふ意味で、洞山が非常な勢で雲門に迫つた處が、意外にも又雲門は頭から飯袋子云々というて抑へ付けた、洞山の方からいへば所謂當頭著で行き詰つて終つたのである、『前箭は猶ほ輕く後箭は深し』最初に「汝に三頓の棒を放す」と雲門のいうたのは前箭であつて、それは極めて淺傷であつたが「飯袋子江西湖南便ち恁麼にし去る」というたのは後箭であるが、これが頗る强くて洞山に取つては全く致命傷であつた、洞山はこゝで當頭著と大死一番したが忽ち飜身して見事に再活現成したのである、雲門が學人接得の委曲叮嚀なる、洞山が道の爲に精進努力して不屈不撓なる、全く禪門古今の範といふべきであるといふ意味を頌したのである。

第十六則　鐘聲七條

雲門曰世界恁麽廣闊因甚向鐘聲裏披七條

【和訓】　雲門曰く、世界恁麽に廣闊たり。甚に因つてか、鐘聲裏に向つて七條を披る。

〔講話〕『雲門曰く、世界恁麽に廣闊たり』これは雲門文偃和尙の垂示である、語は頗る簡單であるけれども意味は甚だ深長である、雲門和尙は學人を接するに叮嚀懇切であると共に又時には頗る奇想天外といふ樣な作略を用ひられた、此の則の如きは其の好適例である、世界は實に廣漠として限なく濶い、西へ行かうと東へ行かうと自由自在である、それと同時に時間は無限に連續して居る、何時何を爲ようと人々の心の儘である、然るに『甚に向つてか鐘聲裏に向つて七條を披る』何いふ譯で鐘がなると大勢の坊さん達は同じ樣に七條の袈裟を掛けて法堂に出掛けるのかといふ問である、印度では昔から五條七條九條の三種の袈裟を身に纒うたものである、それが支那へも傳はり日本へも傳はつて現今でも一般に僧侶は袈裟を掛けるが其の態裁は印度のものと大いに違つて居る、印度では裸體で五條を腰に卷き七條を上に掛け、外出の時は九條を其の上に掛けたものであるといふが支那では日本と同じ樣に衣を着て、其の上に法要等の時は多くは七條を掛ける、併しこの公案には別に袈裟の事等は用事はない、吾々は時間的にも空間的にも無限に廣い世界に住しながら何故鐘が鳴るとそれに束縛せられて袈裟を掛けてのこのこ出頭するのか、鐘鳴れば法堂、鮑響けば齋堂、汽笛が鳴れば職工が出掛ける、午砲が鳴れば下女は午飯の支度をする、一體是は何の理由であらうか、分り切つた樣で分らぬ、分らぬ樣で分り切つたことである、參學の諸人者何と此の道理を會得したか、妄想分別では到底解らぬ、須らく實參實究して始めて得べしである。

無門曰大凡參禪學道切忌隨聲逐色縱使聞聲悟道見色明心也是尋常殊不知衲僧家騎聲蓋色頭々上明著々上妙然雖如是且道聲來耳畔耳往聲邊直饒響寂双忘到此如何話

會若將レ耳聽應レ難レ會眼處聞レ聲方始親

【和訓】無門曰く、大凡そ參禪學道は、切に忌む聲に隨ひ色を逐ふことを。縱使ひ聞聲悟道見色明心なるも也た是れ尋常なり。殊に知らず、衲僧家聲に騎り色を蓋ひ、頭々上に明に、著々上に妙なることを。然も是の如くなりと雖も、且らく道へ、聲、耳畔に來るか、耳、聲邊に往くか。直饒ひ響寂双び亡するも、此に到つて如何んか話會せん。若し耳を將つて聽かば會し難かる應し。眼處に聲を聞いて、方に始めて親し。

〔講話〕『大凡參禪學道は切に忌む聲に隨ひ色を逐ふことを』この評は却々面白く出來て居るが、併し聊か理窟に落ちた弊がないでもない、古人の中には隨分手酷く貶して居る人もある、參禪學道でなくても世渡りをする上に於いては、聲を聞いてそれに心を奪はれたり、色を見て愛着の心を起したりするのは宜しくない、殊に若いものは兎角聲色に迷ひ易いものであるから大に注意せねばならぬ『縱使ひ聞聲悟道見色明心なるも也た是れ尋常なり』縱使香嚴和尚の樣に擊竹の音を聞いて悟り、靈雲和尚の樣に桃花の色を見て心を明むるといふ實例があつても、それは別段賞讃する程のことで



なく、尋常一様の所謂衲僧家の茶飯事である、『殊に知らず衲僧家聲に騎り色を蓋ひ、頭々上に明に著々上に妙なることを』更に一歩進んで考へて見るに衲僧家卽ち實參實究底の境界に住する人は聲に引張り廻はされるのではなくて聲を自由に騎りこなし、色の爲に心眼を蓋ひ昧まされずして色を自由に見分ける、されば一切の物の上に於いて明かに其の眞相を辨識し、又一切の事を自由自在に處理する妙用を以つて居る、然るに世間一般の人は、かゝる明智妙用なることを知らずして聲に隨ひ色を逐ふことを人間の常態と考へて、稀に香嚴や靈雲の如き人があれば、それを奇蹟の樣に珍しがる、『然も是の如くなりと雖も、且らく道へ聲耳畔に來るか、耳聲邊に往くか』それは兎も角として、吾々が物の音を聞く時には聲が向ふから耳の畔へ來るのか、或は耳がこちらから聲の方へ行くのか、此處一番研究を要する處である、これは楞嚴經に出て居る話で、佛が大勢の弟子達と祇園精舍に居られた時に鐘の音が聞えた、佛はそれを聞いて、阿難よあれは鐘の音が向ふから來て耳に入るのか或は耳が向ふへ行つて鐘の音を聞くのかと問はれたことがある、古人が之に注を加へて次の如く言つて居る、耳が聲の方へ行くならば同時に二つ以上の異つた音を聞いた場合はどういふ譯であるか、マサカ兩方へ行くといふ道理もあるまい、又聲が耳の方へ來るものとすれば一人が聞くべきであつて大勢に同じ樣に聞える筈はない、然らば一體どういふ譯のものであるか、これは畢竟一妙性の顯現するのであるといふのである、一妙性といふは靈妙不可思議なる心の本體のことで、吾々が音を聞くのはそれが現はれたのであつて向ふから來るでもこちらから行くでもない、然らば其の心の本體の働とは如何と問はゞ曰く言ひ難しと答へる外はない、「鐘が鳴るかや撞木が鳴るか、鐘と撞木の間がなる」といふ俗謠があるが、全く鐘と撞木の間がなる道理は到底說明や理窟で解るものではない、『直饒ひ響寂双び亡ずるも此に到つて如何か話會せん』たとひ響と寂とを二つながら亡じて終ふ、まだ聲とか耳とかいふものに執着して居つては、此處の道理を會得する事は出來ぬ、

此處の道理とは何ぞや、鐘聲に應じて七條を披る底の道理、聲に騎り色を蓋ひ、頭々上に明に著々上に妙なる消息である、『若し耳を以つて聽かば會し難かるべし、眼處に聲を聞いて方に始めて親し』

此の句が頗る面白い、耳を以つて聲を聞く中は眞に聲色の繫縛を脫することは出來ぬ、眼で音を聞き耳で色を見る、此處に於いて始めて親しく聲色の眞面目を會することが出來るのである、眼處に聲を聞くとは作麼生、曰く眼を閉ぢ聲を停め、耳を塞ぎ、色を消し、一切を絕して始めて得べしである。

頌曰會則事同一家不レ會萬別千差不レ會事同一家會則萬別千差

【和訓】頌に曰く、會するときは卽ち事同一家、會せざるときは萬別千差。會せざるときは事同一家、會するときは卽ち萬別千差。

〔講話〕『會する時は則ち事同一家』差別卽平等、現象卽實在の道理を會得すれば山も河も草も木も同一本體の假相であり、善惡も是非も正邪も得失も凡て萬事萬端悉く同一家である。『會せざる時は萬別千差』然るに此の萬物の差別相の底には一貫した眞理が横はつて居つて一切が離るべからざる關係の下にあるといふ道理が分らぬ時は、事々物々が恰も珠數の絲の斷れたるが如くバラ〳〵になつて終ふ、而し此處に會する會せぬといふのは一方が正しくて他方が誤つて居るといふのではない、萬有の上には平等の方面と差別の方面とがあつて、時と場合とによつて平等に卽するか差別に卽するか其宜しきに從うべきである、而かも其の差別は平等を離れた差別でなく、其平等は差別を離れた平等ではない、而して又『會せざる時は事同一家』といふ道理もある、これ會不會は正邪是非の問題ではないからである、此の立場からすれば『會する時は萬別千差』の道理もある譯である、今一應此の四句を二句づつ一對にして解り易く解釋すれば、上の二句は差別の相に執着して平等の方面を閑却するもの、弊を指摘したのであつて、宇宙の眞理を會得すれば萬有は事同一家卽ち平等なるものであるが、凡夫は迷ふが故に之を萬別千差と見るのであるといひ、後の二句は平等に偏して差別あるを忘れるもの、爲に、會せざるが故に惡平等に墮ちて悟も迷も味噌も糞も一つにして終ふが、會して見れば平等の中にもチヤンと差別の存在することが解るといふのである、斯樣に理窟的に解釋することは我が禪門では最も忌む處であるけれども、已に講話といふ上は出來得る限り拖泥帶水して一般門外の人の爲にかく注釋した譯である。而しこれを以つて直ちに無門の的意を會することが出來た等と思うてはならぬ、平等卽差別、差別卽平等の端的に至つては全く實參實究によつて直下に會得する外はない、此の頌は本則とは甚だ緣遠い殆ど無關係の樣に思はれるが、それは文字の表面でのことで、本則の的意、頌の眞面目を會得して見れば其處に靈犀一點相通ずるものなることが解るであらう、聊か文字を弄して見ようならば、世界の廣闊たるはこれ平等の當相であり、鐘聲裏に七條を披るはこれ差別の現象である、差別中に平等あり平等中に差別あることを雲門は一

句を以つて道破して居るのであると見ることが出來る、併し予が斯の如き閑言句を弄して佛祖の面に泥を塗つた罪は實に萬死に價するものである、慚愧慚愧。

第十七則　國師三喚

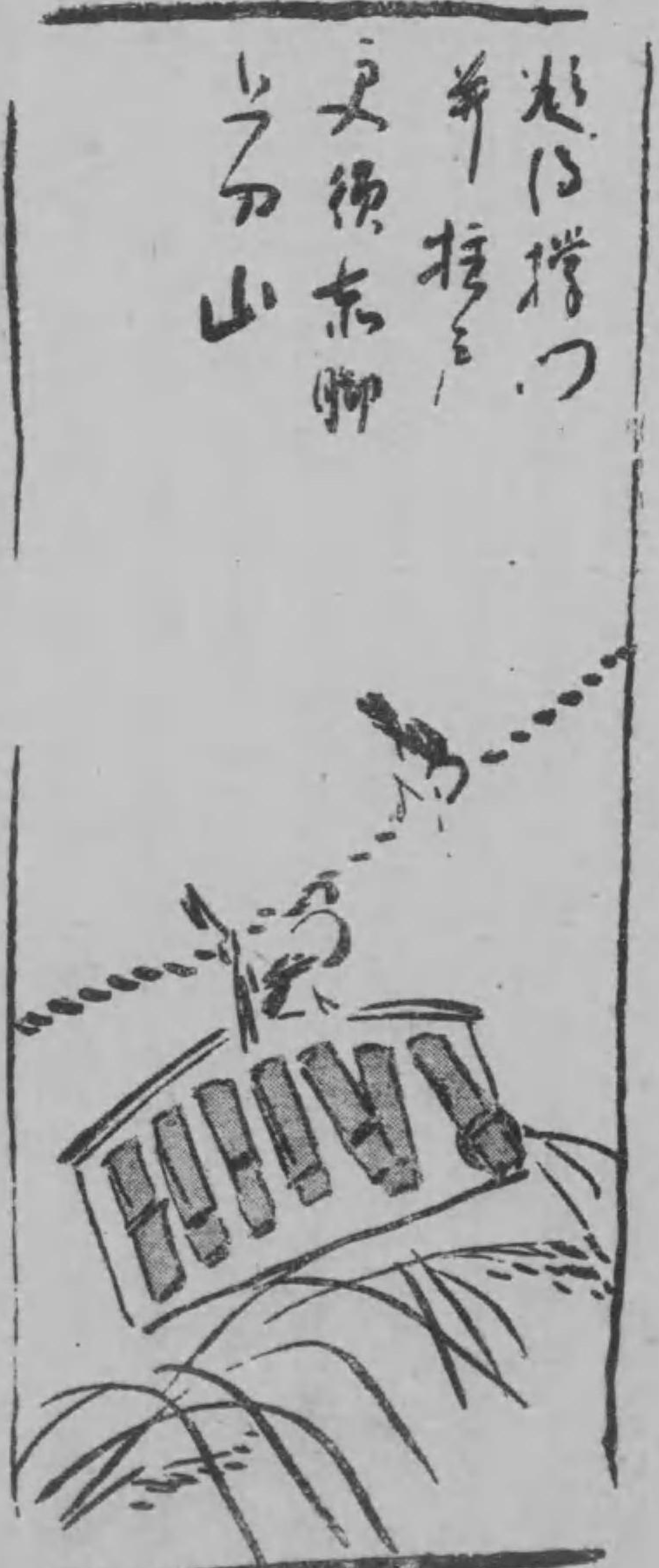
國師三喚侍者、侍者三應、國師云將謂吾辜負汝、元來却是汝辜負吾

【和訓】國師三たび侍者を喚び、侍者三たび應ず。國師云く、將に謂へり、吾、汝に辜負すと。元來却つて是れ汝、吾に辜負す。

〔講話〕『國師』は南陽の慧忠國師をいふ、大師は弘法に取られ太閤は秀吉に取られたといふ格で、我が禪門では國師といへば先づ此慧忠國師を指すものとなつて居る、國師は六祖曹溪慧能和尚の法を嗣いだ人で、南陽白崖山黨子谷に住んで四十年山を出でなかつたが、其の高風は都へ聞えて遂に唐の肅宗の詔勅を蒙つて聖旨默し難く、都に上つて肅宗代宗の爲に師となつた、和向は名目丈の國師ではなくして、眞實の國師であつたから、其の名が廣く傳つたのである、『三たび侍者を喚び、侍者三

たび應ず』侍者の名は耽源というた、國師が侍者を三度喚ばれると侍者も根よく三度返事をした、喚べば應ずる叩けば響く、これは現象有りの儘の働で別に不思議なことはない、併し不思議でない處に不思議な道理がある、さればこの樣なありふれたことが禪門では大問題になつて居る『國師曰く、將に謂へり吾汝に辜負すと、元來却つて是れ汝吾に辜負す』元來法には名の名とすべきは無い、耽源といふも實名にあらず、侍者といふも假名である、それを鹿爪らしく喚んだ國師は已に國師に負いて居る、國師の眞面目に蹉過して居る、それを國師も將に謂へり吾れ汝に辜負すといつた、衲がお前の眞面目に負いて居つたと思つたのに、元來却つて是れ汝吾に辜負す、衲に喚ばれてハイと答へたお前の方が却つて衲に辜負して居るのであつた、喚んだ處の名が已に實名ではない、それを相手にして返事をするといふのは已に衲といふ一物を誤つて認めて居るのである、國師も侍者も元來實相はない、喚ぶのも誤なれば應ずるのも誤である、二人は互に本性に辜負し合つて居るのである、併し辜負して居るのは國師と侍者ばかりではない、書を讀むものは書に辜負して提唱を聞くものは提唱の聲に辜負して居る、一切萬有が一切萬有に辜負して居るのである。

無門曰國師三喚舌頭墮地侍者三應和光吐出國師年老心孤



按牛頭喫草侍者未肯承當美食不中飽人飡且道那裏是他辜負處國淸才子貴家富小兒驕

【和訓】無門曰く、國師三喚、舌頭地に墮つ、侍者三應、光に和して吐出す。國師年老い心孤にして、牛頭を按じて草を喫せしむ。侍者未だ肯て承當せず。美食飽人の飡に中らず。且らく道へ、那裏か是れ他の辜負の處、國淸うして才子貴く家富んで小兒驕る。

〔講話〕『國師三喚、舌頭地に墮つ』國師は喚ぶべきものも無いのに三度まで舌を弄した、餘り慈悲の深すぎるので其の罰で舌が墮ちて終つた。『侍者三應、光に和して吐出す』侍者の耽源が三度應答したのも和光同塵で結構な樣であるが、それも畢竟餘計なことである、光に和すといふのは和光同塵と熟字して、佛が衆生敎化の爲に自己の光德を包み隱して世事の塵埃に混じて種々な作略を用ひられること、こゝでは國師や侍者が向下の閑手脚を弄するに喩へたのである『國師年老い心孤にして』國師ももはや老年に及んで心寂しくなつたものと見えて、『牛頭を按じて草を喫せしむ』喰ひたがりもせぬ牛の頭を引き廻して草を喫はせる樣に、侍者に對して無理やりに佛法禪道の草を喫はせて居る、斯樣に親切が過ぎると先にもいふ通り舌頭が坐斷する樣なことになるのである。『侍者未だ承當せず』國師は親切の限を盡して耽源や耽源やと喚んでも侍者の方では一向受け應へがない、食慾の無い牛に草を押し付ける樣なものである、佛法の道理は之を自ら希ひ求めるものでなくては會得が出來るものではない『美食飽人の飡に中らず』どの樣な山海の珍味を竝べ立てても、腹十分に食つた人には御馳走にもならぬ、侍者は悟だの佛法だのといふ御馳走で腹一杯になつて居るから國師の提撕も其の甲斐がない『且らく道へ、那裏が是れ他の辜負の處』それは兎も角、辜負するとは畢竟如何なることであらうか、他は一應は國師のことと見ても可いがこれは必ずしも國師のみを指したのではない、漠然と一切萬有を指したのである、一切萬有は互に一切萬有に辜負して居るといふが、其の辜負といふは一體如何なる樣子であらうか『國淸うして才子貴く、家富んで小兒驕る』驕は一本に嬌となつて居るが驕の方が正しい、國が治まり天下が太平になると百般の文物燦然として光を發し、文學藝術に勝れた才人が續々と現れ、家が富めば小兒は皆驕りたかぶる樣になる、國師が餘り親切過ぎるので學人がいづれも自己の才智を賴んで我が儘勝手に振舞ふ、この樣子を我に辜負すといふたのである。併し才子や富家の小兒ばかりではなく、鈍物も貧兒も皆これ本來の那人

であるから辜負したまゝに立派に本分に契當して居る道理がある。

頌曰鐵枷無孔要人擔累及兒孫不等閑欲得撐門並拄戸更須赤脚上刀山

【和訓】鐵枷無孔、人の擔はんことを要す、累ひ兒孫に及んで等閑ならず。門を撐へ並に戸を拄ふることを得んと欲せば、更に須らく赤脚にして刀山に上るべし。

〔講話〕『鐵枷無孔、人の擔はんことを要す』鐵枷は鐵の枷のことで國師三喚に譬へたものである、國師三喚は實は無孔であつて手も付けられぬ、併し學人たるものは此の無孔の鐵枷を擔いで我がものとする必要がある、『累ひ、兒孫に及んで等閑ならず』國師が此の樣な厄介な代物を遺して置いたので後世のものは等閑にする譯には行かぬから何とか始末をせねばならぬ、實に困つた累である、『門を撐へ竝に戸を拄ふることを得んと欲せば』禪門を撐へ禪戸を拄へて佛祖正傳の大法を扶竪せんとならば大いに努力せねばならぬ累であるからというて等閑にして置いては、上佛祖の慈恩に背くのみならず下一切衆生に辜負する譯である、然らば何として門戸を撐へたものであらうか、『更に須らく赤脚にして刀山に上るべし』跣足で刀の上に上る程の大力倆を養ふべきである、更にといふのであるから悟つた上にも更に修行を怠らず、大勇猛心を振ひ起して精進の上にも精進すべきである、何事でも一事をなすには獻身的努力が必要であるが、殊に衆生敎化といふ大任を果す爲に赤脚を捲つて劍の山に登る程の勢を以てすべきである。

第十八則　洞山三斤

洞山和尙因僧問如何是佛山云麻三斤

【和訓】 洞山和尙、因に僧問ふ、如何なるか是れ佛。山云く、麻三斤。

〔講和〕『洞山和尙因に僧問ふ、如何なる是れ佛』この洞山も洞山三頓の話と同じく洞山守初和尙のことである、守初和尙は雲門宗祖雲門文偃和尙の法嗣であつて、雲門宗の特色は高尙な問題を平易にスラ〳〵と捌くのにあるといはれて居るが、此の則の如きも其の一例で、頗る手輕に僧の問に答へられて居る、此の僧はどれ程の力倆のあつたものか知らぬが、洞山の麻三斤といふ答話で直ちに疑團を氷解したと見えて問答が簡單に濟んで居る處を見ると、相應な力倆があつた者と思はれる、佛とは何ぞやといふことは誠に千古の疑問であつて古來參學の徒はいづれも皆これが爲に身心を勞して孜々として研究したものである、三千年前に印度藍毘尼園に降誕せられたのも佛である、佛檀の中に金色燦爛として輝いてござるのも佛である、併し乍ら佛とは斯樣もなのばかりをいふのではない、佛とは梵語の佛陀の略であつて、支那に譯して覺者といふ、悟つたもの覺めたるものゝ義であつて、宇宙の眞理に徹底したものをいふのである、併し悟るといへば最も高尙な精神を有する人間にのみ與へられた權利の樣に思はれるが必しもさうではない、與へていへば鳥も獸も木も石も、悉く佛であるといふ道理がある、佛といふことを詳細に說明すれば際限がない、八萬四千の法門五千餘卷の經典、悉くこれ佛の一字の註釋である、此の則とは僧が其の總體を佛といふ字に引くるめて問うたのであるから、却々油斷のならぬ陷穽である、之に對して洞山は何と答へたか『山云く、麻三斤』誠に無造作な答話である、洞山が麻といふことで答へたに就いては古來種々な說がある、其の時恰も洞山が胡麻の重量を量つて居たから斯樣に答へたのであるともいふ、又織物の麻を量つて居たのであるともいふ、併しそんなことはいづれでも可い、只洞山の的意を會することが肝要である、如何なるか是れ佛といふ問に對しては眼橫鼻直と答へた祖師もあり、乾屎橛と答へた祖師もある、佛といふても別段な相好がある譯でなく、眼は橫鼻は直である、又尊いものばかりとも限らぬ、乾いた糞橛の如きものも佛であるといふのである、されば佛とは遠方にある所の高尙尊嚴

なものではなく、吾々の左右前後到る處に存在する、麻三斤も佛なれば米一升も佛である、其時其の場所にあり合せのものを以つて直ちに佛を示すことが出來るのであるけれども、道ひ得る底の力倆を具して居ぬものが口眞似や手眞似を以つて示さうと思つてもそれは何の役にも立たぬ、虎を描いて猫どころではない、全く似てもつかぬものに過ぎぬのである。

無門曰洞山老人參得些蚌蛤禪開兩片露出肝腸然雖如是向甚處見洞山

【和訓】無門曰く、洞山老人、些の蚌蛤の禪に參得して、兩片を開いて肝腸を露出す。然も是の如くなりと雖も、甚れの處に向つてか洞山を見ん。

〔講話〕『洞山老人、些の蚌蛤の禪に參得して』無門は大いに高く止まつて洞山を睥睨した、洞山のお爺さんが少しばかり禪をやつたのを鼻に掛けて『兩片を開き肝腸を露出す』僧に對して麻三斤等と答へたのは恰も蚌蛤が兩方の貝を開いて腸をさらけ出した樣なもので、自分では大得意かも知れぬが側の目には醜くて仕方がない、無門は語の上でかく見くびつた樣なことをいつて居るが其の實



これは例の句抑下の意卓上で、腹の中では洞山がかくも親切に腹のどん底を示して僧を教化せられた大慈悲を讃嘆して居るのである、『然かも是の如くなりと雖も、甚れの處に向つてか洞山を見ん』併しかく云ふもの、洞山の眞意は畢竟何處にあるであらうか、麻三斤の的旨を會得して見なければ洞山が徹悃の慈悲は充分に解るものではない。

頌曰突出麻三斤言親意更親來說是非者便是是非人

【和訓】突出す麻三斤、言親しく意更に親し。來つて是非を說く者は、卽ち是れ是非の人。

〔講話〕『突出す麻三斤』。僧が如何なるか是れ佛というたら、直ちに手に持つて居た麻を差し出して麻三斤と答へた、敲唱相應ずるといふ實に間髮を容れざる手際である。『言親しく意更に親し』言語も極めて親しいが其の意に到つては更に親しい、敲けば唱へ、喚べば應ずる、併かも其の應じ振が如何にも親しく、七難しい語を用ひずに平易な言葉を以つて手近なものに就いて示された、此處等が雲門宗の特色で、弟子に對する精神上の親しみに到つては骨肉を分けた親子も及ばぬ程である、『來つて是非を說くものは』併し此の麻三斤といふ答話を聞いて兎や角と是非善惡の論量に渉るものがあれば、『便ち是れ是非の人』で、答話其のものは是非を絕したものであるけれどもそれを論ずる人自身が是非に渉つて居るのである、烏は自分で黑いと思つて居らぬかも知れぬ、鷺も自分で白いと思つて居らぬかも知れぬ、而かも人が勝手に白だの黑だのと價値をつけるのであつて、黑白を分つ人こそ實に黑白に捉はれて居るのである、麻三斤の眞面目は思量分別を絕して居る、それに對して思量分別を下さうとするものがあれば、其の人は最早洞山の的意を失却して終つて居る、麻三斤が佛であるといふのは釋尊が我に山河大地と同時に成道すと仰せられたから、其の道理から推して行けば麻も又成佛して居る、麻にも佛性が具はつて居るといふ意味で洞山が答へられたのである等と尤らしく說き立てるものがあれば、それこそ麻三斤の當體と相距ること白雲萬里である、當らずと雖も遠からずでなくて、當ると雖も甚だ遠しである。

第十九則　平常是道

南泉因趙州問如何是道泉云平常心是道州曰還可趣向否泉云擬向卽乖州云不擬爭知是道泉云道不屬知不屬不知知是妄覺不知是無記若眞達不疑之道猶如太虛廓然洞豁豈可强是非也州於言下頓悟

【和訓】南泉、因に趙州問ふ、如何なるか是れ道。泉云く、平常心是れ道。州曰く、還た趣向すべきや否や。泉云く、向はんと擬すれば卽ち乖く。州云く、擬せずんば爭でか是れ道なることを知らん。泉曰く、道は知にも屬せず、不知にも屬せず。知は是れ妄覺、不知は是れ無記。若し眞に不疑の道に達せば、猶ほ太虛の廓然として洞豁なるが如し、豈に强て是非すべけんや。州言下に於いて頓悟す。

〔講話〕『南泉、因に趙州問ふ、如何なるか是れ道』南泉は第十四則の處に詳しく述べて置いた通り池陽南泉山の普願和尚である、趙州は例の從諗和尚で南泉の高足である、南泉の處である時趙州が道とは如何なるものでありますかと問うた、趙州は有力の大人である、通り一片の問ではない、前の則では如何なる是れ佛と人格的に問うたが、今度は實踐的倫理的に、道とは如何なるものであるかと問うたのである、道とは人の行くべき道である、人の實踐躬行すべき規則である『泉曰く、平常心是れ道』南泉和尚の答は極めて穩かである、道とは吾々お互の平常の心である、平常の心とは波風の立たぬ穩かな場合に於ける吾々の心をいふ、吾々の心は種々なる煩惱妄想の爲に動搖し勝なものである、かゝる波風の立つた場合の心は兎角平靜を保ち難く物事の道理を正しく見分けることが出來ぬ、從つてそれが行の上に現れて不善行となり邪惡なる働となつて所謂人道に背く、かくの如く煩惱妄想の爲に動搖せぬ心、靜穩なる心こそ所謂平常心であつて、此の心から現るゝ行動はチヤンと道に契つて居るが故に平常心是れ道と答へたのである、斯樣な解釋の仕方は甚だ禪機を逸するのであるから、禪門の本意に背くけれども、前にもいふ通り已に講義といふ上は斯樣に卑近な通

俗的な說明に涉ることも止むを得ぬと思ふ、若し夫れ禪機を會せんとならば本文を繰返し熟讀翫味して、更に公案の的旨に參到する外はない、サテ餘談に涉つたが、趙州は南泉に向つて更に問うた『州曰く、還た趣向すべきや否や』然らば其の道といふものにはこちらから進んで行かれるものでありませうか、換言すれば平常心を識得することが出來るであらうかと云ふ問である『泉曰く、向はんと擬すれば卽ち乖く』イヤイヤ其の向ふといふことが惡い、道は一切處一切時に普ねく行き涉つて居る、儒道の人も道は須臾も離るべからず、離るべきは道に非ずというて居るが、吾々は元來道と一如であるから殊更に向ふといふ必要はない、向はんと擬すれば却つて背くのである、牛に騎つて牛を尋ぬるの類で、牛はどこに居るかと思うて向ふばかり見て居れば何時まで經つても牛は見付からぬ、却つて牛に遠かるばからである『州曰く、擬せずんば爭でか是れ道なることを知らん』道を求める心が無ければ道は得られぬではありませんか、佛道修行の志がなければ佛道の何たるかを知ることは出來ぬではありませんかと、趙州は何處までも道を向ふに認めた立場から論じて居る『泉云く、道は知にも屬せず不知にも屬せず』道は天地の公道である、知るの知らぬのといふ論量に涉るべきものではない、道は知るべきものではないといへば、絕對に吾々は道を知ることが出



來ぬ譯であり、知るべきものであるとすれば其の知るまでは吾々は知らなかつた卽ち道と吾々とは一如でなかつた譯であるが、道とは決して其の樣なものではない、其の道理を南泉は更に下の如くに說明せられた『知は是れ妄覺、不知は是れ無記』心意識の作用は畢竟妄覺であつて眞覺ではない、理窟で知つたのは眞に知つたのではない、今此處にいふ知は卽ち心意識の運轉である、又不知は善にもならず惡にもあらざる無記性である、道は決して其の樣な妄覺や無記性ではない、『若し眞に不疑の道に達せば猶ほ太虛の廓然として洞豁なるが如し、豈に强ひて是非すべけんや』それは兎に角若し道の眞面目に到達して疑なきを得たならば、大道長安に通ずといふが長安どころではない、坦然として全宇宙に通じて居る、カラりとして目をさへぎるものもないことを郭然として洞豁というた、太虛は大虛空、全宇宙の實體を支那的に形容した語、かく大道坦然たることを知つて疑はざるに至れば、何も知である不知である、是である非であるなどと分別を加へる必要がないではないかと、南泉が長々と說明せられると『州言下に頓悟す』趙州和尚始めて豁然省悟せられた、併し此の問答は餘り理窟に涉り過ぎて居る、端的を尙ぶ禪門に於いて、殊に禪機縱橫の稱ある南泉や趙州が、斯樣な婆々談議的の問答をせられるといふことは頗る異樣に思はれる、これは趙州がまだ一向力を得て居らぬ時の問答か、或は他の未穩在のもの、爲に、南泉趙州が申し合せた拖泥帶水の商量をして見せられたものかとも思はれる、但し語句は雙方共に頗る廻り諄いことを言つて居られるが、其の的意に到つては矢張高尙幽玄なるものがあることは申すまでもない、この公案に限らぬが、公案といふものは學人の力次第で如何樣にも味ひ得るものであるから參學の諸士は各自自己の力一杯に硏究して見るが可い、そこが又公案の面白い處である。

無門曰南泉被趙州發問直得瓦解氷消分疎不下趙州縱饒悟去更參三十年始得

【和訓】無門曰く、南泉趙州に發問せられて、直に得たり瓦解氷消、分疎不下なることを。趙州縱饒ひ悟り去るも、更に參すること三十年にして始めて得べし。

〔講話〕『南泉趙州に發問せられて、直に得たり瓦解氷消、分疎不下なることを』瓦解氷消は普通は疑問がスツカリ解けた意味であるけれども、こゝでは南泉が趙州に問ひ詰められてメチヤクチヤになつて終つたことをいふ、南泉は散々な目に逢つて、所謂分疎不下で、何ともいひ解きが出來なか

つた、直に得たりは恰で分疎不下になつて終つたといふ意『趙州縱饒ひ悟り去るも更に參すること三十年にして始めて得べし』趙州は趙州で又悟つたというてもそれで滿足して終つてはならぬ、悟後の修行といふことが大切である、一旦南泉の委曲叮嚀な說法によつて所謂言下に頓悟しても、其の頓悟の境界に留まつたならば所謂向上の死漢である、三十年といへば如何にも際限のある時間で、何か古來の規定でもある樣であるが、これはつまり無數の意味を表はしたのであつて、三百年というても三十年というてもいゝ、要するに佛道修行は永久不斷であるべきであつて、古人も一生不離叢林を以つて標榜とせられたが一生どころではない七生までも生れ易り死に易り限りなく修すべきである。

頌曰春有百花秋有月夏有涼風冬有雪若無閑事挂心頭便是人間好時節

【和訓】頌に曰く、春に百花あり秋に月あり、夏に涼風あり冬に雪有り、若し閑事の心頭に挂る無んば。便ち是れ人間の好時節。

〔講話〕『春に百花あり秋に月あり』この頌は大道坦然として徧界に通じ、整然として一絲亂れざるをいふのである、春來れば百花爛漫として咲き誇り、秋にもなれば明月皎々として澄み渡る、年々歲々其の順序は毫釐の間違もない、『夏に涼風あり冬に雪あり』いづれもとり〴〵に趣味があつて人間は四季折々に歡樂を味ふことが出來る、知不知を絕したる不疑の道の活現である、これを人間の上に就いていへば親は子を愛し子は親に侍づき、兄弟に友に夫婦相和する、これ卽ち南泉の謂ふ所の平常心の作用である、『若し閑事の心頭に挂る無んば』サテ此處が此の頌の眼目である、斯樣に大道は坦然として通じ整然として行はれて居るが、吾々の心に一點妄想の影がさせば忽ち其の大道が見えなくなつて終ふ、五祖門下の秀才神秀上座が、時々に拂拭して塵埃を惹かしむること莫れといつたと同じで、少しでも心の上に是だの非だの善だの惡だのといふ閑妄想の影がさすと、春の花に對しても秋の月に對しても、心の奧から樂しいといふ譯には行かなくなるが、かゝることが毫末もなく所謂心が太虛の廓然として洞豁なるが如くであつたならば、『便ち是れ人間の好時節』それこそ何の苦勞もない人間として、最も愉快な境界である、無門は以上の如く道といふものを形容したが心頭に挂くる無んばというたのは聊か評唱の的意に蹉過して居る樣に思はれぬでもない、本來無

一物なる廓然たる大道には塵埃の惹くべきなく閑事の挂くべきがないではないが、併し其の樣にいふのも已に言句に滯つて居るかも知れぬ、只朗々として春は百花あり秋は月ありと諷詠すれば可い、要らぬ閑言句を消して却つて大道を失却してはならぬ。

第二十則　大力量人

松源和尚云大力量人因甚擡足不起又云開口不在舌頭上

【和訓】 松源和尚云く、大力量の人甚に因つてか足を擡げ起さざる。又云く、口を開くこと舌頭上に在らず。

〔講話〕『松源和尚曰く、』松源和尚は名を崇岳といつて、靈石の妙和尚、大慧宗杲和尚、及び應庵和尚等に參じて大いに力倆を積んだ人で、年を取つて耳も遠くなり腰も曲つて四衆接化にも不便を感ずる樣になつたので虎丘山より、靈隱寺に移る時に、師匠の白雲守端から授かつた袈裟を弟子に傳へようと思つてそれに因んだ三轉語を造られた、此處には二轉語が出て居る丈であるが葛藤集には他の一轉語も出て居る、卽ち「明眼の人甚に因つてか、脚跟下の紅線を斷たざる」といふのである、

松源和尚は三轉語を示して袈裟を傳ふべきものを求められたが機に契つたものが無かつたので、自分が死んだら此の袈裟は我が塔所に止めよ、三十年後其の力を具するものが出で、必ず相承するであらうと遺言されたといふことである、果して三四十年後で石溪といふ名僧が出て、「大庾嶺頭黄梅の夜半、之を争ふに足らず之を讓るに餘あり」といふ偈を唱へて袈裟を掘り出して大衆に示した、サテ此の則に出て居るのは次の二轉語である。『大力量の人甚に因つてか足を擡げ起さゞる、又云く、口を開くこと舌頭上に在らず』佛向上の境界に於いては大力量ある人と雖も如何ともすることが出來ぬ、足を擡げて歩くことも出來ねば、又口を開いて說き示すことも出來ぬ、又此の則には出て居らぬが上に述べた三轉語の一句、明眼の人甚に因つてか脚跟下の紅絲線を斷ぜざるといふのも同じ樣な意味で、吾々が兎角物事に束縛せられて自由な活動の出來ぬのは、鳥が紅い絲で脚をくゝられて居る樣なものである、吾々は迷に束縛せらるゝのみでなく、悟といふものにも束縛せられる、悟は立派なものであるけれども、紅い絲が如何に美しくても縛られて居る鳥に取つては迷惑なものであると同樣に、悟といふものも邪魔物である、而も其の脚下の線を斷つといふことは明眼の衲僧といはれる人にも容易に出來難いことである、即ち佛法的々の大意、換言すれば宇宙の眞理といふこ



第二十則　大力量人

とは手脚を以つて之を示し表はすことも出來ず舌の頭を以つて言ひ表はすことも出來ず、又それに束縛せられると、容易に斷ち切つて自由になることも出來ぬ、畢竟如何にしたものであらうかといふのが三轉語の大要である、かく吾々の意識分別の力を以つて如何ともすることの出來ぬいが即ち大道の眞面目である所以を松源和尙が後世の兒孫の爲に示されたのである、併しかういふのは一應の解釋であるが、向上邊からいへば已に松源の的意を失脚するものであつて、畢竟は直下に參學の諸人が自ら究明するに一任する外はない。

無門曰松源可謂傾腸倒腹只是缺人承當縱饒直下承當正好來無門處喫痛棒何故聻要識眞金火裏看

【和訓】無門曰く、松源謂つ可し、腸を傾け腹を倒すと。只だ是れ人の承當することを缺く、縱饒ひ直下に承當するも、正に好し、無門が處に來らば痛棒を喫せん。何が故ぞ聻、眞金を識らんと要せば火裏に看よ。

〔講話〕『松源謂つべし腸を傾け腹を倒すと』松源和尙は實に兒を憐んで醜を忘ずる人である、腸も胃袋も何も彼もサラケ出して足を擡け起さゞるとか、口を開くこと舌頭上に在らず等と諄々しい說法をせられた、『只だ是れ人の承當するを缺く』折角の御垂示も座下に一人の直下承當底の人物が無かつたのは甚だお氣の毒である、抑ゝ口を開くこと舌頭上にあらずといひながら自分で口を開いて說くといふことが間違つて居る、說くべきものでなければ從つて又た聽くべきものでもない、承り當るといふ樣なことは松源座下ばかりでなく、三世の諸佛歷代の祖師と雖も出來得ることではない、されば無門も次の如くに云つて居る、『縱饒ひ直下に承當するも正に好し無門が處に來らば痛棒を喫せん』といひ、悟つたというても決して當になるものではない、承當するのせぬのといふ論量のものではないから承當したといふならば必ず何か間違つたものを執へて居るに違ひない、我れ無門の處へ來らば其の樣な妄想漢には罰棒三十を與へてくれよう、『何が故ぞ聻』それは畢竟何故であらうぞ、聻は意を強める語、サア何いふ譯であらうぞといふ警告である、『眞金を識らんと要せば火裏に看よ』眞金であるか僞金であるかを識別せんと欲せば爐鞴にかけて燒いて見ねばならぬ、松源の的意を會せんと欲せば明眼の師家の爐鞴に入つて親參實究すべきである、佛法の玄旨を了得したものであるか否かを知らんとするには宗師家が自ら接得して見ねばならぬ。

頌曰擡脚踏翻香水海低頭俯視四禪天一箇渾身無處著請續一句

【和訓】頌に曰く、脚を擡げて踏翻す香水海、頭を低れて俯して視る四禪天。一箇の渾身著くるに處無し、請ふ一句を續け。

〔講話〕『脚を擡げて踏翻す香水海』香水海とは楞嚴經に「水を見るに身中世界の外浮幢王刹、諸の香水海と等しうして差別なし」とあり、其の註に「華藏海中に大蓮華あり、其の蓮華の中に諸香水あり、一一の香水海諸佛刹世界の種となる」とある處から引いた語で、只文章を飾る丈で別に深い意味はない、脚を擡げ踏翻す太平洋でも脚を擡げ踏翻す五大州でも可い、要するに法身の大活用を形容するのである、『頭を低れて俯して視る四禪天』四禪天は又四空ともいふ、一には空處、二には識處、三には無所有處、四には非々想處である、禪定の悟を究め了つて一切世間の物慾の爲に心を動かされぬ境界である、印度古代の人は世界を分つて欲界、色界、無色界の三界と考へた、欲界は五慾のある世界、色界は此の滅した世界、無色界は物慾が滅したのみならず色も形も無くなつた世界であつて、其の無色界に又四天あつて、其の中の最上を四禪天といふのである、佛向上涅槃の境界に至ればかゝる上等の世界たる四禪天をも踏み超えて遙かに下の方に見下すことが出來るのである『一箇の渾身著くに處なし』香水海をも踏翻し、四禪天をも超越して終つて一箇の渾身即ち全身の置き處はない、少しでも身を落ち付ける處があれば已に其の場所に捉はれたものである、渾身著くる處なき境界こそ實に自由無碍である、これ松源が所謂大力量の人も足を擡げ起さず口を開くこと舌頭上にあらずといふた消息である、無門はかく三句を撚じ來つて『請ふ一句を續け』次の一句は後學の自由に續くるに任せるといつて百世の下に好結句を付するものを期待した、サテ此の問題を如何に解釋したものであらうか、理窟や分別では駄目、文才を弄するが如きは却つて前三句を殺して修ふ、寶劍は諸人が手裏にある、殺活は意の儘である。

第二十一則　雲門屎橛

雲門因僧問如何是佛門云乾屎橛

【和訓】雲門因に僧問ふ、如何なるが是れ佛。門云く、乾屎橛。

〔講話〕『雲門因に僧問ふ、如何なるが是れ佛』雲門は例の雲門文偃和尚である、此の則は禪門では頗る有名なもので、前にあつた洞山の麻三斤とはよく引合に出される、僧が雲門に對して佛とは如何なるものでありますかと尋ねた、洞山麻三斤の處でもいうた通り佛といふ語は頗る意味深長である、僧は佛とは三十二相八十種好といふから非常に立派なものであらう智慧に於いても相好に於いても並の人間には想像の出來ぬ程勝れたものであらうといふ考が先入主となつて居ることは其の問振で見え透いて居るので、雲門は『門曰く、乾屎橛』と答へた、乾屎橛は乾いた糞篦といふことである。糞篦とは糞をした時尻をこそげて置く木の片端のことで、昔は紙を用ひないで斯樣な道具を用ひたものである、一旦使用して直ぐ捨てゝ終ふのではなくて、これを洗つて置いて又使ふ、佛とは其の糞篦の洗つて乾したのであるといふのであるから實に穢いこと此の上なしである、併し雲門は淨穢といふ樣な相對邊のことを兎や角と問題にしたのではない。只僧が清淨とか美麗とかいふことに執着して居るのでかく反對のものを持ち出して示したのである、かく道ふのも一應の說明であつて動もすれば其の反語である倒語であるといふことに執はれる惧がある、否惧がある處ではない、全く左樣な解釋は雲門の的意と相距ること千萬里も啻ならざるものである、然らば乾屎橛とは如何なることであらうか、曰く謂ひ難しである、參學の諸人須らく實地に參究し始めて得べしである前則に所謂火裏に看よである。

無門曰雲門可謂家貧難辨素食事忙不及草書動便將屎橛來撑門拄戶佛法興衰可見

【和訓】無門曰く、雲門謂つ可し、家貧にして素食を辨じ難く、事忙しくして草書に及ばず。動もすれば便ち屎橛を將ち來つて、門を撑へ戶を拄ふ。佛法の興衰見つ可し。

〔講和〕『無門謂つべし家貧にして素食を辨じ難く』無門はすさましい勢で雲門を貶下した、雲門和尚は實に貧乏の極に達して居つて粗食をも食ふことが出來ぬ、身貧にして道貧ならずというて禪僧は昔から枯淡な生活をするものと相場が定まつて居るが、其の心は豐かであつて常に道を味うて樂しむことが出來る、併し其の道を樂しむといふこともまだ〳〵眞に安樂な境界ではない、道といふものに執はれ悟といふものが鼻の先にぶら下つて居つて甚だ邪魔になる、其の悟とか道とかいふものを一切捨て切つて心中無一物なる境界こそ實に我が雲門文偃和尚の身の上である、佛法とか悟とかいふ樣な御馳走は夢にも食ふことの出來ぬ赤貧の雲門和尚は實に最も幸福な人といふべきである『事忙にして草書に及ばず』草書は下書のこと、雲門和尚は衆生敎化に忙しくて說敎をするにも下書をする遑もない程である、それゆゑ謂ふ處が甚だ辻褄のあはぬとばかり、書いたものも甚だ醜いものである、其の辻褄の合はぬ話見苦しい書き振が、又却つて能辯の人の話よりも人を感動させ、達筆の人の書よりも味ひに富んで居る、これ衆生敎化の赤誠が流出したものであるが故である『動もすれば屎橛を將ち來つて門を撑へ戶を拄ふ』風が吹く時等は貧乏で門や扉を拄へるものが無いので糞箆等を持ち出す、衆生敎化は大風の拄りの如く、一刻も猶豫の出來ぬ重大な任務であるから必要



第二十一則　雲門屎橛

とあれば何の彼のと選擇に時を移すべきではない、糞箆でも小便桶でも構はず持ち出すが好いが、而し此の働は雲門の如き人にして始めて爲し得る所である、『佛法の興衰見つべし』斯樣な有樣であるから佛法が盛へるか衰へるかは學人自らよく雲門の作略に就いて參究するが可い。

頌曰閃電光撃石火眨得眼已蹉過

【和訓】　閃電光、撃石火、眼を眨得すれば、已に蹉過す。

〔講話〕『閃電光』この頌は極めて簡單に雲門の作略を讃嘆したのである、僧が如何なるか是れ佛と問うたのに對して、雲門和尙が間に髪を容れず乾屎橛と答へた樣子は實に電光のピカ〳〵と閃めくが如くである、又更に之を喩ふれば『撃石火』石を撃つと火花が散る、其の火花にも似た敏捷さである、『眼を眨得すれば』斯樣に敏活な雲門の作略に對して、これは一體何事を意味するであらうか等といふ樣な考を、チラリとでも起すならば『已に蹉過す』忽ち雲門の的意にスリ違つて終ふ、眼を眨得するといふは眼を瞬くとであつて、電光を見てハッと思うて瞬きすればもう光は見えぬ、雲門の作略は丁度それである。此の頌は一應は雲門の答話の敏捷さを形容したものと見るべきであるが更に又宇宙の本體の活動の速かなるを諷詠したものと見ても可い、本體の活動は電光や火花よりも尙ほ敏活で、聊かでも其の跡方を見ようと思へば忽ち白雲萬里の外に逸して終ふ、兎や角と思量分別に渉らうとすれば早く箭新羅を過ぐである。

第二十二則　迦葉刹竿

迦葉因阿難問云世尊傳金襴袈裟外別傳何物葉喚云阿難阿難應諾葉云倒却門前刹竿著

【和訓】迦葉因に阿難問ふて云く、世尊、金襴の袈裟を傳ふるの外、別に何物をか傳ふ、葉喚んで云く、阿難と、難應諾す。葉云く、門前の刹竿を倒却し著せよ。

〔講話〕『迦葉因に阿難問うて云ふ』迦葉も阿難も共に佛の十大弟子であつて、迦葉は頭陀行第一といふ最も行狀の正しい人であり、阿難は多聞第一というて一度聞いたことは決して忘れない、而して佛の說法は餘さず漏さず聞いて居つたといふ人である、佛滅後佛の弟子達が集つて結集を行つた、卽ち佛の說法を集めて整理した時に迦葉が座長になつたが、阿難は多聞第一であるからかゝる場合には最も重要な人であるけれども未だ悟が開けて居ないからといふ理由で、結集の席に列することを許されなかつた、阿難はそれを非常は殘念に思つて大奮發心を起して寢食を忘れて坐禪工夫して遂に悟を開き、結集の道場へ行つて迦葉に其の旨を告げて入場を許されんことを乞うと、迦葉は最早何人も入れぬことになつて居るから此の門を開くことは出來ぬが、悟を開いたものならば、此の門の鑰の穴から這入つて來いというた、阿難は其の言葉に從つて錠の穴から這入つて結集に參加したといふ傳說がある、歷史的事實の有無等を詮索する必要はない、兎に角迦葉と阿難とは佛十大弟子の中でも特に重んぜられて居る『世尊金襴の袈裟を傳ふるの外、別に何物をか傳ふ』阿難が或時迦葉に向つて尋ねた、世尊が迦葉に大法を傳へられた時其證據として金襴の袈裟を傳へたといふが、其の外何か別に祕密のものを傳へられたに相違ないと思ふが如何と尋ねた『葉喚んで曰く、阿難と』迦葉は阿難の問には答へずして阿難の名を喚んだ、『難應諾す』阿難は何氣なくハイと答へた、此迦葉が喚んで阿難が應諾した處に世尊傳授の祕密の法があるのである『葉曰く、門前の刹竿を倒却し著せよ』門前に刹竿が立つて居る、それを倒して來いと命じた、刹竿は印度では說法をする目標として精舍の門前に旗を建てた、其の旗のことである、日本でも彼岸や盆等に寺院には刹竿を建てる、一體迦葉が斯樣にいうたのは何いう譯であらうか、世尊傳授の祕密の法を問うたのに對し

て迦葉が阿難の名を喚んだのは、世尊は別に難しい祕密の法等を傳へられたのではない、喚べば應ずる底これ世尊傳授の佛法の全體である、刹竿を建て、說法をする等といふのが抑ゝ餘計なことである、斯樣なことをするから阿難汝の如きものまでが佛に傳授すべき特別のものでもあるかの樣な妄想を生ずるのである、あの樣な刹竿を倒して終へといつたのである、二人の問答を强ひて筋道を立てれば右の樣に解釋すべきであるけれども、禪門では元來斯樣な理窟は大禁物である、迦葉喚んで阿難應諾し、更に迦葉が門前の刹竿を倒却し著せよというたのが世尊付授の佛法である、刹竿を倒却するには限らぬ、拄杖を拈起しても竹篦を振り廻しても或はお茶を出しても菓子を出しても佛法は立派に其處に現前するのである。

無門曰若向者裏下得一轉語親切便見靈山一會儼然未散其或未然毘婆尸佛早留心直至而今不得妙

【和訓】 無門曰く、若し者裏に向つて一轉語を下し得て親切ならば、便ち靈山の一會、儼然として未散なることを見ん。其れ或は未だ然らずんば、毘婆尸佛早く心を留めて、



直に今に至るまで妙を得ず。

〔講話〕『若し者裏に向つて一轉語を下し得て親切ならば』者裏とは刹竿倒却の當處である迦葉が刹竿を倒却し著せよというた端的に對して最も適切なる一轉語を下し得るならば、『便ち靈山の一會、儼然として未散なることを得ん』世尊が三千年前に於いて靈鷲山に於いて開かれた說法の道場に集つた大衆は、儼然として今日まで解散しないであらう、卽ち世尊拈華迦葉微笑の面目は一轉語の當處に歷然として現前するであらう、『其れ或は未だ然らずんば』若し者裏に向つて一轉語を下し得るものが無ければ、『毘婆戸佛早く心を留めて直に今に到るまで妙を得ず』毘婆戸佛は過去七佛の最初の佛で、久遠劫の昔より心を留めて百年も千年も修行したが遂に妙處に達することが出來なかつたと傳へられて居るが、迦葉が阿難に對する垂示の的意を會することが出來なければ矢張此の毘婆戸佛のお仲間で、いづれも佛道修行には全力を注いで居るではあらうけれども畢竟無駄骨折りといふものである、併し卽今無門座下の諸人者果して妙處に達し得る底の分があるか、文字言句の末に拘泥して居つては永劫に相逢ふの期はないぞ。

頌曰問處何如答處親幾人於此眼生筋兄呼弟應揚家醜不屬陰陽別是春

和訓】 頌に曰く、問處は何ぞ答處の親しきに如かん、幾人か此に於いて眼に筋を生ず。兄呼び弟應じて家醜を揚ぐ、陰陽に屬せず別に是れ春。

〔講話〕『問處は何ぞ答處の親しきに如かん』阿難が世尊金襴の袈裟を傳ふるの外別に何物をか傳ふと問うたのは迦葉の答に比すれば大いに本分に遠かつて居る、迦葉が阿難を呼んで其の應諾を聞いて門前の刹竿を倒却せよというたのは實に本分に親しい說法である、佛が付授せられた大法其の儘の丸出しである、『幾人か此に於いて眼に筋を生ず』迦葉の答話に對しては何人も目を白黑させるばかりで適當の應對は出來ぬであらう、眼に筋を生ずとはつまり目の玉をキョロ付かせて呆氣に取られて居る樣子をいふ、『兄呼び弟應じて家醜を擧ぐ』迦葉は兄で阿難は弟である、佛門下の兄弟が互に相呼び相應へて大法を商量したのは甚だ結構なやうではあるけれども元來佛法は左樣な手段を以つて擧揚せらるべきものではない、『二人の振舞は全く世尊一家の內輪事を世間にあばき出したといふものである、』陰陽に屬せず別に是れ春』併し其の家醜が又頗る結構なもので、二人が之を擧揚

した爲に今日我々は其の化に浴して安樂の法門を味ふことが出來るのである。其の所謂家醜は陰陽を絕し古今を絕し更に八萬四千の法門にも屬せぬ天地一色の春景色である、佛とか法とかいふ樣な有難さうな閑名目を離れた別世界の春である。

第二十三則　不思善惡

六祖因明上座趁至大庾嶺祖見明至卽擲衣鉢於石上云此衣表信可力爭耶任君將去明遂擧之如山不動踟蹰悚慄明曰我來求法非爲衣也願行者開示祖云不思善不思惡正與麼時那箇是明上座本來面目明當下大悟遍體汗流泣淚作禮問曰上來密語密意外還更有意旨否祖曰我今爲汝說者卽非密也汝若返照自己面目密却在汝邊明云某甲雖在黃梅隨衆實未省自己面目今蒙指受入處如人飮水冷暖自

知今行者即是某甲師也祖云汝若如是則吾與汝同師黄梅善自護持

【和訓】六祖因に明上座趁つて大庾嶺に至る。祖、明の至るを見て、即ち衣鉢を石上に擲つて云く、此の衣は信を表す。力を以つて爭ふ可けん耶、君が將ち去るに任す。明遂に之を擧ぐるに、山の如くにして動ぜず、踟蹰悚慄す。明曰く、我れ來つて法を求む、衣の爲めにするに非らざるなり。願くは行者開示し玉へ。祖云く、不思善不思惡、正與麼の時那箇か是れ明上座本來の面目、明當下に大悟し、遍體汗流れて、泣涙作禮して問うて云く、上來の密語密意の外、還つて更に意旨ありや否や。祖曰く、我れ今汝が爲めに說くには、即ち密に非らざるなり。汝若し自己の面目を返照せば、密は却つて汝が邊に在らん。明云く、某甲黃梅に在つて衆に隨ふと雖も、實に未だ自己の面目を省せず。今入處を指受することを蒙つて、人の水を飲んで冷暖自知するが如し、今行者は某甲が師なり。祖云く、汝若し是の如くならば則ち吾と汝と同じく黄梅を師とせん。善く自ら護持せよ。

〔講話〕『六祖因に明上座、趁つて大庾嶺に到る』六祖は支那禪宗第六祖曹溪慧能和尚のことである、六祖は我が禪門に於いて最も重んぜられた祖師で、西天四七、東土二三といつて印度の二十八祖達磨大師は禪を東土に傳へ、支那の六祖慧能和尚は禪宗の基礎を確立した人である、六祖は支那新州嶺南の人で、姓を盧氏といひ、三歳の時父を喪ひ、母と共に極めて貧しい生活をして居つたが、性來親孝行な人で、毎日山に入つて薪を取り、其の資を以つて母を養つて居つた、或日道で僧の經を誦するのを聞いて、「應に住する處なくして其の心を生ず」といふに至りて大いに感じ、其の經文の金剛經なることを知つて家に歸り、切に母に乞うて出家の許を得た、六祖は老いたる母に離るゝのを悲しんだけれども衆生濟度の爲には自己の母を顧る遑もない、殊に佛道修行は親しく母に仕へるにもました孝行であると覺悟して、遂に黄梅山の五祖弘忍和尚の許に行つて之に參じて、最初弘忍和尚に謁した時、五祖が「何處から來たか」と問うた、六祖は「嶺南」と答へた、五祖「何事をか須めんと欲す」六祖「作佛を須む」五祖「南嶺の人是れ獦獠、若爲んぞ作佛するを得ん」六祖「人

に南北ありと雖も佛性本南北なし、獦獠の身と尊者と同ぜざるも佛性何の差別かあらん」初祖見の時已に斯樣な見識を以つて居つた程であるから五祖も大いに望を矚せられたが、尙は至心に辨道せしめようといふ慈悲心から、六祖を碓房卽ち米舂部屋に入れて米舂をさせた、六祖は喜んで碓房に入つて毎日熱心に米を舂きながら箇の一大事を工夫して遂に八箇月にして佛知見を發得した、五祖門下には七百の大衆が居つて互に鎬を削つて參禪辨道したが、未だ大事を了畢したものが無かつた、或日五祖は大衆を集めて「汝等辨道工夫に努むること已に久しいことであるから、最早大いに得る處があつたであらう、今日はいづれも其の所解を偈に作つて提出せよ而して我が意に叶つたものには世尊以來傳持の衣鉢を傳へるであらう」と申渡された、一同はいづれもこれを聞いて大奮發心を起し、我れこそは其の衣鉢を傳へて祖師の列に加はらうと、各〻精一杯に考へた、佛道を詩作か何かの樣に思ひ違ひをして辭句の裝飾に骨を折るのもあれば奇拔な文句を以つて師家の注意を惹かうとする不心得ものもあつたが、中に於いて神秀上座といふのは最も舊參でもあり且つ博識であつて偏ねく古今の經論に通じて居つたので、大衆は各自己惚や野心は持つて居るもの、衣鉢は結局此の神秀上座の手に歸するであらうと思つて居つた、神秀上座自身も大いに期する處があつて有名なる「身



第二十三　不思善惡

は是れ菩薩樹、心は明鏡臺の如し、時々に勤めて拂拭せよ、塵埃を惹かしむる莫れ」といふ偈を發表した、これが一山の評判になつて、斯樣な立派な偈が出來ては衣鉢は愈々神秀上座の手裏に落在するに定つたと噂とり〴〵であつた、六祖の碓房翁は此を聞いて「成程結構ではあるが未だ本分に叶うたものとは云はれぬ」と云ふと、之を聞いた他の僧はいづれも碓房翁の力量を知らぬので「米春老爺等にこれが分つて堪るものか」といつて相手にするものはなかつた、然るに碓房翁が神秀上座の偈と竝べて貼り出した偈はこれは有名な「菩提本樹にあらず、明鏡亦た臺に非ず、本來無一物何れの處にか塵埃を惹かん」といふのである、之を見た黃梅山下七百の大衆は眞の意味は充分解らぬながらも何となく神秀上座の句よりも勝れて居る樣に思つた、神秀上座の偈は吾々の身體は菩提卽ち悟の樹の樣なものであり、心は本來清淨にして明鏡の如くであるが、鏡が曇る樣に吾々の心にも煩惱の塵埃がかゝることがあるから怠らず拂拭して清淨にせねばならぬといふ意である、然るに六祖の偈は之と大いに趣を異にして、菩提は元來樹ではなく、心も又明鏡の如き有形なる固定的のものではない、本來菩提とか心とかいふもののみならず、天地間には一物として認むべきものはない、從つて塵埃のかゝるべき處もないから拂拭等といふ手數を掛ける必要が何處にあるぞといふのである、此の一偈は實に禪門の宣言書ともいふべき歷史的にも宗義上からも最も重要なものである、五祖は之を見て心中大に喜び、碓房翁こそ大法を授與すべき佛種子であると思はれたが、神秀を始め舊參の大衆を差し措いて新到の而かも米春老翁に衣鉢を附與したならば如何なる大事が持ち上がるかも知れぬので、其夜三更に及んで竊かに大法を六祖に附囑し、其の證據たる金襴の袈裟を授與し、尙ほ六祖に注意して夜中に黃梅山を立ち退かせられた、六祖は其の夜竊かに黃梅山を下つて大庾嶺といふ處まで來られた、此の則に出て居るのは此の大庾嶺に於ける出來事である、此の則を講ずるには一應以上の因緣を述べて置く必要があつたので、かくは長々しく縷述した譯である、六祖の後を逐つて明上座といふのが大庾嶺まで來たといふが、明上座はもと四品將軍であつ人で、陳の宣帝の裔孫で、法名を慧明という處から又慧明將軍の稱があつた、慧明は大力量ある人であつたが、愈々五祖の法を碓房翁が嗣いで衣鉢を附與されたと聞いて、あの樣な新參者に橫取せられては吾々の面目が立たぬというので後を逐驅けて來たのである『祖、明の至るを見て卽ち衣鉢を石上に擲つて云く、此の衣は信を表す、力を以つて爭ふ可けん耶、君が將ち去るに任す』六祖は慧明將軍が逐つ驅けて來たのを見て、六祖から附與せられた衣鉢を石の上に擲け付けて、この衣鉢は大法

を傳授した證據卽ち信として與へられたもので力づくでは取れるものでない、持つて行くならば勝手に持つて行くが可いといつたのである、『明遂に之を舉ぐるに山の如くにして動ぜず、踟蹰悚慄す』慧明は石の上に擲け付けられた衣鉢を取らうとしたが恰で山の如くでビクともせぬ、流石大力無双の慧明も段々薄氣味惡くなつて幾度もためらつたり身振ひして居つた、『明曰く、我れ來つて法を求む、衣の爲にするに非ざるなり、願くは行者開示し玉へ』慧明將軍も六祖の語を聞いて遂に其の及ばざるを悟り、態度を更めて六祖の示導を乞うた、私は法を求めて來たのであつて衣を奪ひ返しに來たのではありませぬ、どうぞ佛法の道理を御開示が願ひたうございますと頗る穩かな願である、而し始めから其のつもりであつたかどうかは怪しいものである、『祖曰く、不思善不思惡』六祖は慧明の乞に對して善をも思はず惡をも思はぬ、これが佛法的々の大意であると、至極叮嚀なお示しである、併し餘り親切過ぎて却つて慧明を窠窟へ落ち込ませたかも知れぬ、『正與麼の時那箇か是れ明上座本來の面目』不思善不思惡の當處が佛法的々の大意であるが、今明上座自身が善をも思はず惡をも思はず、迷をも厭はず悟をも希はざる境界に至つたならば其處が卽ち上座の本來の面目であるといふ、那箇とは此處では疑問の意味でなくて其處が卽ちといふ程の意味である、『明當下に大悟し、遍體汗流れて泣涙作禮して問うて曰く、上來の密語密意の外更に意旨ありや否や』慧明は六祖の言下に忽ち省悟して全身流汗淋漓たるを覺え、有難涙にくれて六祖を禮拜し、上來お示し下さつた處は誠に甚深微妙の佛法、至極祕密の大道であるが、それ以上に尙ほ何か別に趣がありませうかと問うた、これではまだ一物を認めて居るのであつて、所謂大悟も頗る怪しいものである、『祖曰く、我れ今汝が爲に說くは卽ち密に非ざるなり』お前は密語密意といふが今示したことは決してその樣な重要なことではない、『汝若し自己の面目を返照せば密は却つて汝が邊に在らん』囘光返照といひ脚下照顧といふことが肝要である、法は決して遠方にあるのではない、脚下是れ黃金の地で、吾々凡夫の上にチヤンと法身が現成して居るのであるから、各自に自己を返照し顧ることが肝要である、そこで六祖も慧明に對してお前が自ら自己本具の佛性を徹見したならば密意密語はお前の手許にあることが解るであらうというた、『明曰く、某甲黃梅に在つて衆に隨ふと雖も實に未だ自己の面目を省せず』慧明がいふには、私は黃梅山に居つて大勢の大衆と共に修行して居つたけれども脚下照顧といふ樣なことには一向氣が着きませんでした、『今入處を指受することを蒙つて人の水を飮んで冷暖自知するが如し』只今證入すべき處を貴僧から御指示を蒙つて始めて眞に佛祖の密意が解りまし

た、其の有様は恰ど水を飲んで始めて冷暖が解つた様なものであります。思量分別の上の研究は隨分大衆と共にやつたがいくら研究しても水の冷暖は解らなかつた、今貴僧によつて始めて水を飲ませられた様なものであります『今行者は卽ち某甲が師なり』されば貴僧は私に取つては實に師匠であるといふ、行者とは六祖の姓が盧氏であつて碓房の行者をして居つたから盧行者と呼ばれて居つたが其の盧を略して行者というたのである『祖曰く、汝若し是の如くならば則ち吾と汝と同じく黃梅を師とせん』六祖は慧明の語を聞いて、さういふ次第ならば何も拙僧を師とするには及ばぬ今まで隨侍して居つた事であるから私と同じく黃梅山の弘忍和尚を師匠と仰ぐこととしたが可からう、而して『善く自ら護持せよ』而して今までの修行によつて得た處の佛法を大切に護持し錬磨するが可い、悟後の修行といふことが最も肝要であるぞと懇々と諭された、此の則は甚だ長文であるが公案の主眼とすべき點は脚下照顧の要を示すにあるのである。

無門曰六祖可謂是事出急家老婆心切譬如新荔支剝了殼去了核送在爾口裏只要爾嚥一嚥

【和訓】無門曰く、六祖謂つ可し、是れ事は急家より出づと。老婆心切なり。譬へば新荔支の殼を剝ぎ了り、核を去け了つて、爾が口裏に送在して、只た爾が嚥一嚥を要するが如し。

〔講話〕『六祖謂つべし是れ事は急家より出づと』之は漢文殊に禪門の祖錄等に獨特な文體で、漢文を讀み慣れぬ人は「六祖が謂ふであらう、事は急家より出づと」といふ樣な意味に解することがあるが、此の文句は決してさういふ讀み方をしてはならぬ、事は急家より出づとは稼ぐに追ひ付く貧乏なしといふ意味にも、又窮すれば通ずることがあるといふ意味にも取れるが、要するに六祖に慧明の爲に我れ來つて法を求む願はくは行者開示せよと迫られて切端詰まつて止むを得ず拖泥帶水の說法をして明上座をして遂に大悟徹底せしめた、實に其の功績は六祖が急場に迫つて舉げた處のものであつて、善をも思はず惡をも思はず、正與麼の時那箇か是れ明上座本來の面目といつたのは實に『老婆心切なり』で、明上座を早く悟らせたいばかりに諄過る程の心切を盡されたのである『譬へば新荔支の殼を剝ぎ了り核を去け了つて爾が口裏に送在して只だ爾が嚥一嚥を要するが如し』荔支は枇杷の實の類であるといふ、六祖が學人を提撕せられる樣子を喩へていへば新しい枇杷の實の皮を剝取り核を取除いて口へ入れて嚥み下させる樣なもので、實に親切叮嚀到れり盡せりである、

斯樣に佛法の正味ばかりを喰はされるので、平生修行に力を盡して居るものならば必ず之によつて大悟徹底するに相違ない、慧明上座の如きも遙々大庾嶺まで六祖を逐驅けて行く程に熱心であつたから、此の懇ろな提撕を受けては忽ちにして桶底を脱することが出來たのである。

頌曰描不成兮畫不就贊不及兮休生受本來面目無處藏世界壞時渠不朽

【和訓】頌に曰く、描せども成らず、畫けども就らず、贊すれども及ばず、生受することを休めよ。本來の面目藏すに處無し。世界壞する時渠朽ちず。

〔講話〕『描せども成らず畫けども就らず』神秀上座が七百甲子の秀才を以つて大法傳受の恩惠に與らんが爲に頭を惱して作つた得意の偈、身は是れ菩提樹云々といふのも佛法の面目を描したつもりであらうが眞相は現はれて居らぬ、のみならず、本分底よりいへば印可證明を得た六祖大師の偈も又虎を畫いて猫に類するの類に過ぎぬ。『贊すれども及ばず生受することを休めよ』どの樣な文章家が出て讃揚しようと思つても宇宙の本體は到底充分に讃し得るものではない、描すといふも畫くといふも、又贊するといふもいづれも皆法の丸呑みに過ぎぬ、充分嚙み締めて味はつた上でなくては眞に不思善不思惡の味は解るものではない『本來の面目藏するに處無し』サテ佛法の的意宇宙の本體を嚙み締めて充分其の味ひを知つた上は其の本來の面目は盡法界に充塞して徧ねからざる處はないといふとが解る、藏すとすれど顯はるゝで、如何に藏さうと思つても徧界に滿ち渡つた本來の面目は藏すことは出來ぬ『世界壞する時渠朽ちず』劫火洞然として大千倶に壞す、不審し這箇壞か不壞かといふ問に對して或は壞と答へ或は不壞と答へた師家があるが、今此處にいふ渠は卽ち這箇である、這箇とは本來の面目眞如の本體、本則に就いていへば列祖承傳の衣鉢である、時間を超起した本來の面目は世界壞滅の時が來ても決して朽ちるものではない。

第二十四則　離却語言

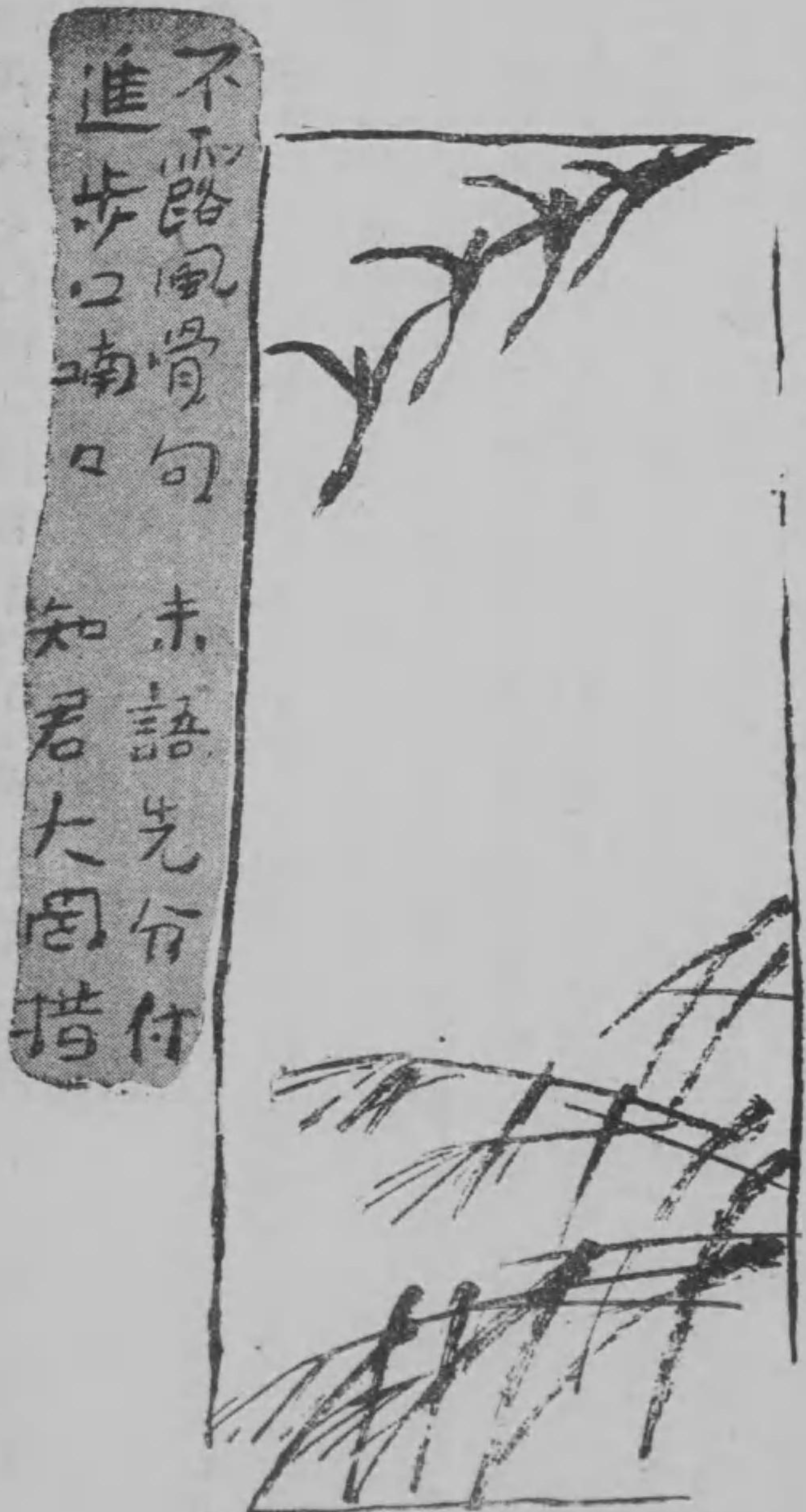
風穴和尚因僧問語默涉離微如何通不犯穴云長憶江南三月裏鷓鴣啼處百花香

【和訓】風穴和尚因に僧問ふ、語默は離微に涉る、如何んか不犯を通ぜん。穴云く、長に憶ふ江南三月の裏、鷓鴣啼く處百花香し。

〔講話〕『風穴和尚』風穴は「ふうけつ」でなくて「ふけつ」といふのが讀み癖である、名を延沼といひ始め鏡淸道怤に參じ、後南院慧顒の門に入つて遂に大事を了畢した人である、風穴が南院和尚の許に在つた時園頭といふ役を務めた、掃除や木の手入れ等庭園に關することを取扱ふのである、或日菜園に出て耕作をして居ると其處へ南院和尚が來て「南方の一棒作麼生か商量せん」南方の佛法、卽ち禪宗の玄旨を何と工夫したものであらうかといふと園頭の延沼は「斯間の一棒如何か商量せん』と南院に向つて反問した、拙僧は兎も角和尚は以と工夫せられたかと機に當つては師に讓らざる英邁な作略である、南院は之を聞いて棒を拈起して「棒下の無生忍機に臨んで師に讓らず」無生忍とは不生不滅の眞如法性を認知した位をいふ、今は延沼を讃稱した語である、實に此の無生忍は親勝りの人物であると賞められて風穴は始めて大悟したといふ。『因に僧問ふ、語默は離微に涉る、如何が不犯を通ぜん』離微とは法の本體と作用をいふ、離とは六入跡無しといふて法の本體は恰も明鏡の晃々として一塵一埃も留めず、漢來れば漢現じ胡來れば胡現じ、男來れば男現じ女來れば女現じて毫も味ます處がないが、而かもかく種々の像を現じても少しも跡方は殘さぬ、微とは萬用無我というて、法の作用活動は自由自在であつて、或は花となつて咲き或は鳥となつて囀り、或は考慮し我は實行し、或は把住し或は放行して應用無碍であるけれども、而かも其の作用の上に於いて聊かも己が我がといふ我見がない、恁運にして機に臨んで其の本具の作用を表はすに過ぎぬ、併し離は一切を容れて跡なく、徹は萬差の働を作して而かも無我であつて、いづれも甚だ結構なものであるけれども而かも本體とか作用とかいふ差別邊を離れることが出來ぬ、離といふも本來の面目を犯し徹といふのも眞如の上に汚點を殘す、所謂未だ不犯の端的には到らぬのである、今玆に語默

は離微に渉るといふのは、語は眞如が作用を顯はした場合、卽ち微離であつて、默は眞如が其の作用を藏して本體に歸した場合、卽ち離である、文殊菩薩は十二不門の道理を滔々と述べ立てたが而かもこれ語に墮ちて居る、維摩は默然として口扁檐の如くであつたが而かも默に着して居る、語も默もそれぞれ相對的の離微に渉るものである、語も默も共に眞如を觸犯するものであるがいづれの一方面でもいかぬが此の二方面を離れて果して何れに不犯の法があるか、離微に渉らざる法は如何にして得られるであらうかといふ問である、此の僧却々見識を具した英靈の漢であつて、風穴和尚に對して驗試の問を設けて畏に掛けようとしたのである『穴曰く、長に憶ふ江南の三月の裏、鷓鴣啼く處百花香し』これが不犯の法の端的である、語に墜ちず默に着せず、離微いづれにも渉らざる宇宙の本體は卽ちこの實景である、本體とか作用とかいふ樣な差別的の妄想を抱いて居つては親しく此の景色を味ふことは出來ぬ、鷓鴣は聲の佳い鳥、江南は風光明媚な所である、陽春三月、うらゝかなる江南の野に鷓鴣のなきしきる樣子こそ實に不犯の消息である、理窟や妄想を總て捨て去つて悠々と此の佳境に逍遙する底の漢はないか。

無門曰風穴機如〻掣電〻得〻路便行爭奈坐〻前人舌頭〻不〻斷若



第二十四則　離却語言

向者裏見得親切自有出身之路且離却語言三昧道將一句來

【和訓】無門曰く、風穴、機掣電の如く、路を得て便ち行く。爭奈せん前人の舌頭に坐して斷せざることを、若し者裏に向つて見得して親切ならば、自ら出身の路有らん。且つ語言三昧を離却して、一句を道ひ將ち來れ。

〔講話〕『風穴機掣電の如く、路を得て便ち行く』風穴は南院や鏡淸に就いて只管參禪辨道して技倆を鍊磨した人であるから、學人を接得する機略は實に俊潑怜悧であつて、恰も電のピカリと閃く程である、されば僧は陷虎の機を設けて風穴を陷れんとしたが巧に「江南三月の裡、鷓鴣啼く處百花香し」と向上の一路を開いて悠々として重關を脫し去つた、實に轉身の妙用何人も追從を許さぬ處である、『爭奈せん前人の舌頭坐して斷ぜざること』而し僧は寶藏論に出て居る離微といふ樣なことを擔ぎ出してそれに執着して居る、所謂前人の舌頭に坐り込んでそれを離れることが出來ぬ、その樣な力で風穴の如き大師家を勘過しよう等とは甚だ僭上の到りであると無門が自己の腕力を以つて僧を抑へ付けた『若し者裏に向つて見得して親切ならば自ら出身の路あらん』者裏とは前人の舌頭と見ても可い、又不犯の端的と見ても可い、兎に角者裏の消息を親しく見得することが出來たならば身を現象界の束縛から脫して自由自在の路に出づることが出來るであらう、見得するに特に親切でなければならぬ、通り一返に可い加減に早合點して獨りで晴天見得した氣になつて居ても實參實究を經て居ないものは却つて本分に蹉過して終つて居る『且つ語言三昧を離却して一句を道ひ將ち來れ』語言三昧とは法華藥王品に「一切衆生の語言三昧を解く、三昧は玆に正受といふ、語言三昧といふは語言に於いて妙趣を得るなり」とある、語默は共に離微に渉るといふが、語言に於いて妙趣を得て、所謂三昧に住しても尙ほ語言三昧といふ絆に縛られて居るから更にそれをも離却した上で向上の端的を一句に道破して見るが可い、見得して親切なるものならば其の一句よく不犯の面目に契當するであらう。

頌曰不露風骨句未語先分付進步口喃々知君大罔措

【和訓】頌に曰く、風骨の句を露さず、未だ語らざるに先づ分付す、步を進めて口喃々

たらば、知んぬ、君が大いに措くことなきを。

〔講話〕『風骨の句を露さず』風骨は風采様子といふ程の義で、宗師家たるものは學人を接するに悟らしい様子は少しも見せぬ、有とも無とも向上とも向下とも一句を露はさずして、『未だ語らざるに先づ分付す』『未だ一言も語らずして不犯の面目を手渡して終つた、これ評唱に所謂機掣電の如き有様である、『歩を進めて口喃々たらば』喃々は喧しく饒舌る様子をいふ、風穴が風骨の句を露さず未だ語らざるに先づ分付すといふ様な向上の作略を用ひずして、進んで佛と說き法と說き、他力と說き自力と說いて限なく饒舌を逞うするならば、『知んぬ君が大いに措くこと罔きことを』それで風穴が未だ大悟徹底の境地に達して居らぬ、兎や角と疑着することを止めぬといふことが解る、斯の如くんば風穴は向上の那人と許すことは出來ぬと抑へた、それも矢張り句抑下の意卓上である。

第二十五則　三座說法

仰山和尚夢見往彌勒所安第三座有一尊者白槌曰今日當第三座說法山乃起白槌云摩訶衍法離四句絕百非諦聽諦聽

【和訓】仰山和尚、夢に、彌勒の所に往いて、第三座に安ぜらる。一尊者有り、白槌して曰く、今日第三座の說法に當る。山乃ち起つて白槌して云く、摩訶衍の法は四句を離れ百非を絕す。諦聽々々と云ふを見る。

〔講話〕『仰山和尚』仰山は潙山靈祐和尚の法嗣で、夫の潙仰宗は潙山と仰山とによつて開かれたものである、名を慧寂といひ韶州懷化の人で、初め耽源和尚に謁して玄旨を悟り、後潙山に師事すること十五年にして其の印可を受けた、初め和尚が佛道に入らうといふ望を起して父母に乞うたが免

されなかつたので、逐に指を切つて其の志を固きを示したといふ、古人が入道に熱心であつてたことは大凡斯の如くであつて、從つて參學辨道に對し、精進不退なることは實に驚嘆すでき程である、此の則は仰山和尚が一場の夢に因んで座下に摩訶衍の法を開示したのである、つまらぬ夢物語だ等と貶し去つてはならぬ、『夢に彌勒の所に往いて第三座に安ぜらる』彌勒菩薩は今釋迦牟尼佛の後に出でて衆生濟度をする佛である、そ
れは五十六億七千萬年の後であるから、それまでは兜率天の奧の院に住して居られる、第三座といふのは上座の位の中に又一座二座三座といふ階級がある、仰山和尚は夢に彌勒菩薩の處へ行つて上座の中の第三位の單に坐らせられた、其の時、『一尊者あり、白槌して曰く、今日第三座の說法に當る』一人の尊者が居つて報告の槌を打つて一同に告げていふには、今日は第三座仰山尊者の說法の當番であると、『山乃ち起つて白槌して曰く、摩訶衍の法は四句を離れ百非を絕す、諦聽々々と云ふを見る』そこで仰山は躊躇せずして直ちに起つて槌を打つて摩訶衍の法は云々というた、摩訶衍の摩訶は支那に譯すると大、多、勝の三義を含んで居るが一般に大に譯する、衍とは乘といふ義であるから、仰山は大乘の法は四句を離れ百非を絕して居る、一同のもの諦に聽け諦に聽けと自ら率位に立つて堂々と說法したといふ處を夢に見た、四句は一異有



無の四、百非は四句を各又四句を具す、之を三世に約し、已起未起の二に約し、更に根本の四を加へると一百となる、これは外道論爭の方式となつて居つたもので、大乘の法の極則はこれ等の方式に當て篏めて論ずることは出來ぬから離れるとか絶するとかいうたのである、諦に聽け等というても元來夢中の說法であるから語言の境界を絶して居る、彌勒の所といふも夢、白槌するといふも夢、四句といふも百非といふも皆夢である、仰山和尙が斯樣な夢物語をせられたには大いに理由がある、卽ち聞くものをして離四句とか、摩訶衍とかいふことに執着させない爲に老婆心である、併しかく注釋するも又仰山の意に背くものであるかも知れぬ。

無門曰且道是說法不說法開口卽失閉口又喪不開不閉十萬八千

【和訓】無門曰く、且く道へ、是れ說法するか說法せざるか。口を開けば卽ち失し、口を閉づれば又喪す、開かず閉ぢざるも十萬八千。

〔講話〕『且く道へ、是れ說法するか說法せざるか』仰山和尙は彌勒の所で說法したといひ、又それが夢であつたといふ、畢竟和尙は說法をしたのかせぬのか、諸人者確かなとこが解るかな、『口を開けば卽ち失し、口を閉づれば又喪す』語默共に離徹に渉ると前の則にもあつたが、摩訶衍の法は一寸でも口を開いて言はんと擬すれば忽ち本分に蹉過して終ふ、さればとて口を緘ぢて言はなければ又大法を滅却して終ふ道理である、『開かざるも閉ぢざるも十萬八千』開いても失し閉ぢても喪するとすれば開かず閉ぢずであつたならば如何といふにそれも又大乘法を距ること遠くして遠しである十萬八千里どころか無量無數の距離がある、仰山和尙も已に夢中說法に於いて四句を離れ百非を絶すというてござる。

頌曰白日青天夢中說夢捏怪々々誑謼一衆

【和訓】頌に曰く、白日青天、夢中に夢を說く。捏怪々々、一衆を誑謼す。

〔講話〕『白日青天』青天白日眞晝間の明るい處に大乘法は歷然として現前して居る、これが見えぬのはお互に文字言句に執着して大乘の法を尋ねようとするからである、『夢中に夢を說く』仰山が夢を說くのも畢竟夢中の浮言である、仰山のみならず、天下の人喧々轟々として明けても暮れても夢

中に夢を說いて居るのである、一として取り止めのある確實なことがあらうか、國家百年の大計だとか、千古不磨の憲法だとが仰山らしくいうたけれども、悠久の天地に比すればいづれも皆一時の幻影に過ぎぬではないか、思量分別の上から悧口ぶつてヤレ宗教ぢやヤレ哲學ぢやと並べ立てた處で畢竟夢中の夢物語に過ぎぬのである、『捏怪々々』さればいづれも雲を摑む樣な話ばかりで、第三位だの彌勒だのと並べ立てる道具も皆捏怪である、それを以つて仰山は『一衆を誑謼す』一山の大衆を誑らかさうとせられる樣であるか、誰が其の手にのるものか、餘人は知らず、此の無門ならばイキナリ仰山和尙を引き起して惡夢から覺醒させてやるであらうといふ程の勢を示した頌である。

第二十六則　二僧卷簾

清涼大法眼因僧齋前上參眼以手指簾時有二僧同去卷簾眼曰一得一失

【和訓】清涼の大法眼、因に僧齋前に上參す。眼、手を以つて簾を指す。時に二僧有り同じく去つて簾を卷く。眼曰く、一得一失。

〔講話〕『清涼大法眼』清涼大法眼とは江南清涼院の法眼和尙をいふ、羅漢桂琛の法嗣で餘杭に生れて姓は魯氏、名は文益、大法眼は其の諡である、法眼始め諸方に行脚して地藏院に到つて小憩して居つた、時に院主が出て來て種々と話をしてから將に辭し去らんとして門前まで來た時、見送つて來た院主が門の側にあつた石を指して此の石汝が心內にありや或は心外にありやと問うた、法眼は心內にありと答へると院主は笑つて貴僧は御苦勞千萬にもこんな重いものを持つて行脚せらる

るのかというた一言を聞いて飜然として悟る處あり、院主の只人ならぬを知つて師資の禮をとつて其の爐鞴に投じた、この院主とは卽ち桂琛和尙であつた、法眼は始め崇壽院といふに住したが、後江南の國主に請ぜられて清涼院に住して大いに化門を開いた、天下の雲衲霞袂其の高風を慕つて來り參ずるもの頗る多く、遂に法眼宗の一派を成すに至つた『因に僧齋前に上參す、眼手を以て簾を指す』此の大法眼の前へ僧が齋前卽ち午飯前に參じた、法眼は何とも云はずに手を以つて側らの簾を指した、これが法眼和尙常用の作略である、無言の大說法である『時に二僧あり、同じく去つて簾を卷く』其の時二人の僧が立つてスル〳〵と簾を卷いた、日本の清少納言も矢張り此の樣なことをやつたといふが、それとこれとは大いに樣子が違つて居る、一體此の二僧は法眼の眞意が解つたであらうか、自分達では一ぱし解つたつもりで此の樣な眞似をやつたであらうが、其の實大いに蹉過して居るのではあるまいか、鸚鵡の物眞似でなければ可いが『眼曰く、一得一失』流石一宗の開祖である、一見辨見に二人の手許を見分けて一人は得で一人は失であるといつた、同じく簾を卷いたものに對して、得失の差別を立てたのはどういふ譯であらうか、同中に異あり異中に同あり、銀盌に雪を盛り白鷺蘆花の中に藏るゝが時は天地一色であつて何等の差別もなき樣であるけ



第二十六則　二僧卷簾

れども而かも銀盌は銀盌、雪は雪、白鷺は白鷺蘆花は蘆花でチャンと區別がある、併し法眼が差別的見解を以つて兩者を見たのである等と、例の妄想に執はれては簾を卷いた僧の手許さへも會得し得られるものではない。

無門曰且道是誰得誰失若向者裏著得一隻眼便知清涼國師敗闕處然雖如是切忌向得失裏商量

【和訓】無門曰く、且く道へ、是れ誰か得、誰か失。若し者裏に向つて一隻眼を著得せば、便ち清涼國師敗闕の處を知らん。然も是の如くなりと雖も、切に忌む得失裏に向つて商量することを。

〔講話〕『且らく道へ是れ誰か得、誰か失』法眼和尚は二僧の簾を卷くを見て一得一失といふたが、一體誰が得で誰が失であらうか、得といひ失といふ異つた處があつたら各自でそれを指摘するが可い。『若し者裏に向つて一隻眼を著得せば』若し一得一失の當處に於いて心眼を豁開して其の眞相を看破し得るものがあれば、それこそ『便ち清涼國師敗闕の處を知らん』清涼法眼和尚が大いに失策を演じて居ることを見付けるであらう、一體法眼は何を失策したのであらうか、一得一失といふたのが差別的見解であるから惡いといふのか、若しそれならば前にもいふ通り法眼は無眼子の漢が妄想する樣な差別觀に執はれて居りはせぬ、然らば手を以つて簾を示したのが惡いか、それとても語默に渉らざる活作略であつて、兎角の評を加ふべきではない、作麼生か敗闕の處、それは只諸人者の參究に任せて置く、『然かも是の如くなりと雖も切に忌む得失裏に向つて商量することを』者裏に向つて一隻眼を著得せば云々といふを聞いて、直に法眼が一得一失といふたのが怪しい、あそこに敗闕があるのであらう等と妄想して思量分別を逞うすることは大禁物である、只管に打坐して法眼の的意如何と工夫することが肝要である。

頌曰捲起明々徹太空太空猶未合吾宗爭似從空都放下綿綿密々不通風

【和訓】頌に曰く、捲起明々として太空に徹す、太空猶は未だ吾が宗に合はず、爭か似かん空より都て放下して、綿々密々風を通ぜざらんには。

〔講話〕『捲起明々として大空に徹す』法眼が簾を指した時、二僧が立つて簾を捲き上げた樣子は實に天晴れな振舞である、閃電光の如く擊石火の如くに敏活であつて而かも其の手際は明々として、大空に輝き渡つて居る、少しも昧ます處がないのは實に讃嘆に値する。『太空猶ほ未だ我が宗に合はず』併し其の太空に徹した働も實はまだ本分に合つて居らぬ、聊かでも手脚を弄すれば已に手脚邊に墮在する、我が宗の的意は一切の言句葛藤と絕して居る、されば『爭か似かん空より都て放下して綿々密々風を通ぜざらんには』寧ろ一切を放下し更に其の放下底をも放下して綿密に簾を垂れて微風をも通ぜぬのが何より本分に契當する方法である、憖ひに法眼が簾を指したり一得一失等というたので天下後世の學人が妄想の種となつたのである、所謂風なきに波を起し平地に骨堆を生ずるといふものであるから、學人は須らく法眼の手脚に迷はされぬ樣に綿々密々の室內にあつて至心に工夫するが可い。

第二十七則　不是心佛

南泉和尚因僧問云還有不與人說底法麼泉云有僧云如何是不與人說底法泉云不是心不是佛不是物

【和訓】 南泉和尚、因に僧問うて云く、還つて人の與めに說かざる底の法あり麼。泉云く、有り。僧云く、如何なるか是れ人の與めに說かざる底の法。泉云く、不是心、不是佛、不是物。

〔講話〕『南泉和尚、因に僧問うて曰く、還つて人の與に說かざる底の法ありや』南泉和尚のことは第十四則の斬猫の話の處に詳しく述べた筈である、或時僧が南泉に對して從上の諸聖が誰も嘗て說かなかつた深甚微妙の祕密法とでもいふべきものがあるであらうかと問うた、佛に三百餘會の說法あり、祖師に一千七百の公案があるといふが、尚ほこれに漏れた佛法があるかといふ問である、

此の僧不說底の法といふものを認めての問か、若くは南泉を勘過せん爲に強らにかゝる問端を起したのであらうか、それは一則全體の上に就いて研究すべきである。『泉曰く、有り』南泉は先づ大いに放行して示した、有るともあるとも不說底の法は乾坤に充ち滿ちて居るというて溺れんとする僧を執り付かせる爲に有といふ木片を與へた、『僧曰く、如何なるか是れ人の爲に說かざる底の法』果然として妄想漢であつた、矢張不說底の法といふものを引かゝへて放さうともせぬ、陸へ上つてからでも南泉の與へた木片に執り付いて足で泳ぐ樣子をして居る樣な醜態を演じて居る、一體人の爲めに說かざる底の法とは如何なるものでありませうかと南泉の放げ付けた塊を逐つて居る『泉曰く、不是心、不是佛、不是物』これは頗る面白い答話である、心が不說底の法か、さうでもない、然らば佛か、否、然らば一切萬物か、否々、不是心不是佛不是物が其の儘不說底の法である、不是心は心にあらず心にあらざるにあらず、不は否定の意味であつて又肯定の意味をも有することが、禪門獨特の文字驅使法である、法華經には心佛及衆生是三無差別とあり、禪門では普通卽心卽佛是心是佛等といふから此の心とか佛とかいふものが最も尊ひもので、これが不說底の法であらうといふ考が僧の頭の底にコビリ付いて居ることが分つたから、南泉が不是の二字を各の上に加へて否定された

叮嚀損君德
無言眞有功
任從滄海變
終不爲君通



のである、併し法華經の說く處、禪門普通に說く處が悪いのではない、不是心其の儘が不說底の法である、不是の二字は否定であるといふ考に固執して居つては南泉の眞意は會得することは出來ぬ、尙ほ南泉は心佛物の三の中に一切を包括させたのであるから狗も猫も草も木も一切萬物悉く不說底の法であることを知らねばならぬ。

無門曰南泉被者一問直得揣盡家私郎當不少

【和訓】無門曰く、南泉者の一問を被つて、直に得たり、家私を揣盡して、郎當少なからざることを。

〔講講〕『南泉者の一問を被つて』南泉和尙の處へ僧が還つて人の與に說かざる底の法ありやと問うた、南泉は此の問を受けて、『直に得たり家私を揣盡して郎當少からざることを』忽ち「不是心不是物不是佛」と家の財寶を悉く傾け盡して終つた、これ宗師家たるもの、爲人の慈悲であつて實に讃嘆すべきであるけれども、惜い哉、郎當少からずで、全體が失策だらけである、不說底の法を問うたのに不定心だの不是物だのと言句を費して說くのが抑ゝ間違つて居る、不說底の法ならば言語や文字を以つて詮はし得べき筈のものではない、郎當少からざるは當然のことである。

頌曰叮嚀損君德無言眞有功任從滄海變終不爲君通

【和訓】頌に曰く、叮嚀は君德を損ず、無言眞に功有り。任從らばあれ滄海は變ずれども、終に君が爲めに通ぜず。

〔講話〕『叮嚀は君德を損す』餘り物事を叮嚀にし過ぎると却つて君德を損ずるものである、支那の聖天子は法三章のみを以つて天下を治めた、無暗に法律の條項を多くしても民が免かれて恥なしといふ樣な狀態では却つて君の德を損ずるのみである、昔混沌王といふがあつて六形あれども六門を開かず、而かも天下はよく治まつたが、王の死後群臣が種々と細目に涉つて穿鑿した爲却つて國が亂れたといふ傳說があるが、南泉が不說底の法を問はれて不是心不是佛不是物と答へたのは矢張穿鑿が過ぎたのである、『無言眞に功あり』饒舌り過ぎると却つて言葉屑が出る、寧ろ無言で居つた方が不說底の法に契つて居つたであらうに、要らぬ手數を掛けて却つて功を立て損うて終つた、『任從らばあれ滄海は變ずれども』前二句の評によれば有言は道を明むる妨となるものである、無言にし

て始めて佛法的々の意旨を會することが出來るといふ樣に解せられるけれども、かく有言と無言とを並べ立てる有言を抑へ無言を揚げると學人は兎角其の無言に執着したがるものであるが、それは甚だ宜しくない、然らば何と心得たものであらうか、それは却々一朝一夕には說明し難い、所謂滄海變じて桑田となる時が來ても『終に君が爲に通ぜず』到底學人諸君の爲に眞箇の佛意祖意を通ずることは出來ぬ、只諸君が實參實究によつて自ら體得するに一任する外はない、南泉が家私を揣盡してすら尚ほ郞當少からずであつた、まして後世脚下未穩在の僧侶達が說法だの提唱だのと偉さうに云つても、樣に據つて胡盧を畵くことさへ覺束ないものである、參學の諸高流、彼等の閑言句に惑はされてはならぬぞ。

第二十八則　久響龍潭

龍潭因德山請益抵夜潭云夜深子何不下去山遂珍重揭簾而出見外面黑却回云外面黑潭乃點紙燭度與山擬接潭便吹滅山於此忽然有省便作禮潭云子見箇甚麼道理山云某甲從今日去不疑天下老和尚舌頭至明日龍潭陞堂云可中有箇漢牙如劍樹口似血盆一棒打不回頭他時異日向孤峯頂上立吾道在山遂取疏抄於法堂前將一炬火提起云窮諸玄辨若一毫致於太虛竭世樞機似一滴投於巨壑

將二疏抄一便燒於レ是禮辭

【和訓】龍潭因に徳山請益して夜に抵る。潭云く、夜深けぬ、子何ぞ下り去らざる。山遂に珍重して簾を掲げて出づ。外面の黑きを見て却回して云く、外面黑し。潭乃ち紙燭を點じて度與す。山接せんと擬す、潭便ち吹滅す。山此に於いて忽然として省有り、便ち作禮す。潭云く、子箇の甚麼の道理をか見る。山云く、某甲今日より天下の老和尚の舌頭を疑はず。明日に至つて、龍潭陞堂して云く、可の中、箇の漢有り。牙、劍樹の如く、口、血盆に似たり。一棒に打てども頭を回さず。他時異日孤峯頂上に向つて、吾が道を立すること在らん。山遂に疏抄を取つて、法堂前に於いて、一炬火を持つて提起して云く、諸の玄辨を窮むるも一毫を太虚に致くが如く、世の樞機を竭すも、一滴を巨壑に投ずるに似たりと云うて、疏抄を將つて便ち燒いて、是に於いて禮辭す。

〔講話〕『龍潭因に徳山請益して夜に抵る』龍潭は澧陽龍潭寺の崇信和尚のことで、青原下第三世の祖、天皇道悟の法嗣である、もと渚宮の餅屋の子であつたが天皇道悟に就いて參學して佛智見を發得し、龍潭に於いて盛に宗風を擧揚した、徳山のことは第十三則に於いて述べて置いた通り、所謂周金剛と稱せられた程金剛經の研究に沒頭した人で「後得智の中に千劫に佛の細行を學んで然る後成佛す」と考へて居つた處が、南方では盛に即心即佛といふことを唱道するものがあると聞いて、大いに之を說破するつもりで金剛經の抄疏を背負つてスタ〳〵と出掛けた、澧州へ來て只ある茶屋で腹慥へをしようと思つて腰を掛けた、禪宗では普通の齋時の外に小食をするのを點心といふ、腹が減つたり身體に異狀があるとどうしても心が落ち付かぬものである、そこで心を點ずる、即ち心を落ち付ける爲に小食をするのである、徳山が茶屋の老婆に餅を乞うて點心をしようとすると老婆は「貴僧が背負つて居るものは何だ」と問ふので何心なく「これは金剛經である」といふと老婆は「金剛經には過去心不可得現在心不可得未來心不可得といふことがあるさうだが貴僧は餅を食つてどの心を點じようとする」のかといふ、徳山偉いことをいふ婆があるものだと驚いたが、茶屋の老婆が此の樣なことをいふ處を見ると定めし此の邊に勝れた師家が居るに違ひないと思つたので「此の邊に偉い知識が居らるゝか」と老婆に尋ねると、「こゝから五里ばかりの處に龍潭和尚が居る」と

いつたので、徳山は早速龍潭の門を叩いて、「久しく龍潭と響く、到り來るに及んで潭も見えず龍も亦た現ぜず」と云つた久響龍潭といふ此の則の題目は卽ちこゝが出處である、龍潭は之に答へて「子龍潭に到れり、」お前は已に龍潭の深味へはまり込んで居るではないかといつた、この問答をよく味つて見ると面白いが餘り長くなるから略して本文の講話に移らう、龍潭因に徳山請益して夜に抵る、徳山は其の儘龍潭の處で修行することになつたが或時龍潭に就いて參禪して居る中に夜になつた、請益は化益を請ふといふ意味で師の敎を請ふことである、『潭曰く、夜深けぬ、子何ぞ下り去らざる』龍潭がいふには、もう夜が深けた、お前はもう可い加減に歸つたらいゝではないか、『山遂に珍重して簾を掲げて出づ』徳山は然らばといふので挨拶をして簾外へ出た、珍重は僧が分れる時の挨拶で御機嫌ようといふ程の義である、『外面の黑きを見て却回して云く、外面黑し』外が眞暗なのを見て引返して、方丈外は眞暗ですよといふ、『潭乃ち紙燭を點じて度與す』龍潭和尚頗る親切である、自分で紙燭を點けて徳山に渡される、併し其の手許に氣を付けぬと飛んだ目に遇ふぞ、『山接せんと擬す』徳山が何氣なくそれを受け取らうとすると、『潭乃ち吹滅す』龍潭はフッと紙燭の灯を吹き消して終つた、果せる哉、親切らしく見せかけたのは計略の罠であつた、併し又其の罠が滿腔の慈愛か



ら流出したものであることを知らねばならぬ、灯を吹き消されたので大地黑暗々、一物の見るべきものもない、龍潭も見えず紙燭も見えぬ、『山此に於いて忽然として省あり』德山此の時忽然として悟つた、マンマと龍潭の計畫が圖に當つたのである、渡すべき何物もなく、受け取るべき何物もないのに德山が手を出したのは一期の失策であつたが、龍潭の吹滅に遇つて暗黑中に大光明を認めたのである、『便ち作禮す』畫龍點睛である、この作禮が無くては折角の悟が實を結ばぬ、『潭曰く、子箇の甚麼の道理をか見る』龍潭は更に慈眼を垂れて德山の悟つた跡方を點檢して、お前は何の道理を見て悟つたのかといふ、『山曰く、某甲今日より天下の老和尚の舌頭を疑はず』從來金剛經の意旨を最も尊いものと考へて、卽心卽佛等と說くものを外道天魔の樣に思つて居つたが、師の提撕によつて天下の大宗師家の說く處に眞理のあることを悟りました、今後は天下の老和尚達の舌頭を疑ひませぬと兜を拔いで脚下に身を投じた貌である、『明日に至つて龍潭陞堂して曰く、可の中箇の漢あり、牙、劍樹の如く、口、血盆に似たり』其の翌日龍潭が說法の坐に陞つて大衆一同に垂示せられた、此の大衆の中に一人の英靈の漢がある、其の牙は劍を竝べ立てた如く、其の口は血を盛る盆の如く、天下の大宗師家をも一口に嚙み殺す程の大力倆を持つて居る、『一棒に打てども頭を回らさず、他時異日孤峯頂上に向つて吾が道を立すること在らん』斯樣な英靈漢であるから一棒や二棒位ではビクともせぬ、高邁堅固な信念見識を持つて居るから、他日何人もより付くことの出來ぬ所の、一切の攀緣を絕したる孤峯頂上に於いて、吾が正傳の佛法を擧揚することであらうと、龍潭は極力德山の力倆を賞讚した、『山遂に疏抄を取つて法堂前に於いて一炬火を持つて提起して曰く』そこで德山は平生金科玉條の如くに尊重して居つた金剛經の疏抄を取り出し、片手に炬火を持つて提げて、『諸の玄辨を窮むるも一毫を太虛に致くが如く、世の樞機を竭すも、一滴を巨壑に投ずるに似たりというて疏抄を將つて便ち燒いて、是に於いて禮辭す』種々と經論の奧義玄旨を研究し盡しても、畢竟太虛の如き限なく廣い處に兎の毛一筋を置く樣なもので、到底及びも付かぬことである、又世間法の最も樞要な機關を窮め竭しても巨大な壑の中へ一滴の水を落した樣なもので、到底其の壑を水を以つて滿たす等といふことは思ひもよらぬ、學問智慧の力を以つて宇宙の眞相を研究めよう等といふことは人間の如き我見小見のもの〻爲し得べきことではない我が從來努力した金剛經の研究も畢竟之に類する無益のことであることを知つたというて、疏抄に火を點けて燒き捨てて終つて禮拜して退いた。

無門曰德山未出關時心憤々口悱々得々來南方要滅却教外別傳之旨及到澧州路上問婆子買點心婆云大德車子內是甚麼文字山云金剛經抄疏婆云只如經中道過去心不可得現在心不可得未來心不可得大德要點那箇心德山被者一問直得口似匾檐然雖如是未肯向婆子句下死却遂問婆子近處有甚麼宗師婆云五里外有龍潭和尚及到龍潭納盡敗闕可謂是前言不應後語龍潭大似憐兒不覺醜見他有些子火種郞忙將惡水驀頭一澆澆殺冷地看來一場好笑

【和訓】無門曰く、德山未だ關を出でざる時、心憤々、口悱々。得々として南方に來つて、教外外傳の旨を滅却せんと要す。澧州の路上に到るに及んで、婆子に問うて點心を買はんとす。婆云く、大德車子の內、是れ甚麽の文字ぞ。山云く、金剛經の抄疏。婆云く、只だ經中に道ふが如くんば、過去心も不可得、現在心も不可得、未來心も不可得と、大德那箇の心をか點ぜんと要す。德山者の一問を被つて、直に得たり口匾檐に似たることを。然も是の如くなりと雖も、未だ肯て婆子の句下に向つて死却せず。遂に婆子に問ふ。近處に甚麽の宗師か有る。婆云く、五里の外に龍潭和尚有り。龍潭に到るに及んで敗闕を納れ盡くす。謂つ可し、是れ前言後語に應せずと。龍潭大いに兒を憐んで醜きことを覺えざるに似たり。他の些子の火種有るを見て、郞忙して、惡水を將つて、驀頭に一澆に澆殺す。冷地に看來らば一場の好笑ならん。

〔講話〕『德山未だ關を出でざる時』此の評唱は德山が澧州の婆子に勘過せられた因緣を述べたもので、このことは本則の講話の始めに大體述べて置いたから讀めば解る筈である、こゝでは字義の解

釋と無門が此の因緣を引いて評唱に代へた意旨丈を述べて置かう、德山がまだ鄕關を出で行脚せず盛んに金剛經を研究して居た頃は、『心憤々口悱々』南方の卽心卽佛が氣になつて憤慨に堪へず、口言はんと欲して發せず、モグ〳〵とさせて居つた。『得々として南方に來つて敎外別傳の旨を滅却せんと要す』遂に志を立て、意氣揚々として南方へ行つて所謂敎外別傳と稱する輩を論破せんとした、『澧州の路上に到るに及んで婆子に問うて點心を買はんと要す』澧陽まで行つて路傍の茶屋の老婆に點心の餠を賣らんことを乞うた、『婆曰く、大德車子の內是れ甚麼の文字ぞ』車は匣の誤である、匣はハコのこと、大德は僧に對する尊稱である、旅の大德よ貴僧が背負つて居らるゝ匣の中は何の經文でありますかといふ問である、『山問く、金剛經の抄疏』これは金剛經の抄疏であると德山が答へた、『婆曰く、只だ經中に道ふが如くんば過去心も不可得現在心も不可得未來心も不可得と、大德那箇の心をか點ぜんと要す』老婆は更に、金剛經には過去心といふものも求めて得べからざるもの現在心も然り未來心も然り、元來心とは捉へて見ることの出來ぬものである、然るに何の心を落ち付けようとするのかと問ひ詰めた、『德山者の一問を被つて直に得たり口遍檐に似たることを』遍檐は反り曲つた擔ひ棒のこと、德山が老婆の詰問に遇つて反答が出來ず、口をへの字形に曲げた樣子をいふ、『然も是の如くなりと雖も未だ肯て婆子の句下に向つて死在せず』口遍檐の如くであつたけれども敢て老婆の言句に負けて自由を失つたのではない、『遂に婆子に問ふ、近處に甚麼の宗師かある』此の邊にどの樣な宗師家があるかと老婆に問うた、『婆曰く、五里の外に龍潭和尚あり』老婆は此處から五里許りの處に龍潭院崇信といふ大善智識があると敎へた、そこで德山は龍潭の處へ行つたが『龍潭に到るに及んで敗闕を納れ盡す』龍潭に遇つて商量した處が金剛經の研究で得た位の智識は何の役にも立たず、散々な敗北をした、『謂つべしこれ前言後語に應ぜずと』この邊からが無門の德山に對する批評である、これでは前の高言に似ず慘めな敗北である、『龍潭大いに兒を憐んで醜きことを覺えざるに似たり』龍潭は又龍潭で大いに拖泥帶水の手脚を勞せられた、紙燭を點けて自ら德山に渡したり、又それを吹き消したり等は甚だ醜いことであるけれどもこれも兒孫を憐んで斯樣な手段を取られたものと見える、『他の些子の火種あるを見て、郞忙して惡水を將つて驀頭に一澆に澆殺す』德山がまだ金剛經によつて得た空といふ妄想の火種を藏して居るのを見て惡水を頭からぶつ掛けて一と澆ぎに澆ぎ倒して終つた、却々用意周到な接し振であるけれども、『冷地に看來らば一場の好笑ならん』冷靜に之を觀察する時は、龍潭の作略も畢竟無用の閑手脚で好一場の好い笑ひ草で

ある。

頌曰聞名不如見面見面不如聞名雖然救得鼻孔争奈瞎却眼睛

【和訓】頌に曰く、名を聞かんより面を見んには如かず、面を見んより名を聞かんには如かず、然も鼻孔を救ひ得ると雖も、争奈せん眼睛を瞎却することを。

〔講話〕『名を聞んより面を見んには如かず』徳山は金剛經によつて佛法の名を聞いて居つたが未だ直接に佛法の眞面目に相見して居らぬ、名目のみに執着せずに寧ろ早く眞面目を徹見するが可い、『面を見んより名を聞かんには如かず』今度は反對に佛法の眞面目を見るよりも眞實に其の名を聞いた方が可いというた、これは紙燭を吹滅した端的をいうたのである、徳山は紙燭を點して佛法の光を目の當り見せ付けられて、これが佛法だナといふ執着を起した、これ所謂面を見たのである、それ故龍潭は紙燭を吹滅して其の面を奪つたのである、以上の様に解するのも一應の見方であるが、又之を簡單に徳山と龍潭との初相見のことに就いて詠じたもの と見ても可い、龍潭龍潭と名ばかり聞いて想像して居るよりも直接會つて見る方が可い、併し會つて見ると龍潭も評判程のこともないから矢張名を聞いたばかりの方が可いかも知れぬ、『然も鼻孔を救ひ得ると雖も』徳山は龍潭に會つて其の提撕によつて孤峰頂上に立つて宗風を擧揚するものであるといふ賞讃を蒙つて大いに鼻孔を救ひ得たけれども肝腎の眼目たるべき金剛經を燒却して終つた、イヤ金剛經等といふと却つて迷惑の種である、鼻孔を救得して眼睛を瞎却して終うた、併し其の鼻孔も本來失却底のものであることを忘れてはならぬ。

第二十九則　非風非幡

六祖因風颺刹幡有二僧對論一云幡動一云風動往復曾未契理祖云不是風動不是幡動仁者心動二僧悚然

【和訓】六祖因に風刹幡を颺ぐ。二僧有り對論す。一は云く、幡動くと。一は云く。風動くと、往復して曾て未だ理に契はず。祖云く、是れ風の動くにあらず、是れ幡の動くにあらず仁者が心動ず。二僧悚然たり。

〔講話〕『六祖因に刹幡を颺ぐ』六祖の慧能和尚のことは第二十三則で述べて置いたから茲には略する、六祖は五祖の法を傳へたが黃梅山の大衆が迫害する惧があつたので十五年間世を避けて居られたが、佛法興隆の時節が到來したので、山を出で廣州の法性寺へ行つた、其の時法性寺では印宗法師が涅槃經を講じて居つたといふことである、折柄門前に樹てゝあつた刹幡即ち說法の目標の幡が風に吹き颺げられて居つた、『二僧ありて對論す、一りは云く幡動くと、一りは云く風動くと、往復して曾て未だ理に契はず』二人の僧がそれを見て議論をして居る、一人は幡が動くのであるとい ひ一人は風が動くのであるといふ、互に論駁往復して果しがないがどちらも確かに理に契つた說を述べ得ない、『祖云く、是れ風の動くにあらず是れ幡の動くに非ず、仁者の心動くなり』六祖は二人の議論を聞いて居たが、二人共風とか幡とかいふ物に執はれて居るのを齒痒く思つて、それは風が動くのでもなければ又幡の動くのでもない、仁者貴僧達の心が動くのであるといつた、事實の上からいへば風の動くといふのも道理があり、幡の動くといふのにも道理があるけれど兩者が對立して論ずる日になれば水掛論であるから、六祖は一段と高所に立つて心が動くのであると一刀兩斷の裁決を與へた、二僧はいづれも外界の物に着眼して內界の心を忘れて居つたから、六祖は三界唯一心心外無別法といふ立場に立つて仁者の心動くなりと二人の注意を內へ引き戻した、併し乍ら風動幡動が共に不可なりとすれば心動も又不可である、即ち前者は外界に執はれ後者は內心に執はれて居るからである、六祖の眞意は其の樣な內外物心の兩邊に涉つた解釋ではないが、それを今茲に文字の上に說明して見た處で結局一場の戲論に過ぎぬから、それは學人が各自に參究するに任せること

とする『二僧悚然たり』二僧は六祖の裁決を聞いてビツクリして懼を懷いた、何となく冒し難い威嚴に打たれたのであらう。

無門曰不是風動不是幡動不是心動甚處見祖師若向者裏見得親切方知二僧買鐵得金祖師忍俊不禁一場漏逗

【和訓】　無門曰く、是れ風の動くにあらず、是れ幡の動くにあらず、是れ心の動くにあらず、甚れの處にか祖師を見ん。若し者裏に向つて見得して親切ならば、方に知る、二僧鐵を買うて金を得たり。祖師忍俊不禁にして、一場の漏逗なること。

〔講話〕『是れ風の動くにあらず、是れ幡の動くにあらず、是れ心の動くにあらず』六祖は二僧の風動幡動を否定したが、無門は自己の見識を以つて更に六祖の心動までも否定して終つた、然らば『甚れの處にか祖師を見ん』六祖の面目は潰れて終ふ筈である。何處に六祖の立場があるのかと又自ら反問した『若し者裏に向つて見得して親切ならば』若し風幡心の三者共に動ぜざる理由を親しく見得することが出來たならば『方に知る二僧鐵を買うて金を得たり』それこそ二僧は鐵を買ふつもり



第二十九則　非風非幡

で金を得る樣な望外な幸を得たものといふべきである、二僧が爭つて居つたのはホンの其の場の冗談半分の議論で宇宙の本體だの佛法の的意だのといふ、大切なことを研究して居つたのでないのに、而かも者裏に向つて本分の事を見得したならばそれこそ思ひ掛けない掘り出しものである、『祖師忍俊不禁にして一場の漏逗なることを』忍俊不禁とは俊發怜悧なものは他人がテキパキと事を取り運び得ぬのを忍んで見て居ることが出來ぬをいふ、二祖は二僧の風動幡動といふつまらぬ枝葉の議論を見るに見兼ねて仁者の心動ぜりと横鋒を入れたが、それも二僧達の議論と五十歩百歩の失策である、漏逗は漏れ逗るで失策缺點のこと。

頌曰風幡心動一狀領過只知レ開レ口不レ覺二話墮一

【和訓】頌に曰く、風幡心動、一狀に領過す。只だ口を開くことを知つて、話墮することを覺えず。

〔講話〕『風動心動』二僧は風動幡動といひ、六祖は心動というた、其の一則全體を無門は一句に引括めて斯樣に頌を起したのである『一狀に領過す』これは裁判の判決をするに同罪のものは一狀の判決書で片付けて終ふ意味の語であるが、此處では二僧も六祖も畢竟内外物心の對待邊に執着して居るのであるから同罪に處すべきであると抑へる意味に用ひたのである『只口を開くことを知つて、話墮することを覺えず』されば二僧も六祖も無暗に口を開いて議論をすることは知つて居てもそれが皆言ひ損ひである、失策であることに氣が付かぬ、併し二人の僧は只の話墮であるが六祖の話墮は、慈悲の餘りの話墮である、實に其の境界には雲泥の差がある、それを區別せずに一等に貶し去つたのは無門が活作略である、此の處無門和尚大出來と申すべきである。

第三十則　卽心卽佛

馬祖因大梅問如何是佛祖云卽心卽佛

【和訓】　馬祖因に大梅問ふ。如何なるか是れ佛。祖曰く、卽心卽佛。

〔講話〕『馬祖因に大梅問ふ』馬祖は六祖慧能和尙の法孫で南嶽懷讓和尙の法嗣である、江西馬祖山に法幢を建てゝ門風大いに榮え、八十餘人の善智識を打出したが、就中百丈懷海、南泉普願、及び此の則に出る大梅法常等は最も傑出した人である、當時湖南石頭の希遷和尙と竝んで禪界の雙璧と稱せられた、大梅は浙江省大梅山の法常和尙のことで、初め馬祖山に在つて道一和尙に就いて卽心卽佛の趣旨を了り、後寧波府の南七十支那里の大梅山中なる梅子眞の舊居に隱れて出です、或僧が之を發見して馬祖に告げると、馬祖は一僧を遣はして大梅を訪問させた、僧は大梅に遇つて「和尙什麼を得てか此の山に住す」と問うた、大梅云く「馬大師我に向つて適ふ卽心卽佛と、故に我れ此の山に住す」僧云く、「馬大師近日又非心非佛といふ」大梅云く「這の老漢人を惑亂して了期あらず、任他れ非心非佛、我は只管に卽心卽佛と、僧が此の旨を歸つて馬祖に告げると馬祖は喜んで「梅子熟せり」といつて其の技倆の卓越せるを賞揚したといふ、サテ此の則は法常が馬祖の下で修行して居つた時の問答で、馬祖は常に卽心卽佛を以つて學人を接得したので、斯樣な問答は他の人との間に屢〻繰り返されたであらうけれども、大梅はこれまで實參實究の功を積んで、此の時眞箇に馬祖の卽心卽佛を了悟したのであるから問にも答にも最も力が籠つたものである、それ故無門は特に一則として評唱を加へたのである『如何なるか是れ佛』これが大梅の問である、佛とは何ぞやといふ疑問は三尺の童子の胸中にも起り八十の老翁の胸中にも起るが、各〻其の意味に深淺がある、今大梅は此の平凡な問を提げて馬祖に對したけれども多年の工夫を經た上の問であるから、馬祖にして若し的確な答話を與へなかつたならば忽ちにして其の鼻孔を撚ち曲げられたであらう『祖曰く、卽心卽佛』流石に六祖以後禪門の大棟梁たる馬祖であるから、一言の下に萬機を截斷する底の明快な答を與へた、佛とは遠く十萬億土の彼方にあるのでもなく、三十二相八十種好といふ樣な制限のある名目を以つて形容し得るものでもない、吾々の此の心此の儘が佛である、人々本具の心が所謂

法報應三身を具足せる佛である、「傀儡師首に掛けたる人形箱、佛出さうと鬼を出さうと」といふ道歌があるが吾々の心は傀儡師即ち人形賣の持つて居る箱であつて、心次第で鬼ともなれば佛ともなる、馬祖は大梅に對して此の佛心を取り出して示されたのである、迷ふが故に三界は城なり悟るが故に十方は空なりともいつて、吾々が鬼の相を現はす時は迷ふが故であり、佛の相を現はすのは悟るが故である、而して悟とは自己の本心を徹見することであるから吾々の心の本體は佛である、併し乍ら其佛は生佛とか迷悟とかいふ樣な相對上のものではないといふことは今更辨解するまでもない。

無門曰若能直下領略得去著佛衣喫佛飯説佛話行佛行即是佛也然雖如是大梅引多少人錯認定盤星爭知道説箇佛字三日漱口若是箇漢見説即心即佛掩耳便走

【和訓】　無門曰く、若し能く直下に領略し得去らば、佛衣を著け、佛飯を喫し、佛話を説き、佛行を行じ、即ち是れ佛ならん。然も是の如くなりと雖も、大梅多少の人を引いて、錯つて定盤の星を認めしむ。爭か知らん、箇の佛の字を説くも、三日口を漱ぐと道ふことを、若し是れ箇の漢ならば、即心即佛と説くを見ば、耳を掩うて便ち走らん。

〔講話〕『若し能く直下に領略し得去らば』若し馬祖の所謂即心即佛の旨を領解了悟し得たならば、何人でも其の身其の儘光明遍照の佛であるから、『佛衣を著け佛飯を喫し佛話を説き佛行を行じ、即ち是れ佛ならん』軍服を着けて居るものは軍服のまゝが佛衣、唐棧の袷に前垂掛のものは其の儘が佛衣である、又領略底の眼から見れば鼠を捕へて喰ふ處の猫はこれ佛飯を喫して居るのであり、賊を見て吠ゆる處の犬は佛語を説いて居るのである、いづれも皆即是佛である、『然も是の如くなりと雖も大梅多少の人を引いて錯つて定盤の星を認めしむ』定盤星は秤の目盛のことで、大梅は本則にある樣な問答によりて本分の事を悟つたといふが後世の學人達はそれを傳へ聞いて成程即心即佛が即ち佛である、吾等の本心其の儘が佛であると言句に執着をして得々として居る、何んぞ知らんそれは恰も秤の目盛を見てそれが重さであると思ふ樣なものである、目盛は重さを表はす印に過ぎずして、重さは何處までも重さである、目盛を以つて重さであると思ふのは錯であると同じく、即心即佛は何處までも即心即佛であつて佛其のものではなく眞如其のものではない、後人は大梅の爲に定盤星を重さ其の物と錯り認めさせられて居る、『爭でか知らん、箇の佛の字を説くも三日口を漱



ぐと道ふことを』佛の一字も心田の汚れといふことがあるが大梅も馬祖も如何なるか是れ佛だの卽心卽佛だのといふて得意になつて居るけれども、抑ゝ眞如法性には佛といふ樣な名稱を付けるのも已に餘計なことである、所謂混沌に眉を畫き無垢の白璧に瑕を着ける樣なものである、されば佛といふ字を說いても口の汚れであるから三日も四日も口を漱がなければならぬ、而かも一旦ついた汚れは容易に取り去ることが出來ぬ、『若し是れ箇の漢ならば』若し眞箇徹證の漢ならば、眞に悟の開けた程のものならば、『卽心卽佛と說くを見ば耳を掩うて便ち走らん』卽心卽佛の一語を聞いたばかりでも、耳の汚れであるから、聞かぬ先に耳を掩うて逃げ出すであらうといふ、この評唱は無門が佛法の的意は文字言句を以つて詮し得べきものでなく、假ひ佛といふ簡單な語を用ひても已に本分に蹉過するものである所以を力說したのである。

頌曰青天白日切忌尋覓更問如何抱贓叫屈

【和訓】 頌に曰く、青天白日、切に忌む尋覓することを。更に如何と問へば、贓を抱いて屈と叫ぶ。

〔講話〕『青天白日』佛法の空には一點の雲もない、滿天碧瑠璃の如く澄み渡つて居る、卽ち佛といふ雲も卽心卽佛といふ烟もない『切に忌む尋覓することを』さればかゝる青天白日の下に悟だの迷だの、三身だの眞如だのと尋ねまわることは大禁物である、尋ね覓むべき何物もない、遍界廓落として一纎翳をも留めぬ『更に如何と問へば』大梅法常和尙ともあらうものが、如何にまだ修行中のことであつたとはいへ、佛法の大海は一波起らぬ極めて湛々たるものであつて、修行だの證果だの生死だの涅槃だのといふのは畢竟風なきに浪を起す樣なものであるといふ道理の解らぬ筈はないのに、故らに如何なるか是れ佛等と問ふのは『臟を抱いて屈と叫ぶ』で、泥棒が贓品を持つて居りながら裁判官に對して、それは無實の罪である、自分を捕縛するのは屈辱であるといふ樣なものである一體佛とは各人本具の法性であつて之を佛と名けるも當らず、聖といふも當らず、卽心卽佛といふも非心非佛といふも凡て瑕なきに瑕を求むるのである、斯樣な結構な法性を持つて居ながら大梅和尙が如何なるか是れ佛と問うて之を外に求め、その名を問ふたのは、卽ち贓を抱いて屈と叫ぶものであると、無門は例によつて自己の力量を以つて本則の面目を描き出した、これ無門精一杯の處であるが、學人諸士は又諸士の精一杯を以つて此の則を拈弄して見るが可い。

第三十一則　趙州勘婆

趙州因僧問婆子、臺山路向甚處去、婆云驀直去、僧纔行三五步、婆云好箇師僧又恁麼去、後有僧擧似州、州云待我去與爾勘過這婆子、明日便去亦如是問、婆亦如是答、州歸謂衆曰、臺山婆子我與爾勘破了也

【和訓】趙州因に、僧婆子に問ふ、臺山の路甚れの處に向つてか去る。婆云く、驀直に去れ。僧纔かに行くこと三五步。婆云く、好箇の師僧、又た恁麼にし去る。後に僧有つて州に擧似す。州云く、待て我れ去つて爾が與めに這の婆子を勘過せん。明日便ち去つて、亦た是の如く問ふ、婆も亦た是の如く答ふ。州歸つて衆に謂つて曰く、臺山の婆子

我れ儞が與めに勘破し了れり。

〔講話〕『趙州因に僧婆子に問ふ』趙州のことは前に屢出て居る、趙州門下の一僧が五臺山の麓の茶屋に居る婆さんに向つて『臺山の路甚れの處に向つてか去る』と問ふた、臺山は五臺山のことで文殊菩薩の淨土であると稱せられ、觀世音を祠つた補陀落山と共に支那の著名な靈地である。五臺山下の婆子は無著和尚に就いて文殊の前三三後三三の話を悟つたといふ女禪客で五臺山を訪ふ雲衲は屢々此の婆子の爲に勘過せられたものである。此の僧もそんな婆さんが居やうとは知らぬから浮乎道を聞いた『婆曰く、驀直に去れ』眞直に行つたが可いと、これは一應普通の答の樣であるが、而かも婆子は鋭い目で僧の脚下を睨んで居る『僧纔かに行くこと三五步』僧はまだ此の婆子の何者であるかを知らぬからいはれるまゝに眞直に五六步行くと『婆曰く、好箇の師僧又た恁麼にし去る』老婆は好い和尙の癖に又あの樣に人の口端に乘つてノコ〳〵步いて行くよと冷笑した、他の語呂に轉却せられる樣では此の僧も矢張り大した代物ではないといふ意味を含んで居るのである『後に僧有つて州に擧似す』これも婆子に勘過せられたお仲間であらう、餘り忌々しいので趙州和尙に此の話をしたものと見える『州曰く、待て我れ去つて儞か與に這の婆子を勘過せん』趙州は僧の話を聞



第三十一則　趙州勘婆

いて、それでは山僧が一つ其の厄介な婆さんをウンと吟味してやらう、一同山僧が手許を見て居るが可いといふので其の翌日趙州自ら山下の老婆の處へ出掛けられた。『明日便ち去つて亦た是の如く問ふ、婆子も亦た是の如く答ふ』婆子に向つて趙州は他の雲衲達がする通りに、「臺山の路甚れの處に向つてか去る」と問ふと、婆子も「驀直に去れ」と答へたものと見える、山下の老婆がまさか趙州和尚の顏を見知らぬ譯でもなからうが、果して何いふ意旨であつたか、それは婆子に參じて見なければ解らぬ、趙州が又他の僧と同じ様に眞直に歩き出されると婆子は「好箇の老僧也た恁麽にし去る」とでもいふたものであらう、趙州の意旨も大いに研究ものである。『州歸つて衆に謂つて曰く臺山の婆子我れ儞が與に勘破し了れり』趙州は其の儘歸つて大衆に告げて申された、臺山の婆子というて皆が大騒ぎをするのでどれ程怜悧俊潑な婆子かと思つたら案外につまらぬものであつた、何の苦もなく山僧が諸人者に代つて勘破して來たぞ、頭のギリギリから足の爪先まですつかり見屆けてやつたといふた、趙州は一體どうして婆子を勘破せられたであらうか、此の的意は却々難解であつて、古來參學の高流いづれも大いに苦心をしたものである、無門の評唱に就いて研究したならば或點までは見得することが出來るであらう。

無門曰婆子只解座籌帷幄要且箸賊不知趙州老人善用偸營劫塞之機又且無大人相檢點將來二俱有過且道那裏是趙州勘破婆子處

【和訓】無門曰く、婆子只だ座ながら籌を帷幄に解して、要且つ賊を著くることを知らず、趙州老人善く營を偸み、塞を劫すの機を用つて、又た且つ大人の相無し。檢點し將ち來れば二り俱に過有り。且く道へ、那裏か是れ趙州婆子を勘破する處。

〔講話〕『婆子只だ座ながら籌を帷幄に解して要且つ賊を著くことを知らず』史記に「漢の高祖曰く、夫れ籌を帷幄に運らして勝を千里の外に決す、吾れ子房に如かず」とあるが、老婆が五臺山下にあつて通りかゝりの雲衲を勘破するのは恰も智略縱横の謀將が幕の内にあつて計を運らす樣なもので、天下の衲僧皆敗北して終ふ、併し乍ら趙州といふ老賊の爲に財產をスッカリ奪はれたことは知らずに居る、婆子が趙州に對しても他の雲衲に對すると同じ樣な眞似をして居るのは既に手許が

空しい證據である、『趙州老人善く營を偸み塞を劫すの機を用つて又た且つ大人の相なし』前には婆子を評したが今度は趙州の作略を評した、營とは軍隊の本營のこと、大將の居る陣所である、塞は要塞、城、壘の意味で、趙州は敵の本營を奪ひ取つたり、要塞を劫かすことは頗る上手で、其の樣な場合には機略縱横であるけれども、餘りコセ付き過ぎて悠々たる大人の相がない、婆子を勘破する爲に慈悲の手段を用ひ過ぎる『檢點し將ち來れば二り倶に過あり』本則の作略を仔細に檢査して見ると、婆子が僧を勘破し趙州を勘破した手許にも過があるが、趙州が又衆の爲に等とつまらぬ親切氣を出して一山の主ともあらうものが門前の婆さんの處までワザ〳〵出掛けて行つて問答するのも又大いに過つて居る『且つ道へ、那裏か是れ趙州婆子を勘する處』それは兎も角趙州和尚はどの樣に婆子を勘破せられたであらうか、趙州が老婆の處へ行つて他の雲衲達と同じ樣な問答をして來たのがどうして婆子を勘破したことになるのか、此處は參學の諸人者が各自に實參實究して始めて得べき處であつて、兎や角と玆に文字を費して說明しても到底其の一斑を描き出すことも出來ぬ、強いて之に點劃を着けて見やうならば脚下未穩在のものは婆子の爲に飜弄されて所謂行くこと三五歩であつたが、大悟底の趙州は行くこと三五歩を以つて婆子をして好箇の老僧又た恁麽にし去ると兜を趙州の軍門に脫いで降參させて居るとでもいふべきであらう。

頌曰問既一般、答亦相似飯裏有レ砂泥中有レ刺

【和訓】　頌に曰く、問既に一般、答も亦た相ひ似たり。飯裏に砂有り、泥中に刺有り。

〔講話〕『問旣に一般』雲衲達の問も趙州の問も其の形式に於いては一般である、何も異つた處はない『答も亦た相似たり』老婆の答も亦同樣である、平雲水と一山の主との問に何等の區別をも立てぬ處に婆子の見識がある『飯裏に砂あり』趙州と老婆との問答の上に就いていへば趙州が腰を低くして平雲水と同じ樣に問うた態度は頗る謙遜であるけれども、而かも腹に一物あつて婆子の脚下を睨んで居るのは、美味しい御馳走の中に砂が混じて居る樣なもの、浮乎とは呑み込めない『泥中に刺あり』老婆も又穩かに同じ樣な應對をして居るけれども、常に問ふ人の腹の底を見透かして居るのであるから、一つ違へば忽ち取拉ぎ兼ねぬ怖しい刺を持つて居る、趙州も婆子も互に飯に砂を混へ泥中に刺を藏して對機を勘破するのであるから、穩かな樣でも却々油斷はならぬといふのが一應頌の意味であるが、されば其の砂は何處にあるであらう、刺とはどんなものであらう等と探し廻る

樣ではまた婆子の爲に勘過せられるを免がれぬぞ、無門の作略は無門の作略として置いて、之に付き廻ることなく、各人は各自に自己の力を以つて趙州や婆子の手許を參究して見るが可い、

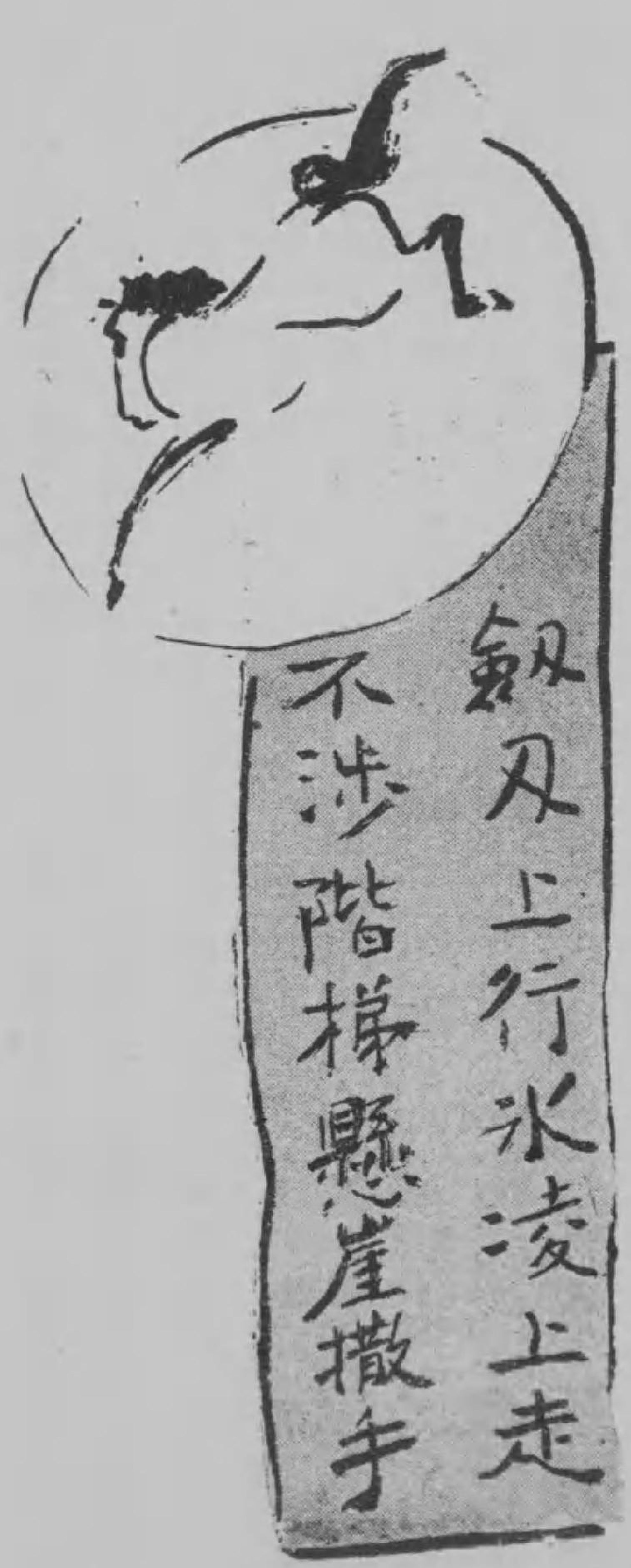
第三十二則　外道問佛

世尊因外道問不問有言不問無言世尊據座外道贊歎云世尊大慈大悲開我迷雲令我得入乃具禮而去阿難尋問佛外道有何所證贊歎而去世尊云如世良馬見鞭影而行

【和訓】世尊因に外道問ふ、有言を問はず、無言を問はず。世尊座に據る。外道贊歎して云く、世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて、我をして得入せしむと云うて、乃ち禮を具して去る。阿難尋いで佛に問ふ、外道何の所證有つてか贊歎して去る。世尊云く、世の良馬の鞭影を見て行くが如し。

〔講話〕『世尊因に外道問ふ』世尊は釋迦牟尼世尊のことである、外道は「心外に法を見る之を外道

といふ」と或る經に說いてあるが必ずしも心外に法を見る所謂唯心論に反對なものばかりを外道といふのではない、卽ち世尊出世の前後に六派九十二種の異說があつたが、それ等を指して佛弟子達が一般に外道と稱したのである、其の外道の中の一人が或時世尊に向つて次の如き問を發した『有言を問はず無言を問はず』有言とは華嚴阿含方等般若法華涅槃等と世尊が從來橫說竪說せられたがそれ等の言敎に關する質疑を訊さうとするのではなく、又一切の言句を離れた默然照會といふ消息に就いても尋ねるのではない、有言無言を超絕した端的畢竟如何といふ難詰である、此の外道も却却油斷のならぬ曲物で、世尊の雙劍を奪つて自らそれを振り翳して迫つて來た。併し外道は天晴有無の對待を絕したつもりで居るが矢張外道は外道丈のもので有無超越といふ處を最上の妙境界とでも思つて居ると見えて、斯ういうて行つたら釋迦牟尼佛も返答に困るであらうといふ態度がありありと見える『世尊座に據る』所が世尊は泰然自若たるものである、有とも無とも迷とも悟とも說かず、良久說法の座に据つたまゝであつた、こゝが世尊の勝れた處で、有言無言を超越した端的は露堂々に其處へ擴げられたのである、默然據座の當處に八萬四千の法門が橫說竪說せられて居る、維摩も默然として佛法の正令を全提したことがあるが何というても默然據座の本家は釋尊である、「外



第三十二則　外道問佛

道贊歎して曰く、『世尊大慈大悲』外道も有言を問はず無言を問はず等と向上底から問端を起して來る程であるからで已に佛事門中の消息も充分に知つて居つたであらうが、まだ一重の薄皮を被つて居つた、其の薄皮が至極厄介なもので、今日でも相當に力倆を具して居ながら薄皮がある爲に自由を束縛せられて居るものが少くない、此の外道は幸にも世尊に對して敢然として上述の如き問端を起して行つたお蔭で、親しく世尊據座の提撕を受けて豁然として薄皮を破り去ることが出來たのである、從來外道の身邊を包んで居た迷雲が世尊の慈風に遇うて奇麗に吹き拂はれて本具の佛身を現はすことが出來た、實に廣大なる世尊の慈悲は、斯く偏見に執はれた外道さへも濟度し給ふたのである『我が迷雲を拂うて我をして得入せしむと云うて、乃ち禮を具して去る』外道は佛のお蔭で大道に證入することの出來たのを心から感謝して禮拜をして退いた『阿難尋いで佛に問ふ、外道何の所證あつてか贊歎して去る』上述の問答を聞いて居つた阿難尊者は外道證悟の眞相が解らなかつたと見えて世尊に質問した、阿難は世尊の十大弟子の一人で多聞第一といはれた程の人であつたが、記憶力はあつても修行力がまだ足らなかつたから世尊據座外道得入の端的を會得することが出來なかつたものと見える、併し人々個々圓成であつて、而かも其の端的は各人各箇獨特のものであるから、外道の端的阿難知らずといふても必しも阿難が外道に劣つて居たとばかり斷ずる譯にも行くまい、外道には外道の面目あり、阿難には阿難の鼻孔があるから、阿難は自己の鼻孔を以つて外道の面目を窺がはうとしたのである、阿難は世尊に向つて、一體外道は何を證つてあの樣に贊歎して去つたのでありますかと極めて尋常な態度で尋ねた『世尊曰く、世の良馬の鞭影を見て行くが如し』經に馬に四種類あることが說いてある、最も愚鈍な馬は鞭の痛みが骨に徹して始めて走る、次は肉に徹して走る、次は鞭が毛皮に觸れると直ちに走る、最も鋭敏なる馬は鞭を振り上げる其の影を見た丈で走り出すといふが、人間にも恰ど此の樣な銳鈍の差がある、今此の外道は實に銳敏怜悧の漢であつて、我が一言一句も說かずして據座した當處に法の眞面目を了得した、これ實に良馬が鞭影を見て直ちに走る樣なものである、阿難が外道入證の當處に於いて其の端的を觀破することの出來なかつたのは良馬の鞭影を見て走るに比して如何、世尊は暗に阿難を鈍馬に比して此の語を以つて答へられたのであると解しても必しも不當ではないが、左樣な解釋は兎角學人を謬り易いから、只文字に現れた處によつて驀直に佛意祖意に證入することを努めるが可い、否其の文字をも超絕して世尊の眞面目に相見することが最も肝要である。

無門曰阿難乃佛弟子宛不如外道見解且道外道與佛弟子相去多少

【和訓】 無門曰く、阿難は乃ち佛弟子、宛も外道の見解に如かず。且らく道へ、外道と佛弟子と相ひ去ること多少ぞ。

〔講話〕『阿難は乃ち佛弟子、宛も外道の見解に如かず』阿難は世尊の直弟子であるから佛説佛意は充分に承知して居る筈である、然るに商賈人の阿難の見識が素人の外道よりも劣つて居た、これは公案の表面であるが、兎に角門外漢が專門家よりも事に通じて居たとすれば專門家たる阿難の面目は丸潰れとなる譯である『且らく道へ外道と佛弟子と相ひ去ること多少ぞ』一體外道と佛弟子たる阿難との見識に幾干の距離があるであらうか、外道とはそも如何なるもの、佛弟子とは又如何なるものをいふのであらう、一切衆生悉有佛性といふからには外道と雖も佛性を具して居る筈である、阿難を專門家の樣に思ひ外道を門外漢の樣に定めるのが抑も誤つた見解ではあるまいか、併し乍ら外道を西に向つて行くものとすれば佛弟子は東に向つて行くものである、一歩の差は千里萬里の差となる、而かも地球を圓いものとすれば遂に相逢ふの期があるのであるから、遠ともいひ難く近とも定められぬ、相ひ去ること幾干ぞ、これは實に千古の疑問である、會するが故に佛弟子といひ會せざるが故に外道といふ等と差別を立て丶得々として居るものは矢張痛骨に徹しても尙ほ走らざる鈍馬である、山と河との距離幾干ぞ、鼻孔と眼睛との距離幾干ぞ、會せんと要すれば例に依つて參ずること三十年すべしといふ外はない。

頌曰劍刄上行氷稜上走不渉階梯懸崖撒手

【和訓】 頌に曰く、劍刄上に行き、氷稜上に走る。階梯に渉らず。懸崖に手を撒す。

〔講話〕『劍刄上に行き氷稜の上に走る』外道は有言を問はず無言を問はずと向上の端的から世尊に問うて來た、其の有樣は劍の刄の上を渉るが如く、氷の稜の上を歩く樣なもので實に危險千萬な仕事である、眞に佛法の頂に登るが爲にはこれ位の冒險はお茶の子サイサイでなければならぬ、虎穴に入らずんば虎兒を得ずである『階梯に渉らず懸崖に手を撒す』十住十行十回向等といふ階梯に渉らずして一超直入如來地で、外道から直ちに佛の境界に達することが出來る、斯樣に漸進的でなく

て頓悟主義の我が禪門の立場からいへば大悟徹底の境界に證入するには、『懸崖に手を撒す』で百尺竿頭に一歩を進むる底の作略がなくてはならぬ、劍刃上に行き氷稜上に走るといふのが抑も懸崖に手を撒するのであつて、外道が佛に向つて思ひ切つて向上底の問を設けてぶつかつて行つたのは實に痛快な手段である。孤峰頂上に登つても其處に執着せず、更に手を撒して千尋の谷底へ飛び込むことが最も肝要である。

第三十三則　非心非佛

馬祖因僧問如何是佛祖云非心非佛

【和訓】馬祖因に僧問ふ、如何なるか是れ佛。祖云く、非心非佛。

〔講話〕『馬祖因に僧問ふ、如何なるか是れ佛』これは第三十則の卽心卽佛と關係のある公案で、馬祖のことは第三十則の處で述べて置いた通り、六祖慧能の法孫馬祖山の道一和尚である、馬祖は常に卽心卽佛といふて、此の心そのまゝが佛であるといふ旨を學人に示して居られたが、動もすれば其の眞意を誤解して吾々の煩惱妄想其の儘が佛である、修行も悟も必要がないといふ樣に考へて居るものがあるので、此の誤解を匡さんが爲に機會を得る每に此の則の樣な反對の垂示をせられたのである、馬祖下の一僧が或時如何なるか佛と問ふた、此の僧幾干の力倆があつたかは明でないが、馬祖の答へ振から見ると馬祖平生の持論たる卽心卽佛といふことを金科玉條と尊んで、之に執着し

て居つたものと思はれる、『祖曰く、非心非佛』心でもない佛でもない、修行でもない證果でもないその樣なものは一切用不着である、澧州龍潭院の附近の老婆は周金剛に對して過去心不可得現在心不可得未來心不可得何の心をか點ずるといふたさうであるが、實に心を求むるに遂に不可得であるまして三十二相八十種好といふ樣な佛が此の心の中に在る。吾々の心が其の端嚴微妙の佛である等とは甚しい妄想である、然らば心といふものは無いか、佛は此の心以外のものであるか、否々、佛とは非心非佛である、心に非ざるにもあらず佛にあらざるにもあらず非心非佛それが卽ち佛である斯ういふた丈では何のことかサツパリ解らぬかも知れぬがこれ以上は最早說明の範圍ではない、例によつて實參實究あるのみである。

無門曰若向者裏見得參學事畢

【和訓】　無門曰く、若し者裏に向つて見得せば、參學の事畢んぬ。

〔講話〕『若し者裏に向つて見得せば』者裏とは馬祖が非心非佛と答へた端的である。僧の如何なるか是れ佛と問ふた端的である、換言すれば公案の眞意義である、公案の眞意義、非心非佛の面目を



見得したならば、『參學の事畢んぬ』參禪辨道の目的は達したのであるといふ、果して然るか、かくては吾々は目的の爲の手段として參禪辨道して居る樣である。悟りさへすれば修行は無用なものであるとすれば歷代の祖師は何故に八十九十の老齡に及んでも尙ほ孜々として參究を怠らなかつたか、百丈は九十に垂んとして尙ほ一日作さずんば一日喰はずの勝躅を貽されたではないか、かく追究する時は無門の評唱は甚だ價値のないもの、樣になるが、更に深く無門の意旨を忖度して見ると、無門は必ずしも參學を悟の目的としたのではなく、者裏に向つて見得することの最も大切なる所以を力說する爲にかくいふたものである、者裏に見得徹するといふことは實に至難なことで之が爲には全力を傾倒せねばならぬ、若し見得が出來なければ七生までも生れ變つて其の目的を達する程の大覺悟がなくてはならぬといふ意味をかく簡單に言ひ詮したものである。

頌曰路逢劍客須呈不逢詩人莫献逢人且說三分未可全施一片

【和訓】 頌に曰く、路に劍客に逢はゝ、須く呈すべし、詩人に逢はずんば献ずること莫れ。且らく三分を說け、未だ全く一片を施すべからず。

〔講話〕『路に劍客に逢はゞ須く呈すべし』素人に向つて劍術の奧の手を使つて見せても何の役にも立たぬ、劍道の達人に逢つたならば、須らく祕術を盡して技を鬪はすべきである、馬祖の如き宗門の大劍客に逢つたならば早速如何なるか是れ佛と一本挑むべきである、『詩人に逢はずんば献すること莫れ』卽心卽佛だの非心非佛だのといふ風流韻事は大梅法常の如き佛向上の詩人に逢つて始めて談ずべきことである、碌々修行もせぬ無風流漢に詩文を示したところで何の效もない、『人に逢ふては且らく三分を說け』正令全提等は容易になすべきことではないのに、馬祖は餘りに說き過ぎて居る、卽心卽佛も非心非佛も頗る向上底の垂示であつて、簡單に本分の面目を道破したのであるけれども、尙ほ維摩の默、世尊の據座に比すれば饒舌底である、人の爲には須らく三分を說いて七分を藏すべきである、否三分を說くも已に蹉過底である『未だ全く一片を施すべからず』一片は全體である、食物でも腹八分目といふ、佛法の御馳走も腹充分喰べると食傷を起すから主人役たる師家も餘り御馳走を竝べ立てゝ學人の食慾を刺戟せぬ樣にすべきである、世尊や維摩の如く一片も施さぬのが眞の慈悲眞の親切といふものである。

第三十四則　智不是道

南泉云心不是佛智不是道

【和訓】南泉云く、心、是れ佛にあらず。智、是れ道にあらず。

〔講話〕『南泉曰く、心是れ佛にあらず』南泉は南泉山の普願和尚で、第十四則の斬猫の話の處で詳しく述べて置いた筈である、南泉は馬祖の法嗣であるから卽心卽佛の話も非心非佛の話も充分透過して居るから、先づ非必非佛の端的を述べて、心是れ佛にあらずといふた、三界唯一心、心外無別法等といふから佛といふも畢竟心の換へ名である心佛及衆生是三無差別である等といふ立場に執着する座下の學人の爲に心といふ一物を打破して示したのである『智是れ道にあらず』道を學ぶとか佛道を悟るとかいふと、如何にも智慧を以つて道が悟られるもの、智慧が道の根本になるものであるといふ樣な誤解を生じ易い、戒定慧の三學等といふ場合にも學といふ字を用ひるから、學は智慧を



以つて道理を學ぶことであると解して、戒定慧も又智慧が基礎になつて居る樣に考へる、斯の如き誤解は最も悟道の妨となるもので、道とは決して智慧を以つて得らるゝものでもなく、智慧を以つて基礎とするものでもない、心だの智だの佛だの道だのといふ樣な意識分別的のものは佛向上の端的に於いては一切無關係である、人々本具の佛性は心にあらず智にあらず、佛にあらず道にあらず一切名くべき名はない、所謂不是心不是佛不是物である。

無門曰南泉可謂老不識羞纔開臭口家醜外揚雖如是知恩者少

【和訓】 無門曰く、南泉謂つ可し、老いて羞を識らずと。纔かに臭口を開いて、家醜外に揚ぐ、然も是の如くなりと雖も、恩を知る者は少し。

〔講話〕『南泉謂つべし老いて羞を識らずと』無門は例によつて自己の力量を振つて南泉の境界を吟味した、南泉も隨分老耄れになつて憶面がなくなつた、親切といへば親切であるけれども、心は佛にあらずだの、智は道にあらずだのと、餘計なことを竝べ立てゝ赤恥を曝して居る、『纔かに臭口を開いて家醜外に揚ぐ』悟り臭い口を開いて佛事門中の祕密を潑き出すとは實に言語同斷である、心は佛にあらず智は道にあらずといふのは、珠數の絲を切つて心と佛と道と智とをバラ〳〵にしたまでのことで、矢張り心とか佛とかといふ珠は其處らあたりに散ばつて居つて悟の妨げとなつて居る坐敷の中が奇麗サツバリとならぬ、『然も是の如くなりと雖も恩を知るものは少し』斯樣に醜を忘して兒孫の爲に種々と說法敎化せられても、學人の方では左程有難くも思はぬ、老いて羞を識らずといふたが羞を知らぬのではなくて羞を顧る遑が無いのである、斯程までに學人の爲に骨を折られた南泉和尙の廣大な慈恩を何人が酬いたであらうか、南泉座下のものゝみが其の恩惠を蒙つて居ると思ふと大きな間違ひであるぞ、今日滿天下の禪客誰か南泉の德澤に浴せざるものがあらう、恩を知つては須らく酬ゆべしであるが、其の報恩は如何にすべきであらうか、外でもない、只管打坐、參禪辨道して箇の一大事を了得して佛德祖風を偏ねく今の世に擧揚することである。

頌曰天晴日頭出雨下地上濕盡情都說了只恐信不及

【和訓】 頌に曰く、天晴れて日頭出で、雨下つて地上濕ふ。情を盡して都べて說き了る。

只だ恐らくは信不及なることを。

〔講話〕『天晴れて日頭出で』心是れ佛にあらずといへば如何にも高尙幽玄な哲理、難かしい理論の樣であるけれども、決して其の樣な事ではない雲が晴れて晴天になれば日が出る『雨下つて地上濕ふ』雨が降れば地上の草木はそれに濕つて色を新にする、別段變つた理窟ではなく、春が來れば花が咲き秋となれば紅葉が輝やく、水は低きに向つて流れ、烟に上に向つて騰る、これ又所謂智是れ道にあらずの面目である、南泉は嘗て趙州が如何なるか是れ道と問ふたのに答へて、平常心是れ道といはれたが天晴れて日頭出で、雨降つて地上濕ふのは卽ち平常心是道の端的である、智慧も分別も用ひぬでも雨の降る日は天氣が惡く、兄貴俺より歲が上位のことは分り切つたことで、而かもそれが道である、大道である、佛教では之を佛道といひ、儒道では之を至道といふ、名は何と呼んでも畢竟これ宇宙を一貫せる道である、其の道は智慧分別を以つて論量すべきものではないから南泉は智は是れ道にあらずと側面から道破したのである『情を盡して都べて說き了る』南泉は人情の限りを盡し、あり丈の親切氣を出して說かれた、評唱にもいふた通り、老いて羞を識らず臭口を開いて家醜を外に揚げたけれども『只だ恐くは信不及なることを』悲しい哉、這の平凡な道理を、而かも苦口叮嚀に說いたのを天下人は信得及することが出來ぬ、說明を聞いて成程と合點するのは知ることであつて信ずることではない、知つて尙ほ信ぜずんば眞に知つたとはいはれぬ。物事の道理はそれが信念となつて始めて力があるのである。見得徹し信得及して始めて佛道が我等の日常生活の上に力となつて働くのである。

第三十五則　倩女離魂

五祖問僧云倩女離魂那箇是眞底

【和訓】 五祖、僧に問ふて云く、倩女離魂、那箇か是れ眞底。

〔講話〕『五祖』五祖は名を法演といひ、五祖山に住したから五祖法演と稱せられる、白雲守端の法嗣で、其の門下には碧巖に垂示や評唱を書いた圜悟克勤がある。『僧に問ふて曰く、倩女離魂、那箇か是れ眞底』此の公案は昔から頗る難透の關として叢林に喧傳せられて居る、倩女離魂は不思議な因緣話で『正燈錄』や『剪燈新話』等に出て居る、昔支那の衡陽といふ處に張鑑といふ人があつたが此の人に倩女といふ一人の娘があつて絕世の美人であつた、又張鑑の甥に王宙といふ美男子があつて張鑑は始め自分の娘の倩女を此の王宙に妻す約束にして置いたが、其の後張鑑は或高官から娘を望まれて遂に王宙との約束を破つてそれへ遣ることにした、娘の倩女は王宙との婚約を非常に喜



んで居つたのに、父がそれを反古として他の人に遣ることにしたことを知つて怏々として樂まず、遂に病の床に就いた、王宙も亦た之を一方ならず遺憾に思つて最早故鄕に居るのも快からず、京師に行つて此の悶々の情を忘れやうと決心して、船に乘つて行く中に途中で日が暮れた、すると岸に沿つて船を逐つて來るものがあるので船を寄せて見ると、戀人の倩女であつたから、且つ驚き且つ喜んで種々相談した結果、道を變へて蜀の國へ行き、知らぬ他鄕で心置きなく睦まじい處帶を持つて、五年ばかり暮した、而して一人の子まで擧げたが、倩女は故鄕に殘した父母が戀しくなつて、是非歸つて不孝の罪を詫び、親の許を受けた上で天下晴れて暮したいといひ出したので、王宙も尤なことに思つて打ちつれて故卿衡陽に歸つた、先づ王宙が家に入つて此の旨を告けると、張鑑は大いに驚いて、倩女は其許がこの地を立退いてからこの方、氣拔けの樣になつて病床に就いたまゝ今以つて枕もあけぬ樣な有樣で、蜀の國に行く等とは思ひも寄らぬことであるといふた、王宙もそれを聞いて不審晴れやらず、兎に角兩方を逢はせて見ようといふので、病床の倩女を呼び起し門外の倩女を呼び入れて二人を逢はせると忽ち合して一人となつて終つた。倩女は此の時、只だ初め宙が妾を後て殘して去つたことを知つた、妾は夢中に急いで船を逐うて走つたことを覺えて居るが、其の後去つたものが我か留まるものが我かを知らなかつた」と語つたといふ、これは頗る不思議な傳說であるが、精神と肉體とが離れること、心か二つに分れる等は昔からよくあることで、西遊記でも孫悟空が妖怪の術にかかつて自分でもどちらが眞の孫悟空であるかゞ分らず、觀音菩薩でも分らぬので、遂に佛樣に見分けて貰つたといふ話がある、兎に角五祖は倩女が二人一しよになつたといふ昔話を持つて來て、那箇か是れ眞底、いづれが眞の倩女であらうかと學人に對して問端を提起した、凡夫たる吾々が悟つて佛となるといふ場合に、吾々は畢竟凡夫であらうか佛であらうか、那箇か是れ眞底の自己といふ問題を起したならば、諸人者は何と答へるか、これ頗る難透の疑團である生佛不二、煩惱卽菩提等といふあり來りの道具を使つて此の問題を片付けやうとしては却つて蹉過するぞ、然らば何としたものであらうか、これも又銘々の力任せに勘辨する外はあるまい。

無門曰若向者裏悟得眞底便知出殼入殼如宿旅舍其或
未然切莫亂走驀然地水火風一散如落湯螃蟹七手八脚那
時莫言不道

【和訓】無門曰く、若し者裏に向つて眞底を悟り得ば、便ち知らん、殼を出で〻殼に入ることは、旅舍に宿するが如くなることを。其れ或は未だ然らずんば、切に亂走すること莫れ。驀然として地水火風一散せば、湯に落つる螃蟹の七手八脚なるが如くならん。那時言ふこと莫れ、道はじと。

〔講話〕『若し者裏に向つて眞底を悟り得ば』若し倩女離魂の當處に於いて、いづれが眞底の倩女であるか、衆生と佛との二に於いて、いづれが眞底の自己であるといふことが悟られたならば『便ち知らん殼を出て殼に入ることは旅舍に宿するが如くなることを』恰も蟲が一つのぬけ殼を出て他のぬけ殼に入るが如く旅舍から旅舍へ移り換る樣なものである、衆生といふ殼から佛といふ殼へ移る丈のことで何の造作もないことであるといふことが分るであらう『其れ或は未だ然らずんば切に亂走すること莫れ』若し者裏に向つて悟り得ることが出來なかつたならば、餘り周章へて走り廻らぬ樣にするが可い、修行だの證果だのと急に騷いだ處で、者裏の眞底が悟られるものではない『驀然として地水火風一散せば、湯に落つる螃蟹の七手八脚なるが如くならん』地水火風は四大といつて萬物を形造る原素である、吾々の身體も此の地水火風の四大が集まつて出來たものであるが、一旦無常の風に誘はれて此の四大が分散した場合には、恰かも煮え湯の中に落ちた蟹が、手も脚も散り散りバラ〲になる樣なものである『那時言ふこと莫れ、道はじと』此の時になつて今更の樣に無門が敎へてくれなかつたからこんなことになつたなどゝいふまいぞ、平生底に於いて實參實究して者裏に向つて眞底を悟り得て置けば、四大分散の期に及んでも泰然自若として八風吹けども動せざる底の分があるであらう。

頌曰雲月是同溪山各異萬福々々是一是二

【和訓】頌に曰く、雲月是れ同じ、溪山各々異なり。萬福々々、是れ一か是れ二か。

〔講話〕『雲月是れ同じ』この頌は無門が悟達の境界を筆に任せて諷詠したのである、平等の方面からいへば閨中の倩女も他國跉跰の倩女も同一である、山も川も草も木も、行雲流水、明月清風、盡く一枚の畫圖であつて、一味平等の法海に歸すべきものである『溪山各異なり』併し乍ら差別の方面から見れば、千山萬壑各異つた趣がある、高きあれば低きあり、屹つあれば蟠まるあり、千態萬狀とり〲に、別個の風致を具へて居る、此の頌の上二句は所謂春色に高下なし、花枝自ら長短と

いふ趣を詠じたものである『萬福々々』かく平等と差別の二方面があるが、吾々は其の二方面に於いて自由無碍に往徠が出來る、或時は一味平等の法性海中に悠々自適することもあり、或は萬差の事々物々の上に於いて縱横の作略を用ふることもある、同じく煦々たる春光を平等に浴び乍ら、或花は紅に咲き或花は黄色に咲く、而かもそれ〳〵自己本具の色彩を充分に發揮して互に其の艶容を誇つて居る、我も境も箇々皆萬福多幸である『是れ一か是れ二か』這般の境界に於いて、これ平等か是れ差別か、倩女は一人か二人か、よく〳〵參究して見るが可い。

第三十六則　路逢達道

五祖曰路逢達道人不將語默對且將甚麼對

【和訓】五祖云く、路に達道の人に逢はゞ、語默を以つて對せざれ。且らく道へ、甚麼を將つてか對せん。

〔講話〕『五祖曰く、道に達道の人に逢はゞ語默を將つて對せざれ』五祖は前の則にも出た五祖法演和尚のこと、達道は大道に通達した人をいふ、至極の大道に通達した人は文字言句によつて意を會せやうとはせぬものであるが、さればとて默々として一言一語を語らぬことを以つて宗乘の玄奥を得たものともせぬ、されば斯樣な人には語を以つても默を以つても應對すべきでない、富留那の辯を以つて縱横無碍に說き立てゝも佛法の道理は其の九牛の一毛だも說き示すことが出來ず、維摩は毘耶離城に於いて八萬の大衆を方丈の室に請じて默然として鬼眼睛を弄したけれども、其の宗風必

すしも後世に榮えなかつた、道ひ得るも三十棒道ひ得ざるも三十棒であるから、達道の人に對しては語默いづれも役に立たぬ『且らく道へ、甚麼を將つてか對せん』言うても惡い言はぬでも惡いとすれば何として應對したものであらうか、五祖は此の問題を座下の大衆に課して參究せしめられたが、無門は更に本書に之を收めて後世參學のものをして五祖の提供した問題を咬嚼せしめ、自ら其の參考として此の公案に對する自己の評唱及び頌を示された、これ無門が自己の力倆を以つて公案を拈弄して兒孫の爲にせられたのであるから、學人は須らく無門の慈悲に酬い且つ自家本分の爲に大いに之に參究すべきである。

無門曰若向二者裏一對得親切不レ妨慶快其或未レ然也須二一切處一著レ眼

【和訓】無門曰く、若し者裏に向つて對得して親切ならば、妨げず慶快なることを。其れ或は未だ然らずんば、也た須らく一切處に眼を著くべし。

〔講話〕『若し者裏に向つて對得して親切ならば妨げず慶快なることを』者裏とは路に達道の人に逢



第三十六則　路逢達道

つた場合である、路に本來の面目に逢つた場合といつても可い、又路に大毘盧舍那佛に逢つた場合というても可い、かゝる際に語を以つて對せず默を以つて對せず、極めて親密適切な應對が出來たならば、それこそ目出度い、愉快至極なことである、世尊は臘月八日曉の明星に逢つて親切に應對せられた、香嚴は擊竹の音に相見して親切に應對せられた、いづれも慶快なことであつたであらう、『其れ或は未だ然らずんば也た須らく一切處に眼を着くべし』若し親切な應對が出來なかつたならば、日々夜々一切時一切處に眼を着け力を注いで參究すべきである、行も又禪座も又禪行住坐臥の四威儀の上に於いて常に如何如何と參究して始めて漆桶打破の時節があるのである、六祖は碓房裏に工夫し、百丈は九十の老齡に至るまで孜々として作務せられた、これ語默超越の應對をなさんが爲であり、且つ其の工夫、其の作務が正に親切なる應對であつたのである。

頌曰路逢達道人不將語默對欄腮劈面拳直下會便會

【和訓】頌に曰く、路に達道の人に逢はゞ語默を將つて對せざれ、欄腮劈面に拳す、直下に會せば便ち會せよ。

〔講話〕『路に達道の人に逢はゞ、語默を將つて對せざれ』本則をそのまゝ頌に用ひた、吾等は常に達道の人に逢ひつゞけである、一歩門外に出づれば車に逢ひ犬に逢ひ、馬に逢ひ人に逢ふ、いづれも本分底よりすれば達道のものならざるはない、路傍の小川や河畔の並木、悉くこれ語默を超越した本體である『欄腮劈面に拳す』これが語默以外の應對である、出會頭に橫面を拳でウンと擲つて遣るが可い、併しこの作略は思量分別や學問解會では得られぬ、『直下に會せば便ち會せよ』直下承當これが最も捷徑である、考へることも研究することも要らぬ、然るを兎や角と分別に涉るならば却つて取り違へて終ふぞと警誡したのである。

第三十七則　庭前柏樹

趙州因僧問如何是祖師西來意州云庭前柏樹子

【和訓】趙州因に僧問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。州云く、庭前の柏樹子。

〔講話〕『趙州因に僧問ふ、如何なるか是れ祖師西來意』趙州は例の趙州觀音院從諗和尚である、趙州和尚に對して座下の一僧が祖師西來意とは何ぞやと問ふた、祖師とは佛法を傳へる所の歴代の宗師をいふのであるが、此處では特に達磨大師を指す、達磨大師は遙々印度から東土卽ち支那の南方へ來て初めて佛心宗を傳へられた、これより先佛教は已に傳へられて居つたが不立文字敎外別傳の宗旨は始めて達磨大師に依つて傳へられたのである、祖師西來意とは卽ち祖師が西から傳來せられた佛法の本意をいふ、此の問の前に僧は趙州に向つて「和尚境を以つて人に示すこと莫れ」と念を押し、趙州も「境を以つて人に示さず」と答へて、それから此の問答があつたのである『州曰く庭前の柏樹子』趙州は所謂境を以つて人に示さずといふ約束通り、境を離れた答話を以つて應ぜられた、達磨東土に來つた意旨とは換言すれば禪宗根本の道理である、斯樣な大切な問であるから、趙州も之に對しては輕卒な答をせず、全力を盡して答へられた、語に落ちず默に落ちず、境に渉らず人に偏せぬ、所謂向上の端的をニユツと突き出されたのである。觀音院の庭にあつた柏樹を指してアレが祖師西來の意である、佛法の根本義、佛心宗の的意であると示された、柏樹子は日本の柏の木のことでなくて柏杉といふ樹であるといふが、そんなことは今更彼是と論ずる必要はない、庭前の松の樹でも床の間の梅もどきでも、茶椀の中の白飯でもお椀の中の吸物でも、借りて來る道具は何でも可いが、要するにそれを以つて祖師西來意を脫體に其處へ拈出し得ることは其の地に到つた人でなければ出來ぬことである、趙州にして始めて庭前の柏樹子を以つて祖師西來の意を學人の面前に現成させることが出來たのである、如何なる理由で庭前の柏樹子が祖師西來意であらうか等と聊かでも分別に渉れば忽ち趙州の面目に蹉過する、古人は此の答話に對して焦塼打著す連底の凍といふ評語を加へて居る、如何なるか祖師西來意といふ疑團に對して庭前の柏樹子と答へたのは、恰ど燒け焦けた塼を底まで凍つた水の上へなげ付けた樣なもので、疑團の氷は忽ち溶けて終つて祖師

意の水が溶々として流出して盡天地が祖師意に滿ち充ちて來るといふのである、此の評必ずしも當つて居るとはいはぬが、參考としてこゝに添へたまでゞある、古人は此の公案に對していづれも慘憺たる苦心を重ねられたものであるが、近來はいづれも可い加減に片付けて終つて吾趙州柏樹子の話を透過し得たり𥁕と鼻孔遼天で居る輩が少くないが、若し境に墮せず人に偏せずして眞に祖師意に相見し得たものが一箇半箇でもあれば幸甚である。

無門曰若向趙州答處見得親切前無釋迦後無彌勒

【和訓】無門曰く、若し趙州の答處に向つて見得して親切ならば、前に釋迦無く、後に彌勒無けん。

〔講話〕『若し趙州の答處に向つて見得して親切ならば』趙州の答處は宇宙の眞相、本來の面目である、趙州一人の私有品ではない、天下人の自由に來つて參得し翫味するに委すべきものであるから學人たるものは須らく擧つて咬嚼するが可い、若し咬嚼して其の味を知ることが出來たならば『前に釋迦なく後に彌勒なけん』釋尊は三千年前に印度に出現して一切衆生の爲に大獅子吼せられ、彌



勒菩薩は五十六億七千萬歳の後に第二の釋迦として出現せられるといふが、最早それ等の人に用事はない、見得底のものは直下第二人なく、天上天下唯我獨尊であるから、釋迦も彌勒も自己一身の裏にあつて運足轉歩、喫茶喫飯しつゝあるものである、無門は例の通り自己の力倆を傾倒して趙州柏樹子の話を斯樣に拈弄したけれども、餘り千篇一律で興味がない、何とか今少し別箇の作略を用ひて欲しかつた。

頌曰言無展事語不投機承言者喪滯句者迷

和訓】 頌に曰く、言、事を展ぶること無く、語、機に投ぜず。言を承くる者は喪し、句に滯る者は迷ふ。

〔講話〕『言、事を展ぶることなく、語、機に投ぜず』此の頌は全篇悉く洞山の語を借りたものである、達道の人の言葉は春が來て溫くなりましたとか、秋風が吹いて涼しくなりましたとかいふ樣な平凡な事柄を展べるのではなく、其の表面では犬が走つたとか猫が啼いたとかいふ樣な平凡なことをいつて居つても、其の眞意は佛向上の面目を道破して居る、然るに脚下未穩在のもには、たとひ高尚らしい悟り臭いことを千萬言竝べ立てゝも、決して眞實の事を展べて居らぬ、又明眼の衲僧の語はふと心に思ひ浮んだ機卽ちことがらに契ひ投ずる爲に故らに難かしいことをいふのではない、山が高く屹えて居るとか川が淸く流れて居るとかいふても、それは只一應機に投ずる爲にいつて居るのではない、之に反して修行功勳を積まぬ輩は大いに機に投ずるつもりで精々眞理臭いことをいうても決して機に投ずるものではない、『言を承くるものは喪し』されば言語は眞實を現はすものでないから言を承けて兎や角と分別するものは喪身失命して終ふ、從つて『句に滯るものは迷ふ』で、經論等の文句に就いて宗を會せんとして、之に滯るものは却つて有無得失等の葛藤窠裡に迷ひ込んで自由の働が出來ぬ、要するに趙州が祖師西來意の問に對して庭前の柏樹子と答へたのを事を展べ機に投じたものだと思つて彼是と詮議するものがあつても、其の人は到底趙州の的意を會することは出來ぬ、所謂言を承けて喪し句に滯つて迷ふものである。

第三十八則　牛過窓櫺

五祖曰譬如水牯牛過窓櫺頭角四蹄都過了因甚麽尾巴過不得

【和訓】五祖曰く、譬へば水牯牛の窓櫺を過ぐるが如き、頭角四蹄都べて過ぎ了れる。甚麽に因つてか尾巴過ぐることを得ざる。

〔講話〕『五祖曰く、譬へば水牯牛の窓櫺を過ぐるが如き、頭角四蹄都べて過ぎ了る、甚麽に因つてか尾巴過ぐることを得ざる』五祖は即ち五祖山の法演和尚である、この文句は涅槃經から引いたのであるけれども、五祖の手裏を通じて玆に別段の趣を添へて居るのであるから、單に經論の一部を解釋する樣な心組で見ては、決して公案の的意に契當することは出來ぬ、直に五祖の手許に切り込んで其の祕藏の寶劍を奪ひ取る底の大機用を發揮すべきである、水牯牛は大牛のことである、一頭の大牛が格子窓を過ぎる場合に、頭も角も四つ蹄も都べて樂々と通つて終つたのに、何故尾巴即ち尻尾が通らぬのかといふ、問ひ放しで答のない公案である、碧巖や從容錄等には斯樣な公案は餘り見當らぬが無門關には幾つもある、師家の手許に於いては問其の儘が答になつて居るが、學人から見れば、之が手強い詰問であつて、熱心に參究することを促して居る、煩惱の頭や菩提の角、修行の前蹄や證果の後蹄等を透過することは困難ではないが、向上の關棙子、悟の境界といふ尻尾を透過することは却々容易ではない、何に依つて然るか、これは古人も大いに惱まされた問題である、須らく參すること三十年にして始めて得べしとでもいふ外はあるまい。

無門曰若向者裏顚倒著得一隻眼下得一轉語可以上報四恩下資三有其或未然更須照顧尾巴始得

【和訓】無門曰く、若し者裏に向つて顚倒して、一隻眼を著得し、一轉語を下し得ば、以つて、上四恩に報じ、下三有を資く可し。其れ或は未だ然らずんば、更に須らく尾巴を照顧して始めて得べし。

〔講話〕『若し者裏に向つて顚倒して一隻眼を著得し、一轉語を下し得ば』無門は此の公案を逆にして考へて見よといふた、尾巴過ぎ了つて頭角四蹄過ぐることを得ずといふ場合に於いて頂門の一隻眼卽ち向上の眼を具して見よといふのである、何も殊更に逆に考へなくても公案其の儘に一隻眼を具すれば可いのであるが、無門はかく拈弄して居るから一歩譲つて顚倒して一隻眼を著得したとすれば何となるか『以つて上四恩に報じ下三有を資く可し』と無門はいうて居る、四恩は國王の恩、父母の恩、三寶の恩、衆生の恩である、三有は慾界色界無色界の有情をいふ、一隻眼を著得した功德によつて上四恩に報じ下三有を資けて成佛得脫せしむることが出來るといふ、前には庭前の柏樹子の端的を著得すれば前に釋迦なく後に彌勒無しというて一切を掃蕩したが、此處では三有を資くとか四恩を報ずるとかいうて世間的道德律を扶起した、掃蕩すべき時には掃蕩し扶起すべき時には扶起する、それは無門の技倆に一任して差閊へないが、顚倒して云々といふたのは餘計なことであつて動もすれば未悟底の學人を惑はすことがある、何か顚倒するといふことに深い仔細でもある樣に考へて、此の轉倒が肝緊の處ぢや等と空見識を振り廻すものが出來ては、無門は惡毒を後世に流したといふ譏を免かれまい、併し英靈の漢はその樣なことに惑はされる樣なことはないから敢へて



第三十八則　牛過窓櫺

憂ふるに足らぬが、只老婆心の餘り一寸注意をして置くまでゞある、『其れ或は未だ然らずんば更に須らく尾巴を照顧して始めて得べし』若し顚倒して一隻眼を著得せよといふ無門の注文に應じられぬとならば、須らく其の透過し得ざる底の尾巴を仔細に照顧して見るが可い、さすれば飜然として省悟する處があるであらうといふ、併し照顧が出來るものならば著得も出來る筈であるから何も無門の指示を俟つまでもないが、此處は只無門が實參實究の大切なる所以を特に力說したまでのことである、卽ち尾巴を照顧するとは打坐三昧の正當恁麼時に於いて努めて尾巴に參究することである。

頌曰過去墮坑塹回來却被壞者些尾巴子直是甚奇怪

【和訓】　頌に曰く、過ぎ去れば坑塹に墮ち、回り來れば却つて壞を被る。者些の尾巴子、直に是れ甚だ奇怪なり。

〔講話〕『過ぎ去れば坑塹に墮ち』格子をくゞつて外に出れば大きな堀がある、向上の關棙子を打開すれば其處に向上の賊が待ち構へて居つて吾を脅かす、坑は穴、塹は堀のことである、『回り來れば却つて壞を被る』さればとて引返へせば其處には大きな石臼が控へて居つて吾が身を叩き壞して終う、進むも不可退くも又不可、水牯牛の進退は玆に谷まつて終ふ、恰も猿蟹合戰の猿の樣なものである、向上の坂を登ることも出來ず、向下の谷に下ることも出來ぬ、かゝる場合こそ筋斗飜の活作略懸崖に手を撒する妙用を現じて窮處に通達の途を開くべきである『者些の尾巴子』此の尾巴は人々本具のものであるけれども、上述の如く兩頭倶に截斷する底の力あるものに非ずんば所謂對面千里相逢ふて相知らざるものが多い『直に是れ甚だ奇怪なり』かく吾々は尾巴を具有しながら仔細に之を照顧せぬが爲に相見することが出來ぬのである、併し乍ら此の尾巴は甚だ奇怪千萬なものであつて、思量や分別や智慧や學問では容易に相見し得るものでないから古來天下の衲僧がいづれも種種と辛酸を嘗められたのである。

第三十九則　雲門話墮

雲門因僧問光明寂照遍河沙一句未絕門遽曰豈不是張拙秀才語僧云是門云話墮也後來死心拈云且道那裏是者僧話墮處

【和訓】雲門因に僧問ふ、光明寂照遍河沙と。一句未だ絕せざるに、門遽に曰く、豈に是れ張拙秀才が語にあらずや。僧云く、是。門云く、話墮せり。後來死心拈じて云く、且く道へ、那裏か是れ者の僧話墮の處。

〔講話〕『雲門因に僧問ふ、光明寂照遍河沙と、一句未だ絕せざるに門遽かに曰く、豈に是れ張拙秀才が語にあらずや』雲門は第二十一則にも出て居る雲門宗祖文偃和尙である、僧が大悟徹底の妙境界に就いて光明寂照云々と述べ初めると、雲門和尙はまだ一句も云ひ終らざるにそれを遮り止めて、それは張拙秀才が語ではないかといつた、張拙秀才は姓を張名を拙といひ秀才といふ學位を持つて居つた人で、禪月大師の指敎に因りて石霜和尙に參じて深く禪要を得た、或時石霜が秀才に向つて名を問ふと秀才は姓を張名を拙といふと答へた、そこで石霜が曰ふには「巧を覓むるに尙ほ不可得なり、拙何れの處よりか來る」と、秀才茲に於いて忽然として大悟し次の如き偈を石霜に呈した「光明寂照遍河沙、凡聖含靈共に我が家、一念生ぜざれば全體現ず、六根纔かに動けば雲に遮らる、煩惱を斷除すれば重ねて病を增す、眞如に趣向するも亦た是れ邪、世緣に隨順して罣碍なく涅槃生死空華に等し」僧が此の偈を讀み上げやうとしたので早速雲門が抑制した、これが僧に對する雲門の答話であつて、僧をして皆までいはせぬ處に雲門の力がある、僧が讀み立てるに任せて置いたならば遂に喪身失命したのであらうが、中途で遮きられたのでそれを免がれたのである『僧云く、是』僧は初めて我に歸つて、左樣でございますといふた、雲門の敏俊な作略に比してこれは又頗る遲鈍な答へぶりである、これではまだ雲門が語を遮つた意旨が解つて居ないのであらう、解つて居るものならば差し措かず雲門の口を閉却するか其の喉首を擒住する位の作略はあつたであらう

に「是」など、間だるい返答をして居る樣では大抵其の力倆の程も察せられる『門曰く、話墮せり』雲門も僧の答を聞いて甚しく失望して、何だお前は言ひ損つて居るではないか、情ない男であるといふた、僧の覺醒を促した言葉であるが雲門もこの處少々話墮の傾向がある。此の樣な鈍漢には斯樣に手ぬるい接得よりも寧ろイキナリ三十棒を與へてやつた方が可かつたのに『從來死心拈して曰く、且らく道へ那裏か是れ者の僧話墮の處』死心は黃龍慧南和尚の法曾孫に當る死心悟新和尚のことである、僧と雲門との商量を後に至つて死心和尚が拈弄して大衆に對して一體此の僧は何と言ひ損ひをしたのであらうといつて各自に自ら究辨せしめた、死心座下の大衆ばかりではない、天下人悉く此の話墮の處を咬嚼して見ねばならぬ、これ參學の至要事である、光明寂照といふ光明が話墮である、寂照も話墮である、否照も寂も明も光も悉く言ひ損てある、一言でも半句でも言へば直ちに話墮となる、さればかくいふ死心も又話墮して居る。

無門曰若向者裏見得雲門用處孤危者僧因甚話墮堪與人天爲師若也未明自救不了



第三十九則　雲門話墮

【和訓】無門曰く、若し者裏に向つて、雲門の用處孤危、者の僧甚に因つてか話墮すと云ふことを見得せば、人天の與めに師たるに堪えん。若し也た明めずんば、自救不了。

〔講話〕『若し者裏に向つて』無門は例に依つて自家の寶藏を打開して公案を拈弄した、者裏とは雲門が僧を接得した眞面目である『雲門の用處孤危、者の僧甚に因つてか話墮すといふことを見得せば』孤危は嶮峻で寄り付かれぬこと、人天は人間天上のこと、若し此の公案に向つて雲門和尚の作略を用ふる處孤危嶮峻で容易に寄り付かれぬ様子を知り、又此の僧はどういふ點を言ひ損なつて居るか何が間違つて居るかを見得するものがあれば、それこそ實に人天の大導師たるべき力を具せる人といふべきである、『若し也た未だ明めずんば自救不了』若し此の事が解らぬ様では人間天上の濟度等は扨て措き自分が迷妄の地獄に墮しつゝあるのを救ふことさへも出來ないであらう、自ら救ふことも不了いのであらうといふ。

頌曰急流垂レ釣貪レ餌者著口縫纔開性命喪却

【和訓】頌に曰く、急流に釣を垂る、餌を貪るものは著く、口縫纔かに開けば性命喪却す。

〔講話〕『急流に釣を垂る』師家が覺人を接得するのは恰ど急流に釣を垂れて居る様なものである、『餌を貪るものは著く』師家は種々の作略を以つて學人を釣らうとする、迷を轉して悟りを得やうとか、苦を脫して樂に到らうとかいふ樣な美食を貪るものは直に引かゝる、僧が雲門に對して光明寂照云々と問端を起したのは雲門が默つて垂れて居つた釣に自ら進んで引かゝつたのである、『口縫纔かに開けば』少しでも口の縫目を開いて餌を食はんとすれば『性命喪却す』所謂喪身失命すである、雲門が是れ張拙秀才が語にあらずやといつたのは、恰ど引かゝつた魚に少し糸をたるめて充分餌を飲み込ませた樣なもので、忽ちにして話墮也と絲を引き上げられて、遂に喪身失命して終つたのである。

第四十則　趯倒淨瓶

溈山和尚始在百丈會中充典座百丈將選大溈主人乃請同首座對衆下語出格者可往百丈遂拈淨瓶置地上設問云不得喚作淨瓶汝喚作甚麼首座乃云不可喚作木𣔻百丈却問於山山乃趯倒淨瓶而去百丈笑云第一座輸却山子因命之爲開山

【和訓】溈山和尚始め百丈の會中に在つて、典座に充つ。百丈將に大溈の主人を選ばんとす乃ち請じて首座と同じく衆に對して下語して、出格の者往く可し。百丈遂に淨瓶を拈じて地上に置いて、問を設けて云く、喚んで淨瓶と作すことを得ざれ、汝喚んで甚麽とか作す。首座乃ち云く、喚んで木𣔻と作す可からず。百丈却つて山に問ふ。山乃ち淨瓶を趯倒して去る、百丈笑つて云く、第一座、山子を輸却せり。因つて之れに命じて開山と爲す。

〔講話〕『溈山和尚始め百丈の會中に在つて典座に充つ』溈山は名を靈祐といひ、百丈懐海和尚の法嗣、仰山慧寂和尚の本師であつて、溈仰宗の祖であることは前にも述べて置いた、唐の宣宗大中七年に壽八十三を以つて示寂せられた、擊竹を聞いて悟つた香嚴、桃花を見て語つた靈雲は共に溈山の法嗣である、此の溈山が百丈懐海和尚の下に居つた時、典座の役を擔任した、典座は一山の食事を司る役である、司馬頭陀といふ易や地理のことに通じた坊さんが湖南から百丈山に來た懐海和尚に語つて云ふには「南湖に大溈山といふ景勝の地があるが此處で一千五百人の大衆に師たるに堪ゆる程の善知識を住持として迎へたいが、和尚の門下にはありませぬか」百丈が「拙衲ではどうぢや」といふと、司馬は「貴僧は貧相であるからあの樣な肉山の主には不向である」といふ、百丈「それでは我が座下に適當なものがあるか檢べて見るが可い」といふ譯で、あれか是れかと大衆を物色した、其の時百丈山の第一座卽ち雲衲の頭をして居つた花林の覺和尚といふがあつたが司馬が相して

之は駄目であるといつて反ねた、それから典座をして居つた靈祐和尚を相して「これこそ潙山に主たるべき人である」といふので靈祐典座が選に入つた、百丈は「此の勝境汝當に之に居して我が宗を嗣き後學を度せよ」と委托せられた、所が第一座の花林の覺和尚が却々不平で抗議を申込んだ乃て百丈は一つの試驗法を設けて公平に潙山の主を定めることになつた。其の試驗といふのが此公案である『百丈將に大潙の主人を選ばんとす、乃ち請じて首座と同しく衆に對して下語して出格のもの往くべし』そこで典座の靈祐を請じて首座即ち第一座の花林と同じく大衆に對して一語を下して最も格調の超出したものが潙山に往くことに定めやうといふので『百丈遂に淨瓶を拈じて地上に置いて問を設けて曰く、喚んで淨瓶と作すことを得ざれ汝喚んで甚麽とか作す』淨瓶は僧侶の持つ淨水の容れものである、又しびん即ち便器のことであるといふ、百丈は斯様な大切な試驗をするにも別段お經や論部の中から難しい文句を引張り出す譯でなく、手許にあつた淨瓶をさし上げて。サア之を淨瓶などゝありふれた名で喚んではならぬ、何と喚んだものであらうぞといふ質問がある、名は實の賓といふから名は實を其の儘詮はすものではない、淨瓶といふも人間が假に付けた名目に過ぎぬ、實名を何と喚んだものであらうぞといふ難問である、『首座乃ち曰く、喚んで木楔と作す可



からず』百丈山の第一座花林の覺和尚が先づ最初に得々として答へた、それを喚んで木の株と爲すことは出來ぬ、淨瓶でなければ木楔とでも喚ぶか、それも不可であるといつて、百丈に和して一切の名目を拂ひ去つた樣子を述べたのである、木楔は木履のことであるといふが、木履でも木の株でも可い、今はその樣なことを詮索する必要はない、『百丈却つて山に向ふ、山乃ち淨瓶を趯倒して去る』百丈は今度は山即ち後に潙山となるべき靈祐典座に向つて問うた、靈祐は淨瓶とも木楔とも何とも曰はずに、淨瓶を蹴倒してサッサと其處を退いた、問題の根本たる淨瓶を全々認めない、木楔と作す可からずなんといふのはまだ大いに淨瓶に滯つて居る、我れこそ大潙山の主人にならうといふ野心があり〳〵と見えて居るが、靈祐の手許に於いては浮瓶もなければ木楔もない、況んや大潙山等といふ樣なものは全く念頭にないのであるから、爲ることが全く俗臭を絕して居る、趯倒淨瓶の端的は所謂言語道斷心行所滅の活作略であつて、講釋も及はず讃歎も盡すことが出來ぬ『百丈笑つて曰く、第一座山子を輸却せり』百丈は呵々大笑して、第一座も潙山にしてやられた、地位は首座と典座であるけれども力倆は靈祐の方が勝れて居ると鑑定して終つた『因つて之に命じて開山となす』そこで、靈祐を遣はして大潙山一千五百人の頭領たらしめた、三十年の化門大いに榮えて潙抑宗始めて興つたのは實に此の際に於ける百丈の勘辨に依るものである。

無門曰潙山一期之勇爭奈跳百丈圈圚不出檢點將來便重不便輕何故聻脫得盤頭擔起鐵枷

【和訓】 無門曰く、潙山一期の勇、爭奈がせん、百丈の圈圚を跳り出でざることを、檢點し將ち來れば、重きに便りして、輕きに便りせず。何か故ぞ聻。盤頭を脫得して鐵枷を擔起す。

〔講話〕『潙山一期の勇』潙山は一期の勇を奮つて淨瓶を趯倒した、實に天晴な大機大用である。併し乍ら『爭奈せん百丈の圈圚を跳り出でざることを』潙山が斯樣なやり方をしても、まだ百丈の圈圚以外に超出することは出來ぬ、圈圚は圓規のことで、百丈の圓規は盡天盡地を包括して居るから潙山の如き超凡越聖の大活躍を現ずるものでも、それ以外に跳り出ることは出來ぬ『檢點し將ち來れば重きに便りして輕きに便りせず』よく〳〵潙山の手許を檢べて見ると旗色の好い方へついて廻つて居る樣子は歷然として其の作略の上に現れて居る、潙山は輕重を超越して居る樣であるが、第

一座山子を輪却せりと百丈が典座を重んじたのが嬉しかつた樣である、重賞を望んで居つたことは疑ふべくもない『何が故ぞ、嶄』サア其の譯は如何、諸人者目を覺して篤と見定めるが可いぞ『盤頭を脱得して鐵伽を擔起す』靈祐は百丈山に於ける切盤の番人たる典座の役を脱れたけれども其の代りに大潙山の住持といふ鐵の枷を背負はされて終つた、どちらにしても自由安樂な境界にはなれぬ、圏圚を出でず鐵枷を擔起すと抑へたのは一方に於いて潙山が百丈と同境界に證入し同一負擔に堪へ得ることを認めたのである。

頌曰颺下笊籬並木杓當陽一突絶周遮百丈重關欄不住脚尖趯出佛如麻

【和訓】頌に曰く、笊籬並びに木杓を颺下して、當陽の一突周遮を絶す。百丈の重關欄れども住らず、脚尖趯出して佛、麻の如し。

〔講話〕『笊籬並に木杓を颺下して』潙山が典座を止めて大潙山の住持となつた樣子を形容したのである、笊籬や柄杓の樣な勝手道具を抛げ捨て、『當陽の一突周遮を絶す』當陽は即今、當時といふ樣で意味がある、潙山はあの時、淨瓶を一突に蹴飛ばして四方八方の遮欄即ち障碍物を打ち拂つて終つた、『百丈の重關欄れども住まらず』百丈和尚が千重萬重の關門を設けて潙山を欄らうしたけれども、もう斯うなつては萬里の長城でも函谷關でも到底之を喰ひ止めることは出來ぬ、『脚尖趯出して佛麻の如し』潙山が百丈の重關を蹴飛して超出した脚の尖の力は實に恐しいもので、三世の諸佛も歴代の祖師も麻の如くメチヤメチヤに踏み躒られて終つた、潙山の脚下大光明を放つて光明赫灼たる阿彌陀如來も、太陽の前の線香煙火位のものであると、此の頌は極力潙山の活作略を讚歎したのである。

第四十一則　達磨安心

達磨面壁二祖立雪斷臂云弟子心未安乞師安心磨云將心來爲汝安祖云覓心了不可得磨云爲汝安心竟

【和訓】　達磨面壁す。二祖雪に立ち臂を斷つて云く、弟子、心未だ安からず、乞ふ師、安心せよ。磨云く、心を持ち來れ、汝が爲めに安んぜん。祖云く、心を覓むるに了に不可得、磨云く、汝が爲めに安心し竟んぬ。

〔講話〕『達磨面壁す』達磨大師は禪宗の初祖として誰知らぬものもない、禪は達磨によつて出來たものでもなく世尊によつて始めて興つたものでもない、所謂從劫至劫歷然として存する宇宙の大法である、併し乍ら支那に於いて坐禪調心の宗風を初めて擧揚したのは何といふても西來の祖師たる達磨大師である、達磨は南印度香至國王の第三子で名を菩提多羅といひ、釋尊から二十七代目の祖師般若多羅尊者に就いて佛道に入り、遂ひ其の法を嗣がれた、達磨入道の因緣は不思議なことであつて、達磨の父なる香至國王は或時當時有名な高僧般若多羅尊者を宮中に請待して說法を聽かれた後で、報謝の爲に無價の寳玉を贈つた、尊者は其の時側に居つた王の三子を顧みて、世の中にこれより貴重な寳があるかと尋ぬると、長子月淨多羅は「此の珠最上にして七寳中の最なり、固より世に之に勝るものあることなし、吾が王家に非んば孰か能く之を致さんや、尊者の道力に非んば孰れか能く之を承けんや」と答へ、次子功德多羅も殆ほ之と同じ樣な答をした、然るに第三子菩提多羅は、此の珠は世寳なり、未まだ上とするに足らず諸寳に於いて法寳を以つて上となす、此は是れ世寳、未だ上とするに足らず、諸光に於いて智光を以つて上と爲す、此は是れ世光、未だ上とするに足らず、諸明に於いて心明を上とす、凡そ諸寳の中に於いて心寳是れ最上、何ぞ世寳を問はんや」と答へた、般若多羅尊者は之を聞いて驚歎し、強いて王に乞うて弟子として菩提達磨と名けた、達磨は四十年間般若多羅尊者に隨侍して其の法を嗣ぎ、同門の佛大先と共に般若多羅門下の二甘露門と稱せられた、當時盛に唱道せられた有相宗、無相宗、定慧宗、戒行宗、無得宗、寂靜宗の六派の外道を論駁し、其の後六十四歲にして支那に來つて禪を傳へた、梁の武帝に相見したことや、魏

の少林山に行つて九年の面壁をしたこと等は有名な話であるから殊更諄々しく説明するまでも無からう、此の公案は少林山に於ける面壁打坐の間に起つた事柄である『二祖雪に立ち、臂を斷つて曰く、弟子心未だ安からず、乞ふ師安心せよ』達磨大師が面壁打坐して居つたのは、折角西來しても未だ正法流布の時節が到來せぬことを知つたから、暫らく退いて時機を待つたのであつて、其處へ二祖が來て始めて佛法興隆の因緣が熟したのである、二祖は俗名を神光といひ、久しく伊洛に居つて眼を群書に曝し善く玄理を談じたが常に「孔老の教は禮術風規のみ、莊易の書は妙理を盡さず」と嘆じて居つたが、達磨大師が魏の嵩山の麓に來て坐すると聞いて深く其の道風を慕ひ、行いて之に參せんとしたが達磨は默々として坐定して之を顧みぬ、神光は古人は道を求むるに身命を捧げて屈しなかつたといふ、我れ又之に倣はんと決心して夜に入つても其處を動かなかつた、時しも十二月九日の夜で、ふり積る雪は膝を沒し腰を埋むる程であつたが求道の赤誠に擬り固まつた神光は堅く立つて動かなかつた、曉方に及ぶ頃になつて達磨は其の志氣の壯烈なことを認めて、始めて汝久しく雪中に立つ、當に何事をか求めんとする」と尋ねられた、神光は「唯願はくは和尙慈悲、甘露門を開て廣く群生を度せられよ」と請ふた、達磨曰く「諸佛無上の妙道は曠劫精勤して行じ難きを



第四十一則　達磨安心

能く行し、忍び難きを能く忍ぶ、豈に小德小智輕心慢心を以つて眞乘を冀はん、徒らに勤苦を勞するのみ」と、神光は玆に於いて大いに發奮して刀を以つて自ら左の臂を斷ち切つて達磨の前に投げ出した、之を本文に臂を斷つといつたのであるが、弟子未だ心を安んぜず云々といふ前にまだ次の如き問答がある、達磨は神光の斷臂を見て「諸佛最初に道を求むるに法の爲に形を忘れたり、汝今臂を斷てり、求むるも可なり」と悠々としたものである、神光は早速「諸佛の法印得て聞くべしや」と問ふと達磨は「諸佛の法印人より得るに非ず」と答へて、佛祖相傳の佛法は不立文字敎外別傳なる旨を示した、そこで神光は本文に出て居る弟子心未だ安からず、乞ふ師安心せよといふ問を發したのである、孔老の敎や莊易の理屈ではどうして心を安んずることは出來ぬ、悶々の情押へ難ぎ結果わざ／＼嵩山に達磨を訪うて漸く其の許を得たので早速心を安んぜんことを請ふたのである、『磨曰く、心を將ち來れ、汝が爲に安んぜん』達磨は流石に東土の初祖であるから悟り臭いことや佛法臭いことはいはぬ、安心が出來ぬといふのか、一體安んずるの安んぜぬのといふ樣なものが何處にあるか、心といふものがあつたら此處へ持つて來い、安心してやらうからと輕い挨拶である、『祖曰く、心を覓むるに不可得』神光は良久考へて居つたが、心を覓めたが得られませぬといふた、覓められぬも道理である、一體心といふ樣なものが身體中何處を尋ねてもあるべき筈のものではないから、併し心は有無を以つて論ずべきものでない、有にあらず無にあらず得にあらず失にあらず、何とも名くべきではない、之を不可得といふのである、『磨曰く、汝が爲に安心し竟んぬ』眞に不可得といふことが解れば確かに大事了畢であるが却々此の不可得底の道理を會することが出來ぬ、神光が不可得を會したのは其の求道心の熾烈であつた爲と、從來熱心に群書を涉獵し玄理を研鑽して大いに智力を磨いて居つた結果、達磨の接得に依つて靈火を點ぜられたのである、かくて神光は達磨の法を嗣ぎ、二祖慧可和尚として禪風擧揚の大源泉となつたのである。

無門曰缺齒老胡十萬里航海特々而來可謂是無風起浪末後接得一箇門人又却六根不具咦謝三郞不識四字

【和訓】 無門曰く、缺齒の老胡、十萬里、海を航りして特々として來る。謂つ可し。是れ風無きに浪を起すと。末後に一箇の門人を接得するに、又た却つて六根不具、咦、謝三郞四字を識らず。

〔講話〕『缺齒の老胡』これは達磨のことである、齒の缺けた老ぼれの野蠻人と、思ひ切り罵つたものである、これは勿論禪僧慣用の善罵である、『十萬里海を航りして特々として來る』十萬里とは又思ひ切つて大きく出たのものである、印度と支那との間は十萬里もある筈がないが、併し佛法の大海は十萬里や二十萬里ではない、無數里である、達磨は其の佛法の大海を乘り超えて來た人である『謂つべし是れ風無きに浪を起すと』十萬里海を航りするといふことが已に餘計なことである、元來大地に衆生なし、何の爲にノコノ\と東土等へやつて來たのか、實に達磨は風無きに浪を起す惡戯者といひつべきである『末後に一箇の門人を接得するに又た却つて六根不具』九年も坐り込んで漸く一人の門人を接得したが、それが又二祖慧可とて片臂無い不具者であつた、實に滑稽極まつた話である、併し其の六根不具が面白い、『咦、謝三郎四字を知らず』咦は喚び掛けて人を警覺する聲である、無門は評唱を結ぶに當つて咦と一聲掛けて學人の注意を捉がして置いて、謝三郎四字を知らずといふた、謝三郎は漁夫のこと、三郎といふたから四字と續けたのであるとか、漁夫は錢文の四字を知らぬから賤人といふとか、又四字は四の字で、謝三郎四字を知らずで罪はお前にあるといふ意味の俗語であるとか、此の句に就いては諸說紛々であるが、字義の解釋はいづれを取つても可い、最後の意味に取つて解すれば、折角一箇の門人を得てそれを不具にして終つたのは達磨大師お前さんではないかといふのである、無門は達磨が二祖を不具にしたのを善いといふのか惡いといふのかこゝは諸人者が大いに參究を要する處である、理屈ぜめや分別悟りでは其の髣髴を忍ぶことも出來ぬぞ。

頌曰西來直指事因囑起撓聒叢林元來是儞

【和訓】　頌に曰く、西來直指、事は囑するに因つて起る。叢林を撓聒するは、元來是れ儞。

〔講話〕『西來直指』達磨大師は遙々と西方から十萬里の波濤を超えて東土に來り、直指人心見性成佛等と鹿爪らしいことを言ひ出したが、『事は囑するに因つて起る』五家だの七宗だの、南頓だの北漸だのといふ七面倒なことの起つたのは、達磨が二祖に對して安心し竟んぬ等と餘計なことを依囑したからである。實に先にもいふた通り風無きに浪を起したのである、『叢林を撓聒するは』撓聒は搔き亂して騷がせること、無事太平であつた天下の叢林に、禪道だの佛法だのといふ問題を引起して騷がせたのは『元來是れ儞』元來お前さん達磨和尙の爲業である、實に迷惑千萬なことをしたも

のである、達磨大師ばかりではない、三世の諸佛歴代の祖師、いづれも皆同罪である、「釋迦といふいたづらものが世に出で、多くの人を迷はするかな」とはよくいふた、全く吾々までがお陰で迷惑千萬な佛性だの法身だのといふものを徹見させられねばならぬと散々に抑へて卓上した。

第四十二則　女子出定

世尊昔因文殊至諸佛集處値諸佛各還本處惟有一女人近彼佛坐入於三昧文殊乃白佛云何女人得近佛坐而我不得佛告文殊汝但覺此女令從三昧起汝自問之文殊遶女人三匝鳴指一下乃托至梵天盡其神力而不能出世尊云假使百千文殊亦出此女人定不得下方過一十二億河沙國土有罔明菩薩能出此女人定須臾罔明大士從地湧出禮拜世尊世尊勅罔明却至女人前鳴指一下女人於是從

定而出

【和訓】世尊昔し因に文殊、諸佛の集る處に至つて、諸佛各々本處に還るに値ふ。惟だ一りの女人有つて、彼の佛坐に近いて、三昧に入る。文殊乃ち佛に白して云く、何ぞ女人佛坐に近くことを得て、而して我は得ざる。佛、文殊に告げ玉はく、汝但だ此の女を覺して、三昧より起たしめて、汝自ら之に問へ。文殊、女人を遶ること三匝、指を鳴すこと一下して、乃ち托して梵天に至つて、其の神力を盡せども、而も出すこと能はず。世尊云く、假使ひ百千の文殊も、亦た此の女人の定を出すことを得じ。下方一十二億河沙の國土を過ぎて、罔明菩薩有り。能く此の女人の定を出さん。須臾に罔明大士、地より湧出して世尊を禮拜す。世尊罔明に勅す。却つて女人の前に至つて、指を鳴すこと一下す。女人是に於いて定より出づ。

〔講話〕『世尊昔し因に文殊諸佛の集る處に至つて諸佛各々本處に還るに値ふ』此の公案の因縁は「諸佛集要經」といふお經の中に出て居るといふことである、釋加牟尼世尊が在世の頃、根本の大智卽



ち世間普通の智慧でなく、無漏の大智慧を具した文殊菩薩が諸佛の太勢集まる處へ行かれた、例へば釋加牟尼佛の處へ阿彌陀佛も彌勒佛も大毘盧舍那佛も其の他過去七佛等も集まられる場合があつたものと見える、其處へ文殊菩薩が行かれたが、恰ど其の時は佛達はいづれも自分の本當の居場所へ歸られて不在であつた、茶椀佛はお膳の上に、鐵瓶佛は火鉢の上に、硯佛は机の上に、それ〴〵本處に歸られたものであらう『惟だ一りの女人ありて彼の佛座に近づいて三昧に入る』然るに一人の女が釋迦牟尼佛の御座席に近い處で坐禪三昧に入つて居つた、三昧とは正定正受の意で正定は不亂の徳というて心の亂れぬ狀態、正受は憶持の能というて記憶念持する作用の勝れた樣子をいふこれ共に坐禪の徳である『文殊卽ち佛に白して云く、何ぞ女人佛坐に近づくことを得て而して我は得ざる』そこで文殊は不思議に思つて佛に問ふた、何故罪業多き女人が斯樣に佛に近づくことを得るのに根本智を具へた私が佛に近づくことが出來ぬのでありませう『佛文殊に告け玉はく、汝但だ此の女を覺して三昧より起たしめて汝自ら之に問へ』佛は文殊が自ら尊んで女人を卑しめた樣な問振に對して一層女人を卓上した答話を以つて應ぜられた、女尊男卑は西洋人ばかりではなくて釋尊も此の時已に唱道して居られた、此處等は女權擴張論者の喜びさうな處である、お前は其の譯が知りたければ女人を喚ひ覺して坐禪入定から起たせて之に問ふたら可からうといふ、斯ういはれては男子の面目丸潰れである『文殊女人を遶ること三匝、指を鳴すこと一下して乃ち托して梵天に至つて其の神力を盡せども而かも出すこと能はず』文殊はそこで婦人の坐つて居る周圍を三度遶つて指を一度鳴らし、又婦人を楚天の居る處へ持つて行つたり、種々と手段を盡したけれどもどうしても婦人を坐禪三昧から覺醒させることが出來なかつた、指を鳴すとは指をパチリと彈くことで人を警覺する場合に行ふ、托するは押すとか持ち上げるとかいふ樣な意味、『世尊曰く、假使ひ百千の文殊も亦た此の女人の定を出することを得じ、下方一十二億河沙の國土を過ぎて罔明菩薩あり、能く此の女人の定を出さん』釋迦牟尼佛は其の有樣を見て文殊に告け給ふた、たとひ千萬人の文殊が來ても此の婦人の定を覺まさせることは出來ぬ、地下十二億恒河沙數の國土を過ぎると其處に罔明菩薩といふがある、此の菩薩ならば解もなく女人を定から喚ひ出すことが出る、斯う云うて居られると『須臾に罔明大地より湧出して世尊を禮拜す』ヒョツクリ其處へ罔明菩薩が地から飛び出して釋迦牟尼佛を禮拜せられた『世尊罔明に勅す、却つて女人の前に至つて指を鳴すこと一下す、女人是に於いて定より出づ』佛は罔明菩薩が出現すると之に勅を下して女人を定から出せと命ぜられた、

すると罔明菩薩は女人の前へ行つて彈指をパチリと一度丈すると忽然として婦人は定から出た、文殊と罔明と女人との作略にどういふ差別があるか、いづれが優れいづれが劣つて居るかは人々各自に參究して見る外はないが、强ひて此の公案の主眼とする處を指摘して見やうならば、女人の如き罪深くして力微なるものでも、一旦那迦大定に入る時は千の文殊萬の釋迦出で來るも之を如何ともすることは出來ぬ、盡天地一枚の女人となつて終ふから佛祖と雖も齒も立つ譯ではない、而かも罔明大士の一彈指によつて女人が忽然として定より出たのは時節到來ともいひ得るが、又罔明が放行の大機大用を現じたが爲であるともいひ得る、併し乍ら是の如く兎角の脚注を加へることは却つて無瑕の公案に瑕を付するものであるから寧ろ只公案其の儘に仔細に參究するに如かぬことを學人は充分心に銘すべきである。

無門曰釋迦老子做者一場雜劇不通小々且道文殊是七佛之師因甚出女人定不得罔明初地菩薩爲甚却出得若向者裏見得親切業識忙々那伽大定

【和訓】 無門曰く、釋迦老子者の一場の雜劇を做す。小々を通ぜず。且らく道へ、文殊は是れ七佛の師、甚に因つてか女人の定を出すことを得ざる。罔明は初地の菩薩、甚と爲てか却つて出し得る。若し者裏に向つて見得して親切ならば、業識忙々たるも、那伽大定ならん。

〔講話〕『釋迦老子者の一場の雜劇を做す、小々を通せず』釋迦牟尼佛は本則にある樣な一場の芝居を演じて見せられたが、此の芝居が却々難透の關棙子で、小乘小見のもの共は一人も透れぬぞ、『且らく道へ文殊は是れ七佛の師、甚に因つてか女人の定を出すことを得ざる』併し乍ら文殊菩薩は過去七佛の師である、それ程勝れた智德ある菩薩が女人の定を出すことが出來ぬとは頗る怪しむべきことである、之に反して『罔明は初地の菩薩甚と爲てか却つて出し得る』罔明は程度の極めて低い初地の菩薩であるのに、それが定を出したとは又如何なる理由であらうか、『若し者裏に向つて見得して親切ならば、業識忙々たるも那伽大定ならん』那迦は大龍王卽ち蛇である、蛇は蟠屈すれば却々動かぬ所から不動の坐禪三昧を那迦大定といふたのである、無門は例に依つて者裏に向つて見得して親切ならばといふたが者裏とは女人三昧に入つた當處か或は出定の當處か、或は罔明彈指の處

か、それはいづれでも可い、又公案全體でも可い、兎に角一切掃蕩の者裏でも一切扶起の者裏でも可いから其眞面目を見得して親密適切毫も蹉過する處が無ければ、業識の爲に迷ひ惑うて東奔西走して居るものでも、其の忙々として平靜なる時のない樣な境界其の儘が兀々として動ぜざる那迦大定である、行も亦禪坐も亦禪、語默動靜體安然と古人もいうて居る、諸人者裏に向つて見得底の分があるか、努めずんば遂に輪廻を免がれることは出來ぬぞ。

頌曰出得不出得渠濃得自由神頭幷鬼面敗闕當風流

【和訓】 頌に曰く、出得、不出得、渠濃自由を得たり。神頭竝に鬼面、敗闕當に風流。

〔講話〕『出得不出得』女人を定から出し得るとか出し得ぬとか、詰らぬことを喧しく論じたものぢや、出すも是、出さゞるも又是で『渠濃自由を得たり』彼は自由である、誰の束縛も干渉も受ける身ではない、渠濃は彼奴とか彼とかいふ俗語であるが、一體彼とは誰を指すのか、女人か文殊か或は罔明か、仔細に見來れば一切の人皆自由を得て居るから出し得る場合もあれば出し得ぬ場合もあるけれども、いづれが是いづれが非と判定すべきではない、『神頭竝に鬼面』『傀儡師首に掛けたる人形箱、佛出さうと鬼を出さうと』といふ歌がある、實に出得を出さうと不出得を出さうと心のまゝである、されば『敗缺當に風流』文殊菩薩が其の根本の大智を以つてしても女人を定から出すとが出來ないで、罔明菩薩をわざわざ地下十二億河沙の國土から喚び出して貰つて、女人を定から出したといふのは如何にも見苦しい失敗であつたけれども、それも一面から見れば又好箇の風流事である。

第四十三則　首山竹篦

首山和尚拈竹篦示衆云汝等諸人若喚作竹篦則觸不喚作竹篦則背汝諸人且道喚作甚麼

【和訓】　首山和尚竹篦を拈じて衆に示して云く、汝等諸人若し喚んで竹篦と作さば則ち觸る喚んで竹篦と作さざれば則ち背く、汝諸人且らく道へ、喚んで甚麼とか作す。

〔講話〕『首山和尚』首山和尚は名を省念といひ、臨濟五世の孫で風穴延沼の法嗣である、萊州の狄子に生れ、始め南福寺で律を修め、後に法華經を誦して諸方を遍歷したので念法華と綽名された、首山に居つて宗風を擧揚したが衆徒集るもの頗る多く、家門大いに榮えた、廣教寺と寶應寺をとに法幢を建て禪宗中興の祖とまで稱せられ、宋の淳化年中に薨じた。『竹篦を拈して衆に示して曰く』竹篦は竹をへの字形に曲げて藤を卷いたもので、一寸弦の無い弓の恰好である、師家が學人を接得



する場合に用うるもので、首山和尚の頃から多く用ひられる様になつたといふことである、首山は竹篦を取り上げて大衆の前へさし出して、『汝等諸人若し喚んで竹篦と作さば則ち觸る』汝等我が座下の諸人達、これを竹篦と喚へば觸れて終ふ、卽ち竹篦といふ名目に制限せられて本體を詮はすことが出來ぬ、『喚んで竹篦と作さゞれば則ち背く』竹篦でないといへば本體に背いて、これ又眞相を詮はす所以ではない、竹篦に限らぬ、善でも惡でも菩提でも涅槃でも、これが菩提であるといへば自由を失ひ、之は菩提ではないといへば又菩提の本體に背く、『汝諸人且らく道へ喚んで甚麼とか作す』然らば諸人者之を何を喚んだものであらうか、サアこれは首山門下の雲衲ばかりの問題ではない、天下人の等しく研鑽すべき人生の一大事である、一日を空うすれば一日丈生死解脫が後れるぞ。

無門曰喚作竹篦則觸不喚作竹篦則背不得有語不得無語速道速道

【和訓】　無門曰く、喚んで竹篦と作さば則ち觸る、喚んで竹篦と作さざれば則ち背く。有語することを得ず、無語することを得ず。速に道へ速に道へ。

〔講話〕『喚んで竹篦と作さば則ち觸る、喚んで竹篦と作さざれば則ち背く』無門は公案其の儘をこゝへ持ち出した、同一竹篦も持ち手が交れば用ひ方も變る、正宗の銘刀も子供に持たせては菜切庖刀の役にも立たぬ樣なものである、首山には首山の用ひ方あり、無門には無門の用ひ方があるから參學の諸人はそれぐ\拈ずる人の手許を見定めねばならぬ、『有語することを得ず、無語することを得す』語に渉つても不可、默に渉つても又不可である、語默以外に意旨を發表する機關は實に禪門の專賣特許である、世尊は拈華し迦葉は微笑した、これ語默超越の作略である、南泉は猫を斬り趙州は草鞋を頂いた、それも有語無語に墮ちざる作略である、併しその樣な芝居めいたこと、今こゝでやつて見せても無門は承知すまい、サア何としたものであらか『速に道へ速かに道へ』擬議すれば蹉過する、間に髪を容れず返答せねば箭新羅を過くである。

頌曰拈起竹篦行殺活令背觸交馳佛祖乞命

【和訓】　頌に曰く、竹篦を拈起して、殺活の令を行す、背觸交馳す、佛祖を命を乞ふ。

〔講話〕『竹篦を拈起して殺活の令を行す』首山和尚は一本の竹篦を以つて殺活自在の正令を行せ

られた、之を竹篦と呼ぶものは常見に執するものであつて名目に觸れ滯る、之を竹篦と呼ばさるものは斷見に迷ふものであつて本體に背く。觸るゝものは之を殺し背くものは之を活かす、これ學人接化の任にある宗師家たるものゝ正當なる法令である『背觸交馳す、佛祖も命を乞ふ』其の正令當行の有樣は實に自由無碍であつて或は背、或は觸、其の時其の場合に應じて交々驅馳する、其の大機大用に遭つては佛祖と雖も兜を脫いで軍門に下り、只管其の指揮命令を乞ふ外はない、釋迦も達磨も其の脚下に喪身失命して終ふ、この頌は首山の活作略を讃歎したものであるけれども、斯樣な作略は首山の獨占物ではないから、苟くも參禪辨道に志したものは、勇猛精進して自己の上に之を現し得る樣に心掛くべきである。

第四十四則　芭蕉拄杖

芭蕉和尚示衆云、儞有拄杖子、我與儞拄杖子。儞無拄杖子、我奪儞拄杖子。

【和訓】　芭蕉和尚衆に示して云く、儞に拄杖子有らば、我れ儞に拄杖子を與へん。儞に拄杖子無くんば、我れ儞が拄杖子を奪はん。

〔講話〕『芭蕉和尚』芭蕉は芭蕉山の慧清和尚であつて、百濟に生れ仰山慧寂の法嗣南塔光涌に法を嗣いだ人である、芭蕉山にあつて宗風を擧揚したものに前後六人あるが、此の則は慧清和尚のことであらうといはれて居る『衆に示して曰く、儞拄杖子有らば我儞に拄杖子を與へん』拄杖子は修行者の道を歩くにつく杖のことで、印度では之に金環を付けて音を立てゝ、毒蟲惡獸等の害を禦いだものである、芭蕉は大衆に對して汝等が若し拄杖を持つて居れば拄杖をやらう『儞に拄杖子無くんは我

れ偏が拄杖子を奪はん』それと反對にお前達の拄杖子を持つて居なければ拄杖子を奪ひ取るであらうといふ、此の場合の有と無、與と奪とは普通の有無與奪とは大いに樣子が違ふ、有る上に與へ無い處から奪ふといふ拄杖は一體どの樣なものであらう、有無與奪を超越した本體本性のことをいふたのである等と鹿爪らしく脚註を加へるならば、却つて芭蕉の拄杖子に相距ること白雲萬里である。

無門曰扶過斷橋水伴歸無月村若喚作拄杖子入地獄如箭

【和訓】無門曰く、扶けては斷橋の水を過ぎ、伴つては無月の村に歸へる。若し喚んで拄杖子と作さば、地獄に入ること箭の如し。

〔講話〕『扶けては斷橋の水を過ぎ、伴つては無月の村に歸る』これは寶壽の恩和尚の句として禪林類聚に出て居る、恩和尚上堂して拄杖を占起して曰く「得ることは天臺よりして比倫を絶す、從來葉無く又根無し、時ありて扶けて斷橋の水を過ぎ、幾度か伴つて無月の村に歸る」杖一本あれば水



第四十四則　芭蕉拄杖

を探つて橋の無い川を渡ることも出來、無月の暗夜に遠い村まで、歸ることが出來る、これ皆拄杖子の扶を借り拄杖子に伴はれての活動である、併し乍ら『若し喚んで拄杖子と作さば』若し之を拄杖子だ等と思うならば『地獄に入ること箭の如し』無間地獄へ落ち込むことは弦を發した箭よりも速かであるといふ、然らば斷橋の水を過ぎ無月の村に歸るには何物に扶けられ何物に伴はれるのであるか、夜間背手に枕子を模するが如しといふ語があるが、吾々の行動は沒縱跡斷消息があつて意識分別を超越して居るけれども、而かもチヤンと道に契つて毫も謬まることはない、吾々の行動を扶け吾々の行動に伴侶となるものは即ち本具の佛性である、孔子は七十にして心の欲する處に從つて則を超えずといふたが、此の境界は即ち斷橋の水を過ぎ、無月の村に歸るといふ消息に近いのである、孔子は何によつて這箇の技倆を得たか、これは彼が天賦の本性と修養の力である、然かも之を直ちに佛祖と同道唱和底と許すことは出來ぬ、所謂佛性が孔子の上に顯現したものであるとは遽かに斷ずることは出來ぬが、兎に角彼の本性と修養の力とは彼をして此の境界に到ることを得せしめたのである、吾等は佛祖正傳の大法によつて心の欲する處に從つて規を踰えざることを得るのであるが、其の大法を佛性とか眞如とか拄杖子とかいふ樣な名を以つて限るならば忽ち墮獄の罪を作るであらう、今孔子等を引合に出したのは假に拄杖子の活用を説明するが爲の手段に過ぎぬのであるが、學人が若し孔子云々の語に滯るならば又地獄へ落つること箭よりも速かなることを知らねばならぬ。

頌曰諸方深與淺都在掌握中撐天幷拄地隨處振宗風

【和訓】頌に曰く、諸方深と淺と、都て掌握の中に在り。天を撐へ幷に地を拄ふ、處に隨つて宗風を振ふ。

〔講話〕『諸方深と淺と、都て掌握の中に在り』諸方の宗師家は深遠高尙な佛法と、淺薄卑近な世法とを自家藥籠中のものとなして、時に臨み機に應じて自由自在に使ひ分ける、これ深淺を掌の中に把握して居るからである、芭蕉和尙は拄杖を拈じて、儞に拄杖あらば云々と、淺く學人に拄杖子を與へ、又儞に拄杖子無くんば云々と深く拄杖子を奪つた、實に自由自在の妙用である『天を撐へ幷に地を拄ふ』芭蕉が橫拈倒用自由自在に用ひた處の拄杖は實に盡天盡地を一貫して居る、上は三十三天に至り、下は黃泉の底を極めたものであつて、之を展ぶれば法界に遍ねく、之を收むれば徹

塵裏に歸する、これ芭蕉の祕藏物ではなく、天下人盡く一箇を所持して居る筈である。『隨處に隨つて宗風を振ふ』世尊は三百餘會の法席に之いて此の拄杖を振ひ、達磨は西天から遙々東土へ之を齎らして之を振り廻した、其の餘風今日に及んで、尚ほ我等の左右に活動しつゝある、諸人いづれも把つて之を横拈倒用するが可い。

第四十五則　他是阿誰

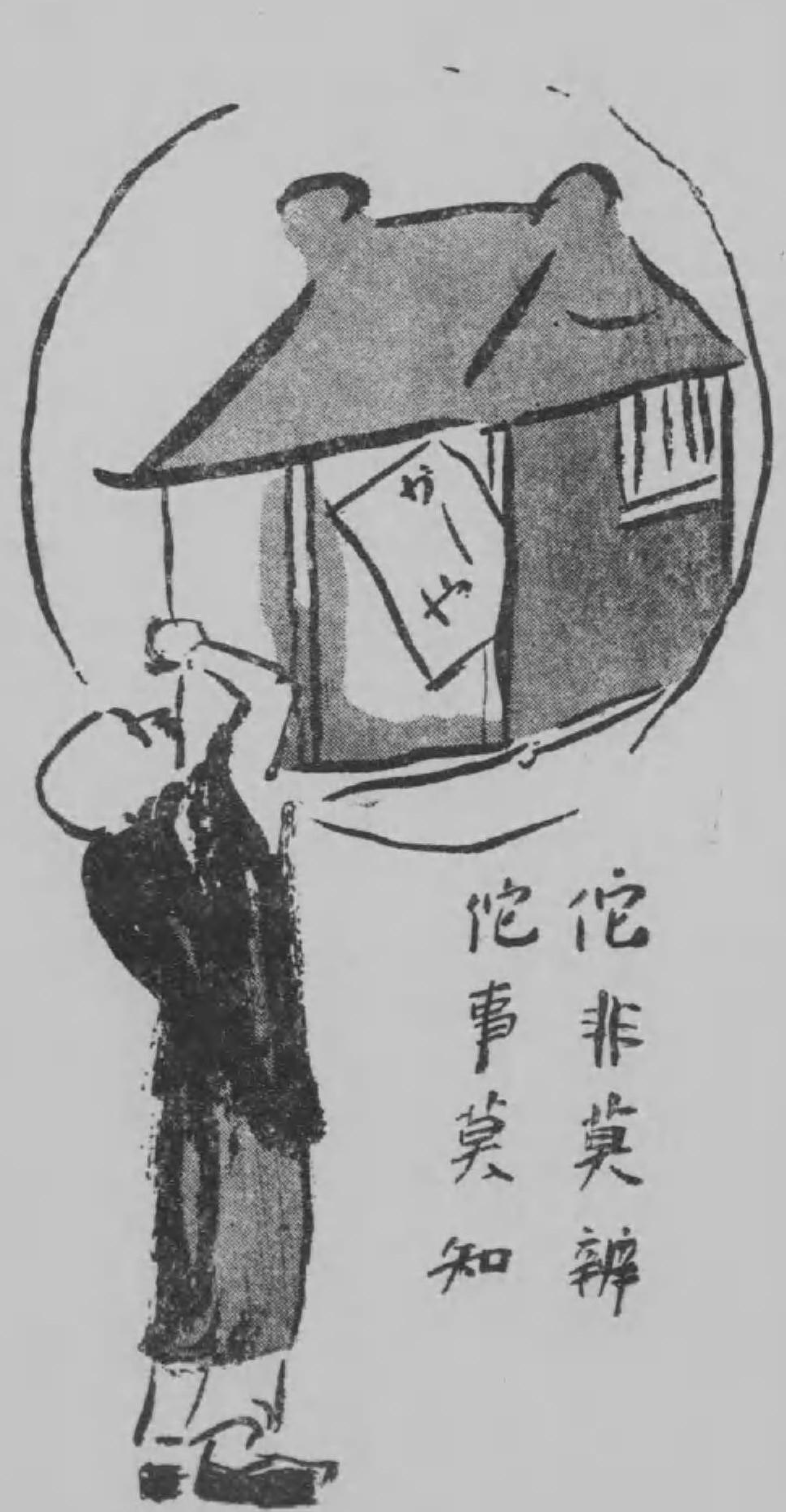
東山演師祖曰釋迦彌勒猶是他奴且道他是阿誰

【和訓】 東山の演師祖曰く、釋迦彌勒は猶ほ是れ他の奴、且らく道へ他は是れ阿誰ぞ。

〔講話〕『東山演師祖曰く』＝東山の演とは五祖山法演和尚のことである、五祖のことに就いては前に屢々述べて置いた通り揚岐派の人であつて大唐五百年間出の高僧と稱せられ、其の影響は廣く支那全國に及んだ、此の人に曰ふには『釋迦彌勒は猶ほ是れ他の奴、且らく道へ他は是れ阿誰』この問に就いては一場の因緣がある、五祖が盛に宗風を舉揚して居つた頃、和州開聖に覺老といふ人があつた始め長蘆の夫鐵脚に參じたが得る處が無かつたので、當時盛名四百餘州に響き渡つた五祖法演和尚を訪うて其の爐鞴に入つた、此の時五祖が覺老に問ふた語が即ち此の公案に引用された語である、「釋迦彌勒猶は是れ他の奴、且らく道へ他は是れ阿誰」覺之て答へて「胡張三、黑李四」權兵衛

八兵衞おさんおなべ、これ皆釋迦彌勒の主人であるといふ、五祖は之を肯つて「是」よし〳〵其の答で充分であるといはれた、其の時五祖山では法演和尚の法嗣で碧巖の評唱を書いた圜悟克勤が第一座を領して居つたので、五祖は此の話を圜悟に擧似して意見を問ふに、「好きことは則ち好し、恐らくは實を失せり、放過すべからず、更に語下に於いて搜看せよ」好いことは好いが眞實と處を見過つて居る、放任して置いては迷を增長するばかりであるから更に其の語を點檢して見るが可いといふた、そこで次の日に五祖は覺老に向つて前日の通りの問を發した、覺老が「昨日和尚に向つて道ひ了れり」といふと、演は「什麼と道ふぞ」と問ひ反した、覺又前日の如く「胡張三、黑李四」演曰く「不是不是」覺曰く「和尚甚としてか昨日は是と道ふ」演曰く「昨日は是、今日は不是」覺老言下に大悟したとある、法演和尚の問の意旨は畢竟何處にあるであらうか、釋迦彌勒を奴婢として顎で使ふといふ人物は誰であるか、覺老は權兵衞八兵衞皆其の人であるといひ、五祖は一旦其の答を肯つて又更に否定した、肯ふが是か否むが是か、過つて會すれば圜悟のいふ通り恐らくは實を失する、學人各自に語下に就いて搜看することが肝要である。

無門曰若也見得他分曉譬如十字街頭撞見親爺相似更不



須問別人道是與不是

【和訓】無門曰く、若し也た他を見得して分曉ならば、譬へば十字街頭に親爺に撞見するが如くに相似たり。更に別人に問ふて、是と不是とを道ふことを須ひざれ。

〔講話〕『若し也た他を見得して分曉ならば』無門は例の見得といふ文字を使つたが、こゝでは者のといはないで「他の」といひ「親切ならば」といはずして「分曉ならば」というて居る、他と者と分曉と親切と是れ同か之れ別か等と鼻垂し小僧の問答の樣なことは云ふまいぞ、他は釋迦彌勒を奴とするもの、分曉は分明の意である、『譬へば十字街頭に親爺に撞見するが如くに相似たり』釋迦彌勒を奴とするものを明に見得した場合は恰ど十字街頭で家の親爺に出會つた樣なものである、親と子との間柄であるから其の親しさは格別で、誰だの彼だのといふ分別を挿む餘地は毫末もない、東山和尚は阿誰等と問ひ掛けたが如何にも遠い處に居る樣な問ひ振であるから、未證據のものは動もするとアチラコチラと尋ね廻る樣なことになるのである、『更に別人に向つて是と不是とを道ふことを須ひざれ』自分の親に遇つたら最早他人に向つて之が親であるかとか親でないかとか問ふ必要はない、東山和尚は覺老に向つて是といひ不是といつて種々に禪機を弄せられたがあの樣なことは最早用不着である、諸人者常に精進不退にして親爺に撞見することを心掛けるが可い。

頌曰他弓莫挽他馬莫騎他非莫辨他事莫知

【和訓】頌に曰く、他の弓挽くこと莫れ。他の馬騎ること莫れ。他の非辨ずること莫れ、彼の事知ること莫れ。

〔講話〕『他の弓挽くこと莫れ』他人の弓を挽くな、他人に向つて阿誰等と問ふた處が畢竟自家半文錢の利得にもなるものではない、それは他人の悟り得た境界を點檢するのであつて、他人のものは如何程點檢しても研究しても畢竟他人のものに過ぎぬ『人の馬騎ること莫れ』これと同じ意味で、吾々は古人の言句や公案を常に研究し參學するがそれも畢竟他人の馬に騎るのであつていか程それに通曉しても餘り自慢になる譯でもない『他の非辯ずること莫れ』是非を語る人は是れ是非の人といふ語があるが、他人のことをいふ人に限つて自分の身の上にも多くの是非を持つて居る人である光陰は矢の如く時節は流水の如し、吾等は一刻も忽諸にせずして自己本性の徹見に努むべきである

近頃は在俗の參禪者にも師家のことを此彼と批評をして得々たるのがあるが實に慨はしいことである、參禪は不惜身命なるべきである『他の事知ること莫れ』東山和尙が覺老を勘過せんとしたのは他の事を知らんとするものであるが、これは師家分上の人が爲人の手を垂れるのであつて他の事にかゝづらふのではないと思ふものがあれば、これ已に迷へるの甚しいものである、東山何の必要あつて斯様な閑手脚を弄するぞ、無常の猛火東山の身邊に燃えつゝあるではないか、何の遑あつて覺老を勘過し圓悟を點檢するぞと、無門が咎めた趣が此の頌全體の上に漲つて居るが、而かもかくいふ無門も他を是非し他の事に拘つて居るではないか、一切の書を見ず一切の人に接せずして山間に獨處した大梅法常和尙も尙ほ即心即佛非心非佛の弓を挽き馬に騎つて居るといふ道理のあることを知らねばならぬ。

第四十六則　竿頭進步

石霜和尙云百尺竿頭如何進步又古德云百尺竿頭坐底人雖然得入未爲眞百尺竿頭須進步十方世界現全身

【和訓】石霜和尙云く、百尺の竿頭如何んか步を進めん。又古德云く、百尺の竿頭に座する底の人、然も得入すと雖も、未だ眞とせず、百尺の竿頭に步を進めて、須く十方世界に全身を現ずべし。

〔講話〕『石霜和尙曰く、百尺の竿頭如何が步を進めん』石霜は名を慶諸といひ、始め潙山靈祐和尙に參じ、後道吾圓智和尙に法を嗣いだ人で唐の僖宗帝其の德を頌表する爲に紫衣を賜つたが辭して受けなかつたと傳へられる、佛道修行も百尺竿頭までは勉強次第で大抵の人が登られるが、それから進一步といふ處が却々難關である、百尺の竿頭までは知見解會を以つても到ることが出來るがそ

れ以上は不惜身命の實參實究でなければならぬ、佛地を跨跳する、大悟却迷する、それが卽ち百尺竿頭の進一歩である、『又古德曰く、百尺竿頭に座する底の人、然も得入すと雖も未だ眞とせず』古德とは長沙景岑和尙のことである、和尙の七言の頌に曰く「百尺竿頭座する底の人、然も得入すと雖も未だ眞と爲さず、百尺竿頭須く歩を進むべし、十方世界全身を現ず、」百尺竿頭に登つても其處に座り込んでは何の役にも立たぬ、佛向上の境界に得入してもそれでは眞實佛向上の端的を我ものとしたとはいはれぬ、そこで『百尺竿頭須らく歩を進めて、十方世界に全身を現すべし』百尺竿頭から更に歩を進めねばならぬが、それは必しも上へ登ることではない、大悟却迷で、悟の絕頂へ登つたら今度は迷の世界に戻つて應機接物すべきである、而して進一歩の當處に於いては一切の葛藤を截斷し、一切の蹤跡を超越せねばならぬ、所謂放身捨命することが肝要である身を捨てゝこそ浮ぶ瀨もあれで、かく萬事を休息し諸緣を放捨すれば始めて轉身の妙用を現じて十方世界に自由無礙なる活動をなすことが出來る、併し乍ら其の進一歩といふことが頗る難事であつて、石霜も座下の學人に對し仔細に參究せしめんとして長沙の垂語を拈出したのである、卽今天下參學の諸人、進一歩に向つて參すること三五十年なるべしである。



無門曰進得歩翻得身更嫌何處不稱尊然雖如是且道百尺竿頭如何進歩嗄

【和訓】 無門曰く、歩を進め得、身を翻し得ば、更に何れの處を嫌つてか尊と稱せざらん。然も是の如くなりと雖も、且らく道へ、百尺の竿頭に如何んか歩を進めん、嗄。

〔講話〕『歩を進め得、』身を翻し得ば、百尺竿頭に向つて更に一歩を進める、即ち向上の樂地にも足を留めずして、身を翻して向下却來の自由を得たならば『更に何れの處を嫌つてか尊と稱せざらん』娑婆即寂光淨土である、九尺二間の裏長屋も、金殿玉樓に異ならぬ妙境である、佛は城邑聚落いづれの處をも選ばず衆生敎化の爲には出入往來せられた、觀音は三十三身を現してあらゆる衆生の爲に慈悲の手を下された、轉身自由を得た人に取つては何れの處も尊い佛土であるから出入往來を厭ひ嫌ふ樣なことはない『然も是の如くなりと雖も、且らく道へ百尺竿頭に如何が歩を進めん嗄』斯樣に大悟却迷底の人は應用無碍であつて爲人接衆に人境の貴賤を問はぬけれども、而かも其の轉身進歩は如何にしてなすべきか、これが學人に取つては當面の問題である、出身轉身をした上の自由な働はこれまで種々說明を聞いて耳に蛸の當る程であるが、それを實現する手段に就いては一向要領を得ぬ、說くことは矢張古來の佛祖が數千萬言を費されたか、門より入るものは家珍にあらずで篤りと腑に落ちぬ、諸人者何として百尺竿頭に歩を進めたものであらうかと無門は學人の參究を促して更に嗄と一聲叫んで評意を強めた、嗄とは瓦器を打破する聲であるともいひ、又船が砂等に突き當る聲であるともいふがそれはいづれでも可い、要するに大聲を揚げて警覺したのである。

頌曰瞎却頂門眼錯認定盤星拚身能捨命一盲引衆盲

【和訓】 頌に曰く、頂門の眼を瞎却して、錯つて定盤星を認む。身を拚て能く命を捨つ、一盲衆盲を引く。

〔講話〕『頂門の眼を瞎却して』頂門の眼は、向上の一隻眼である、吾々は此の頂門の眼を開かんが爲に苦修鍊行するのであるが、而かも其の眼を開いた上は開きながら開き潰れであつて、上佛境界を見ず下衆生界を見ぬ、頂門の一隻眼とは摩醯首羅といふ色界の頂に居る大自在天の眼で、摩醯首羅は額に只一つの眼を以て居るといふことであるが、此處では摩醯首羅等に用事はない、吾々は一

隻眼を具すべきであつて、此の一隻眼の上に更に他の眼を開いて二つとなれば有無是非等の對待邊に滯るのである、併し一隻眼の一は一二の一ではない『錯つて定盤星を認む』頂内の眼を瞎却して終つて百尺竿頭に一歩を進めぬと、兎角動かぬ處の秤の目に執着する樣な間違が生ずる、定盤星は秤の目印、即ち悟とか佛法とか向上底とかいふ樣なものを認めて、それを超越することが出來ぬ、『身を拚て能く命を捨つ』百尺竿頭から一歩を進めて身命を捨て、自由無碍な活動をなさねばならぬ、然らずんば『一盲衆盲を引く』で、自分が迷つて居ながら人を導くのであるから、恰ど盲が大勢の盲の道案内をする樣なものである、自ら妄想の谷底へ落ちて向上の死漢となるのみならず、他人までも地獄の底へ引込むのである、愼みても愼むべきは向上底に座り込むことである、

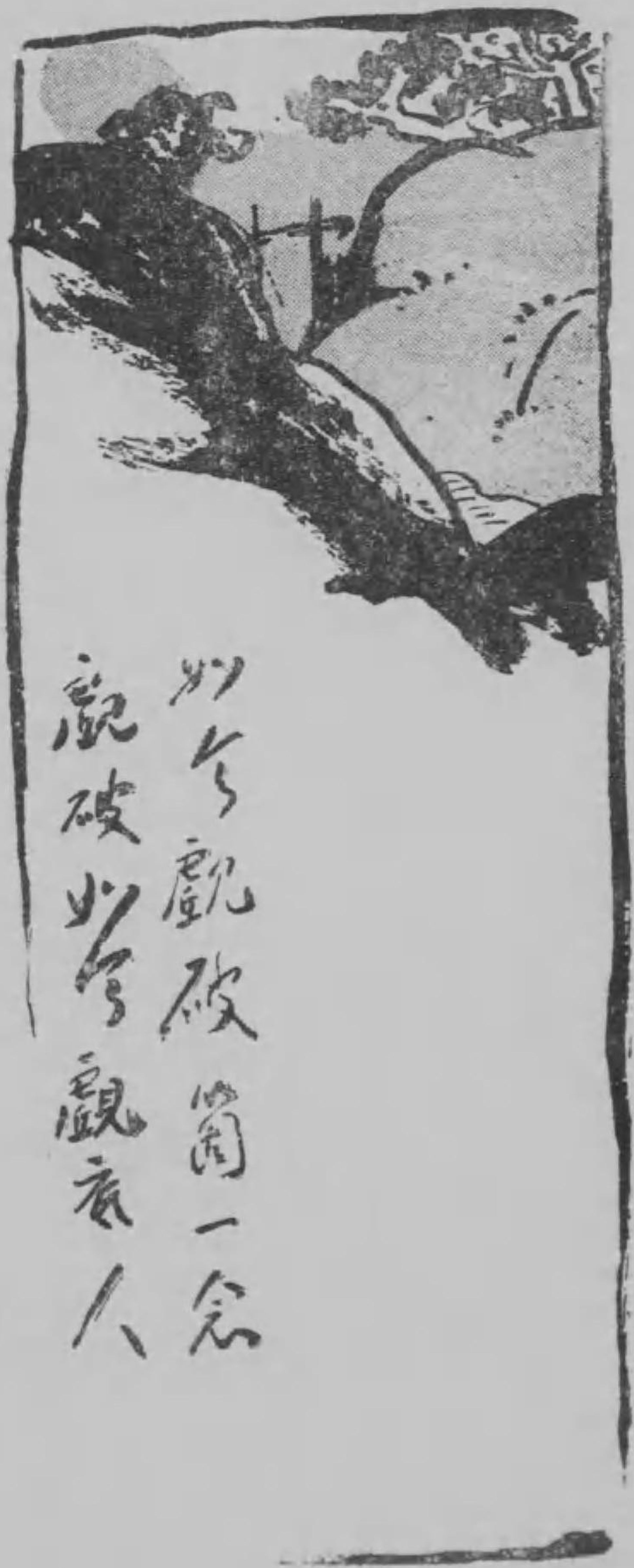
第四十七則　兜率三關

兜率悅和尚設三關問學者撥草參玄只圖見性即今上人性在甚處識得自性方脫生死眼光落時作麼生脫脫得生死便知去處四大分離向甚處去

【和訓】兜率悅和尚三關を設けて學者に問ふ、撥草參玄は只だ見性を圖る、即今上人の性、甚れの處にか在る。自性を識得すれば、方に生死を脫す。眼光落時作麼生か脫せん。生死を脫得すれば便ち去處を知る、四大分離して甚れの處に向つてか去る。

〔講話〕『兜率悅和尚』兜率悅和尚は隆興の兜率寺の從悅和尚のことで、黃龍派肋潭克文和尚の法嗣である、夫の有名なる無盡居士張商英は師の提撕を受けたものである、『三關を設けて學者に問ふ』

兜率の三關というて古來叢林に喧傳せられるものはこれである、兜率は容易に學人に印可證明を與へぬ嚴格な家風の師家で、常に此の三關を設けて學人に鉗鎚を加へた『撥草參玄は只だ見性を圖る卽今上人の性甚れの處にか在る』これが第一關で、撥草とは草を撥いて師を索め道を訪らうこと、參玄は佛法の玄旨に參ずることである、東西に行脚して參禪辨道するのは佛性を徹見することを圖るのてある、サテ今上人卽ちお前の本性本體は何處にあるか、地獄か極樂か、向上か向下か、或は又迷にあるか悟にあるか、これ實に難透の關門である、自己の住處が明に解つた人ならば、兜率の三關を自由に出入往來することが出來る、張商英は此の第一關を「陰森たる夏木杜鵑鳴く、日浮雲を破つて宇宙淸し、曾參に對して曾哲を問ふ莫れ、從來孝子爺の名を諱む」と詠じた、各自に頌意を味つて見るが可い『自性を識得すれば方に生死を脫す、眼光落時作麼生か脫せん』第二關は更に難透である、自己本具の佛性を識得したならば、方に生死輪廻の苦界を脫して不生不滅の安樂を得ることが出來る。然し眼光落地、卽ち眼の光も無くなつて愈々斷末魔をいふ場合は何として脫却するか、生死を脫すると道理の上では解つても實際眼光落地の時を透過し得ることは頗る難事である、張商英はこれを次の如くに詠じた「人間の鬼子符來り取る、天上の花冠色正に萎む、好箇轉身



の時節子、閻老をして等閑に知らしむる莫れ、」次に第三關は一層深い趣がある、『生死を脱得すれば便ち去處を知る、四大分離して甚れの處に向つてか去る』サテ第二關では生死透脱を如何に會得すべきかを參究せしめたが、第三關に於いては生死を透脱した上の落ち着き場所に就いて商量した、此の落ち着き場所を去處といふは、生死を透脱しても去處がなければ中有に迷ふ餓鬼道の有情である、そこで生死を脱得したならば先づ去處を知るべきであるが、生死を脱得し去處を知るといふことは理窟の上の話である、理窟を離れ分別を絶して、四大分離といふ實際の場合に臨んで何處に落ち着くのか、極樂とか地獄とか佛界とか魔界とかいふ様な有りふれた場所では矢張生死流轉を免がれぬぞ、四大分離とは吾々の身體を形造る處の地水火風が離れ／＼になつて終ふ場合、之を死といへば已に名目に墮する、四大分離といふも未だ實際に契はぬけれど、假に此の語を用ひて強ひて死といふことの實際をいひ詮はしたのである、張商英は第三關を頌して、「東村李大の妻を鼓合して、西風曠野涙衣を沾す、碧蘆紅蓼江南の岸、却つて張三と作つて釣磯に座す」といふた、第三關を以つて、これが最上の關で之を透過するのが最後の目的である等と妄想するならば永劫此三關を透過することは出來ぬ、三關等しくこれ向上の關捩子、透過せんと要せば放身捨命し來るべきである。

無門曰若能下ニ得此三轉語一便可下以隨レ處作レ主遇レ縁卽上レ宗其或未レ然麁飡易レ飽細嚼難レ飢

【和訓】無門曰く、若し能く此の三轉語を下し得ば、便ち以つて處に隨つて主と作り、縁に遇つて宗に卽す可し。其れ或は未だ然らずんば、麁飡は飽き易く、細嚼は飢え難し。

〔講話〕『若し能く此の三轉語を下し得ば』天下參學の高流、若し此の三轉語に向つて、一一明快なる著語を下して最も親密切實なることを得たならば『便ち以つて處に隨つて主となり、縁に遇つて宗に卽すべし』生に逢つては生に主となり、死に隨つては死に主となり、飯を喫しては喫飯に主となり、茶を喫しては喫茶に主となつて、行く處毫も第二念に渉らぬ、又順縁でも逆縁でも、縁に遇へば宗旨の本源に卽して、的を外さぬといふ作用を得ることが出來るのである『其れ或は未だ然らずんば麁飡は飽き易く、細嚼は飢え難し』若し三轉語に適切なる一句を下し得る場合は充分念を入れて本分の事を參究するが可い、麁々しく物を喰ふと直に飽いて終ふが、叮嚀に咀嚼すれば眞實食物が腹の足になつて容易に飢えることがない様なものである、參禪辨道は須らく親切叮嚀なるべしで

ある、綿密の修行は此の際最も大切であると警告した。

頌曰一念普觀無量劫無量劫事卽如今如今覻破箇一念覻破如今覻底人

【和訓】頌に曰く、一念普く觀ず無量劫、無量劫の事卽ち如今。如今箇の一念を覻破すれば如今覻る底の人を覻破す。

〔講話〕『一念普く觀ず無量劫』一念萬念、萬念一念といふ語がある、チラリと一念が動いた當處に無量の長時間を見定めることが出來る、心の作用は實に時間を超越して居る、念とは心の作用である、過去現在未來の三世も現在のこの一刹那、一念の上に接することが出來る、卽ち『無量劫の事卽ち如今』である、如今の上に無量無數の長時がある、「千なりや蔓一すぢの心より」一念の上に三千を具する道理は加賀の千代の詠じた此の一句の上にも明に詮はれて居る『如今箇の一念を覻破すれば』今日只今、チラリと動いた一念を仔細に參究して其の端的を看破し得たならば、これ無量劫を看破する所以であつて『如今覻る底の人を覻破す』自他彼此の差別を絕し、物心一如、時空超越の妙用を具するのであるから、見る底の人、大悟徹底の境界成佛得脫の分際をも明かに見破ることが出來る、これ實に兜率の三關を透過し得たものといふべきである。

第四十八則　乾峰一路

乾峰和尚因僧問十方薄伽梵一路涅槃門未審路頭在甚麼處峰拈起拄杖劃一劃曰在者裡後僧請益雲門門拈起扇子云扇子𨁝跳上三十三天築著帝釋鼻孔東海鯉魚打一棒雨似盆傾

【和訓】乾峰和尚因に僧問ふ、十方薄伽梵、一路涅槃門、未審し、路頭甚麼の處にか在る。峰、拄杖を拈起して劃一劃して云く、者裏に在り。後に僧雲門に請益す。門、扇子を拈起して云く、扇子𨁝跳して、三十三天に上つて、帝釋の鼻孔を築著す。東海の鯉魚打つこと一棒すれば雨盆の傾くに似たり。

〔講話〕『乾峰和尚』乾峰和尚は越州乾峰のことで、洞山良价和尚の法嗣で、雲門は嘗て久しく乾峰の許にあつて其の家風を知つて居つたから、乾峰の作略を僧が雲門の處へ行つて示したのである、『因に僧問ふ、十方薄伽梵、一路涅槃門、未審し路頭甚麼の處にか在る』或時僧が乾峰に對し右の樣な問を發した、薄伽梵は梵語、譯して如來とも佛ともいふ、涅槃は寂滅の義で、一切の妄想煩惱の苦を滅して靜寂安樂なる境界に達したるをいふ、東西南北四維上下、いづれの處にも佛が充ち滿ちて居る、戸外には草木瓦礫といふ佛あり、戸内には父母兄弟奴僕を始め、戸障子襖床といふ佛がある、吾々の前には坦々たる不生不滅寂靜安樂なる一路が開かれて居る、進まんと欲すれば進むに任せ、退かんと欲すれば退くに任せる、頭上脚下到る處に涅槃門が開かれて居ると經の中に說かれてあるが一體其の路頭は何處であるかといふ問である、この樣なことは禪宗坊主は常に聞いたり說いたりして解り切つた樣に思つて居るが、サテ斯樣に問はれて見ると速座に明快な答辯の出來るものは少い、思想として頭に印象して居つてもそれが實際自分のものとなつて居らぬからである、然らば乾峰は何と答へたであらうか『峰拄杖を拈起して劃一劃して曰く、者裏に在り』乾峰は拄杖をとり擧げて空中に一の字を劃いて、サア一路涅槃門は此處である、十方の佛達は此の一字の中に鎭

座まします、諸人著近う依つて禮拜を遂げるが可いぞといふ態度である、千語萬語の說明にも勝つた活說法であるが未證據のものが之を眞似ても本文には契はぬ、白隱和尚は拄杖を卓て、「此の座敷が一路涅槃門、皆佛ぢや」といふたが、あれは乾峰の物眞似ではない『後に僧雲門に請益す』僧が其の後雲門文偃和尚の處へ行つて此の問答の話をした、これは前にもいふた通り雲門が乾峰の家風を知つて居るから其の意見を問ふたのである『門扇子を拈起して曰く、扇子𨂻跳して三十三天に上り、帝釋の鼻孔を築着す、東海の鯉魚打つこと一棒すれば雨盆の傾くに似たり』雲門は側にあつた扇子を差し揚げて、此の扇子が跳り上つて天上界の三十三天に至つて其處に鎭座する帝釋天の鼻にぶつかつた、又東海の鯉に一棒を與へると、忽ち雨が盆を覆すが如く盛に降つて來るといふた、

サテこれは一體何のことをいふたのか、一方薄伽梵一路涅槃門の道理がどうして此の樣な不可解な言句で會得が出來やうか、併し十方薄伽梵一路涅槃門であるから扇子が帝釋の鼻孔にぶつかる道理もあり、鯉が上天して豪雨を降らす道理もある、涅槃門が通じて居るから雀海中に入て蛤蜊ともなれば山の芋變じて鰻ともなるのである、理屈や說明に雲門の的意を解せんとするならば乾峰の劃一劃の道理は決して會得せられぬぞ、何といふても實參實究が肝要である。



無門曰一人向深々海底行簸土揚塵一人於高々山頂立白浪滔天把定放行各出一隻手扶竪宗乘大似兩箇馳子相撞著世上應無直底人正眼觀來二大老惣未識路頭在

【和訓】無門曰く、一人は深々たる海底に向つて、行いて簸土揚塵す。一人は高々たる山頂に於いて、立つて白浪滔天、把定放行、各々一隻手を出して、宗乘を扶竪す。大いに兩箇の馳子、相撞著するに似たり、世上應に直底の人無かるべし。正眼に觀來れば、二大老、惣に未だ路頭を識らざることあり。

〔講話〕『一人は深々たる海底に向つて行いて簸土揚塵す』無門が雲門や乾峰の作略を一々批評した此の句は乾峰が劃一劃して者裏に在りと極めて箇明直截に涅槃門を打開した樣子をいつたもので、海の底で土を簸ひ塵を揚げるといふのであるから、如何にも沒蹤跡な作略である『一人は高々たる山頂に於いて立つて白浪滔天』これは雲門の作異である、一人は高い富士山の絶頂で大海嘯を起して居る、實に扇子が三十三天に上つたり、鯉が雨を降らせるのは富士山上の白浪滔天にも似たる大機大用である、到底凡見常見を以つては會し難い消息である『把住放行、各々一隻手を出して宗乘を扶竪す』把住は收めて發せざる樣子、放行は散じて留めざる貌である、宗師家は對機の宗乘に對する智識力倆の程度に應じて或は放行の手段を用ひ或は把住の作略を用ひる、此の則に於いて乾峰を把住とすれば雲門は放行である、いづれも放行把住の雙手を具して居るが、此の場合各一隻手を出して佛祖の宗旨を扶竪擧揚した、其の有樣は『大いに兩箇の馳手相撞著するに似たり』二人の騎者が競馬をして同時に決勝點に着いて兩方がぶつかる樣なものである、雲門と乾峰とは力倆が相匹敵して居るので、放行と把住と、進む道こそ違ふけれども到着點は相一致して居る、所謂函蓋相合し箭鋒相拄ふるが如きものである『世上應に直底の人無かるべし』直は眞の謬であらうといふことであるが直でも差閊ない、世上には此の二人の如く眞實に佛法を會し、驀直に涅槃門を提示し得る人はあるまい『正眼に觀來れは二大老、總て未だ路頭を識らざること在り』併し乍ら正眼を開いて仔細に雲門乾峰二大老の作處を點檢して見るに、未た眞實涅槃門の路を識つて居るものとは思はれぬ、識つて居るものならば拄杖を拈起したり扇子を拈起する樣な閑手脚を弄する筈がない、斯樣

などは畢竟無用であるのみならず却つて學人を迷惑せしむるものであると抑へて結んだのである。

頌曰未擧歩時先已到未動舌時先說了直饒著々在機先更須知有向上竅

【和訓】 頌に曰く、未だ歩を擧せざる時先づ已に到る、未だ舌を動さざる時先づ說き了る。直饒ひ著々機先に在るも、更に須らく向上の竅有ることを知るべし。

〔講話〕『未だ歩を擧せざる時先づ已に到る』足を擧けぬ先に目的地に達して居る、これ實に扇子䟦跳の働きであつて、干戈を動せずして太平を致すといふものである。『未だ舌を動かさゞる時先づ說き了る』乾峰の劃一劃した當處に十分薄伽梵の說法が縱橫無碍に布衍されて居る「者裏に在り」等といふたのは却つて餘計なことである『直饒ひ著々機先に在るも更に須らく向上の竅あることを知るべし』斯樣に擧せざる時先づ到り、動かさゞるに說き了るといふ樣な機に先つて着々事を成す處の大機大用があるものでも、まだ向上の竅のあることを知らねば眞に佛祖の境界を驀過する底の漢といふことは出來ぬ、雲門には雲門の宗乘があり乾蜂には乾峰の眞面目がある、これ卽ち向上の那一竅であつて、參學の徒は須らく親參親究して祖師門下嫡傳の向上の那一竅を探り當てねばならぬ而し其の那一竅も浮乎すると葛藤窠となつて吾人を拘束するものであるから大いに注意せねばならぬ、機先を制する働があつても其の機先に滯るのは向上の竅に落ち込むのである、雲門や乾峰の手先にばかり迷うて居つてはならぬといふ警戒の意味を籠めた頌である。

自跋

從上佛祖垂示機縁據款結案初無剩語揭翻腦蓋露出眼睛肯要諸人直下承當不從他覓若是通方上士纔聞擧著便知落處了無門縁可入亦無階級可升掉臂度關不問關吏豈不見玄沙道無門解脱之門無意道人之意又白雲道明々知道只是者箇爲甚麼透不過恁麼説話也是赤土搽牛嬭若透得無門關早是鈍置無門若透不得無門關亦乃辜負自己所謂涅槃心易曉差別智難明明得差別智家國自安寧旹

紹定改元解制前五日楊岐八世孫無門比丘慧開謹識

【和訓】 從上の佛祖の垂示の機縁、款に據つて案に結す。初めより剩語無し、腦蓋を揭翻し眼睛を露出す、肯て諸人直下に承當して、他に從つて覓めざらんことを要す。若し是れ通方の上士ならば、纔かに擧著を聞いて便ち落處を知らん。了に無門の入る可き無く、亦た階級の升る可き無く。臂を掉つて關を渡る。關吏を問はじ、豈に見ずや玄沙の道ことを。無門解脱の門、無意道人の意と。又た白雲道く、明々として道を知る、只だ是れ者箇、甚麼と爲してか透不過なる。『恁麼の説話も也た是れ赤土牛嬭を搽る。若し無門關を透過せば、早く是れ無門を鈍置せん。若し無門關を透り得ずんば、亦た乃ち自己に辜負す。所謂涅槃の心は曉め易く、差別智は明の難し、差別智を明め得ば、家國自ら安寧。旹に紹定改元解制前の五日楊岐八世の孫、無門比丘慧開、謹んで識す、

〔講話〕『從上の佛祖垂示の機縁、欵に據つて案に結す』これからが無門自身の書いた跋である、趙州狗子の話から乾峰一路の話に至るまで四十八則の公案に對する批評や諷頌は之を以つて終つたが

これまで並べ舉げた所の佛祖の垂示を基とした機略因緣は、所謂欵に據つて案に結す、卽ち罪人の白狀によつて紙案に書き留めた判決書の樣なもので、尊い敎典の樣な類ではなく、却つて人の罪を撥き立てたものに過ぎない、併し乍ら『初めより剩語無し』其の文字には少しも不必要なものはない、悉く『腦蓋を掲翻し眼睛を露出す』全力を傾注して偏輯したもので、頭蓋骨を引くり返し、眼の玉をむき出しにした樣な、極めて眞劒なものばかりである、されば『肯て諸人直下に承當して佗に從つて覓めざらんことを要す』直下に承當することが肝要である、無門關一卷四十八則の文字言句を逐うて遶路に佛法の眞髓を覓めても到底其の目的は達せられぬ、これ所謂佗に從つて覓めるものであつて門より入るものは家珍にあらずといふが如く、斯樣に他から覓め來つたものは眞實自己の者とはならぬ、『若し是れ通方の上士ならば纔かに擧著を聞いて便ち落處を知らん』若し大方の道に通達した上智上根の士ならば、四十八則の長々しい文句を一々追尋せずとも、一寸其の一節を擧げて示せば直ちに人々個々の落着き場處、一切の公案の主眼とする處を觀破するであらう、『了に門戶の入るべきなく、亦た階級の升るべき無し』斯樣な上根の大士には佛道に入る門戶も必要はない、五十二位等の階級も用不著である、『臂を掉つて關を渡つて關吏を問はじ』臂を掉り肩を聳かして自由に關所を透ることが出來る、關所役人も彼是と咎め立てはせぬ、『豈に見ずや玄沙の道ふことを、無門解脫の門、無意道人の意と』雪峰義存和尙の門下に其の人ありと知られた玄沙師備和尙が曾て言つたことがある、佛法には門はない、門の無いのが卽ち解脫の門なる所以である、悟には意趣はない、意趣のないのが卽ち大道を體得したもの、意趣があると、成程玄沙は端的に向上の面目を道破して兒れた、解脫の境界には入るの出るのといふことはないから從つて門だの關だのといふ樣なものはない、大道は意識分別を絕して居る、されば所謂道人は無意にして意識して居るのである、『又白雲道く、明々として道を知る、只だ是れ者箇、甚麼としてか透不過なる』白雲は白雲守端和尙のことである、守端和尙も言うて居る、大道とは何も難かしいものではない、明歷々露堂々と吾等の前後左右に現はれて居る、ソレこゝにある者箇ぢや、此の大道が何故透ることが出來ぬのか、と、『只是れ者箇』といふ代物が聊か難關であるが悟つて見れば何の造作もない、日常我等が觸るゝ處の事物悉くこれ者箇である、『恁麼の說話也た是れ赤土に牛嬭を搽る』斯樣に種々と說いたが、これも畢竟風なきに浪を起し毛を吹いて瑕を求めたのであつた、清淨な赤土に牛乳を塗つて汚した樣なものである、一句でも一語でも說けば明皎々たる法性、鏡の上に汚點を搽へる、玄沙も白雲も

要らぬことを云うて口に風を引かせねば可いが、『若し無門關透得せば早く是れ無門を鈍置す』若し四十八則の無門關を樂々と透過することが出來たならば之を仰山らしく並べ立てた拙者無門を鼻の端であしらうことが出來るが、而しその地に至つて居らぬものの爲には最も必要な參究の據り處であると信ずる『若し無門關を透り得ずんば亦た乃ち自己に辜負す』若し此の無門關を熱心に參究もせず、一則も透過せぬとあつては自己の本分に負く、人々みな本具の佛性を有しながら、之を參究し徹見せぬ樣では自分自身に對して相濟まぬ譯である。『所謂涅槃の心は曉め易く、差別智は明め難し』不生不滅の平等の心は明め易いが、差別せる事々物々の上に應用するといふことは却々難しい向上の道理は會得が出來ても、向下の作用が容易でない『差別智を明め得ば家國自ら安寧』若し差別智を得て自由無碍の活作略が得られるならば、之れを世法の上に應用すれば天下太平家内安全である、世法と佛法とは決して相離れて無關係なものではない、向上の道を悟らんが爲に參禪辨道するのも、要するに之を世法に應用せんが爲である『旹に紹定改元解制前の五日』此の書を書き終つたのは南宋理宗皇帝の紹定元年、夏安居の終から五日前の日である『楊岐八世の孫、無門比丘慧開、謹んで識す』楊岐は楊岐方會和尚から興つた楊岐派のことで、楊岐派は禪宗七派の中の一派である、無門は其の第八世に當る、表にすれば左の通りである。

- (一)楊岐方會
  - (二)白雲守端
    - (三)五祖法演
      - 圜悟克勤
        - 大慧宗果
        - 虎丘紹隆
      - 佛眼清遠
      - (四)開福道寧─(五)大潙善果─(六)大洪祖證─(七)月林師觀─(八)無門慧開
    - 瑯琊永起
  - 保寧仁勇─月掌智淵

無門の門下には心地覺心、自庵宗、瞎驢無見、放牛居士等があるが、其の中心地覺心は日本の人で其の門下に、高山慈照、孤峰覺明があり、孤峰の下に慈雲妙意、拔隊得勝等がある、慈雲妙意は國泰寺派の祖、拔隊得勝は向嶽寺派の祖である、無門は無門關の作者としての外餘り世に知られて居らぬが、其の末流は相應に榮へて居る。

禪箴

循規守矩無繩自縛縱橫無碍外道魔軍存心澄寂默照邪禪恣

意忘緣墮落深坑惺々不味帶鎖擔枷思善思惡地獄天堂佛見法見二鐵圍山念起卽覺弄精魂漢兀然習定鬼家活計進則迷理退則乖宗不進不退有氣死人且道如何履踐努力今生須了却莫敎永劫受餘殃

【和訓】禪箴。規に循ひ矩を守るは無繩自縛。縱橫無碍なるは外道魔軍。存心澄寂は默照の邪禪。恣意忘緣は深坑に墮落す。惺々不味は帶鎖擔枷。思善思惡は地獄天堂。佛見法見は二鐵圍山、念起卽覺は精魂を弄する漢。兀然習定は鬼家の活計。進むときは理に迷ひ、退くときは宗に乖く。進まず退かざるは有氣の死人。且らく道へ、如何んか履踐せん。努力て今生に須らく了却すべし。永劫に餘殃を受け敎むること莫れ。

〔講話〕禪箴とは禪の病に對する箴といふことで、身に病があると同じく心にも病がある、禪は此の心の病を癒す爲のものであるが、其の禪にも又偏見慢心から生ずる種々なる病がある、今無門は自己の立場から見て禪病と信ずるものに對して一々箴を打つた、實に適切な功果のある箴であるから參學のものはいづれも各自に打つて見るが可い。『規に循ひ矩を守るは無繩自縛』規はブンマワシで圓を劃くもの、矩はサシガネで直角や直線を劃くものである、圓や角を劃くに規や矩を用ゆる樣に禪の上でも心の持ち方や身の取り扱ひ方を一々規則にあてはめやうとするのは、自分で自分の身を縛るもの、規則といふ繩ならぬ繩に縛られて自由に身動きの出來ぬ無繩自縛病である、其の樣な病は早速癒して終ふがよい、さればというて身も心も自墮落にすればこれ又不治の病を生ずるぞ、『縱橫無碍なるは外道魔軍』これが今いふ無繩自縛の反對の病である、磊落を衒つて氣儘放埒にやり放すものも禪門には少くない、戒法も何もあつたものではない、佛來れば佛を呵し、祖來れば祖を罵るといふ言葉通りに秩序も長幼も無視するのは所謂破れ大乘で、斯樣なものが自ら稱して縱橫無碍の活作略など、いうて居るけれども、それは畢竟外道魔軍である、『存心澄寂は默照の邪禪』又無念無想に住するのが坐禪の目的であるかの樣に考へて、心を凝を取り靜めて寂然不動と澄し込んで居るのは所謂立枯禪法其の儘悟といふのであつて、此の樣な坐禪をする位ならば樂々と足腰を延して寢た方がましである、これを默照の邪禪といふ、『恣意忘緣は深坑に墮落す』自由自在で何物

にも束縛せられぬのが悟の境界であるといふことを誤つて解釋して、寢たい時に寢、起きたい時に起き、遊びたい時に遊んで、勝手氣儘な振舞をするものは、所謂意を恣にし緣を忘ずるといふもので、かゝる人は因緣因果の道理を無視して萬有の實相に迷ふ暗闇悟の坑に墮ち込む輩である、『惺々不昧は帶鎖擔枷』惺々は眼覺める貌で、常に本心を明にして毫も昧まさぬと力んで居るのは惡くはないが、それも度を越すと惺々不昧が鎖となり枷となつて自由を拘束する、例へば餘り勉強し過ぎて神經衰弱を起した樣なもの、眼を覺して勉強するのも可いが不眠症に罹つて終つては甚だ厄介物である、『思善思惡は地獄天堂』これは善である、あれは惡であると道德上の規定に執着してコセコセして居るのは自身で地獄を造つたり天堂を造つたりするのであつて、これも矢張道德狂たるを免かれぬ、『佛見法見は二鐵圍山』眞如の上には佛だの衆生だのといふ差別はないのに佛といふものを立てゝ有難つたり、又萬法だの一切諸法だのと何か特別なものでもある樣に種々と並べ立てるのはこれも眞實の大道には遠うして遠しである、南閻浮提から三億六萬六百六十三由旬の南に大小の二鐵圍山があるといふが佛見法見に執着する輩は本地の風光を距ること恰も鐵圍山の閻浮提に於けるが如くである、『念起卽覺は精魂を弄するの漢』無念無想は默照の邪禪であるというて公案や因緣等を無暗に念じたり、覺に卽して兎や角と分別ばかりして居るのは卽ち精魂を弄するの漢である、『兀然習定は鬼家の活計』兀々として打坐して禪定を習ふもの、只だ木石の如く坐り込んで辨道も修行も學問も仕事も一切顧ぬとは鬼窟裡の活計、卽ち棺桶の中の生活で、一向生き甲斐のない身の上である、『進む時は理に迷ひ、退く時は宗に乖く』斯樣に並べて見ると、進んで色身精魂を弄すれば道理分別に迷ひ、退いて兀坐澄寂を守る時は本分の宗旨に乖く、さればとて『進まず退かざれば有氣の死人』進退いづれにも傾かねばこれも精氣を散ぜぬ死人、溫まりの拔けぬ死骸の樣なもので甚だ始末が惡い『且らく道へ如何んか履踐せん』サテさうとしたならば吾等は何として日常の行履を導いたものであらうか、此處に於いて轉身の妙用を發揮する必要がある、百尺竿頭進一步し、懸崖に手を撒して始めて無門が如何が履踐せんといふ問に應へることが出來るのである、『努めて今生に須らく了却すべし』此の身今生に度せずんば何れの日にか度せんである、一切衆生の中人心を受くるものは大地の土と爪の上に載せた土との割合であるといふが、其れ程尊い人身を受けた今生に於いて努力して大悟了却せずんば永劫に輪廻を免がれることは出來ぬ、されば無門も『永劫に餘殃を受け敎むること莫れ』と誡めた、自己一身が餘殃を受けるのみではない、後世の群生悉く五百

生野狐身を受くるといふ結果を來すから努々怠つてはならぬぞといふ警告である。

黄龍三關

我手何似佛手、摸得枕頭背後、不覺大笑呵々、元來通身是手。我脚何似驢脚、未擧歩時踏著、一任四海橫行、倒跨楊岐三脚。人々有箇生緣、各々透徹機先、那吒折骨還父、五祖豈藉爺緣。佛手驢脚生緣、非佛非道非禪、莫怪無門關險、結盡衲子深寃。

【和訓】我が手、佛手と何似れ。枕頭背後を摸り得たり。覺えず大笑呵々。元來通身是れ手。我が脚、驢脚と何似れ。未だ歩を擧せざる時踏著す。四海に橫行するに一任す。倒に楊岐の三脚に跨る。人々箇の生緣有り、各々機先に透徹す。那吒骨を折つて父に還す。五祖豈に爺の緣に藉らんや。佛手、驢脚、生緣、佛に非らず、道に非らず、禪に非らず。怪しむこと莫れ、無門關險なることを。衲子の深寃を結盡す。

瑞巖近日有無門、掇向繩床判古今、凡聖路頭俱截斷、幾多蟠蟄起雷音。

請無門首座立僧山偈奉謝紹定庚寅季春無量宗壽書

【和訓】瑞巖近日無門有り、繩床を掇向して古今を判す。凡聖路頭倶に截斷す。幾多の

蟠蟄か雷音を起す。

無門首座を請じて立僧、山偈を以つて謝し奉る。紹定庚寅季春、無量の宗壽書す。

〔講話〕『我か手佛手と何似ぞ』黄龍三關は黄龍慧南和尚が學人を接得する爲に常に用ひられた鉗鎚で、佛手、驢脚、生緣の三關である、無門慧開が無門關を編述したのに對して報恩謝德の誠を表する爲に無量宗壽といふ人が黄龍和尚の三關を頌して贈つたものである、我が手は佛手と何の變りもない、痒い處があれば自然に其處を搔き、欲しいものがあれば任運にそれを取る、自由無碍、何の束縛をも受けぬ、『枕頭背後を模り得たり』夜半背手に枕子を模すといふ語がある、夜半に枕が外れると夢現の境にある樣な時でも手で探つて枕をかうが、眞暗な中でもチヤンと枕を探り當てるのは手の先に眼がある樣である、『覺えず呵々大笑』不思議といはうか、愉快といはうか、實に面白いものである、これは『元來通身是れ手』體中が手であるからである、千手千眼の觀音が吾々の上に乘り移つて斯樣な働を現せらるゝものとでもいふべきであらう、藥山惟儼和尚の法嗣雲巖曇成和尚が同じ法眷の道悟圓智に問うた、「大悲菩薩許多の手眼を用ひて什麼をか作す、」道吾曰く、人の夜半に背手にして枕子を模するが如し、雲巖曰く、我れ會せり、道吾曰く、作麼生か會す、雲巖曰く偏身是れ手眼、道吾曰く、道ふことは則ち太煞道ふ、只八成を道ひ得たり、雲巖曰く、師兄作麼生、道吾曰く、通身是れ手眼」とある、宗壽は此の公案を引いて佛手の關を頌したのである、『我が脚驢脚と何似れ、未だ歩を擧せざる時踏著す』手は佛手に似て脚が驢脚に以たとは同じ人間の手と脚でも貴賤尊卑の差が餘りに甚しい樣である、併し乍ら此の驢脚は敏捷俊潑で、まだ脚を擧げないのに已に千里を驅けて居る、一體脚も擧げないで驅け出して何處へ行かうとするのか、諸人者其の行先をつき留めて見るが可いぞ『四海を橫行するに一任す』驢脚は行歩自在であるから四海五湖どんな處でも橫行濶步することが出來る、其の驢脚に跨つて行く有樣は『倒に楊岐の三脚に跨る』が如く、思量分別を絕した働である、楊岐三脚は楊岐派の宗祖方會和尚が上堂した時、僧が「如何なるか是れ佛」と問ふた、楊岐曰く「三脚の驢子蹄を弄して行く」といふに據つたのである、通身是れ手なることを會したものは三脚の驢に乘る底の作略をも具すべきである、次に第三の生緣の關を頌した『人々箇の生緣あり、各々機先に透徹す』人々箇々今生の緣によつて他生の境界が定つて居る、明眼のものは「各々機先に透徹す」萠の生ぜぬ先にチヤンとそれを見透す作用がある、今世後世のことばか

りではない、一寸先は暗といふが明眼の士は其の一寸先をも透徹する能力がある、これ實參實究に依つて得た力倆である、學問や解會では到底得られぬぞ『那吒骨を折つて父に還す』禪林類聚に「那吒太子肉を折つて母に還し骨を折つて父に還し、然る後本身を現じ神通力を運び父母の爲に說法す」とある、那吒は父母の緣によつて生じた身を再び父母に歸したから生緣を絕して居る、所謂無生より出で、無生に歸る境界である、斯の如き境界のものにして始めて機先に透徹することを得るのである、『五祖豈に爺の緣を藉らんや』五祖は禪門中興の祖といはれた人で、門下大いに榮え、無門慧開の如きも其の流を酌むで居るが、此の五祖は何も父母の生緣によつて斯の如く大根機を得たのではない、自己本具の力倆であつて、所謂生緣を超越して居る、如何か生緣を超越する、それは無門の四十八關に就いて參究して見るが可い、『佛手、驢脚、生緣、佛にあらず、道に非ず、禪に非ず』上來頌し來つた三關は、之を佛法といふも當らず眞道といふも當らず、又禪といふも尙ほ遠しである、『怪しむこと莫れ無門關險なることを』三關斯の如く險岨である、無門が四十八關を險岨に說くのは何も怪しむには當らぬ、これも『衲子の深寃を結盡す』天下の衲僧をして之に參究せしめて深寃を結ばせて置きたい、好い悟が開かせたいが爲である、何にしても無門和尙の親切は有難いことであるといふのである、『瑞巖近日無門有り』無門和尙が瑞巖寺に居つた時、『繩床を撥向して古今を判ず』繩床は繩を圓くして造つた敷物、卽ち圓座である、說法の圓座を拵へて無門が、古今の因緣を引ずり出して種々と判斷をした、而して『凡聖の路頭共に截斷す』生死涅槃煩惱菩提の路を斷ち切つて一路涅槃門を打開して學人の出入を自在にした、『幾多の蟠蟄か雷音を起す』無門が古今の因緣を評唱擧拈した時、天下多數の蟠屈せる蟄龍が忽ち覺醒されて雷音を起した、實に無門關一部は學人に對する警鐘であつた、『無門首座を請じて立僧』そこで此の無門を請待して西堂として其の講說を豪つた、立僧は他山の高德を請して一會の大衆を接得して貰ふ場合に、山主が東の室に居つて東堂と稱するに對して西の室に居らしめて西堂と稱するものである、『山偈を以つて謝し奉る』無門が向上の關棙子を打開して宗壽座下の學人を接得してくれたことに對して宗壽は右の偈を以つて報謝の意を表したのである、山とは宗壽が自身を卑下して喚んだのである、『紹定庚寅季春、無量の宗壽書す』紹定庚寅は紹定三年に當る、暮春の日無量宗壽が之を書した、宗壽の傳記は詳でない。

孟珙の跋

達磨西來不執文字直指人心見性成佛說箇直指已是迂曲更言成佛郎當不少既是無門因甚有關老婆心切惡聲流布無庵欲贅一語又成四十九則其間些子誵訛剔起眉毛薦取淳祐乙巳夏重刊

檢校少保寧武軍節度使京湖安撫制置大使兼屯田大使兼夔路策應大使兼知江陵府漢東郡開國公食邑二千一百戶食實封陸佰戶

孟珙跋

【和訓】達磨西來、文字を執らず、直指人心、見性成佛。箇の直指と說くも、已に是れ迂曲。更に成佛と言ふも、郎當少からず。既に是れ無門、甚に因つてか關有る。老婆心切、惡聲流布す。無庵一語を贅して又た四十九則と成さんと欲す。其の間些子の誵訛、眉毛を剔起して薦取せよ。淳祐乙巳の夏、重ねて刊る。

檢校少保寧武軍節度使京湖安撫制置大使兼屯田大使兼夔路策應大使兼知江陵府漢東郡開國公食邑二千一百戶食實封陸佰戶

孟珙跋

〔講話〕『達磨西來、文字を執らず』これは孟珙の跋である、孟珙の如何なる人であつたかは此の文の終に長い肩書が出て居るので、それによつて大體解るであらうと思ふ、達磨は遙々と西方から萬里の波濤を越えて東土に來たが、不立文字教外別傳の宗旨だとかいふて嵩山へ引込んで坐禪三昧に日を送つた『直指人心見性成佛』それも直に人心を指して佛性を徹見し、佛道を成ぜしめんが爲の大慈大悲である、併し乍ら『箇の直指と說くも已に是れ迂曲』直指といふのが廻り諄い、『更に成佛と言ふも郎當少からず』又成佛等といふのも遍逗少からずで、缺點だらけで

ある、本分の當處には直指も成佛もない、第一達磨がノコノコ西天から來たのが餘計な仕草である。『旣に是れ無門、甚に因つてか關ある』門かあればこそ關もある、無門といふ以上は關等といふ文字も不用ではないか、『老婆心切、惡聲流布す』達磨の西來も無用の閑事業であるが、無門の著述も親切過ぎて却つて惡名を受ける因となると無門を抑へた、『無庵一語を贅して又た四十九則と成さんと欲す』無庵は孟珙の號である、拙者が今一則を加へて四十九則としようと思ふ、卽ち四十九院に因んだつもりである『其の間の些子の誵訛、眉毛を剔起して薦取せよ』第四十九則を付したのには些か入り込んだ譯がある、どういふ譯か、それは本文に就いて眉毛を剔き揚げ、活眼を開いて見るが可い『淳祐乙巳夏、重ねて刊る』理宗帝の十七年夏、一旦絶版になつた無門關に此の跋や第四十九則を付して孟珙が再版した『檢校少保云々』法性寺入道其處退けといふ樣な長い肩書であるが、支那の官制は時代々々によつて變るから說明に困難である、宗乘宗意に無關係であるから略して置く。

安晩の語

無門老禪作四十八則語判斷古德公案大似賣油餅人令買家開口接了更呑吐不得然雖如是安晩欲就渠熱爐熬上再打一枚足成大衍之數却仍前送似未知老師從何處下牙如一口喫得放光動地若猶未也連見在四十八箇都成熱沙去速道々々

【和訓】無門老禪四十八則の語を作して、古德の公案を判斷す。大いに油餅を賣るの人、買家をして口を開かしめて、接し了つて更に呑吐することを得ざらしむるに似たり。然も是の如くなりと雖も、安晩渠が熱爐熬上に就いて、再び一枚を打して、大衍の數を足

し成して、却つて前に仍つて送似せんと欲す。未だ知らず。老師何れの處よりか牙を下さん。如し一口に喫し得ば放光動地、若し猶ほ未だしくんば也た見在の四十八箇を連ねて、都べて熱沙と成り去らん、速に道へ。速に道へ。

〔講話〕『無門老禪四十八則の語を作して古德の公案を判斷す』無門老禪が此の度四十八則の評語や頌を作つて古聖先德の公案を判斷した『大いに油餅を賣る人、買家をして口を開かしめて接し了つて更に呑吐することを得ざらしむるに似たり』丁度それは油餅を賣る人が買手の口へ餅をねぢこんで、呑込むことも、吐き出すことも出來ないで目を白黑させる樣なものである、學人も四十八則の誵訛に對しては隨分苦しめられたものである『然も是の如くなりと雖も安晩渠が熱爐熬上に就いて再び一枚を打して大衍の數を足し成して却つて前に仍つて送似せんと欲す』無門は斯樣に四十八則を學人の口へねぢ込まうとしたが、安晩も更に燒け爛れた鐵器の上へ、更に一枚の油餅を足して大衍の數と成して前の四十八枚の油餅と共に天下人の口中へ送り込まうと思ふ、大衍の數とは易から來た語で五十四數をいふ、卽ち無門の四十八則に黃龍三關と下に出す第四十九則とを合すると五十になる『未だ知らず老師何れの處よりか牙を下さん、如し一口に喫し得ば放光動地』サテ天下の老和尚達、此の最後に添へた餅を何處から噛み付くか、若し一口に呑み込む程の機用があればそれこそ額に白毫光を放ち大地を六種に震動する佛身を現ずる譯である『若し猶ほ未だしくんば也た見在の四十八箇を連ねて熱沙と成り去らん、速に道へ速に道へ』若し此の一則を見事始末を付ける丈の働が無いとならば現在出來て居る無門の四十八則まで黑こげになつて終つて咽喉を熱く樣な結果を招くであらう、サア何とするか、諸人者返答はどうぢやと詰め付けた、サテ其の四十九則は抑も何の樣なものであらうか。

第四十九則語

經云止止不須說我法妙難思安晚曰法從何來妙從何有說時又作麼生豈但豐干饒舌元是釋迦多口這老子造作妖怪令千百代兒孫被葛藤纏倒未得頭出似這般奇特話靶匙挑不上甑蒸不熟有多少錯認底傍人問云畢竟作如何結斷安晚合十指爪曰止止不須說我法妙難思却急去難思兩字上打箇小圓相子指示衆人大藏五千卷維摩不二門總在裏許

頌曰語火是燈掉頭弗應惟賊識賊一問即承

淳祐丙午季夏初吉安晚居士書于西湖漁莊

【和訓】經に云く、止止不須說、我法妙難思と。安晚曰く、法何れ從りか來り、妙何れ從りか有なる。說く時又た作麼生。豈に但だ豐干饒舌なるのみならんや。元と是れ釋迦多口、這の老子妖怪を造作して、千百代の兒孫をして、葛藤に纏倒せられて、未だ頭出することを得ざらしむ。這般の奇特の話靶に似たらば、匙、挑するとも上らず、甑、蒸すとも熟せず。多少の錯つて認むる底の傍人有つて、問ふて云く、畢竟して如何んか結斷せんことを作さん。安晚十指爪を合せて曰く、止止不須說、我法妙難思、却つて急に難思、兩字の上に去つて、箇の小圓相子を打して、衆人に指示す。大藏五千卷、維摩不二の門、總べて裏許に在り。

頌に曰く、火は是れ燈なることを語れば、頭を掉つて應へず。惟れ賊、賊を識る、一問に即ち承く。

淳祐丙午季夏初吉、安晩居士、西湖の漁莊に書す。

〔講話〕『經に曰く、止止不須說、我法妙難思と、安晩曰く、法何れ從りか來り妙何れよりか有なる』法華經に『止みね止みね說くべからず、我が法は妙にして思議し難し』とある、安晩は先づそれを引いて、法華經には斯樣にいふてあるが一體法といふものは何處から生じたか、又妙といふことは何處から出たか、これは佛御自身でも返答が出來ない、止みね〳〵といふ口の下から我が法だの妙難思だのと餘計なことをいはれるので後代の衆生が迷惑致す『說く時又た作麼生』若し佛の御誡めを聞き入れずに說いたら何の樣な罪になるのか『豈に但だ豐干饒舌なるのみならんや、元と是れ釋迦多口』一體釋迦牟尼佛からして餘り多辯過ぎる、四十九年三百餘會の說法等といふが、よくも口が曲らぬことぢや、豐干は支那國淸寺の僧で、寒山拾得二仙士と交つて禪を談じ詩を賦した、釋尊ばかりではない、豐干和尚といふ御饒舌もあつて閑言句を弄して可惜佛法に瑕を付けた、『這の老子妖怪を造作して千百代の兒孫をして葛藤に纒倒せられて未だ頭出することを得ざらしむ』豐干も釋迦も共に下らぬ妖怪を作出して後代の兒孫をして言句の葛藤に纒はれて頭の出し入れも出來なくした『這般の奇特の話靶に似たらば匙挑すれども上らず、甑蒸すとも熟せず』說く時又作麼生といふたが其の說いたことが、所謂我法妙難思議といふ樣な話頭に似て居つたならば匙ですくい上げても甑に掛けて蒸しても熟せぬ、所謂箸にも棒にもかゝらぬ厄介なものである、話靶は話のたづなで、所謂話柄話頭等といふ義『多少誤つて認むる底の傍人有つて問ふて曰く、畢竟して如何が結斷を作さん』斯樣にいふと中には誤つた考を抱いて何か拙者安晩が祕法でも知つて居るかの樣に、畢竟何と結斷したら可からうか等と問ふものがある、かゝる場合に『安晩手指爪を合せて曰く、不須說我法妙難思』拙僧は十本の指の爪を合せ、卽ち合掌して例の文句を唱へ『却つて急に難思の兩字の上に去つて箇の小圓相子を打して衆人に指示す』急に難思の二字を唱へる時に小さな圓相卽ち圓を書いて學人に示すであらうといふ、これが安晩が全力を傾注した處であるとすれば安晩なるものゝ力倆も可い加減なものである、そんな手品使の眞似の樣なことをやつて佛法の的意が現はせるものならば歷代の祖師方は苦勞はなさらぬ、その上まだ安晩は『大藏五千卷、維摩不二の門、總べて裏許に在り』と大口を利いた、胡椒丸呑悟り、立枯れ禪て獨りよがりをして居るのは實に情ない、とはいふものゝ満更捨たものではないから、志ある人は今一應篤と安晩の手許を勘辨して見るが可い。

次に頌がある『火は是れ燈なることを語れば』不須說の當體が卽ち說である、火は燈、燈は火、

説と不説は離るべきものではない、然しそれをさうと口に出して説明すれば既に本分に蹉過なるから明眼の士は『頭を掉つて應へず』である、上來四十八則の無門の評語一々尤であるけれども、相見了の漢は頭を掉つて之を肯はぬ、肯はぬけれども以心傳心、照會默通で『惟れ賊々を知る』同じ穴の狸ならばチャンと腹で承知をして居る、所謂智音底ならば頭を掉つて應へぬでも意志の疏通は充分である、『一問に卽ち承く』一問の當處に於いて直下承當、チャンと腹の底まで見ぬいて居る、これが卽ち妙難思の面目である、此の解釋は餘り理路を逐ひ過ぎて居るから動もすると學人を誘つて葛藤窠裏に墮在せしめる惧があるが、已に講話といふ以上或程度まで理路をたどるのは又止むを得ぬことゝ思ふ、只參學の高流努めて其の意を探つて語路に執着せずんば幸甚である。

無門關講話終

大正九年五月一日印刷
大正九年五月五日發行
【定價貳圓五拾錢】

不許複製
無門關講話

著作者　菅原時保
發行者　東京市京橋區南紺屋町十二番地　增田義一
印刷者　東京市牛込區榎町七番地　渡邊八太郎
印刷所　日清印刷株式會社

發行所　東京市京橋區南紺屋町十二番地　實業之日本社
電京八七四、八七五、八七六、九八九
郵便振替貯金口座三二六

終